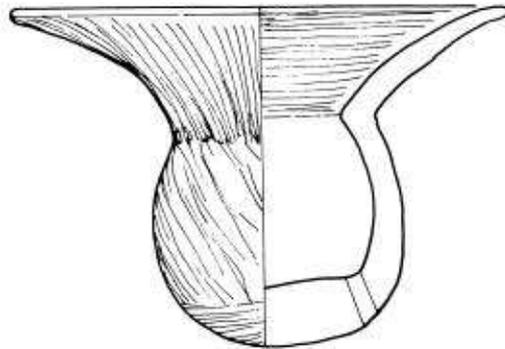


茨城県石岡市

弥陀ノ台遺跡

—小美玉市道栗又四ヶ線道路改良工事に伴う発掘調査—



2014

小 美 玉 市
石 岡 市 教 育 委 員 会
有 限 会 社 日 考 研 茨 城



航空写真（南東から）



航空写真（北東から）

茨城県石岡市

弥陀ノ台遺跡

—小美玉市道栗又四ヶ線道路改良工事に伴う発掘調査—

2014

小 美 玉 市
石 岡 市 教 育 委 員 会
有 限 会 社 日 考 研 茨 城

例 言

1. 本書は茨城県石岡市小井戸に所在する弥陀ノ台遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は小美玉市道架又四ヶ線道路改良工事に伴い、小美玉市長 島田穰一の委託契約を受けた有限会社 日考研茨城が実施した。
3. 調査は石岡市教育委員会および小美玉市教育委員会指導の下に行った。調査内容及び調査組織は下記の通りである。

所在地 茨城県石岡市小井戸465番地外

調査面積 4,950m²

調査期間 平成25年11月25日～平成26年5月2日

整理期間 平成26年5月15日～平成26年8月15日

事務局・調査指導

小美玉市・小美玉市教育委員会

石岡市教育委員会教育長 櫻井 信

教育部長 鈴木 信充

次長 大関 敏文

文化振興課長 武石 誠

文化振興課長補佐 櫻井 浩司

文化振興課係長 安藤 敏孝

文化振興課係長 小杉山大輔

文化振興課主幹 谷仲 俊雄

調査担当者 発掘 大淵由紀子・大淵淳志（有限会社 日考研茨城）

整理 小川和博・遠藤啓子・大淵淳志・大淵由紀子・大野美佳（有限会社 日考研茨城）

調査参加者 相田三郎・海老原光・海老原龍生・大谷和枝・奥沢慎二・小野豊・佐賀剛・佐賀実・島崎清子・鈴木利勝・滝田一徳・露久保三郎・富崎理司・中島昭・中村薫・中島貞雄・中島トミ子・沼田久男・森永典昭・綿引昇市朗

4. 本書は、谷仲俊雄・小川和博・大淵淳志・遠藤啓子・大淵由紀子が分担執筆し、編集は石岡市教育委員会・小美玉市教育委員会の助言のもと小川和博・大淵淳志が行った。
5. 執筆分担は下記の通りである。
第1章第1節・・・谷仲俊雄、第1章第2節・・・大淵淳志・大淵由紀子、第2章・・・遠藤啓子・大淵由紀子、第3章第1・2節・・・大淵由紀子、第3節・・・小川和博、第4章・・・小川和博・遠藤啓子・大淵由紀子、第5章・・・小川和博・大淵由紀子
6. 遺構の写真撮影は大淵淳志が、遺物の写真撮影は大淵淳志・小川和博が行った。
7. 遺物の基礎整理・実測・観察表作成は遠藤啓子・大淵淳志・小川和博が、遺構図面整理は大淵由紀子・大野美佳・小川和博が行った。
8. 記録類及び出土遺物は石岡市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関及び諸氏のご教示・ご協力を得た。記して謝意を表します。

[順不同、敬称略]

茨城県教育庁文化課・茨城県教育財団・ひたちなか市埋蔵文化財センター・上高津貝塚ふるさと歴史の広場・佐藤政則・佐々木義則・比毛君男

凡 例

1. 本書に記してある座標値は世界測地系第IX系を用いている。方位は座標北を示す。
2. 本文中の色調表現は『新版標準土色帖』2008年版(農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修)を用いた。
3. 標高は海拔標高である。
4. 掲載した図面の基本縮尺は以下の通りである。
遺構図 調査区全体図1/400 住居跡・地下式坑・土坑・井戸跡・土層図1/80 住居跡カマド1/50
方形竪穴状遺構1/80 溝跡1/120・1/200・1/300
遺物図 土師器・須恵器・陶器類・土製品・鉄製品・石製品1/4 縄文土器・弥生土器1/3
なお、変則的な縮尺を用いた場合には、スケールをもってその縮尺率を表した。
5. 遺物写真は基本的に実測図の縮尺に合わせて掲載した。
6. 掲載図中のスクリーン・トーン及び記号は以下に示す通りである。
遺構図  カマド袖  焼土  遺構断面
遺物図  須恵器断面  陶器類断面  赤彩
 黒色処理
———・———・——— 硬化面範囲
遺物 遺構図内における●印はすべての種類の遺物を表示した。
7. 実測図・本文中に用いた略記号は以下を示す。
SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SX：地下式坑・竪穴状遺構 SK：土坑・土坑墓
SD：堀・溝跡 SE：井戸跡 P：柱穴 K：攪乱
8. 遺物観察表の法量単位はcmである。法量に付した()は残存値を示す。
9. 本遺跡の略語はMDD-2013とした。遺物の注記もこれに従っている。
10. 遺構一覧表・遺物観察表の表記については、次のとおりである。
(1)現存値は()を付して示した。計測値の単位はm、cm、gで示した。
(2)遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、観察表、写真図版に記した番号と同一とした。
11. 遺構の「主軸」は、最長の軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸方向と共に、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した(例 N-10°-E)。

本文目次

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の方法と基本層序	10
第1節 調査の方法	10
第2節 試掘調査の成果	10
第3節 基本層序	14
第4章 検出された遺構と遺物	15
第1節 概要	15
第2節 遺構外出土の縄文土器・弥生土器	15
第3節 竪穴住居跡	16
第4節 掘立柱建物跡	55
第5節 井戸跡	71
第6節 竪穴状遺構	71
1 地下式坑	71
2 方形・円形竪穴状遺構	73
第7節 堀・溝跡	77
第8節 土坑	83
第9節 調査A区のトレンチ調査	96
第10節 調査C区のトレンチ調査	96
第11節 調査D区のトレンチ調査	96
第12節 古墳時代以降の遺構外出土遺物	96
第5章 まとめ	102

写真図版

抄録

挿図目次

第1図	グリット配置図	3
第2図	遺跡周辺地形図 (1:2,500)	6
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)	7
第4図	試掘トレンチ出土遺物	10
第5図	調査区および遺構配置図	11
第6図	遺構配置図(A・B区)	12
第7図	遺構配置図(C・D・E区)	13
第8図	基本層序	14
第9図	遺構外出土の縄文土器・弥生土器	15
第10図	SI01実測図	17
第11図	SI01カマド実測図	17
第12図	SI01出土遺物	18
第13図	SI02実測図	19
第14図	SI02出土遺物	19
第15図	SI03実測図	21
第16図	SI03炉実測図	21
第17図	SI03貯蔵穴断面図	21
第18図	SI03出土遺物	22
第19図	SI04～06実測図(1)	24
第20図	SI04～06実測図(2)	25
第21図	SI04炉実測図	25
第22図	SI05カマド実測図	25
第23図	SI06カマド実測図	26
第24図	SI04出土遺物	27
第25図	SI05出土遺物	28
第26図	SI06出土遺物(1)	29
第27図	SI06出土遺物(2)	30
第28図	SI07実測図	31
第29図	SI07炉実測図	31
第30図	SI07出土遺物	31
第31図	SI08実測図	32
第32図	SI08カマド実測図	32
第33図	SI08出土遺物	33
第34図	SI09・10実測図	35
第35図	SI09カマド実測図	35
第36図	SI09出土遺物	36
第37図	SI10出土遺物	37
第38図	SI11実測図	38
第39図	SI11炉断面図	38
第40図	SI11出土遺物	38
第41図	SI12実測図	39
第42図	SI12出土遺物	39
第43図	SI13実測図	40
第44図	SI13カマド実測図	40
第45図	SI13出土遺物	41
第46図	SI14実測図	43
第47図	SI14出土遺物	43
第48図	SI15実測図	44
第49図	SI15カマド実測図	44

第50図	SI15出土遺物	45
第51図	SI16実測図	46
第52図	SI16出土遺物	46
第53図	SI17実測図	47
第54図	SI18実測図	48
第55図	SI18出土遺物	48
第56図	SI19実測図	49
第57図	SI19カマド実測図	49
第58図	SI19出土遺物	50
第59図	SI20実測図	51
第60図	SI21実測図	52
第61図	SI21出土遺物	52
第62図	SI22実測図	53
第63図	SI22カマド実測図	53
第64図	SI22出土遺物	53
第65図	SI23実測図	54
第66図	SI23出土遺物	55
第67図	SI24実測図	56
第68図	SI24出土遺物	57
第69図	SI25実測図	58
第70図	SI25カマド実測図	58
第71図	SI25出土遺物	58
第72図	SI26実測図	59
第73図	SI26カマド実測図	59
第74図	SI26出土遺物	59
第75図	SB01実測図	61
第76図	SB01出土遺物	61
第77図	SB02実測図	62
第78図	SB04実測図	62
第79図	SB05実測図	63
第80図	SB05出土遺物	63
第81図	SB06実測図	64
第82図	SB07実測図	65
第83図	SB07出土遺物	66
第84図	SB08実測図	67
第85図	SB09実測図	67
第86図	SB10実測図	68
第87図	SB11実測図	68
第88図	SB12実測図	68
第89図	SB13実測図	69
第90図	SB14実測図	69
第91図	SB15実測図	70
第92図	SB16実測図	70
第93図	SE01実測図	73
第94図	SE02実測図	73
第95図	SE02出土遺物	73
第96図	SX01・02実測図	74
第97図	SX01出土遺物	74
第98図	SX02出土遺物	75
第99図	SX03実測図	75
第100図	SX03出土遺物	75

第101図	SX04実測図	76
第102図	SX04出土遺物	76
第103図	SX05実測図	76
第104図	SX06実測図	76
第105図	SX06出土遺物	76
第106図	SX07実測図	79
第107図	SX08実測図	79
第108図	SX08出土遺物	79
第109図	SX09実測図	80
第110図	SX10実測図	80
第111図	SX11実測図	80
第112図	SD01実測図	81
第113図	SD01出土遺物	81
第114図	SD02実測図	82
第115図	SD02出土遺物	82
第116図	SD03・04・05平面実測図	84
第117図	SD03・04断面実測図	85
第118図	SD03断面実測図	86
第119図	SD03・04・05断面実測図	87
第120図	SD03・04・05断面実測図	88
第121図	SD03(B区)実測図	89
第122図	SD03出土遺物	90
第123図	SD04出土遺物	90
第124図	SD05出土遺物	90
第125図	SD06実測図	91
第126図	SD06出土遺物	91
第127図	SD07実測図	92
第128図	SD08実測図	92
第129図	SD09実測図	93
第130図	SK01～03・12・15・20実測図	94
第131図	SK21～24・26・27実測図	95
第132図	SK01・15・22・23出土遺物	96
第133図	弥陀ノ台遺跡南西部地形測量図	97
第134図	A区埋没谷土層断面図	99
第135図	D区中央部土層断面図	99
第136図	D区埋没谷土層断面図	100
第137図	古墳時代以降の遺構外出土遺物	101

表 目 次

第1表	弥陀ノ台遺跡と周辺遺跡一覧	8
第2表	古墳時代前期の竪穴住居跡計測表	102
第3表	奈良・平安時代の竪穴住居跡計測表	103
第4表	弥陀ノ台遺跡出土遺物観察表	105

写真図版目次

PL. 1	1. 遺跡全景(上空から) 2. 調査区A区全景(上空から)
PL. 2	1. 調査区全景(上空から) 2. 調査区A・B区全景(上空から)
PL. 3	1. 遺跡遠景(北から) 2. 遺跡調査前近景(北から)
PL. 4	1. 1次調査A・B区全景(北から) 2. 2次調査A区全景(北から)

- PL. 5 1. 2次調査A区全景(南西から) 2. 1次調査B区全景(南西から)
- PL. 6 1. 2次調査B区全景(北東から) 2. 1次調査D区全景(南西から)
- PL. 7 1. 1次調査D区全景(南から) 2. 調査A区基本土層(北西から)
- PL. 8 1. 南西部調査前(東から) 2. 南西部調査前(北から)
- PL. 9 1. SI01全景(南から) 2. SI01カマド全景(南から) 3. SI01出土遺物状況(南から)
4. SI02全景(南から)
- PL. 10 1. SI03全景(南から) 2. SI04全景(南から) 3. SI04炉址全景(南から)
4. SI04出土遺物状況(南から)
- PL. 11 1・2. SI04出土遺物状況(南から) 3. SI05全景(南から) 4. SI05出土遺物状況(南から)
5. SI05カマド全景(南から) 6. SI06全景(南から)
- PL. 12 1. SI06遺物出土状況(南から) 2. SI06カマド内遺物出土状況(南から)
3. SI06カマド全景(南から) 4. SI06遺物出土状況(南から) 5. SI07全景(東から)
6. SI07炉址(東から) 7. SI07出土遺物状況(真上から)
- PL. 13 1. SI08全景(東から) 2. SI08カマド全景(東から) 3. SI09・10全景(南から)
4. SI09全景(南から)
- PL. 14 1. SI11全景(南から) 2. SI11炉址(南から) 3. SI11遺物出土状況 4. SI12全景(南から)
- PL. 15 1. SI13全景(南から) 2. SI13カマド全景(南から) 3. SI13出土遺物状況(南から)
4. SI14全景(北から) 5. SI14出土遺物状況(南から)
- PL. 16 1. SI15全景(南から) 2. SI15カマド全景(南から) 3. SI15出土遺物状況(南から)
4. SI16全景(北から) 5. SI16出土遺物状況(西から)
- PL. 17 1. SI17全景(北から) 2. SI18全景(西から)
- PL. 18 1. SI19全景(南から) 2. SI19カマド全景(南から) 3. SI19出土遺物状況(南から)
4. SI20全景(南から)
- PL. 19 1. SI21全景(南から) 2. SI21出土遺物状況(西から) 3. SI22全景(南から)
4. SI22カマド全景(南から)
- PL. 20 1. SI23全景(南から) 2. SI24全景(南から) 3. SI24出土遺物状況(南東から)
4. SI24出土遺物状況(南から)
- PL. 21 1. SI25全景(南から) 2. SI25カマド全景(南から) 3. SI25出土遺物状況(南から)
4. SI26全景(南から) 5. SI26カマド全景(南から)
- PL. 22 1. SB01全景(南から) 2. SB02全景(南から) 3. SB04全景(南から)
- PL. 23 1. SB05全景(南から) 2. SB06全景(南から) 3. SB07全景(北から)
- PL. 24 1. SB07全景(北から) 2. SB07柱穴(P3)(西から) 3. SB07柱穴(P8)(南から)
4. SB07柱穴(P4)(南から) 5. SB07柱穴(P10)(西から) 6. SB08全景(南から)
- PL. 25 1. SB08全景(南から) 2. SB08柱穴(P1)(南から) 3. SB08柱穴(P5)(南から)
4. SB09全景(南から)
- PL. 26 1. SB10全景(北から) 2. SB11全景(西から) 3. SB12全景(南東から)
- PL. 27 1. SB13全景(東から) 2. SB13柱穴(P2)(南西から) 3. SB13柱穴(P3)(西から)
4. SB14全景(西から)
- PL. 28 1. SB15全景(西から) 2. SB16全景(南から) 3. SE01全景(南から) 4. SE02全景(南から)
- PL. 29 1. SX01全景(南から) 2. SX02全景(南から) 3. SX03全景(南から) 4. SX04全景(南から)
5. SX05全景(南から) 6. SX06全景(南から) 7. SX07全景(北から) 8. SX08全景(北から)
- PL. 30 1. SX09全景(南から) 2. SX10全景(南から) 3. SX11全景(東から) 4～8. SD03全景
- PL. 31 1. SD02全景(南から) 2. SD03全景(南から) 3. SD04全景(南から)
4. SD05全景(南から) 5. SD06全景(南から) 6. SD07全景(南から) 7. SD08全景(南から)
8. SD09全景(南から)
- PL. 32 1. SK01全景(南から) 2. SK02全景(南から) 3. SK03全景(南から) 4. SK12全景(南から)
5. SK12出土遺物状況(南から) 6. SK15全景(南から) 7. SK20全景(南から)
8. SK21・22全景(南から)
- PL. 33 1. SK23全景(南から) 2. SK26全景(南から) 3. SK27全景(南から)
4. A区トレンチ(南から) 5. C区トレンチ(1 TX)(北から) 6. C区トレンチ(2 TX)(西から)
7. C区トレンチ土層(北から) 8. D区埋没谷土層(南東から)

- PL. 34 1. 遺構外出土縄文土器・弥生土器 2. SI01出土遺物 3. SI02出土遺物
- PL. 35 1. SI03出土遺物(1) 2. SI03出土遺物(2)
- PL. 36 1. SI03出土遺物(3) 2. SI04出土遺物(1)
- PL. 37 1. SI04出土遺物(2) 2. SI05出土遺物(1)
- PL. 38 1. SI05出土遺物(2) 2. SI05出土遺物(3)
- PL. 39 1. SI06出土遺物(1) 2. SI06出土遺物(2)
- PL. 40 1. SI06出土遺物(3) 2. SI07出土遺物
- PL. 41 1. SI08出土遺物(1) 2. SI08出土遺物(2)
- PL. 42 1. SI09出土遺物(1) 2. SI09出土遺物(2)
- PL. 43 1. SI10出土遺物(1) 2. SI10出土遺物(2) 3. SI11出土遺物 4. SI12出土遺物
- PL. 44 1. SI13出土遺物(1) 2. SI13出土遺物(2) 3. SI14出土遺物(1)
- PL. 45 1. SI14出土遺物(2) 2. SI15出土遺物(1)
- PL. 46 1. SI15出土遺物(2) 2. SI16出土遺物(1) 3. SI16出土遺物(2)
- PL. 47 1. SI18出土遺物 2. SI19出土遺物(1)
- PL. 48 1. SI19出土遺物(2) 2. SI21出土遺物 3. SI22出土遺物
- PL. 49 1. SI23出土遺物 2. SI24出土遺物(1)
- PL. 50 1. SI24出土遺物(2) 2. SI25出土遺物(1) 3. SI25出土遺物(2) 4. SI26出土遺物
- PL. 51 1・2 : SB01出土遺物 3・4 : SB05出土遺物 5～11 : SB07出土遺物
1 : SE01出土遺物 2・3 : SX01出土遺物 4 : SX02出土遺物 5～10 : SX03出土遺物
- PL. 52 1 : SX04出土遺物 2～4 : SX06出土遺物
1～7 : SX08出土遺物
1 : SD04出土遺物
- PL. 53 1. 溝・堀出土遺物(1) 1・2 : SD01 3 : SD02 4 : SD04 5・6 : SD05 7～9 : SD06
2. 溝・堀出土遺物(2) 1～9 : SD03
3. 土坑出土遺物 1 : SK01 2 : SK15 3 : SK22 4 : SK23
- PL. 54 1. 試掘トレンチ出土遺物
1 : T-8 2 : T-12 3・9 : T-4 4 : T-11 5 : T-21 6・7 : T-1 8 : T-7
2. 古墳時代以降の遺構外出土遺物
1 : SI13 2 : SX05 3 : SE01 4・9・10 : SI05 5・15・17 : SX01 6・8 : SI01
7 : SI16 11 : SI26 12 : SD06 13・19 : SI04 14 : SD03 16 : SD02 18 : SX02 20 : SI14

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成24年5月1日、小美玉市長より小美玉市道 栗又四ヶ線 道路改良工事に伴い「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」照会文書が提出された。石岡市教育委員会は、照会地には周知の埋蔵文化財包蔵地である弥陀ノ台遺跡が存在することから、試掘調査が必要である旨を平成24年5月22日付で回答した。

試掘調査は平成25年2月～3月にかけて実施した。その結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡や土坑、中世の整地面等を確認した。

小美玉市長が平成25年4月13日付で茨城県教育委員会に「埋蔵文化財発掘の通知」を提出した。平成25年5月8日付で茨城県教育委員会から、遺構が検出された部分については工事着手前に発掘調査を実施するように通知があった。

石岡市教育委員会と小美玉市、小美玉市教育委員会は協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施すること、調査費用については小美玉市が負担することで合意した。小美玉市による指名競争入札により、有限会社日考研茨城に委託し発掘調査を実施することとなった。

(谷仲俊雄)

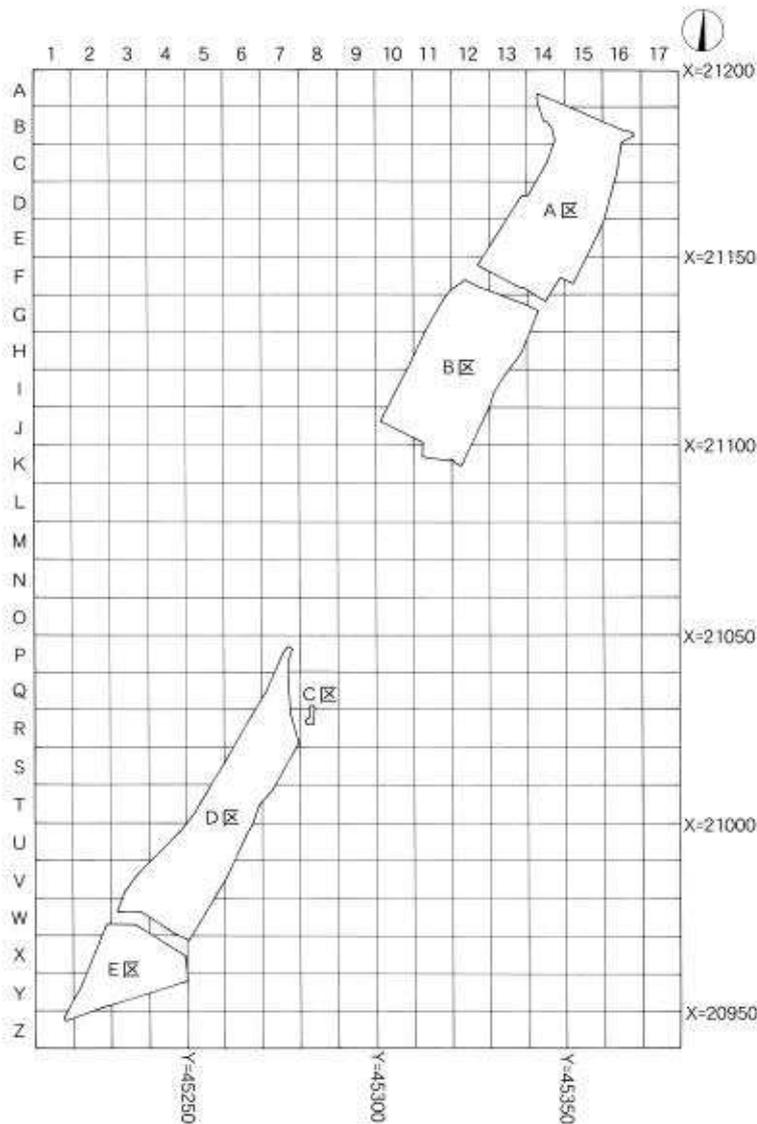
第2節 調査経過

本遺跡の発掘調査は、平成25年11月25日より開始し、平成26年5月2日に現地調査を終了した。また整理作業は同年5月15日から8月11日まで実施した。なお、現地調査については日報を記す。

1. 現地調査日報

- 11・25 発掘作業を開始する。重機による表土層除去を行う。
- 11・26 重機による表土層除去作業を継続し、遺構を検出するための精査作業を開始する。まず溝SD01・02を検出する。
- 11・27 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。竪穴住居跡SI01～03、掘立柱建物跡SB01を検出する。
- 11・28 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。竪穴住居跡SI04を検出し、竪穴住居跡SI01～03、掘立柱建物跡SB01の調査を行う。
- 11・29 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。竪穴住居跡SI05・06・07、掘立柱建物跡SB02を検出する。竪穴住居跡SI01～03、掘立柱建物跡SB01、溝SD01・02の調査を行う。
- 12・02 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。竪穴住居跡SI008・09を検出する。竪穴住居跡SI01～03・05・06、掘立柱建物跡SB01・02、溝SD01・02を調査する。
- 12・03 重機による表土層除去作業を継続する。竪穴住居跡SI01～03・05・06、掘立柱建物跡SB01・02の調査を行う。
- 12・04 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。溝SD03、土坑SK01～10を検出する。竪穴住居跡SI02～03・05～09の調査を行う。
- 12・05 重機による表土層除去作業を継続し、竪穴住居跡SI05・06・09、溝SD03を調査する。
- 12・06 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。竪穴状遺構SX01を検出する。竪穴住居跡SI05・06・09を調査する。
- 12・09 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。竪穴住居跡SI05・06・09、竪穴状遺構SX01を調査する。
- 12・11 重機による表土層除去作業を継続し、溝SD02、竪穴状遺構SX01を調査する。
- 12・12 重機による表土層除去作業を継続し、竪穴住居跡SI01・02・07、掘立柱建物跡SB01、竪穴状遺構SX01、溝SD02、土坑SK04～10を調査する。

- 12・13 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。竪穴住居跡SI02～05、竪穴状遺構SX01、溝SD03を調査する。
- 12・16 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。竪穴住居跡SI02・03・05・06・09、竪穴状遺構SX01、溝SD03を調査する。
- 12・17 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。溝SD04を検出し、竪穴状遺構SX01、溝SD03を調査する。
- 12・24 重機による表土層除去作業を継続し、井戸跡SE01、竪穴状遺構SX02、溝SD05、土坑SK11・12を検出する。井戸跡SE01、溝SD02・04、土坑SK11、SX02を調査する。
- 12・25 重機による表土層除去作業を継続し、竪穴住居跡SI02・03・05、竪穴状遺構SX02、溝SD01・05、土坑SK11を調査する。
- 12・26 重機による表土層除去作業を継続し、竪穴住居跡SI03・05・06・09を調査する。
- 1・06 重機による表土層除去作業を継続する。
- 1・07 重機による表土層除去作業を継続する。
- 1・10 重機による表土層除去作業を継続する。
- 1・14 竪穴住居跡SI11・12、掘立柱建物跡SB03・04、土坑SK13～15を検出する。
- 1・15 竪穴住居跡SI13・14、土坑SK16・17、竪穴状遺構SX03～05を検出する。
- 1・16 竪穴住居跡SI05・06・14、竪穴状遺構SX03～05、土坑SK16・17を調査する。
- 1・17 重機による表土層除去作業を継続し、竪穴住居跡SI05・06・11・14、竪穴状遺構SX02・03・05、土坑SK03～12を調査する。
- 1・20 重機による表土層除去作業を継続し、住居跡SI06・14、井戸跡SE01竪穴状遺構SX04・05、溝SD03～05を調査する。
- 1・21 重機による表土層除去作業を継続し、竪穴住居跡SI11・12・14、溝SD03、土坑SK12・13を調査する。
- 1・23 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。土坑SK18を検出する。竪穴住居跡SI12・13・14、掘立柱建物跡SB04、竪穴状遺構SX04・05、土坑SK14～16を調査する。
- 1・24 重機による表土層除去作業を継続し、竪穴住居跡SI05・06・11を調査する。
- 1・27 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。土坑SK19～23を検出する。竪穴住居跡SI06・11～14を調査する。
- 1・28 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を継続する。土坑SK24を検出する。竪穴住居跡SI11・13・14、土坑SK19～23を調査する。
- 1・29 重機による表土層除去作業を継続する。
- 1・30 重機による表土層除去作業を継続する。
- 2・03 重機による表土層除去作業を継続し、掘立柱建物跡SB04、竪穴状遺構SX05、土坑SK18を調査する。
- 2・06 重機による表土層除去作業を継続し、竪穴状遺構SX04を調査する。
- 2・07 重機による表土層除去作業を継続する。
- 2・17 重機による表土層除去作業を継続する。
- 2・18 重機による表土層除去作業を継続。調査区の航空写真撮影を実施する。
- 2・19～25 重機による表土層除去作業を継続する。
- 2・26 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を実施し、竪穴住居跡SI15、竪穴遺構SX06を検出する。
- 2・28～3・12 重機による表土層除去作業を継続する。
- 3・17 遺構検出作業を実施した。
- 3・18 竪穴状遺構SX07、溝SD06、土坑SK26・27を検出する。竪穴住居跡SI15、溝SD03を調査する。
- 3・19 竪穴住居跡SI16、井戸跡SE02を検出する。溝SD03・06を調査する。
- 3・22 掘立柱建物跡SB05を検出する。竪穴住居跡SI16、竪穴状遺構SX07、溝SD03を調査する。



第1図 グリッド配置図

- 3・24 竪穴住居跡SI16、井戸跡SE02、竪穴状遺構SX07、溝SD03・04・06、土坑SK26を調査する。
- 3・25 井戸跡SE02、竪穴状遺構SX07、溝SD03・04、土坑SK26を調査する。
- 3・26 溝SD03調査する。
- 3・28 重機による表土層除去作業を再開する。遺構検出の精査作業を実施し、竪穴住居跡SI17～19、掘立柱建物跡SB06を検出する。溝SD03・04を調査する。
- 3・29 重機による表土層除去作業を継続し、遺構検出の精査作業を実施し、竪穴状遺構SX08を検出する。竪穴住居跡SI02・09、掘立柱建物跡SB06、溝SD02を調査する。
- 3・31 竪穴住居跡SI02・07・19、竪穴状遺構SX08を調査する。
- 4・01 遺構検出の精査作業を継続し、竪穴住居跡SI20～23、竪穴状遺構SX09を検出する。旧石器確認調査のため深掘り調査を実施する。
- 4・02 竪穴住居跡SI01・03・07・16・19・20・23、掘立柱建物跡SB06、竪穴状遺構SX04、溝SD05、を調

- 査する。
- 4・07 遺構検出の精査作業を継続し、竪穴住居跡SI24～26、掘立柱建物跡SB07～10、竪穴状遺構SX10・11を検出する。竪穴住居跡SI22～26を調査する。
 - 4・08 竪穴住居跡SI08・20～26、掘立柱建物跡SB07～09、竪穴状遺構SX10・11、溝SD06を調査する。
 - 4・09 遺構検出の精査作業を継続し、掘立柱建物跡SB11・12を検出する。竪穴住居跡SI08・10・23・25、掘立柱建物跡SB07、竪穴状遺構SX11を調査する。
 - 4・10 遺構検出の精査作業を継続し、掘立柱建物跡SB13・14を検出する。竪穴住居跡SI23、掘立柱建物跡SB07・12・14を調査する。
 - 4・11 遺構検出の精査作業を継続し、掘立柱建物跡SB15・16を検出する。竪穴住居跡SI04・08・25、掘立柱建物跡SB14、溝SD03を調査する。
 - 4・12 竪穴住居跡SI04・08・10・16・19・24・25、掘立柱建物跡SB06・14を調査する。
 - 4・13 竪穴建物跡SI04・07・08・16・25を調査する。調査区の航空写真撮影を実施する。
 - 4・14 竪穴建物跡SI20～28、掘立柱建物跡SB07～10、竪穴状遺構SX09の調査を実施する。
 - 4・15 竪穴建物跡SI07～23、竪穴状遺構SX11を調査する。
 - 4・17 竪穴建物跡SI07・10・23～26、竪穴状遺構SX11を調査する。
 - 4・18 調査A区埋戻し作業を実施する。
 - 4・19 竪穴建物跡SI04・22～25、竪穴状遺構SX11、溝SD02を調査する。旧石器時代の確認調査を行う。
 - 4・20 重機によるA区とC区の埋戻し作業。竪穴建物跡SI03・08・09・18・19～26、掘立柱建物跡SB08・09、溝SD03を調査する。
 - 4・22 掘立柱建物跡SB07～15、溝SD03を調査する。
 - 4・23 竪穴建物跡SI07、溝SD03、掘立柱建物跡SB12～15を調査する。
 - 4・24 竪穴建物跡SI04・07・16・17・19～26を調査する。
 - 4・25 竪穴建物跡SI15、溝SD07・08、土坑SK27・28の調査を実施し、終了確認を行う。
 - 4・26 重機による埋戻し作業を実施する。
 - 4・28 竪穴建物跡SI15、竪穴状遺構SX07、溝SD09を調査する。
 - 5・02 調査区の終了確認を行う。
 - 5・07～19 重機による埋戻し作業を実施する。

(大淵淳志・大淵由紀子)

2. 整理作業

整理作業および報告書作成は、平成26年5月から有限会社 日考研茨城で開始した。遺物収納整理箱で14箱分の出土遺物の洗浄から着手し、遺物乾燥後、遺構・調査区単位で注記を行い、出土遺物の接合を行った。これらの全資料のち報告書掲載遺物について検討し、詳細な選別については7月8日石岡市教育委員会において実施した。さらに土浦市上高津貝塚ふるさと歴史広場資料館およびひたちなか市埋蔵文化財センターにおいて古墳時代以降の出土遺物の実見をしていただき、遺物の年代や産地等の鑑定をお願いした。こうした一連の資料選別作業終了後、遺物の実測・拓本・トレースと写真撮影を行った。遺構図面については遺物整理と併行して確認・修正・トレースを行い、併せて遺構写真の選別を行った。7月31日までに遺構のトレース、遺構挿図のレイアウトを完了させ、その間、原稿執筆を行い、8月8日に全体割付、写真図版作成を終了し、確認・見直し作業の後に印刷を発注して8月30日に刊行した。

(大淵由紀子)

第2章 遺構の位置と環境

第1節 地理的環境 (第2図)

弥陀ノ台遺跡は、石岡市小井戸465番地ほかに所在する。石岡市は茨城県の中央部に位置し、霞ヶ浦の北西部で、園部川と恋瀬川に挟まれた標高25～30mの平坦な洪積台地上に発達している。この両河川に挟まれた台地は石岡台地と呼ばれ、旧石器時代から現在に至るまで多くの人々の生活が営まれ絶好の場を提供している。当遺跡は市街地の東端にあたり、北西部に流れをもつ園部川右岸に立地している。この園部川は小美玉市や行方市の市境に沿って南流しながら霞ヶ浦の川中子に注ぐ。遺跡は現在の霞ヶ浦から北へ約4.5kmの地点である。付近は谷津や沖積地が樹枝状で複雑に開析されている。

当遺跡は、園部川に向かって東方向へ延びている細長い舌状台地の先端に占地しており、北東方向へ傾斜する緩斜面部にあたる。したがって東西に谷津を望む。遺跡の範囲は東西300m、南北250mで、標高が高位部で22.6m、低位部で7.2mとその比高差は15m以上を測る。しかし、古墳時代から古代の集落形成の中心は標高13mから18m付近で、中世の館はこれより低位に構築されている。なお、従来は小井戸遺跡と呼称されていたものが、平成11・12年の分布調査によって「弥陀ノ台遺跡」と改称されたものである。また周辺の現況は沖積地が水田で、斜面部は畑地と山林となっている。

第2節 歴史的環境 (第3図)

弥陀ノ台遺跡の所在する小井戸地区周辺は、発掘事例が少なく歴史的環境について不明な点が多いが、平成12年度刊の「石岡市遺跡分布調査報告」は当地域の歴史を明らかにする手掛かりとなっていることは確実であろう。また園部川対岸の小美玉市でも同様な状況であり、いずれも茨城県教育委員会の遺跡分布調査を基に、周辺の遺跡を概観したい。

旧石器時代では石岡市内において23遺跡が知られているが、周辺地域では確認されていない。また小美玉市では香取下遺跡(51)で彫器が、千部塚遺跡(20)で槍先形尖頭器が出土しており、その他栗又四ヶ遺跡(3)などで確認されている。

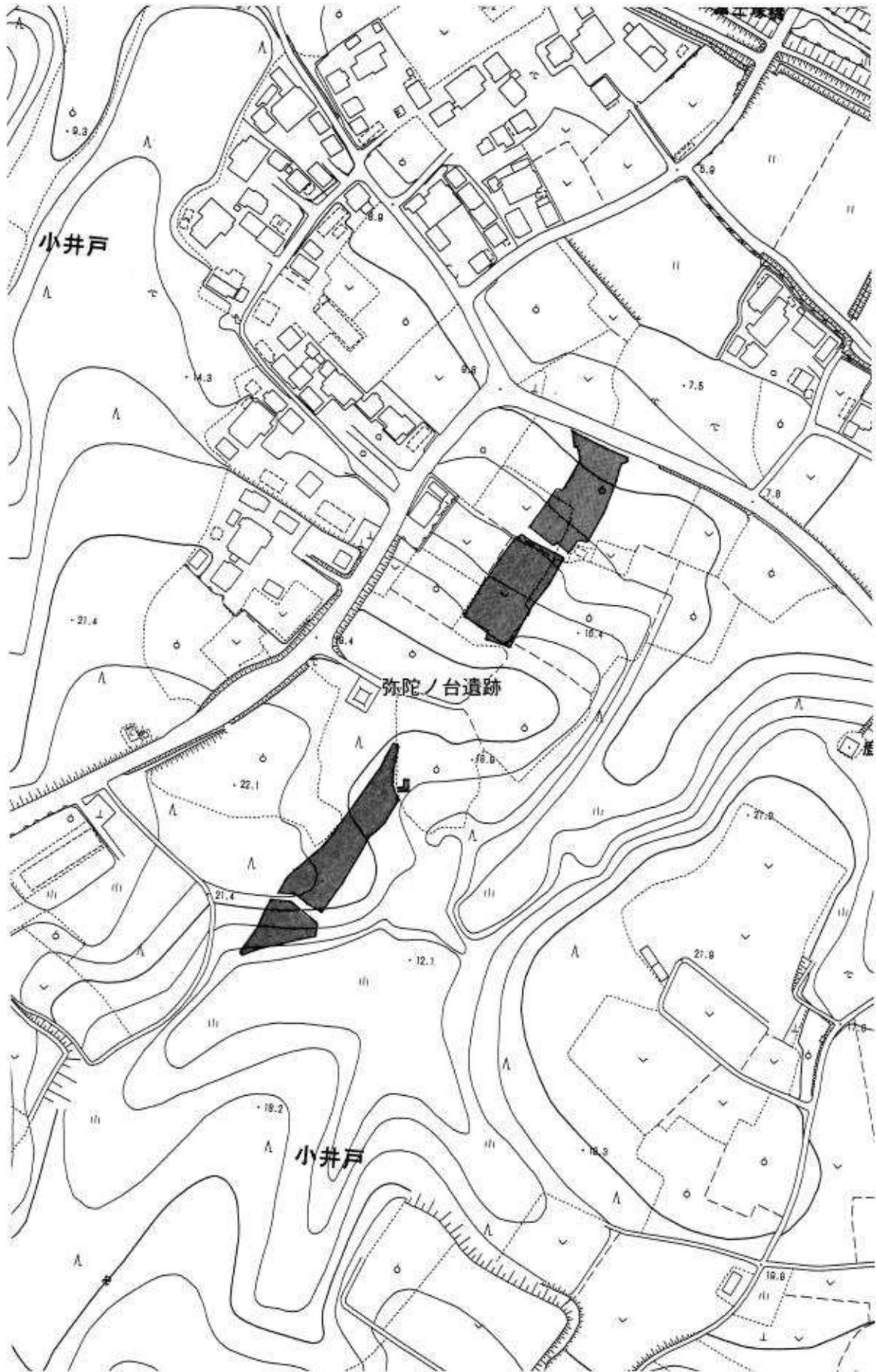
縄文時代になると遺跡数が増加し、石岡市内だけではなく、小美玉市でもその数は増えることが知られている。いうまでもなく霞ヶ浦を中心にその自然環境が恵まれたことが大きな要因であろう。周辺地域ではまず観音前遺跡で前期の黒浜式、浮島式、諸磯式土器が、中期では加曾利E式、後期の称名寺式、堀之内式土器が採集されている。また下坪遺跡(63)で前期の浮島式や諸磯式土器が知られている。小井戸台遺跡(71)でも後期の加曾利B式土器が出土している。その他高野遺跡(25)、中坪遺跡(52)、白旗遺跡(60)、蟹碯遺跡(26・66)など知られている。小美玉市でも八幡脇貝塚(4)、宮後貝塚(5)、原口遺跡、田木谷遺跡(11)などが周知されている。

弥生時代では集落遺跡こそ少ないが、池下遺跡(23)、下坪遺跡(63)、蟹碯遺跡(26・66)、根田上遺跡(68)、小井戸台遺跡(71)で土器が採集されている。また小美玉市でも栗又四ヶ遺跡(3)、千部塚遺跡(20)、香取下遺跡(51)などが知られ、根田上遺跡(68)では中期の遺物が確認されているが、そのほかはいずれも後期に比定されるものである。

古墳時代では古墳群として円墳を主体とする山ノ内古墳群(64)、七人塚古墳群(65)、権現山古墳群(69)、さらに全長75mの前方後円墳と円墳2基からなる要害山古墳群(72)がある。また円墳である天神山古墳(70)、境塚古墳(29)が知られている。小美玉市でも木船塚古墳群(7)、大塚古墳(77)が周知されている。集落としては当遺跡以外に知られていない。土師器の散布遺跡としては、蟹碯遺跡(26・66)、西ノ前遺跡(94)が知られている。

奈良・平安時代の遺跡では、やはり集落遺跡として本遺跡以外確認されていないが、大半の遺跡で土師器・須恵器が出土している。高野遺跡(25)、白旗遺跡(60)、小井戸台遺跡(71)、宮平遺跡(77)がある。

中世では園部川下流域に多く城館跡が知られているが、石岡市内では当遺跡以外に城館跡は確認できず、集落遺跡として下坪遺跡(63)で中世の播鉢や瓦などが採集されている。また小美玉市では平成23年に調査した宮田館跡(95)のほか、玉里八館として知られている飯塚館跡(2)や原山館跡(14)のほか、殿塚館跡(16)に南部に隣接する笠松館跡(15)が知られている。そのほか中根城跡(93)、小川城跡(92)がある。



第2図 遺跡周辺地形図 (1:2,500) ■ 調査区域



- 1 赤陀ノ台遺跡, 2 飯塚館跡, 3 栗又四ヶ遺跡, 4 八幡輪貝塚, 5 宮後貝塚, 6 香取台稲荷古墳, 7 米船塚古墳群, 8 茶屋塚古墳群, 9 岩屋古墳, 10 宮後古墳群, 11 田木谷遺跡, 12 西平西根遺跡, 13 根手山郡跡, 14 原山館跡, 15 笠松館跡, 16 飯塚館跡, 17 富士塚遺跡, 18 折戸古墳, 19 千部塚, 20 千部塚遺跡, 21 辻高台遺跡, 22 中山北遺跡, 23 池下遺跡, 24 根田上遺跡, 25 高野遺跡, 26 蟹崎遺跡, 27 駒崎遺跡, 28 極楽寺遺跡, 29 塚塚古墳, 30 山ノ神遺跡, 31 原田向遺跡, 32 藤田遺跡, 33 観音峯遺跡, 34 木ノ内遺跡, 35 大山遺跡, 36 安楽寺阿彌陀堂跡, 37 沼田平遺跡, 38 沼田遺跡, 39 寺塔遺跡, 40 籠下古墳, 41 東前古墳群, 42 東前遺跡, 43 香居遺跡, 44 稲荷遺跡, 45 石橋遺跡, 46 新林遺跡, 47 中台北遺跡, 48 中台遺跡, 49 上玉里塚群, 50 稲荷台遺跡, 51 香取下遺跡, 52 中坪遺跡, 53 寺久保下遺跡, 54 笠松遺跡, 55 岩屋遺跡, 56 桜久保遺跡, 57 西平西根古墳, 58 香取遺跡, 59 大塚古墳群, 60 白旗遺跡, 61 下坪塚, 62 柳上塚, 63 下坪遺跡, 64 山ノ内古墳群, 65 七人塚古墳群, 66 蟹崎遺跡, 67 高野遺跡, 68 根田上遺跡, 69 糠現山古墳群, 70 天神山古墳, 71 小井戸台遺跡, 72 菱背山古墳群, 73 五切遺跡, 74 宮久保遺跡, 75 古城ノ内遺跡, 76 宮平遺跡, 77 大塚古墳, 78 笠ノ上遺跡, 79 天神平遺跡, 80 松平遺跡, 81 白旗前遺跡, 82 白旗後遺跡, 83 三歳久保遺跡, 84 ハサマ遺跡, 85 東ノ上遺跡, 86 殿高遺跡, 87 氏助山遺跡, 88 庄司ノ上遺跡, 89 火打久保上遺跡, 90 西原遺跡, 91 大峰遺跡, 92 小川城跡, 93 中根城跡, 94 西ノ前遺跡, 95 宮田館跡, 96 熊野権現古墳, 97 三箇弁天経塚群, 98 十三遺跡, 99 竹原城跡, 100 一字一石経塚, 101 君ヶ塚古墳群, 102 平塚群, 103 十一久保経塚群, 104 富士館跡, 105 十三塚, 106 高原城跡。

第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

近世遺跡としては、境塚と知られている下坪塚(61)、柵上塚(62)がある。

(遠藤啓子・大淵由紀子)

第1表 弥陀ノ台遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代・時期
1	弥陀ノ台遺跡	集落跡・館跡	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世
2	飯塚館跡	城館	古墳、奈良・平安、中世
3	栗又四ヶ遺跡	包蔵地	旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安
4	八幡脇貝塚	貝塚	縄文、奈良・平安
5	宮後貝塚	貝塚	縄文
6	香取台稲荷古墳	古墳	古墳
7	木船塚古墳群	古墳群	古墳
8	茶屋塚古墳群	古墳群	古墳
9	岩屋古墳	古墳	古墳
10	宮後古墳群	古墳群	古墳
11	田木谷遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世
12	西平西根遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安
13	取手山館跡	城館	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世
14	原山館跡	城館	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世
15	笠松館跡	城館	縄文、弥生、古墳、中世
16	殿塚館跡	城館	縄文、古墳、奈良・平安、中世
17	富士峯遺跡	包蔵地	旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世
18	折戸古墳	古墳	古墳
19	千部塚	塚	中世、近世
20	千部塚遺跡	包蔵地	旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世
21	辻微高地遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世
22	中山北遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安
23	池下遺跡	包蔵地	弥生、奈良・平安
24	根田上遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳
25	高野遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安
26	蟹裕遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安
27	駒崎遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安
28	極楽寺遺跡	包蔵地	奈良・平安
29	境塚古墳	古墳	古墳
30	山ノ神遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安
31	原田向遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安
32	細田遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安
33	観音峯遺跡	包蔵地	縄文
34	木ノ内遺跡	包蔵地	縄文
35	大山遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安
36	安楽寺阿弥陀堂跡	寺院跡	中世
37	沼田平遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安
38	沼田遺跡	包蔵地	奈良・平安、近世
39	寺塔遺跡	包蔵地	縄文、古墳、近世
40	鷺下古墳	古墳	古墳
41	東前古墳群	古墳群	古墳
42	東前遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安、中世、近世
43	寄居遺跡	包蔵地	弥生、古墳、奈良・平安、中世
44	稲荷遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安
45	石橋遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安
46	新林遺跡	包蔵地	縄文
47	中台北遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安
48	中台遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安
49	上玉里塚群	塚	中世、近世
50	稲荷台遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世
51	香取下遺跡	包蔵地	旧石器、縄文、弥生、奈良・平安、近世
52	中坪遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安、中世、近世
53	寺久保下遺跡	包蔵地	奈良・平安
54	笠松遺跡	包蔵地	縄文、古墳、奈良・平安
55	岩屋遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、近世

番号	遺跡名	種別	時代・時期
5 6	桜久保遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世
5 7	西平西根古墳	古墳	古墳
5 8	香取遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世、近世
5 9	大塚古墳群	古墳群	古墳
6 0	白旗遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安、中世、近世
6 1	下坪塚	塚	近世
6 2	初上塚	塚	近世
6 3	下坪遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安、中世
6 4	山ノ内古墳群	古墳群	古墳
6 5	七人塚古墳群	古墳群	古墳
6 6	蟹裕遺跡	包蔵地	縄文、弥生、古墳、奈良・平安
6 7	高野遺跡	包蔵地	縄文、奈良・平安
6 8	根田上遺跡	包蔵地	縄文、弥生
6 9	権現山古墳群	古墳群	古墳
7 0	天神山古墳	古墳	古墳
7 1	小井戸台遺跡	包蔵地	縄文、弥生、奈良・平安
7 2	要害山古墳群	古墳群	古墳
7 3	五切遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
7 4	富久保遺跡	集落跡	縄文
7 5	古城ノ内遺跡	集落跡	縄文
7 6	富平遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安
7 7	大塚古墳	古墳	古墳
7 8	堂ノ上遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安
7 9	天神平遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
8 0	柗平遺跡	集落跡	縄文、古墳
8 1	白旗前遺跡	集落跡	古墳
8 2	白旗後遺跡	集落跡	縄文
8 3	三蔵久保遺跡	集落跡	古墳
8 4	ハサマ遺跡	集落跡	縄文、古墳
8 5	東ノ上遺跡	集落跡	縄文
8 6	殿島遺跡	集落跡	縄文、古墳
8 7	兵助山遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
8 8	庄司ノ上遺跡	集落跡	縄文、弥生、古墳
8 9	火打久保上遺跡	集落跡	縄文、弥生
9 0	西原遺跡	集落跡	縄文
9 1	大峰遺跡	集落跡	縄文
9 2	小川城跡	城館跡	中世
9 3	中根城跡	城館跡	近世
9 4	西ノ前遺跡	集落跡	縄文、古墳
9 5	富田館跡	城館跡	中世
9 6	熊野権現古墳	古墳	古墳
9 7	三箇井天経塚群	経塚群	中世
9 8	十三遺跡	集落跡	縄文
9 9	竹原城跡	城館跡	中世
1 0 0	一字一石経塚	経塚	近世
1 0 1	君ヶ塚古墳群	古墳群	古墳
1 0 2	平塚群	塚群	近世
1 0 3	十一久保経塚群	経塚群	近世
1 0 4	富士館跡	城館跡	中世
1 0 5	十三塚	古墳	古墳
1 0 6	高原城跡	城館跡	中世

参考文献

石岡市教育委員会1997「石岡市の遺跡」

石岡市教育委員会2001「石岡市遺跡分布調査報告」

日本旧石器学会2010「日本列島の旧石器時代遺跡」

第3章 調査の方法と基本層序

第1節 調査の方法

本遺跡の調査は道路部分が対象であるため、調査範囲は遺跡のほぼ中央部を南北に縦断する長い帯状を呈している。現地調査時には、石岡市教育委員会の行った試掘結果に基づき発掘範囲を北部から南部にかけてA～G区の7地点に分割することとなったが、追加調査が加わることによって既存のA～C区が1地点に纏まったため、整理作業段階でこれらをA区と命名し、以下D区をB区に、E区をC区、F区をD区、G区をE区に変更し、報告書における記載の平易さと簡略化に努めた。

まず表土除去は、遺構確認面となるローム層上面までバックホーを用いて除去した。その後、人力により遺構検出作業を行った。確認された遺構は遺構確認図(1/200)を作画し、順次遺構番号を付した。なお、遺構番号については遺構の種類ごととし、表記方法は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の記号表記に準拠した。

調査区には対象地全体に10mの方眼グリッドを設定し、調査および測定の基準とした。グリッドの設定は世界測地系IX系を用いて、基点を北西隅のX=21200、Y=45210に設定し、西から東に算用数字(1～17)、北から南にアルファベット(A～Z)を付し、例えば北西隅グリッドを「1-A区」と呼称した。

検出された遺構のうち竪穴住居跡はほぼ中央を交点とする十字形畔の土層観察用ベルトを設定して掘り下げを行った。またカマドについては四分法を用い、掘立柱建物跡および竪穴住居跡の柱穴や炉址については半截して断面土層を記録した。また遺構平面図は遺り方実測にて作画し、遺物の出土状況もレベルを用いて3次元位置の記録をした後に取り上げを行った。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、竪穴状遺構、土坑の平面図及び土層断面図・エレベーション図の縮尺は20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1とし、さらにカマド、炉址の平面図・断面図は10分の1で作画した。

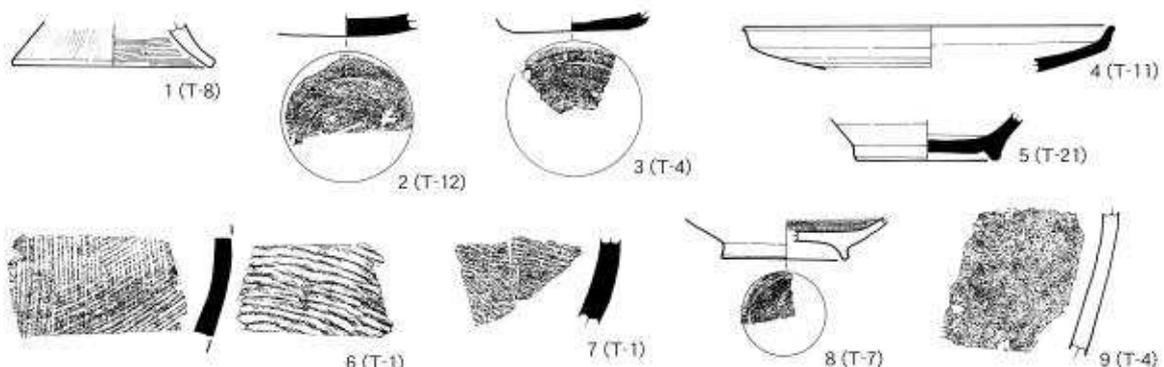
写真による記録として、遺構全景や断面すべて35mmの白黒フィルム及びカラースライドとデジタルカメラを用いて撮影した。

最後に出土遺物は、遺構別及び出土位置別に分類して遺物収納箱に収納し、番号を付して遺物一覧表・遺物収納箱一覧表を作成した。

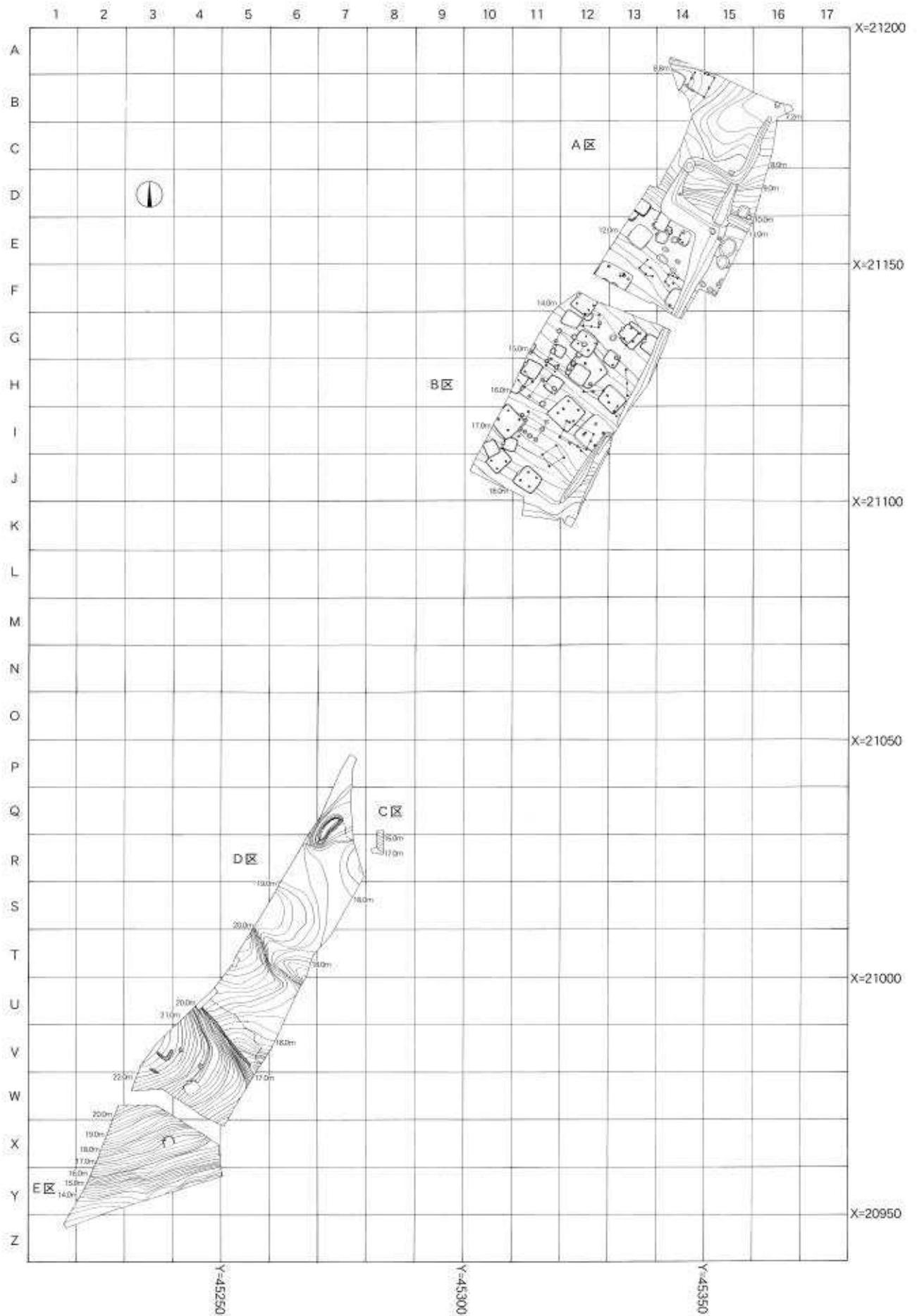
第2節 試掘調査の成果 (第4図)

弥陀ノ台遺跡の試掘調査は、平成25年2月4日から同年2月8日まで、さらに同年2月28日から同年3月5日まで開発予定区域ほぼ全域を対象に実施した。試掘トレンチは113ヶ所設定し、その結果、本調査の範囲から住居跡11軒、土坑2基、ピット2基のほか溝跡や整地面が確認された。

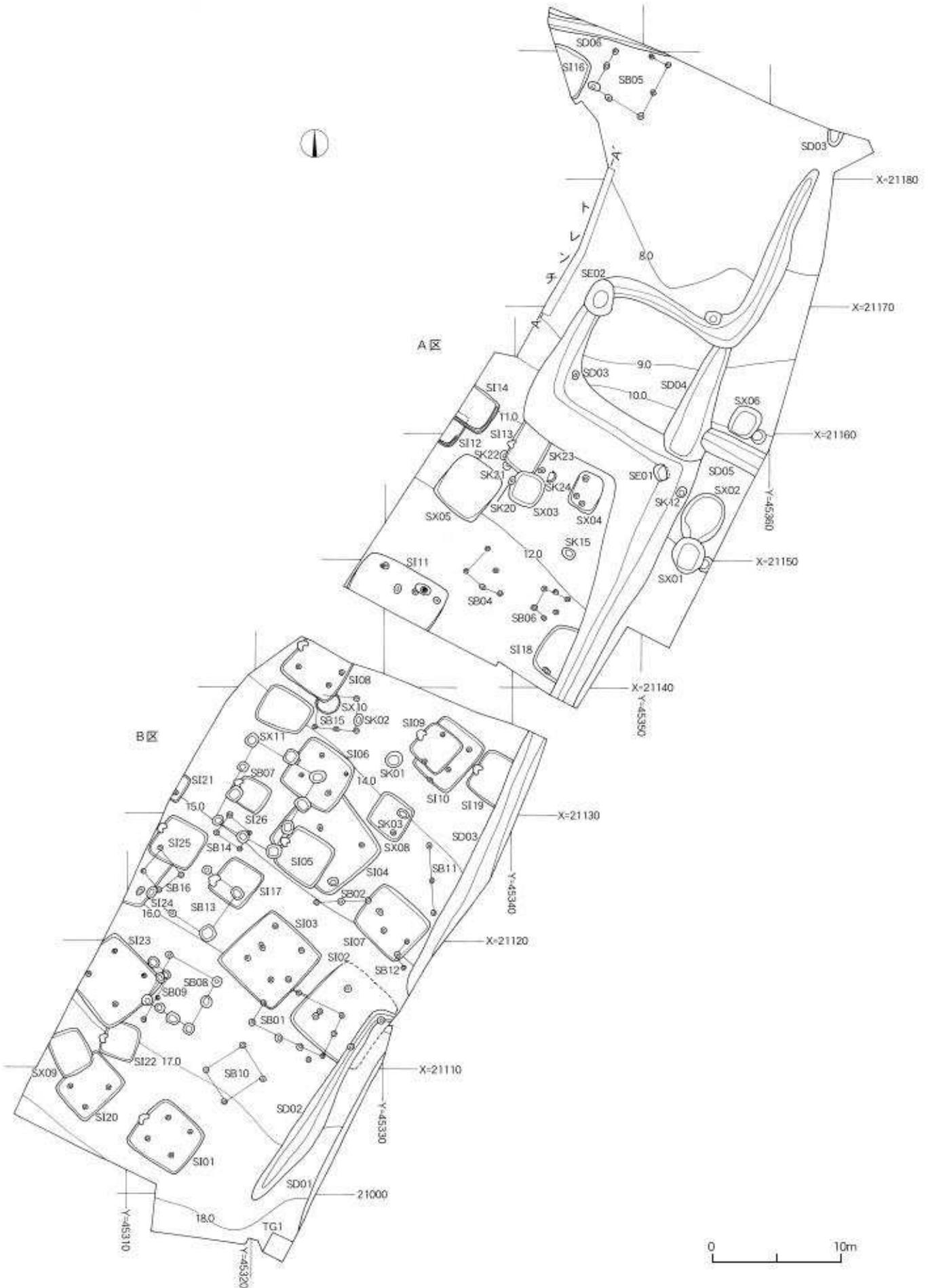
遺物は遺物整理箱1箱が検出され、時期は古墳時代～奈良・平安時代の土師器・須恵器を主体に中世の陶器が出土した。本書では9点を抽出して掲載する。



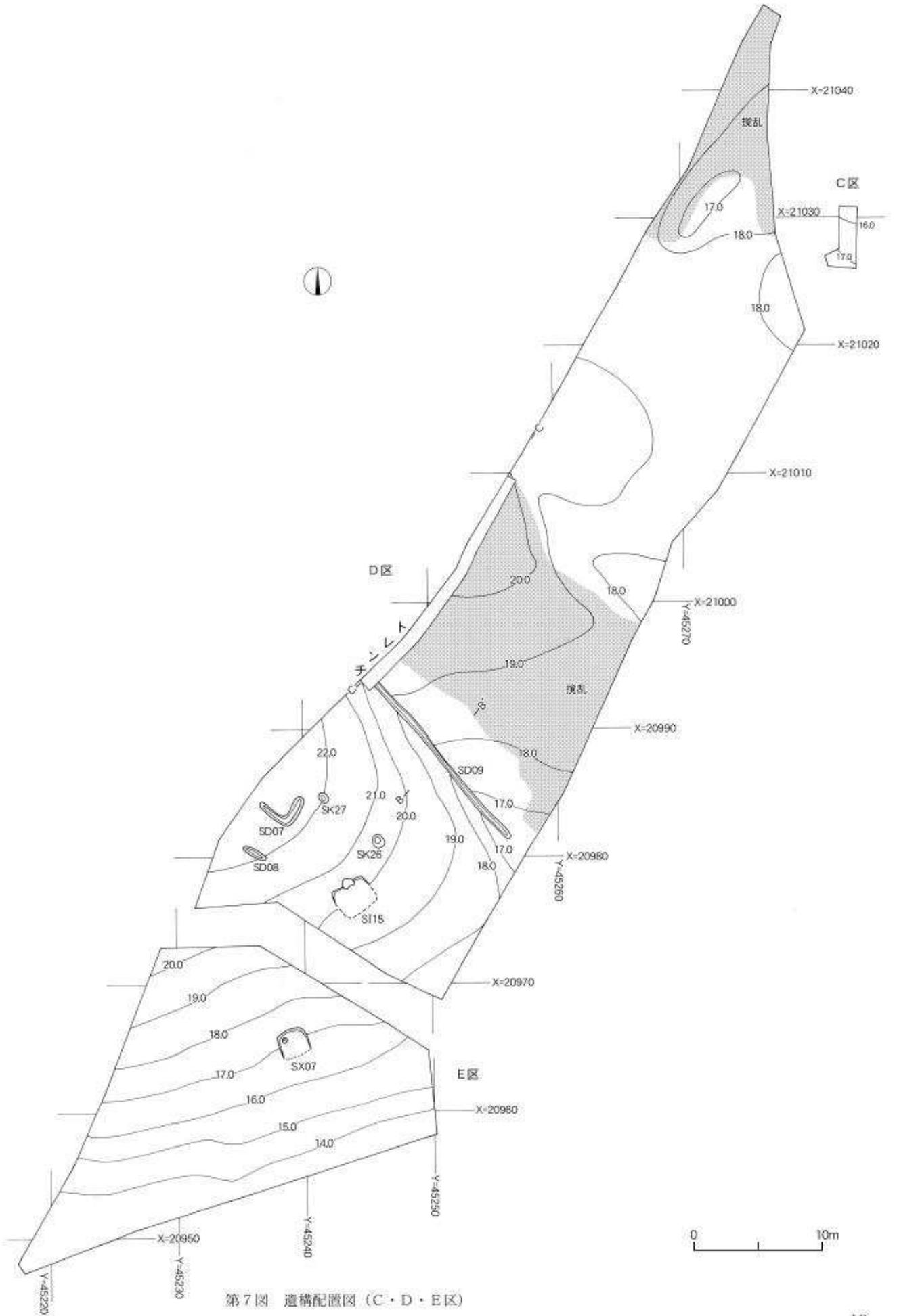
第4図 試掘トレンチ出土遺物



第5図 調査区および遺構配置図



第6図 遺構配置図 (A・B区)



第7図 遺構配置図 (C・D・E区)

1は土師器高坏の脚部破片である。外面ハケの後、縦位のヘラミガキが施され、内面は横位のハケである。古墳時代前期である。2～7は須恵器である。2・3は坏で、いずれも底部回転ヘラキリである。4は盤の口縁部破片。ロクロ成形である。以上は8世紀後半に比定される。5は瓶の底部破片である。高台が付く。6・7は甕の胴部破片である。タタキが施されている。8は土師器高台付坏の高台部の破片である。高台は貼付けで坏部内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。9世紀後半に比定される。9は常滑の甕で胴部破片である。中世である。

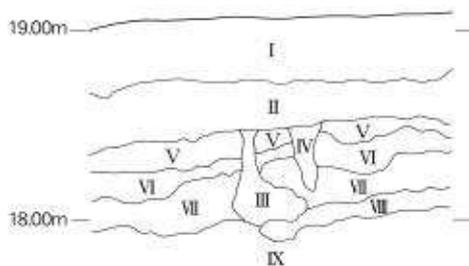
(大瀧由紀子)

第3節 基本層序

旧石器時代に係る文化層および基本土層を確認するために深掘調査区を設定した。設定地は、遺構密度が薄い調査B区南東隅にあたる12-K区の東側壁面で観察を行った。I層およびII層は表土・耕作土層である。III層・IV層はII層下部から掘り込まれたもので、現代の攪乱層である。V層が黄褐色のハードローム層で、上面が遺構確認面となる。VI層もハードローム層であるが、VII層からは暗褐色(10YR3/3)を呈する褐鉄鉱粒を含む粘土層が堆積する

- I. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 耕作土である。ローム粒子を多く含む。しまりに欠け、粘性にとむ。層厚は35cmである。
- II. 暗褐色土(10YR3/3) 耕作土である。ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまりにやや欠け、粘性にとむ。層厚は20～34cmである。
- III. 暗褐色土(10YR3/4) 攪乱層である。ローム粒子・ロームブロックを多く含む。しまりにやや欠け、粘性にとむ。
- IV. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 攪乱層である。ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまりがあり、粘性に欠ける。堅緻である。
- V. 黄褐色ローム(10YR5/6) ハードロームである。しまりがあり、堅緻である。層厚4～16cmである。
- VI. 褐色ローム(10YR4/6) ハードロームである。白色粒子を多く含む。しまりがあり、堅緻である。層厚5～16cmである。
- VII. 灰黄褐色粘土(10YR6/2) 褐鉄鉱を多く含む。しまりがあり、粘性にとむ。層厚11～25cmである。
- VIII. にぶい黄褐色粘土(10YR7/2) 褐鉄鉱を多く含む。しまりがあり、粘性にとむ。層厚10cmである。
- IX. 明青灰色粘土(5B7/1) 褐鉄鉱を多く含む。下層は未掘のため層厚は不明である。

(小川和博)



- I. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 耕作土。ローム粒子を多く含む。しまりに欠け、粘性にとむ。
- II. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまりにやや欠け、粘性にとむ。
- III. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒子・ロームブロックを多く含む。しまりにやや欠け、粘性にとむ。
- IV. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。しまりがあり、粘性に欠ける。堅緻である。
- V. 黄褐色ローム(10YR5/6) ハードローム・ローム粒子を多量に含む。しまりがあり、粘性に欠ける。堅緻である。
- VI. 褐色ローム(10YR4/6) ハードローム・白色粒子を多く含む。しまりがあり、堅緻である。
- VII. 灰黄褐色粘土(10YR6/2) 褐鉄鉱を多く含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- VIII. にぶい黄褐色粘土(10YR7/2) 褐鉄鉱を多く含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- IX. 明青灰色粘土(5B7/1) 褐鉄鉱を多く含む。

第8図 基本層序



第4章 検出された遺構と遺物

第1節 概要

本遺跡は園部川右岸に立地し、東西に谷津を望む台地縁辺部の斜面地である。調査区は標高22.6mの高位面から標高7.2mの低位面が対象となり、調査面積は4,950㎡である。

調査の結果、竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡15棟、竪穴状遺構9基、堀・溝跡9条、井戸跡2基、地下式坑2基、土坑墓1基、土坑11基を確認した。時期は古墳時代前・後期、奈良・平安時代と中世である。

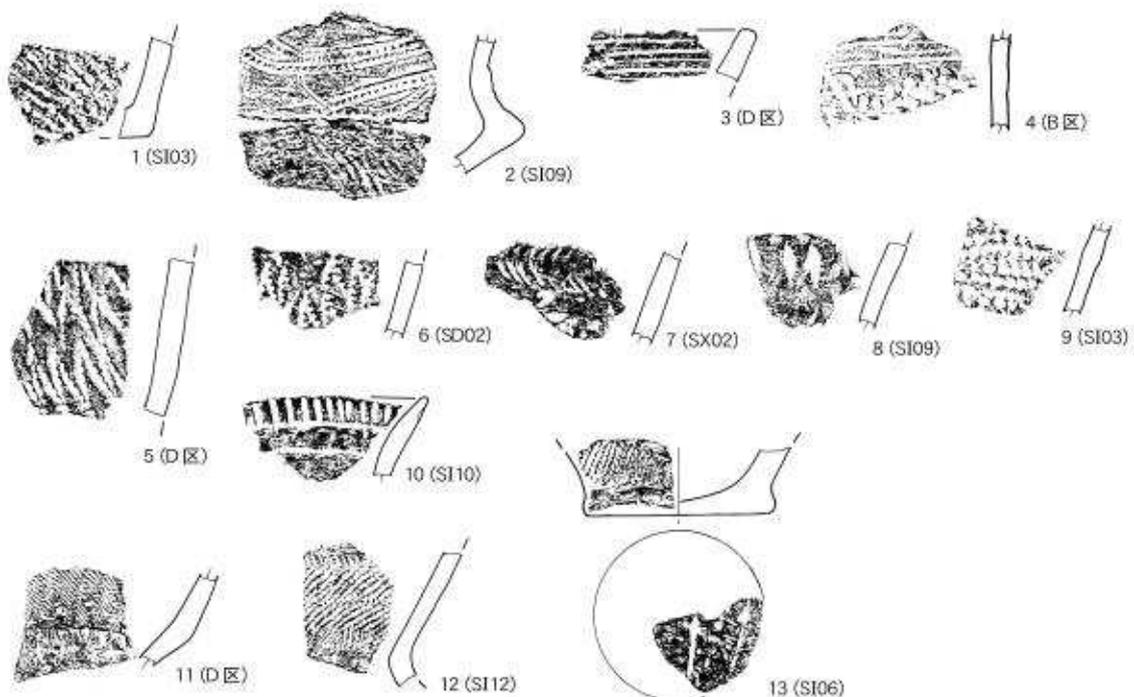
遺物として、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、紡錘車、土玉、鉄製品、石製品等が出土している。

第2節 遺構外出土の縄文土器・弥生土器

調査区内の遺構およびその周辺から縄文土器と弥生土器が出土した。

1～10は縄文前期の土器である。1は深鉢の底部破片で、縄文施文である。原体は単節RLである。2は鉢形の胴部破片である。くの状に屈曲している。口縁部は爪形文による入組弧線文が描かれ胴部には単節RL縄文が施文される。諸磯b式に比定される。3は口縁部破片である。平行沈線文が施文される。4は平行沈線文と波状貝殻文が施文される。5・6も波状貝殻文の施文である。7はロッキング施文による爪形文である。8もロッキング施文による変形爪形文である。10は口縁部破片で、口縁に条線帯をもち、頸部に輪積装飾が施文される。3～10は浮島ⅡからⅢ式に比定される。

11～13は弥生土器である。11は壺の口縁部破片である。口縁に単節RLが施文され、内外面に赤彩が施されている。12は壺の肩部破片と思われる。単節LRが施文され、赤彩が施されている。後期弥生町式に比定される。13は壺の底部破片である。縄文施文で単節LRが施文される。



第9図 遺構外出土の縄文土器・弥生土器

0 10cm

第3節 竪穴住居跡

SI01 (第10～12図)

調査B区の南部、11・J区に位置する。平面形は方形を呈し、その規模は東西軸4.66m、南北軸4.85mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN-53°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大34.9cmである。壁溝は全周し、幅18.0～30.0cm、深さ4.2～15.8cmの断面U状を呈する。覆土は黒褐色土を基調とした7層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は4本検出され、いずれも支柱穴で円形を呈している。その規模はP1が径43.0×36.0cm、深さ51.0cm、P2が径64.0×59.0cm、深さ36.0cm、P3が径77.0×67.0cm、深さ47.0cm、P4が径63.0×55.0cm、深さ47.0cmである。カマドは北西壁中央に付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を17.5cm程半円形に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ100.0cm、検出された両袖部の最大幅112.0cmを測る。袖部にはふい黄橙色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ66.0cm、幅82.0cm、深さ3.5cmの楕円形を呈し、浅い播鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物は覆土中から土師器、須恵器および鉄製品が散存する状況で出土している。1～5は土師器甕である。1～3は口縁部破片で、体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇端部は短く摘み上げられている。4・5は底部破片で木葉痕がみられる。6～15は須恵器である。6～8は坏で、いずれもロクロ整形である。6・7は新治窯産で、8は底部下端が手持ちヘラケズリ、底部は回転ヘラ切りである。9～11は蓋である。天井部は回転ヘラケズリである。12～15は甕である。13・14は外面平行タタキで調整されている。16は鉄製品で鐵の基部破片と推定される。現存長5.21cm、最大幅0.62cm、厚さ0.25cmを測る。

これら出土遺物のうち、8～10は8世紀第3四半期、6・7・11～13は9世紀前半に比定され、本跡の時期は9世紀前半と考えられる。

SI02 (第13・14図)

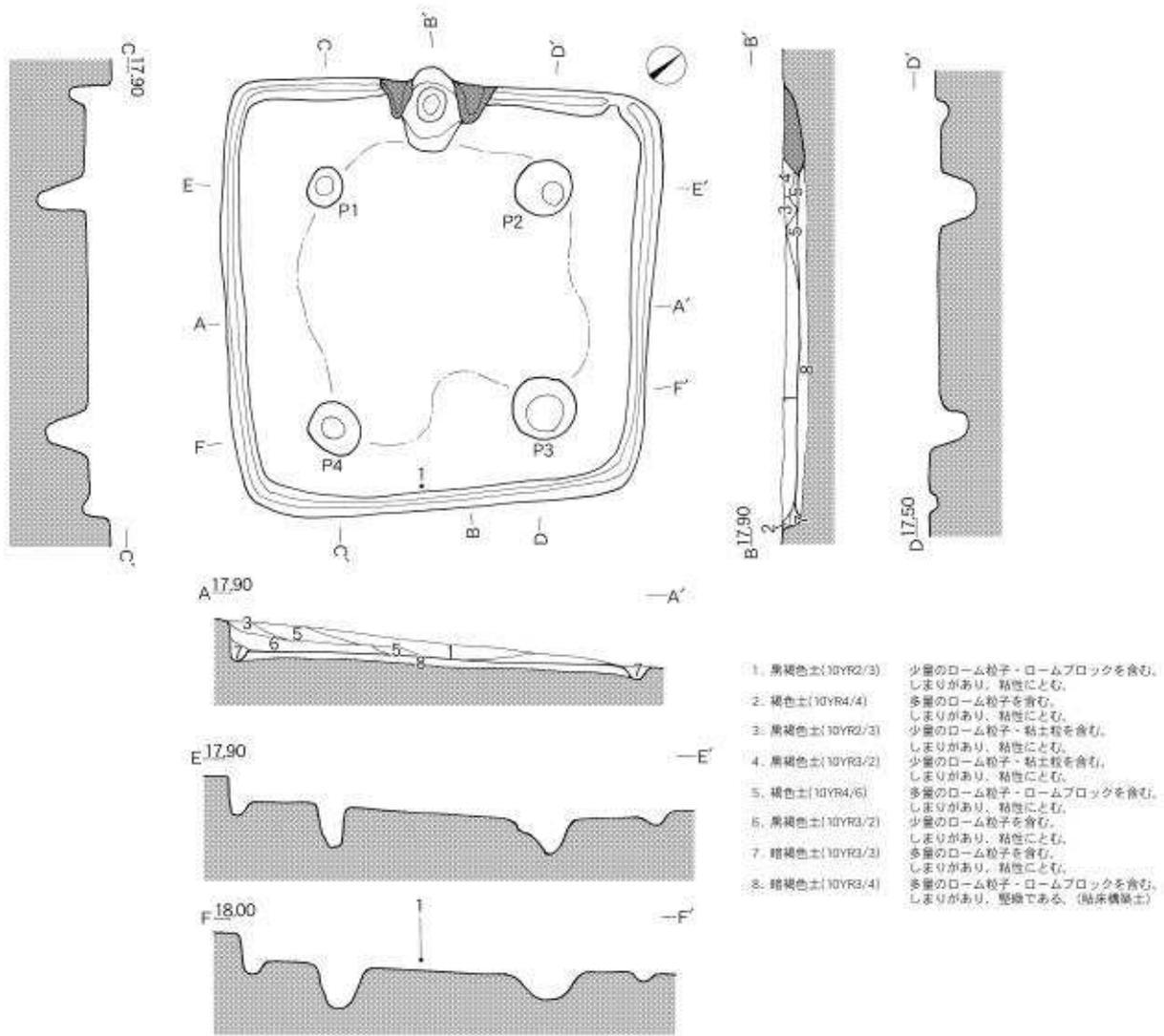
調査B区の中央東部、12・13・I区に位置する。ほぼ全面SB01と重複し、さらに南東部はSD02によって切られ、遺構確認で一部の床面が露出する状態であり、遺存状態は不良である。検出された平面形は方形を呈するものと推定され、その規模は東西軸5.50m、南北軸4.20mを測る。カマドが北東壁辺に設置されているものとする、主軸方向はN-42°-Wを指す。床面はほぼ平坦であるが、全体的に軟弱である。壁面は外傾気味に立ち上がり、残存壁高は最大8.4cmであった。壁溝は南西壁辺と北西壁辺の一部に認められ、その規模は幅23.0～31.0cm、深さ6.5～13.0cmの断面U状を呈する。覆土の堆積は明瞭ではなく、壁溝内において黒褐色土の堆積が認められたのみである。柱穴は4本検出され、いずれも支柱穴で円形を呈している。規模はP1が径57.0×48.0cm、深さ59.3cm、P2が径50.0×47.0cm、深さ60.8cm、P3が径49.0×45.0cm、深さ43.8cm、P4が径45.0×37.0cm、深さ77.3cmである。カマドあるいは炉址は確認できなかった。

遺物は床面直上に少量散存する状況で出土している。いずれも土師器坏の破片で、第14図1は坏身模倣坏で口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、丸底と推定される。2は小破片でスス状の付着が認められる。

これら少量の出土遺物のうち、1は7世紀後半に比定され、本跡の時期も7世紀後半と考えられる。

SI03 (第15～18図)

調査B区の中央部、11・12・H・I区に位置する。南東部でSB01と重複している。平面形は北辺が長く、南辺が短い台形に近い方形を呈し、規模は東西軸6.08m、南北軸5.76mを測る。炉址は北西壁辺寄りに設置されており、主軸方向はN-44°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、炉址前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大37.0cmである。壁溝は構築されていない。柱穴は5本検出され、P1～P4は支柱穴、P5が梯子穴でいずれも円形を呈している。4本の支柱穴の規模はP1が径62.0×54.0cm、深さ28.0cm、P2が径51.0×47.0cm、深さ35.0cm、P3が径65.0×52.0cm、深さ16.0cm、P4が径49.0×33.0cm、深さ12.0cmである。梯子穴P5は南東壁際中央に設置されており径42.0×37.0cm、深さ56.0cmである。炉址は北西壁寄り中央に付設されており、主軸線上で南北方向に長い楕円形に掘り込まれている。規模は長軸77.0cm、短軸48.0cm、



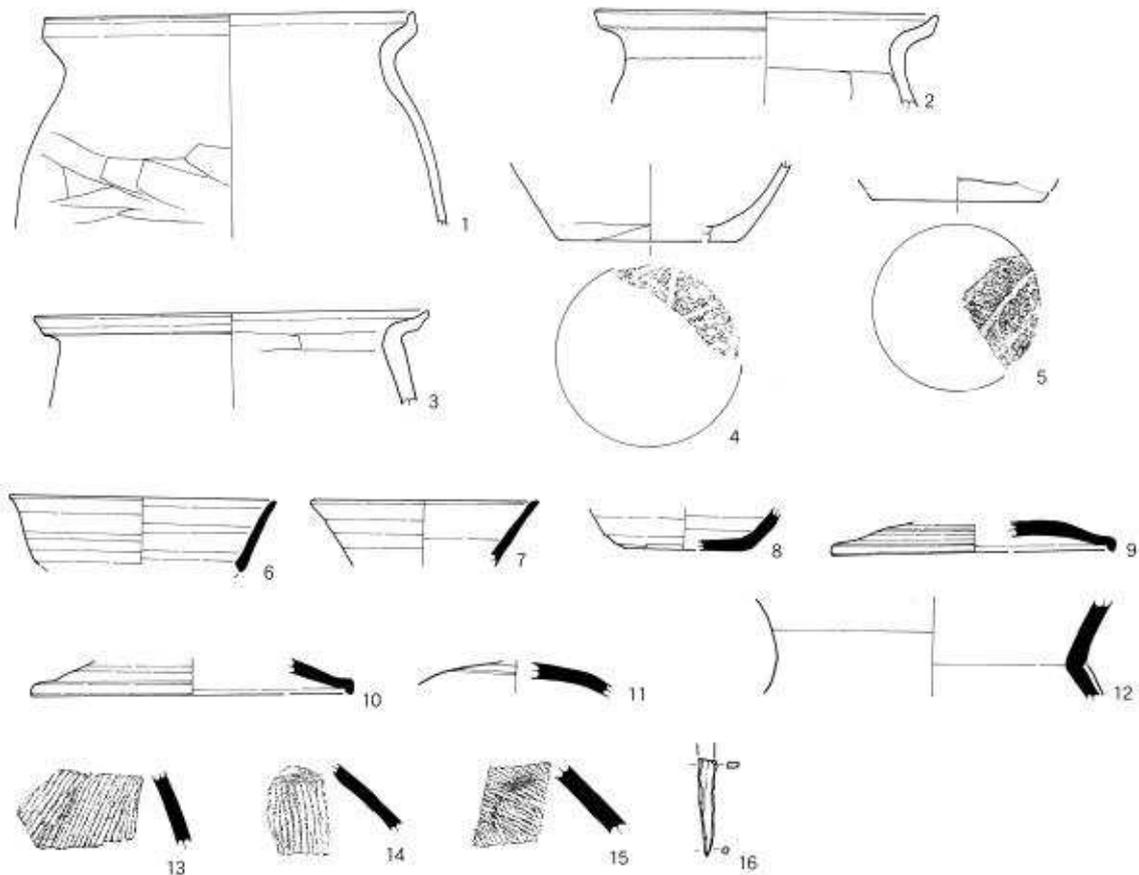
第10図 SI01尖洲洞

0 2m



第11図 SI01カマド実測図

0 1m

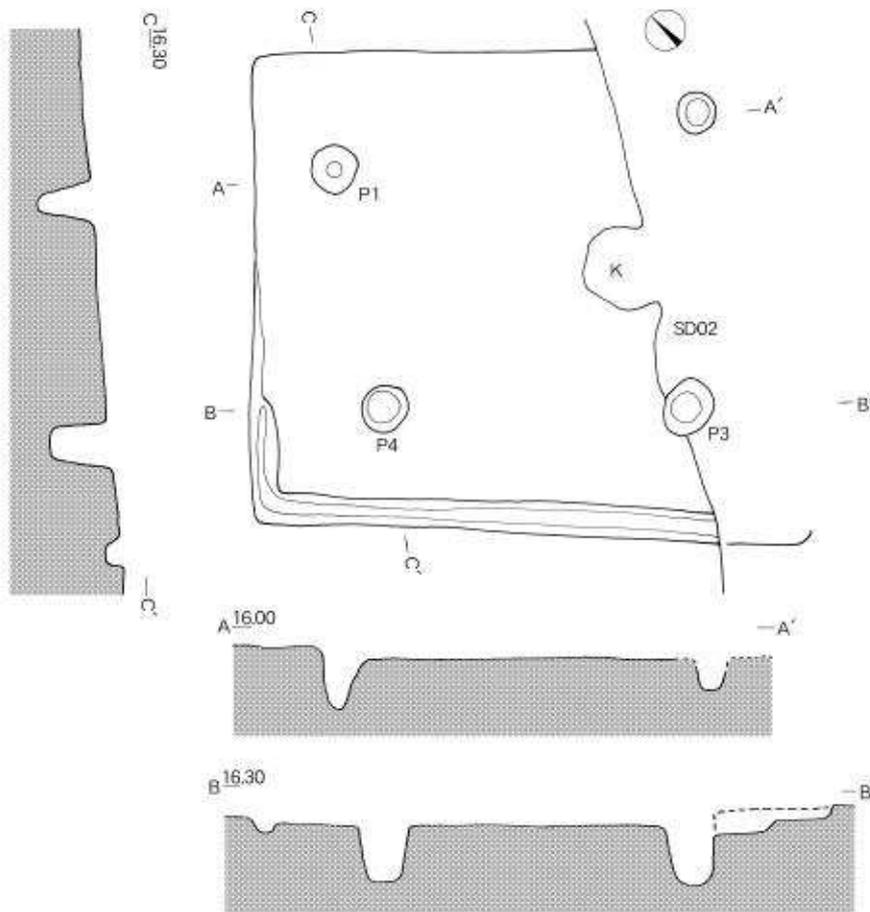


第12図 SI01出土遺物

0 10cm

深さ9.8cmで、底面は楕円状を呈する。火床部には赤褐色の焼土が検出されている。また貯蔵穴が南隅に設けられており、東西に長い楕円形を呈し、規模は長軸60.0cm、短軸55.0cm、深さ30.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がり、底面は平坦であった。覆土は黒褐色土の2層に分層できた。貯蔵穴上面および周辺から遺物が纏まって出土している。また主柱穴P4と南西壁との間に間仕切り溝が検出された。規模は、長さ110.0cm、幅33.0cm、深さ4.5cmで断面U字状を呈している。住居跡覆土は暗褐色土を基調とし6層に分層され、自然堆積の状態を示していた。

遺物は貯蔵穴およびその周辺でまとまって出土している。土師器、球形土錘および磨石が検出された。1は坏である。体部が内彎気味に立ち上がる。2～4は器台である。いずれも小型器台で、2は中央の貫通孔と脚部に円形透し孔を三方に有する。受部内面と脚部外面はミガキが、受部外面はヘラナデが施されている。脚部内面以外は赤彩がみられる。3も同様で中央の貫通孔と脚部円形透し孔が3カ所ある。受部内面と脚部外面はミガキが、受部外面はヘラナデが施されている。脚部内面以外は赤彩がみられる。4は脚部破片である。4は円形透し孔がみられる。5は高杯の脚部破片である。外面は縦位のミガキに赤彩が施されている。6～8は壺である。6・7は折返し口縁で、頭部は縦位のミガキ、内面口縁部は横位のミガキが施されている。6・7は赤彩が施されている。8は口縁部破片で外面が縦位、内面が横位のミガキが施され、赤彩されている。9～13は甕である。9・10は「く」の状口縁甕である。9は外面口縁部に縦位のハケが施されている。10は頭部に縦位のハケである。11の内面口縁部はハケ調製の後横位のミガキが施されている。12・13も口縁部破片である。内外面にハケ調製がみられる。14～17は小型壺もしくは甕である。14・16・17は壺であろう。14・16は頭部にハケの後ヘラケズリが施されている。



第13図 SI02実測図



第14図 SI02出土遺物



15・18は甕であろう。胴部に縦位のハケが施され、頭部と底部は粗いヘラナデがみられる。19～24は底部破片である。やはり壺と甕あるいは埴の区別が困難な資料である。19は埴となろうか。21は壺、20・22～24は甕であろう。20は小型甕と思われる。25～29は甕の胴部破片である。ハケ調製である。30～35はミニチュア土器である。30は胴部が縦位のヘラナデである。赤彩が施されている。31は手捏ね土器で、内面口縁部は横位のハケである。32も同様手捏ね土器で、内面口縁部は横位のハケである。33は外面がヘラケズリ、内面口縁部がハケ調製されている。34は外面がヘラナデ、内面がヘラケズリである。35は底部破片で、ハケが施されている。36・37は球形土錘である。36は径2.76cm、孔径0.74cm、厚さ2.82cm、重さ21.32gを測る。ほぼ球形を呈し、比較的丁寧な

作りである。一方向からの穿孔である。37は径2.63cm、孔径0.52cm、厚さ2.98cm、重さ19.72gを測る。ほぼ球形を呈し、比較的丁寧な作りである。一方向からの穿孔である。38は安山岩製の磨石である。長さ15.39cm、幅10.55cm、厚さ8.53cm、重さ2,108.0gを測る。楕円形の自然石を利用したもので、両端および右側面に敲打痕がみられる。

これら出土遺物は、古墳時代前期後半に比定され、本跡の時期も古墳時代前期と考えられる。

SI04 (第19～21・24図)

調査B区の中央北部、12-G・H区に位置する。南部をSI05、北部をSI06、西部をSB07によって切られ、しかも東隅は緩傾斜面に掛かるため床面が露出する状態であるにもかかわらず、全体を窺い知ることは可能である。平面形は方形に近い長方形を呈し、その規模は東西方向6.03m、南北方向6.37mを測る。炉址が北西壁中央寄りに設置されており、主軸方向はN-33°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、炉址から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大29.0cmである。壁溝は東隅の斜面部以外は全周し、幅13.0～18.0cm、深さ3.0～7.0cmで、断面U字状を呈する。柱穴は3本検出され、いずれも主柱穴で円形を呈している。その規模はP1が径46.0×46.0cm、深さ62.3cm、P2が径80.0×65.0cm、深さ92.3cm、P3が径75.0×55.0cm、深さ79.3cmである。なお、西側主柱穴はSI05によって消失している。炉址は北西壁寄り中央に設置されており、主軸線上で南北方向に長い楕円形に掘り窪められている。規模は長軸77.0cm、短軸46.0cm、深さ14.5cmで、底面は楕円状を呈する。火床部にはにぶい暗褐色の焼土が検出されている。また貯蔵穴が南隅に設けられており、東西に長い楕円形を呈し、規模は長軸78.0cm、短軸63.0cm、深さ39.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がり、底面は平坦であった。覆土中より遺物が出土している。また住居跡覆土は黒褐色土の2層に分層され、自然堆積の状態を示していた。

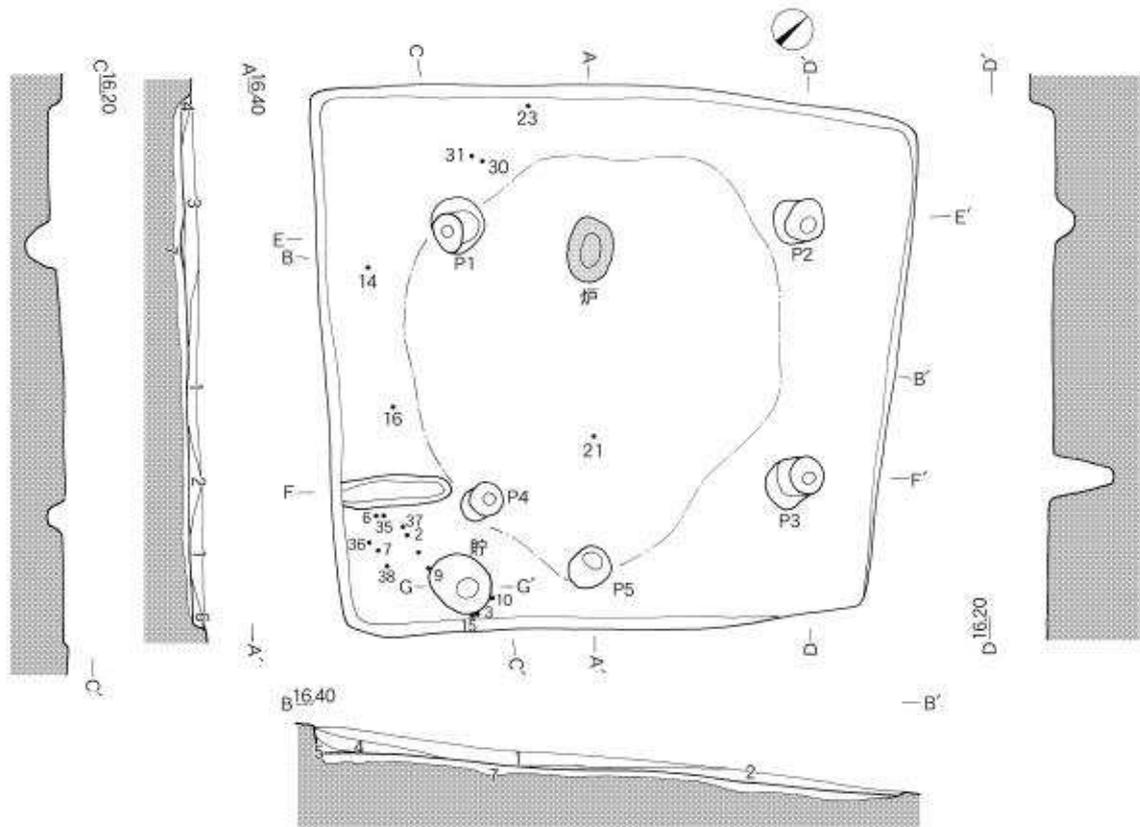
遺物は貯蔵穴およびその周辺でまとまって出土している。土師器と球形土錘が検出された。1～4は埴である。1は内外面に赤彩を伴うミガキが施され、内面は放射状のミガキは光沢を放つ。2は内彎する体部に口縁部が開く。外面と内面口縁部にミガキが施されている。3・4は底部破片である。4は赤彩が施されている。5・6は高坏の脚部である。外面はミガキが施されている。5は赤彩が施されている。7～9は壺である。7は胴部下半の破片で、わずかに下膨れ形状で、外面はヘラナデ、ヘラケズリが施されている。8は底部破片でほぼ中央に径1.8cmの穿孔がある。9は赤彩が施されている。10～20は甕である。10～12は「く」の状口縁甕である。10は口縁部がヨコナデ、胴部のハケは右斜行で、胴下半はヘラナデによりハケを消失させている。11の内面口縁部は横位のハケがみられる。12は外面口縁部に縦位のハケに伴い赤彩が施されている。13も外面は縦位、内面は横位のハケである。14は胴部破片で、上半は縦位のハケ、下半はヘラナデが施されている。15～19は底部破片。16はハケがみられる。20は胴部破片で右斜行もしくは横位のハケである。21は球形土錘である。径2.82cm、孔径0.63cm、厚さ2.72cm、重さ21.70gを測る。ほぼ球形を呈し、丁寧な作りである。一方向からの穿孔である。

これら出土遺物は、古墳時代前期後半に比定され、本跡の時期も古墳時代前期と考えられる。

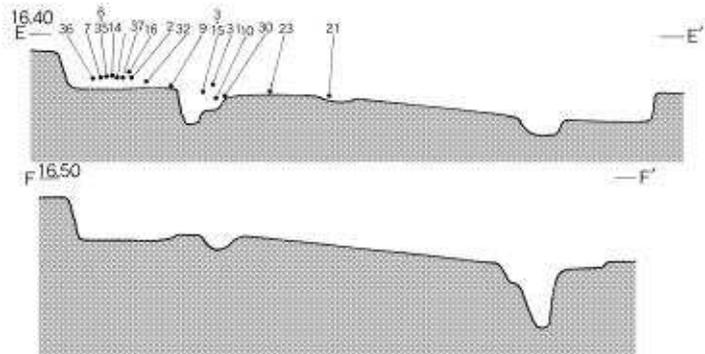
SI05 (第19・20・22・25図)

調査B区の北部、12-H区に位置する。SI04を切り、SB07と重複している。平面形は方形を呈し、その規模は東西軸3.71m、南北軸3.50mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN-58°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大58.0cmである。壁溝は南東壁中央部に間欠部が認められるものの、ほぼ全周し、その規模は幅19.0～43.0cm、深さ5.0～7.9cmで断面U字状を呈する。覆土は黒褐色土を基調とした6層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は構築されていなかった。カマドは北西壁中央に付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を54.0cm程三角形に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ121.0cm、検出された両袖部の最大幅111.0cmを測る。袖部にはにぶい黄橙色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ96.0cm、幅66.0cm、深さ3.0cmの楕円形を呈し、浅い楕円状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

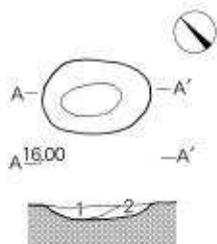
遺物は床面直上およびカマド内で纏まって出土しており、土師器、須恵器、土製品、鉄製品が検出された。1～



- | | |
|------------------|--|
| 1. 暗褐色土(10YR3/3) | 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 2. 暗褐色土(10YR3/4) | 少量のローム粒子・焼土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 3. 褐色土(10YR4/4) | 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 4. 暗褐色土(10YR3/4) | 少量のローム粒子、多量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 5. 暗褐色土(10YR3/4) | 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 6. 褐色土(10YR4/6) | 多量のローム粒子・ロームブロックを碎状に含む。 |
| 7. 暗褐色土(10YR3/4) | 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、堅硬である。(粘床構層土) |

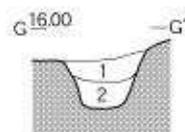


第15図 SI03実測図



- | | |
|-------------------|----------------------------------|
| 1. 褐色土(10YR4/4) | 少量のローム粒子、多量の焼土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 2. 赤褐色土(2.5YR4/6) | 少量のローム粒子、多量の焼土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |

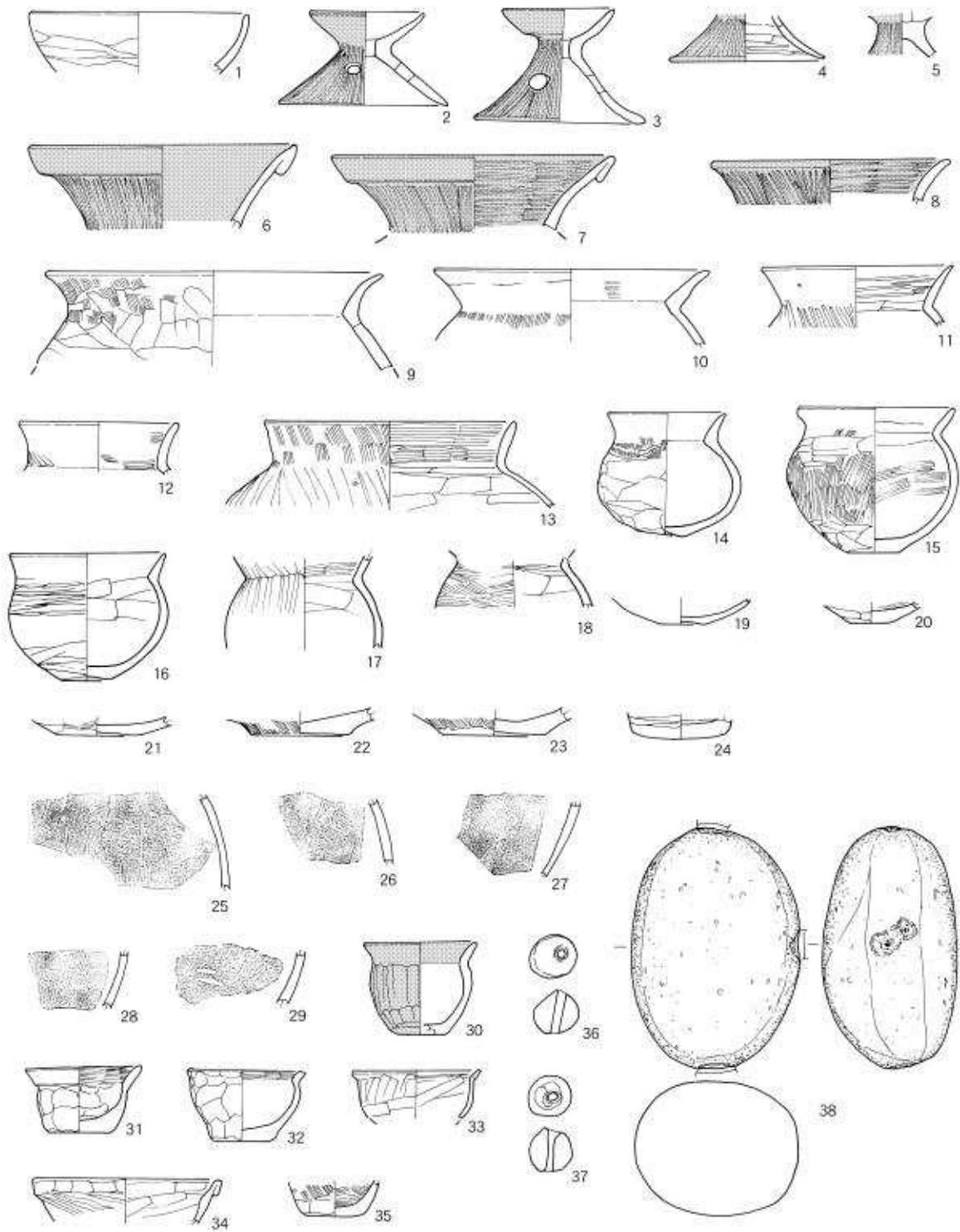
第16図 SI03炉実測図



- | | |
|------------------|--------------------------------------|
| 1. 黒褐色土(10YR3/2) | 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 2. 黒褐色土(10YR3/1) | 少量のローム粒子、微量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |

第17図 SI03貯蔵穴断面図





第18圖 SI03出土遺物

0 10cm

4は土師器で、1は坏である。口縁部と体部の境の稜は弱く、底部も丸底であろう。黒色処理が施されている。2～4は甕である。口縁部破片で、体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。4は体部下半部で底部には木葉痕がみられる。5～20は須恵器である。5～13は坏で、いずれもロクロ成形である。5は二次底部面が回転ヘラケズリである。6・7・10・12・13の二次底部面は手持ちヘラケズリで調製されている。6・12は底部にヘラ記号がみられる。6～10は新治産である。14・15は有台坏である。いずれも高台は貼付である。16・17は蓋である。16は擬宝珠状のつまみが付き、天井部は回転ヘラケズリである。18は高坏の脚部破片である。19・20は甕である。外面は平行タタキで調製されている。19は自然釉が掛かっている。21は球形土錘の破片である。径2.64cm、孔径0.67cm、厚さ2.50cm、重さ8.98gを測る。約半分を欠損している。ほぼ球形で丁寧なく作りである。一方向からの穿孔である。22・23は鉄製品で、22は鎌である。切先を欠損する。現存長14.96cm、刃最大幅3.86cm、厚さ0.46cm、重さ79.0gを測る。全体が内側へカーブし、身幅は切先に向かって次第に狭くなっていく。基部付近は錆化が著しく詳細に計測できないが、折り曲げて作っている。23は刀子の破片である。現存長6.29cm、最大幅0.62cm、厚さ0.25cm、重さ15.18gを測る。全体的に錆化が著しく、刃部および茎部ともに欠損している。関は背および刃部に直角に付けられているものと思われる。

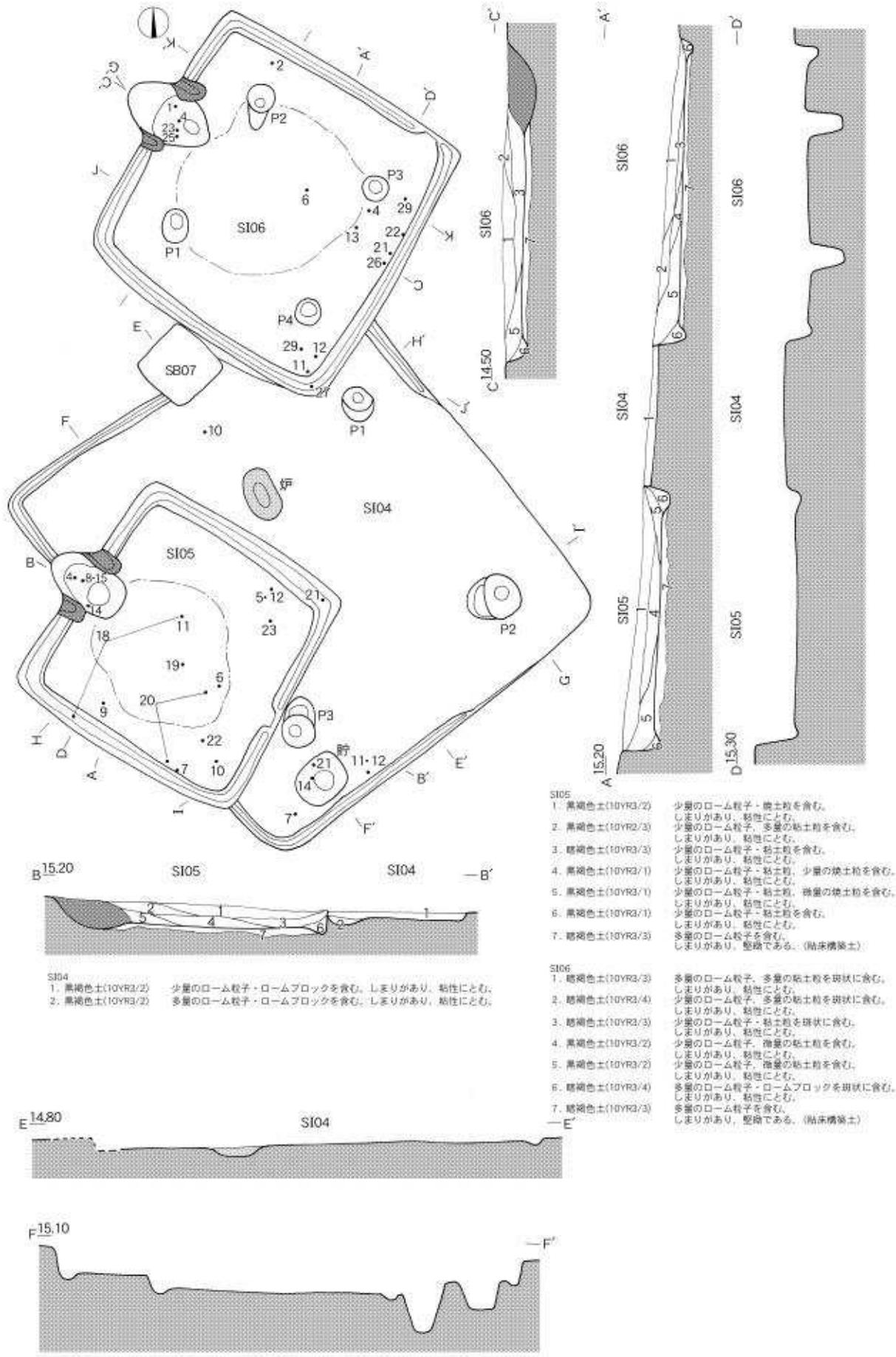
これら出土遺物のうち、6は8世紀第4四半期、8・9が8世紀後半、14が8世紀末から9世紀初頭、5・7・12・18が9世紀前半に比定され、本跡の時期は9世紀第1四半期と考えられる。

SI06 (第19・20・23・26・27図)

調査B区の北部、12-G区に位置する。SI05と同様にSI04を切り、SB07と重複している。平面形は方形を呈し、その規模は東西軸4.32m、南北軸4.14mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN-60°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は12.0～43.0cmである。壁溝は北東隅に間欠部が認められるほか、ほぼ全周し、幅20.0～31.0cm、深さ5.0～18.0cmの断面U字状を呈する。覆土は暗褐色土と黒褐色土を基調とした6層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は4本検出され、いずれも主柱穴で円形もしくは楕円形を呈している。その規模はP1が径46.0×32.0cm、深さ39.0cm、P2が径33.0×26.0cm、深さ60.0cm、P3が径37.0×36.0cm、深さ54.5cm、P4が径36.0×33.0cm、深さ34.5cmである。カマドは北西壁中央に付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を47.0cm程楕円形に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ119.0cm、検出された両袖部の最大幅113.0cmを測る。袖部はにぶい黄褐色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ73.0cm、幅71.0cm、深さ7.0cmの楕円形を呈し、浅い播鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物は住居跡南部およびカマド内で纏まって出土しており、土師器、須恵器、石製品が検出された。1～8は土師器で、いずれも甕である。1～3は口縁部破片で、体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。4・8は体部破片で縦位のヘラナデ調製が施されている。5～7は底部破片で木葉痕がみられる。9～28は須恵器である。9・10・28は坏で、ロクロ成形である。9・28の二次底部面は手持ちヘラケズリで調製され、底部は回転ヘラケズリである。11・12は有台坏である。いずれも高台は貼付で、底部は回転ヘラケズリである。13～15は盤で、高台は貼付である。13の底部は回転ヘラケズリである。6～10は新治窯産である。16～20は蓋である。16は擬宝珠状のつまみが付き、天井部は回転ヘラケズリである。21～27は甕である。22～26の外面は平行タタキで調製されている。22と25は同一個体である。27は底部で内面にタタキ調整がみられる。なお、9・11～14・16・24～26は新治窯産である。29は凝灰岩製の砥石で、完存品である。長さ8.23cm、幅は最大3.37cm、厚さも最大2.91cm、重さ121.0gを測る。両小口に原面を残すほかは4面に研磨面をもつ。とくに表表面は緩いカーブを描く研磨面をもつ。また図左上には径0.42cmの穿孔がみられ、左側面に貫通しており、紐通孔と思われる。

これら出土遺物のうち、17は8世紀第2四半期、9・12～14は8世紀第3四半期、16が8世紀後半に比定され、本跡の時期は8世紀第3四半期と考えられる。



B 15.20 SI05 SI04 -B'

1. 黒褐色土(10YR2/2) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 2. 黒褐色土(10YR3/2) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。

E 14.80 SI04 -E'

F 15.10 -F'

SI05

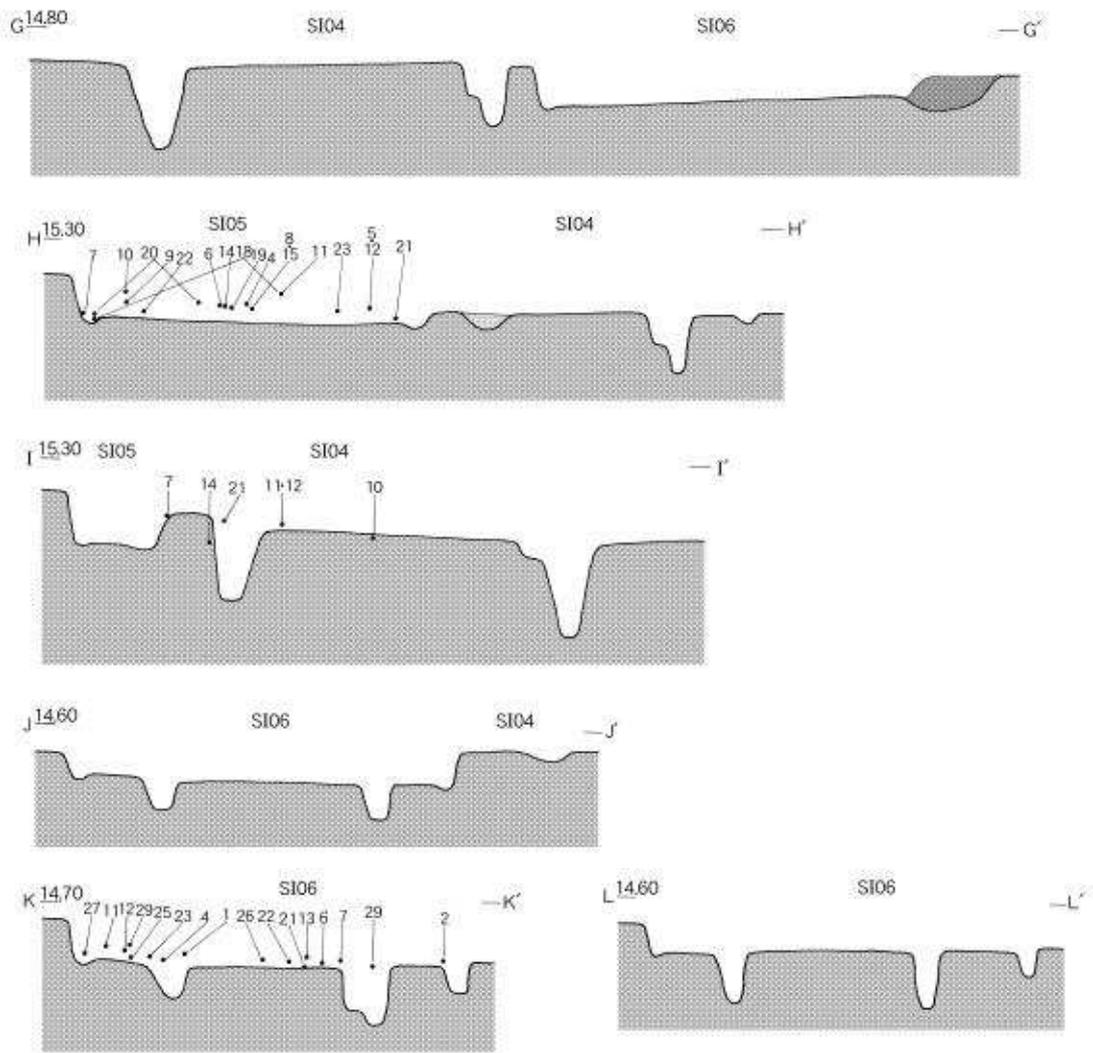
1. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。少量のローム粒子、多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 少量のローム粒子・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
3. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
4. 黒褐色土(10YR2/1) 少量のローム粒子・粘土粒、少量の焼土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
5. 黒褐色土(10YR2/1) 少量のローム粒子・粘土粒、微量の焼土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
6. 黒褐色土(10YR2/1) 少量のローム粒子・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
7. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、堅固である。(粘土塊混入)

SI06

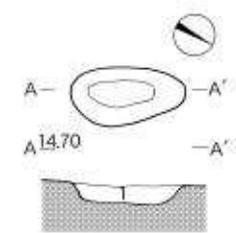
1. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子、多量の粘土粒を塊状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 暗褐色土(10YR2/4) 少量のローム粒子、多量の粘土粒を塊状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
3. 暗褐色土(10YR2/3) 少量のローム粒子・粘土粒を塊状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
4. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子、微量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子、微量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
6. 暗褐色土(10YR3/4) 多量のローム粒子・ロームブロックを塊状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
7. 暗褐色土(10YR2/3) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、堅固である。(粘土塊混入)

第19図 SI04~06実測図(1)

0 2m

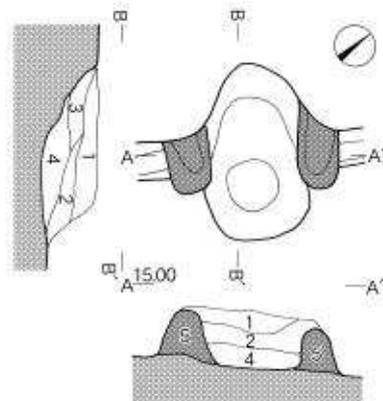


第20図 SI04~06実測図 (2)



1. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にともむ。

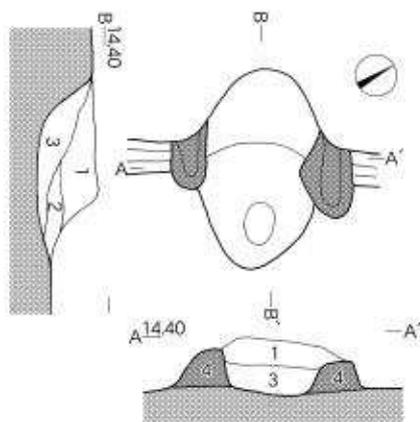
第21図 SI04炉実測図



1. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にともむ。
2. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子・粘土粒を散状に含む。しまりがあり、粘性にともむ。
3. 赤褐色土(2.5YR4/6) 少量のローム粒子・多量の粘土粒・焼土粒を含む。しまりがあり、粘性にともむ。
4. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子・粘土粒を散状に含む。しまりがあり、粘性にともむ。
5. 濃い黄褐色土(10YR5/3) 多量の粘土粒を含む。(カマド構築材)

第22図 SI05カマド実測図





1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 少量のローム粒子・焼土粒、多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子・焼土粒・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
3. にぶい黄褐色土(10YR7/4) 少量のローム粒子・焼土粒、多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量のローム粒子・焼土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

第23図 SI06カマド実測図



SI07 (第28～30図)

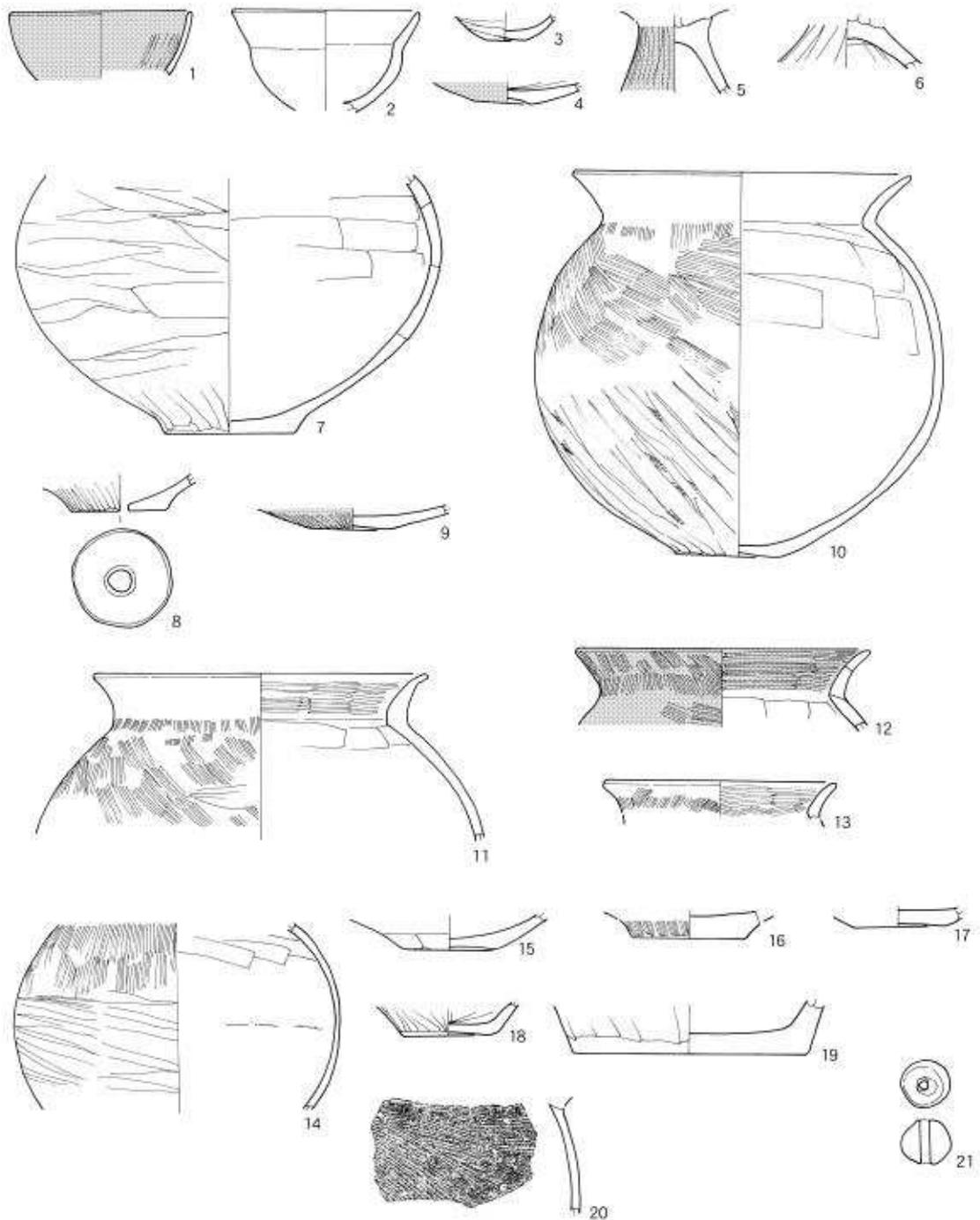
調査B区の中央東部、12・13-H・I区に位置する。本跡は当初西隅から北西壁辺のみの調査であったが、二次調査の拡張によって全掘することができた。しかし、北東部が緩傾斜面に掛かるため、遺構の確認で既に床面が露出し、もしくは削平されている状態であった。平面形は方形を呈するものと推定され、確認できる規模は東西軸4.55m、南北軸4.80mを測る。炉址は北西壁辺寄りに設置されており、主軸方向はN-47°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、床面が削平されていない部分には硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、残存壁高は最大30.0cmである。柱穴および壁溝は確認できなかった。覆土は黒褐色土を基調とした2層に分層され、自然堆積の状態を示していた。炉址は北西壁寄り中央に設置されており、主軸方向と同じ南北方向に長い楕円形に掘り窪められている。規模は70.0×45.0cm、深さ9.5cmで、底面は播鉢状を呈する。火床部にはにぶい赤褐色の焼土が検出されている。また一次調査時において西隅付近で炭化材が検出されており、火災住居であった可能性が高い。

遺物は床面直上に散存する状況で出土し、いずれも土師器である。小型壺・埴・器台・壺・甕である。1はミニチュアの壺である。丸底口縁部が大きく開き、体部は丸味をもつ。また底部付近に細い穿孔部が認められる。高さは5.0cmを測る。2は小型壺の胴部破片である。下膨れ形状で、赤彩が施されている。3は高坏の脚部破片である。受身はヘラナデ、脚部はハケである。4は折返し口縁壺の口縁部破片である。内外面ともにヘラナデで調製されている。5は甕の胴部下半である。ハケ調製の後、縦位のヘラナデで、下部は横位のヘラケズリである。

これら出土遺物は、古墳時代前期後半に比定され、本跡の時期も古墳時代前期と考えられる。

SI08 (第31～33図)

調査B区の北西隅、12-F・G区に位置する。北部の半分近くが未調査区域に伸びており、掘立柱建物跡SB15および竪穴状遺構SX10によって切られている。平面形は方形を呈するものと推定され、検出された規模は東西軸3.62m、南北軸4.85mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN-57°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大38.0cmである。壁溝は検出面で全周し、幅18.0～30.0cm、深さ6.5～10.5cmで、断面U状を呈する。覆土は黒褐色土を基調とした4層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は3本検出され、いずれも主柱穴であるが、北側の主柱穴が未確認で、東側柱穴は約半分の検出である。形状は円形を呈し、その規模はP1が径72.0×57.0cm、深さ49.0cm、P2が径28.0×21.0cm、深さ23.5cm、P3が径25.0×25.0cm、深さ36.5cmである。また南東壁際中央部には円形の貯蔵穴が設置されている。規模は径63.0×61.0cm、深さ57.5cmを測り、黒褐色土が堆積していた。カマドは北西壁ほぼ中央に付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を26.0cm程三角形に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ120.0cm、検出された両袖部の最大幅123.5cmを測る。袖部はにぶい黄褐色

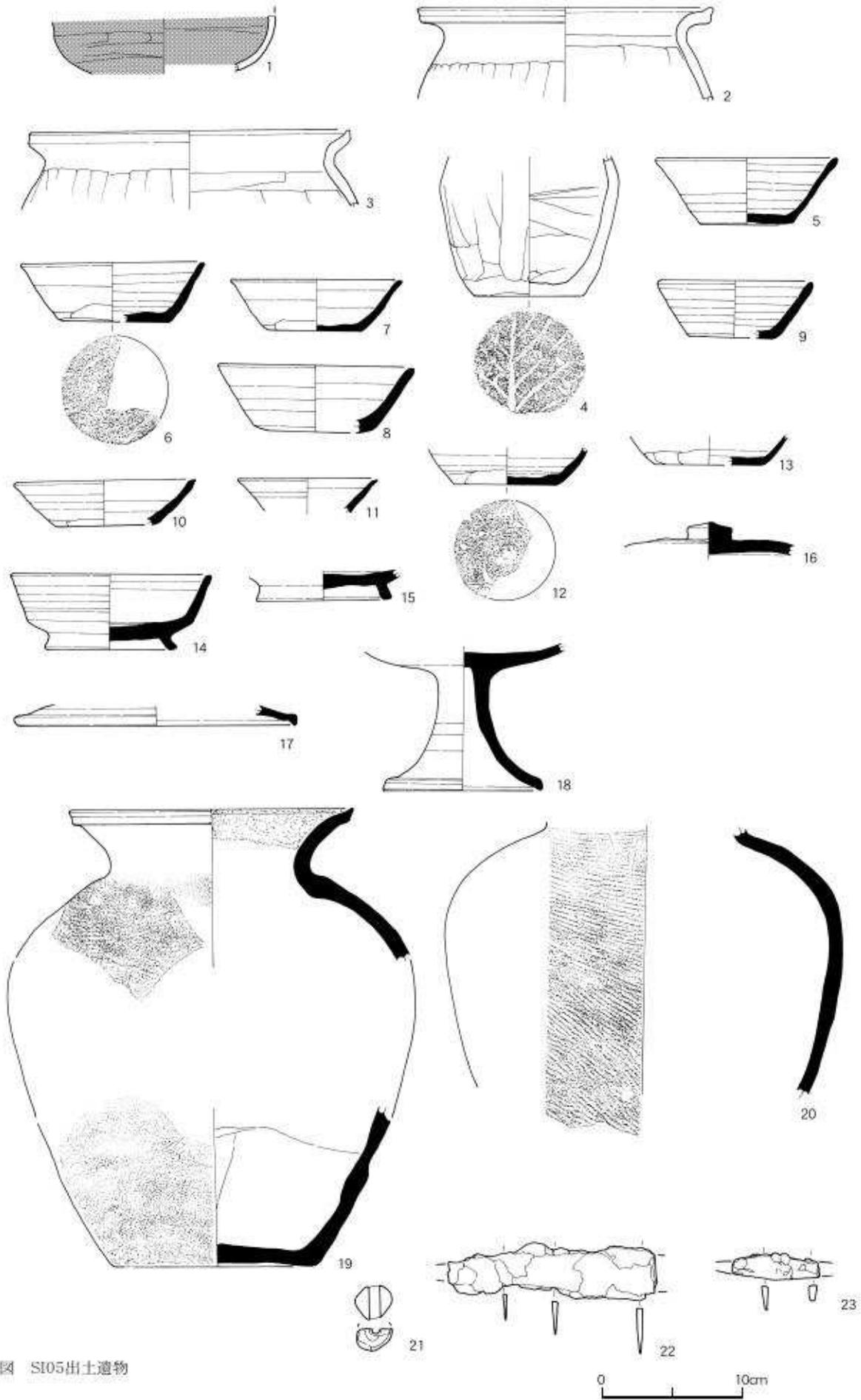


第24図 SI04出土遺物

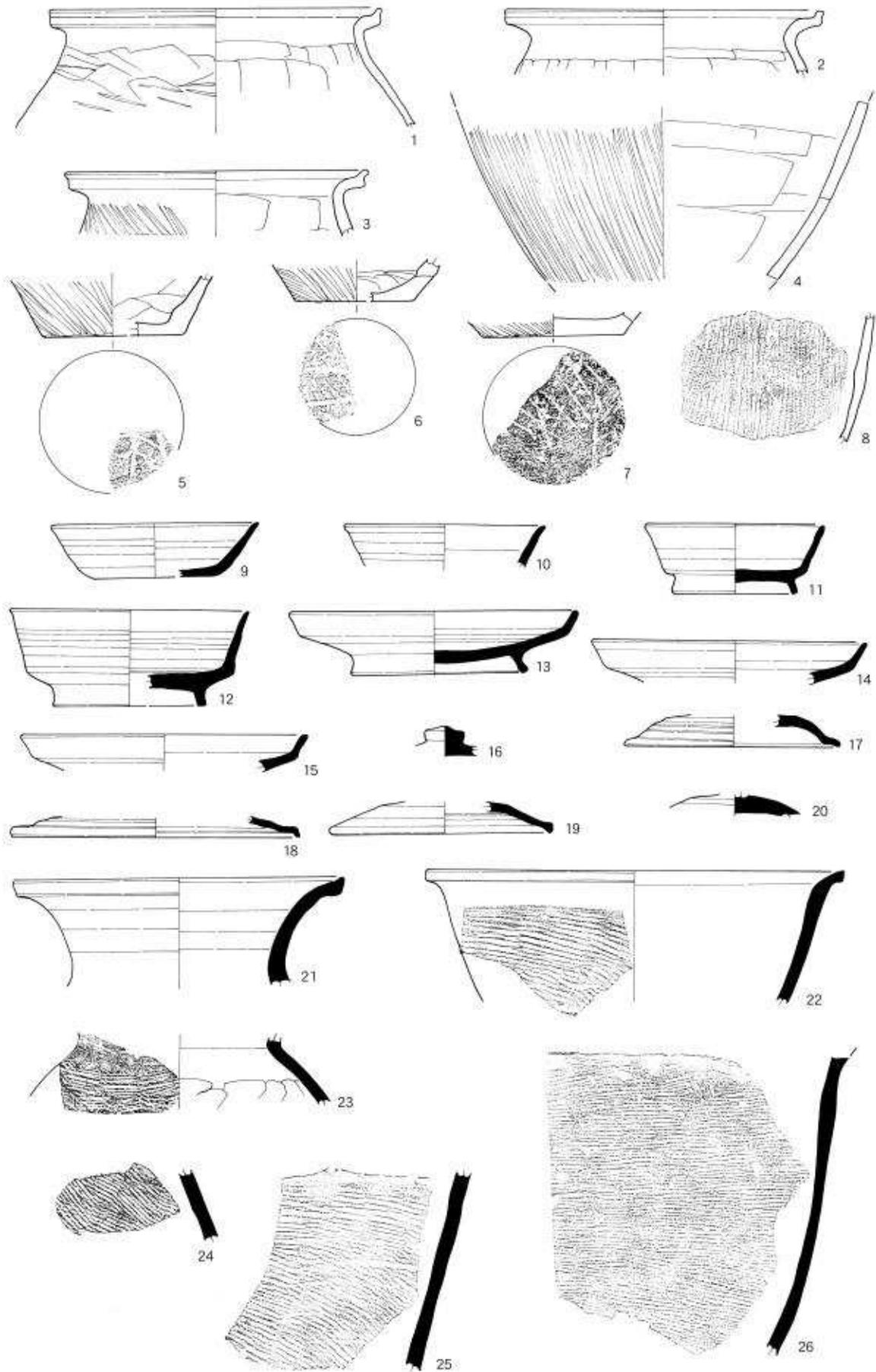
0 10cm

粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ94.5cm、幅70.0cm、深さ14.0cmの楕円形を呈し、浅い挿鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

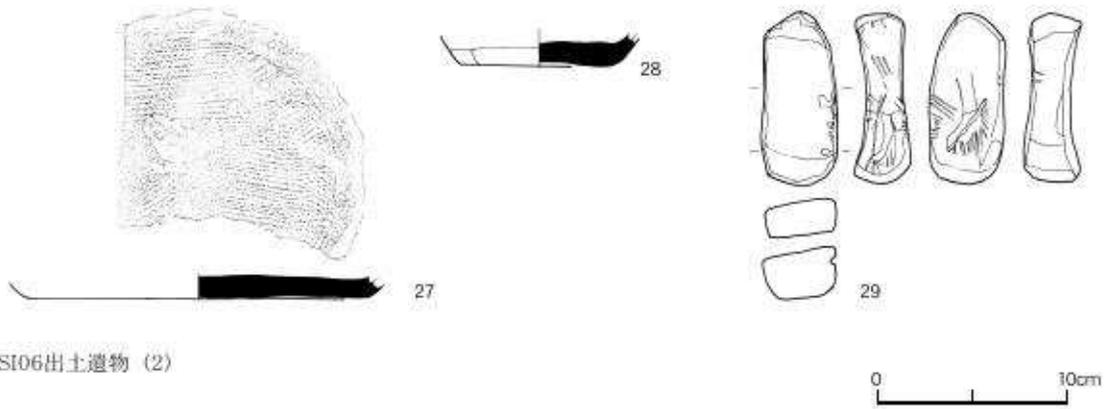
遺物はカマド内とその周辺で纏まって出土しており、土師器、須恵器が検出された。1～11は土師器である。1は坏で口縁部と体部の境に明瞭な稜をもつ。口縁部内外面ヨコナデで、外面体部はヘラケズリである。2は碗である。高台はハの状に開く。内面坏部はヘラミガキの後黒色処理を施している。3～11は甕である。3～6は



第25圖 SI05出土遺物



第26図 SI06出土遺物 (1)



第27図 SI06出土遺物 (2)

口縁部破片で、3は体部が僅かに内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外方へ開く。赤彩が施されている。4・5の口縁部は外反する。4は赤彩が施されている。6は口縁部が強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。7～11は胴部下半の破片である。7・8は体部破片で胴部が球形を呈する。底部に木葉痕を残す。9は下半部が縦位のヘラナデ調製で施されている。10・11は底部破片で木葉痕がある。12から18は須恵器である。12は坏で、二次底部面は回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切りである。新治窯産である。13は蓋である。扁平なつまみが付き、天井部は回転ヘラケズリである。14は甕である。口縁部破片で端部は摘み上げられている。外面は平行タタキである。15～18は甕の胴部破片である。平行タタキである。

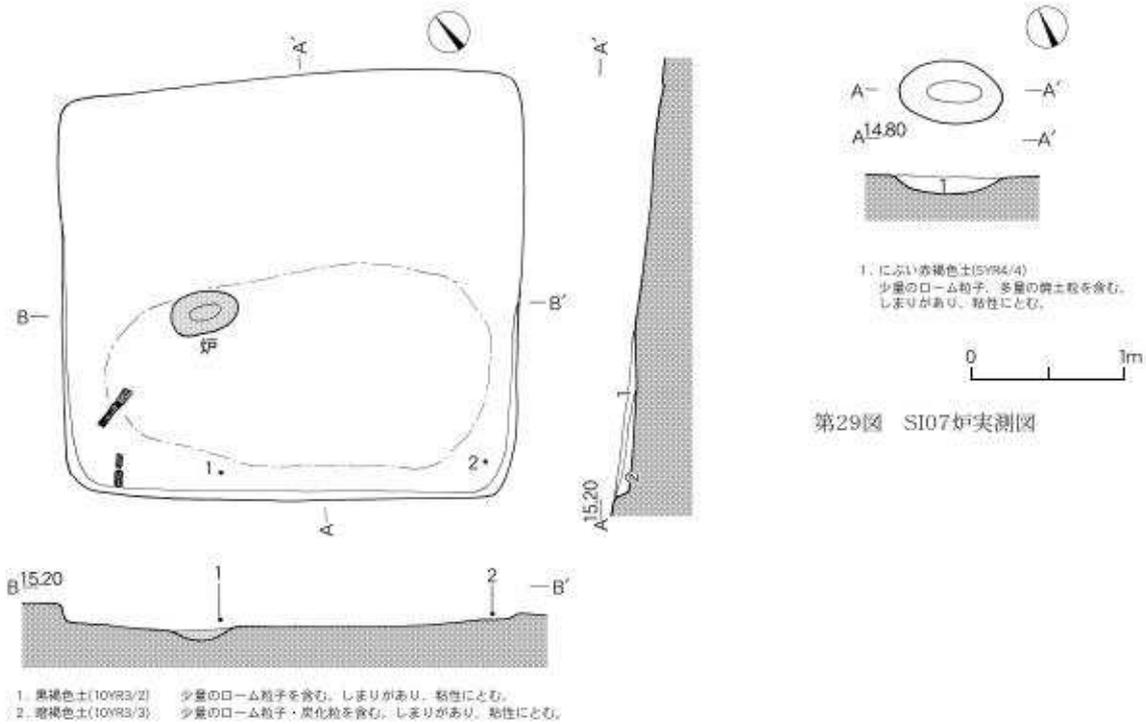
これら出土遺物のうち、12は8世紀前半に比定され、本跡の時期は8世紀前半と考えられる。

SI09 (第34・35・36図)

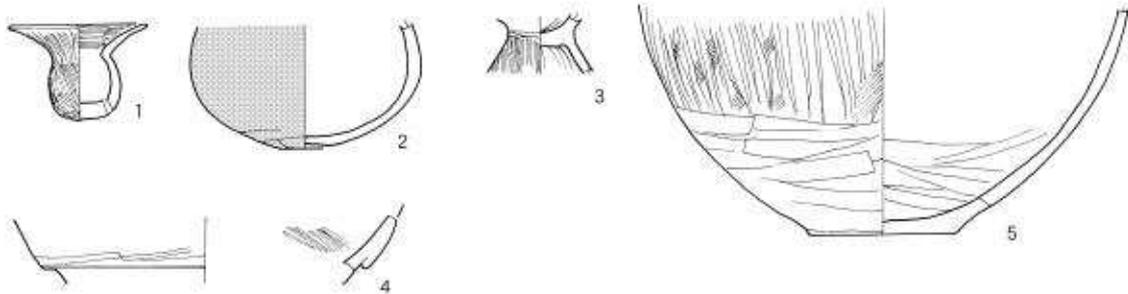
調査B区の北部、13-G区に位置する。SI10を切って構築している。平面形は方形を呈し、その規模は東西軸2.98m、南北軸3.15mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN-58°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大27.1cmである。壁溝は南東壁辺の一部に間欠部がみられるものの、ほぼ全周し、幅10.0～28.0cm、深さ2.0～7.0cmで、断面U字状を呈する。覆土は黒褐色土を基調とした3層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は検出できなかった。カマドは北西壁中央に付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を15.0cm程半円状に掘り込んでい。規模は炊人口部から煙道部までの長さ84.0cm、検出された両袖部の最大幅97.0cmを測る。袖部にはぶい黄橙色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ71.0cm、幅61.0cm、深さ5.0cmの楕円形を呈し、浅い播鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物は住居跡南部およびカマド内で纏まって出土しており、土師器、須恵器が検出された。1～9は土師器である。1～3は坏で、2は二次底部面は回転ヘラケズリで、底部も回転ヘラケズリである。また2・3は内面ヘラミガキの後、黒色処理が施されている。4～9は甕である。4は底部を欠損するものの、口縁部から体部下半まで遺存している。体部のほぼ中央に最大径をもち、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。体部下半は縦位のヘラナデ整形である。5～8は口縁部破片で、体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。9は底部破片で木葉痕がみられる。10～20は須恵器である。10～13は坏で、ロクロ成形である。いずれも二次底部面は手持ちヘラケズリで調製され、10の底部は回転ヘラ切り、11～13はヘラケズリである。14～17は盤である。いずれも高台は貼付で、14の底部は回転ヘラケズリである。18は蓋である。天井部は回転ヘラケズリである。19・20は甕である。外面は平行タタキで調製されている。10・12～14・16は新治窯産である。

これら出土遺物のうち、11・16は8世紀第4四半期、12～14・20は8世紀末葉から9世紀初頭。10が9世紀前



第28図 SI07実測図



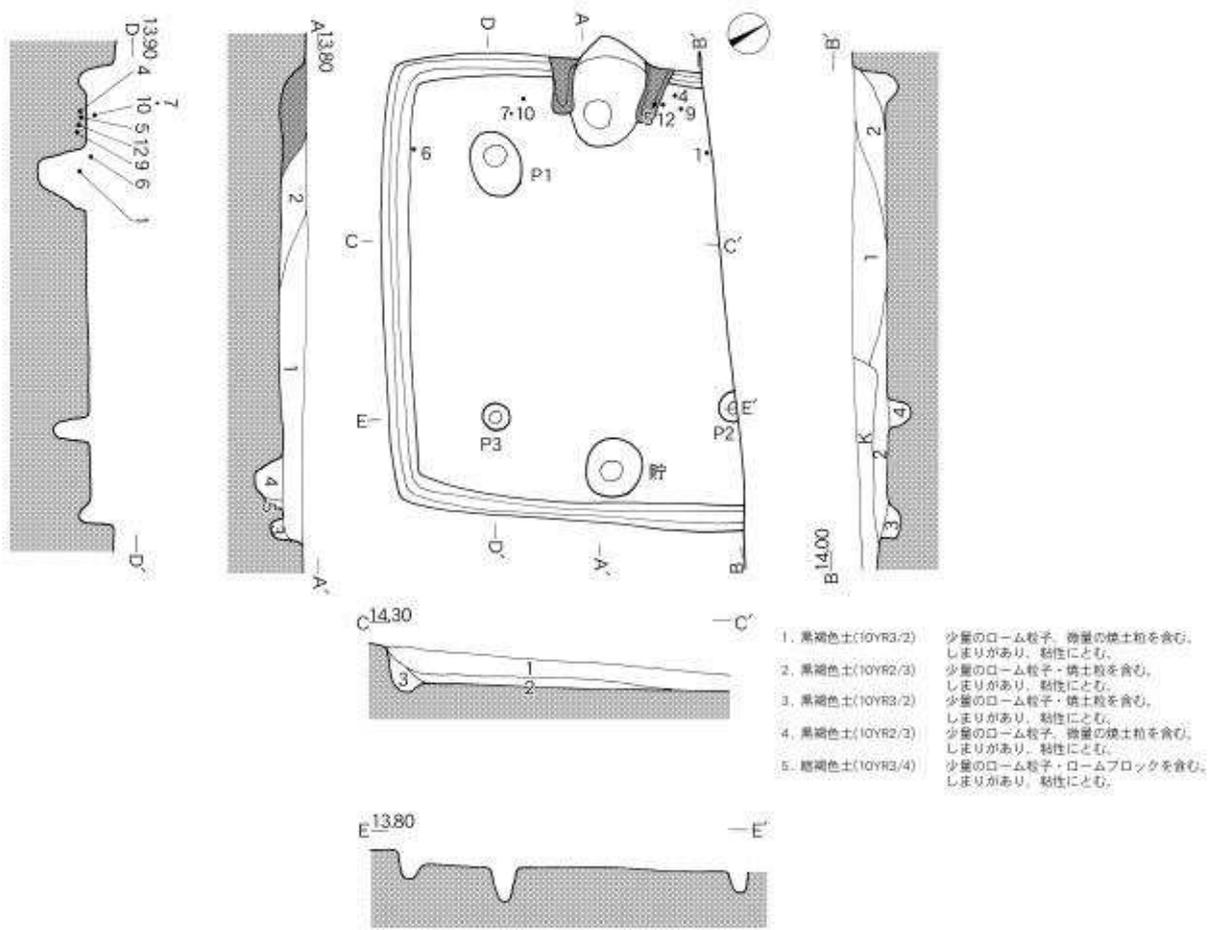
第30図 SI07出土遺物



半に比定され、本跡の時期は9世紀前半と考えられる。

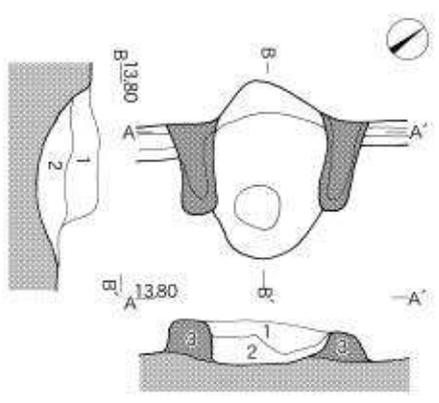
SI10 (第34・37図)

調査B区の北部、13-G区に位置する。SI09に北部半分が切られている。検出された平面形は方形を呈するものと推定され、その規模は東西軸4.34m、南北軸3.95mを測る。カマドは確認できないものの、北西壁に設置されているものとする。主軸方向はN-59°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、検出された床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大30.9cmである。壁溝は検出部で全周し、幅12.0~32.0cm、深さ2.5~9.0cmで、断面U字状を呈する。覆土は黒褐色土を基調とした2層に分層され、自然堆積の状態を示してい



第31図 SI08実測図

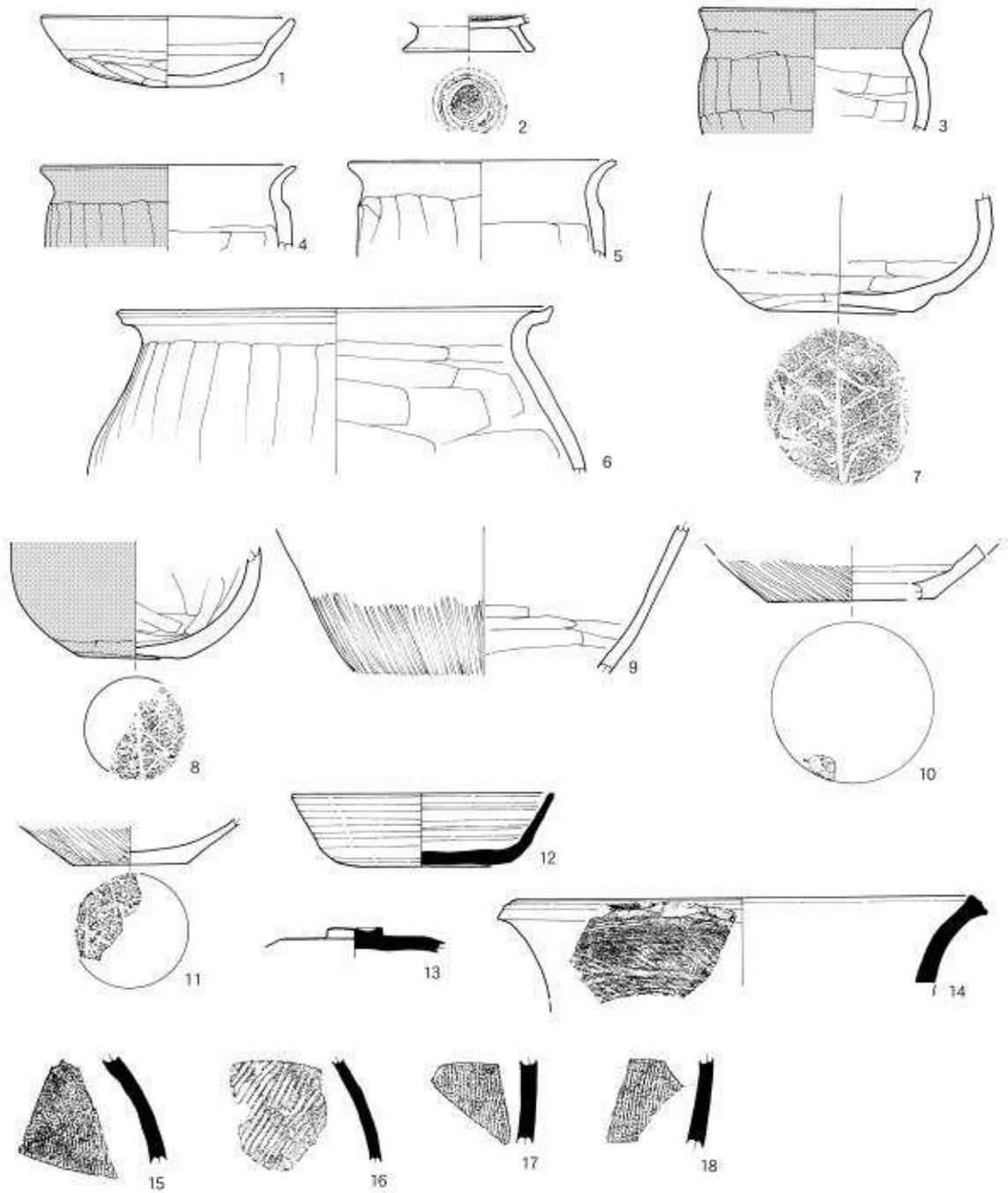
0 2m



- 1. 濃い黄褐色土(10YR5/3) 少量のローム粒子、多量の粘土粒・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとも。
- 2. 濃い黄褐色土(10YR4/4) 少量のローム粒子、多量の粘土粒、少量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとも。
- 3. 濃い黄褐色土(10YR5/3) 多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとも。

第32図 SI08カマド実測図

0 1m



第33図 SI08出土遺物

0 10cm

た。柱穴は4本検出され、いずれも主柱穴で円形を呈している。その規模はP1が径34.0×30.0cm、深さ14.8cm、P2が径37.0×35.0cm、深さ19.0cm、P3が径42.0×36.0cm、深さ33.5cm、P4が径38.0×32.0cm、深さ11.8cmである。カマドはSI09によって壊されているものと推定する。

遺物は住居跡南部で散在して出土しており、土師器、須恵器が検出された。1～9は土師器である。1～4は坏で、1・2は口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち、口縁部が大きく開く。3・4は体部が内彎気味に開き、内面は

ヘラミガキが施されている。5～8は甕である。5は体部が球形を呈し、口縁部が外反する。6・7も同様であろう。8・9は体部下半でヘラナゲ整形が施されている。また8は木葉痕がみられる。10は須恵器甕の体部破片である。平行タタキで調製され、自然軸が掛かっている。

これら出土遺物のうち、3・10のようにSI09からの混入が認められるが、7世紀後半に比定され、本跡の時期も7世紀後半と考えられる。

SI11 (第38～40図)

調査A区の南西隅、12-E・F、13-F区に位置する。南側約半部が未調査区域に伸び、北壁辺が緩傾斜に掛かるため削平され、確認面で既に一部の床面が露出する状態であった。したがって全形は確認できないが、残存している壁面や床面から方形を呈しているものと推定する。検出された規模は東西軸6.95m、南北軸3.67mを測る。炉址は北東壁辺中央寄りに設置していることから、主軸方向はN-34°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、検出された炉址から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大8.2cmである。柱穴は2本検出され、いずれも主柱穴で円形を呈している。その規模はP1が径64.0×55.0cm、深さ43.2cm、P2が径55.0×50.0cm、深さ36.5cmである。覆土は黒褐色土を基調とした3層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は確認できなかった。また炉址は北西壁寄りの中央に設置され、遺存状態は比較的良好である。平面形は円形を呈し、規模は長軸103.0cm、短軸86.0cm、深さ15.4cmの挿鉢状に掘り込んで、火床部に暗赤褐色の焼土が検出されている。

遺物は床面直上に散存する状況で出土し、土師器と球形土錘が検出された。1は直口壺の口縁部破片である。わずかに外反する。内外面ともにハケ調製が施され、赤彩されている。2は甕底部破片。3は甕体部破片である。ハケ調製が施されている。4は球形土錘である。径3.36cm、孔径0.74cm、厚さ2.92cm、重さ30.02gを測る。上下面の孔部は面取りが施されている。一方向からの穿孔である。

これら出土遺物は古墳時代前期に比定され、本跡の時期も古墳時代前期と考えられる。

SI12 (第41・42図)

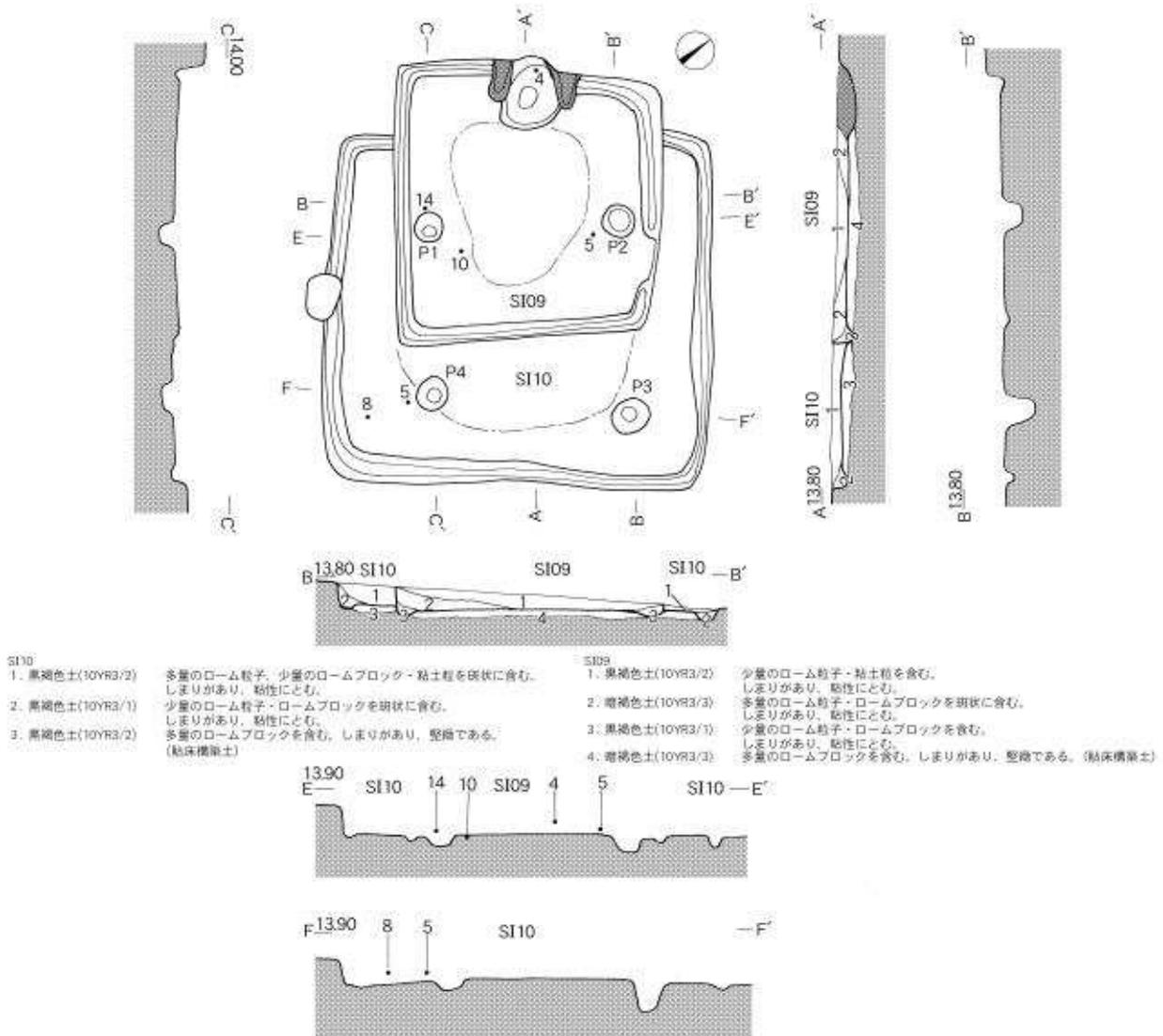
調査A区の西端、13-D・E区に位置する。西側大半が未調査区域に伸びており、北部でSI14を切って構築している。平面形は方形を呈するものと推定される。検出された規模は東西軸1.00m、南北軸3.08mを測る。北西壁辺にカマドが設置してあるものとする、主軸方向はN-31°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、全体的に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、残存壁高は最大11.9cmである。壁溝は検出部で全周し、幅14.0～24.0cm、深さ2.0～8.8cmで断面U字状を呈する。覆土は黒褐色土を基調とした3層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は確認できなかった。

遺物は床面上に散存する状況で出土し、土師器が検出された。1・2は坏である。ロクロ成形で、いずれも二次底部面は手持ちヘラケズリで、2は内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。3は塊の底部破片である。ハの状に開く高台は貼付である。内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。4は甕底部破片である。

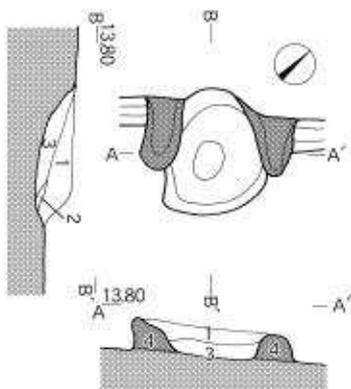
これら出土遺物は10世紀代に比定され、本跡の時期も10世紀前半と考えられる。

SI13 (第43～45図)

調査A区の南部、13-E、14-D・E区に位置する。北壁辺はSD03に、南東隅はSX03、SK23に、北西隅はSK21・22に切られているものの、全体的に大きな破壊はなく、全形を窺い知ることができる。平面形は南北に長い長方形を呈し、その規模は東西軸3.48m、南北軸2.67mを測る。カマドは北西壁に設置されており、主軸方向はN-59°-Wを指す。床面はほぼ平坦であるが、全体的に硬化面が確認できず軟弱である。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大30.8cmである。覆土は黒褐色土の単層であり、自然堆積の状態を示していた。柱穴および壁溝は確認できなかった。カマドは北西壁中央南寄りに付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を29.5cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ75.0cm、検出された両袖部の最大幅115.0cmである。袖部はにぶい黄橙色粘土と砂の混土で構築されている。火床部の掘り込みは確認できず、床面とほぼ同じレベ



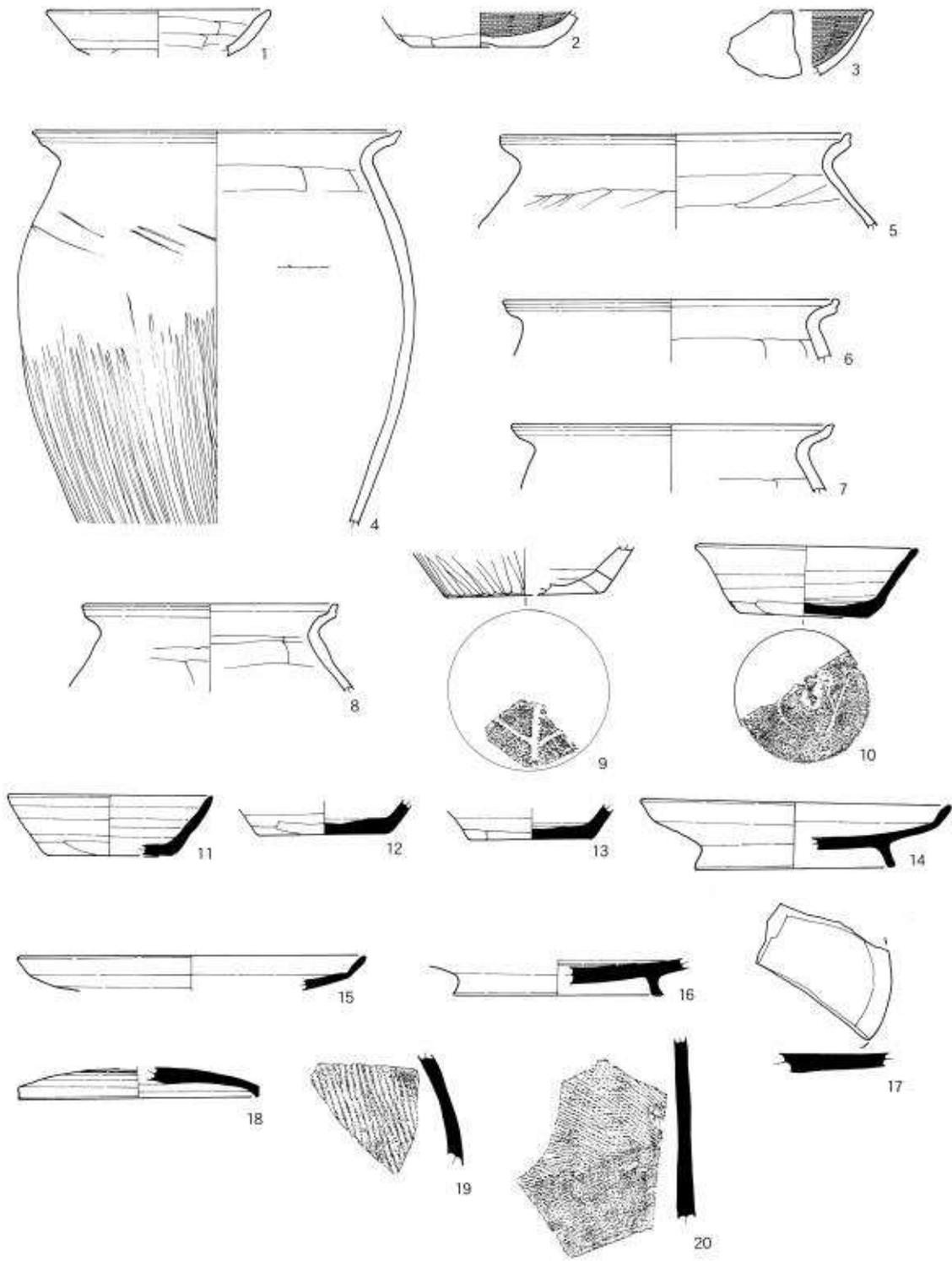
第34図 SI09・10実測図



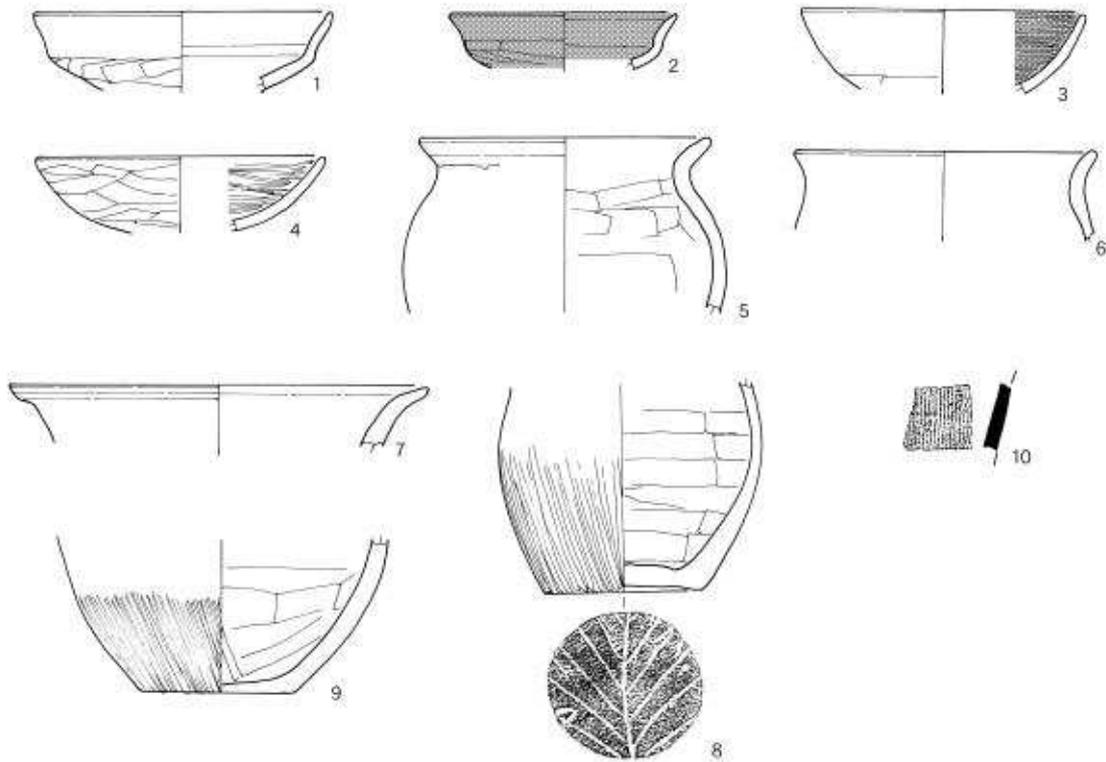
- 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子・粘土粒を混状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 黒褐色土(10YR3/1) 少量のローム粒子。多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 褐色土(10YR4/6) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- にじい黄褐色土(10YR6/4) 多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。(カマド構築材)

第35図 SI09カマド実測図





第36図 SI09出土遺物



第37図 SI10出土遺物

0 10cm

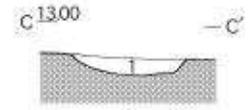
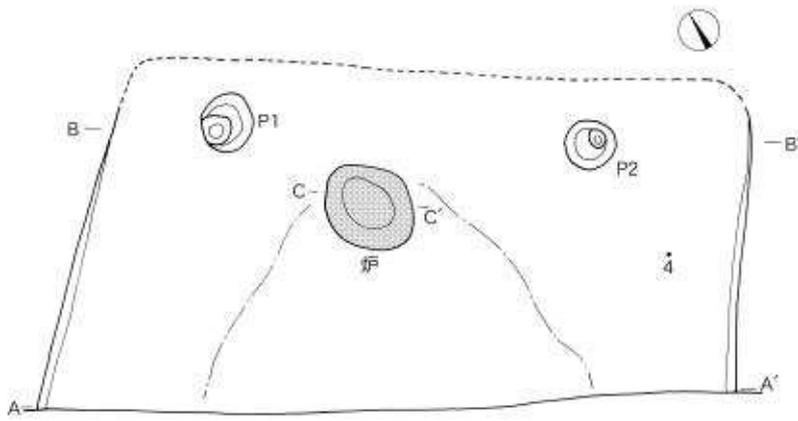
ルには被熱により赤変硬化していた。その範囲は長さ56.0cm、幅44.0cmを測る。

遺物は床面直上に散存する状況で出土しており、土師器、須恵器、土製品が検出された。1～8・10～13は土師器である。1～6はロクロ成形の坏である。1は底部がヘラケズリである。2の底部はヘラ切りである。4は回転糸切りである。また5の内面はヘラミガキの後黑色処理を施している。7・8・10は塊である。高台はいずれもハの状に開く。8の内面はヘラミガキの後黑色処理を施しており、底部は回転ヘラケズリである。11～13は甕である。11の口縁が僅かに外反する。10は肩が張り球形に近い形状をもつ。13は底部破片で木葉痕がみられる。9・14・15は須恵器である。9は有台坏で、高台はいずれもハの状に開き、底部は回転ヘラケズリである。14・15は外面が平行タタキで調製されている。16は猿投窯の灰釉陶器である。壺であろう。17は球形土錘である。径2.99cm、孔径0.57cm、厚さ2.85cm、重さ24.10gを測る。ほぼ球形を呈し、丁寧な作りである。一方向からの穿孔である。

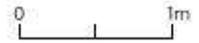
これら出土遺物のうち、1は8世紀後半から9世紀前半に比定され、本跡の時期は9世紀前半と考えられる。

SI14 (第46・47図)

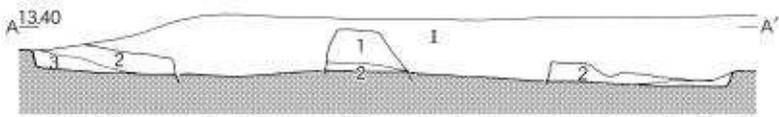
調査A区の西端、13-D・E区に位置する。西側の一部が未調査区域に延びており、南部でSI12と上層で重複している。平面形は方形を呈するものと推定される。検出された規模は東西軸3.05m、南北軸2.58mを測る。カマドは確認できないが、北西壁辺に設置してあるものとする、主軸方向はN-57°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、検出された床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大36.0cmである。壁溝は検出部で北東壁辺を除き、南東壁辺、南西壁辺で構築されており、規模は幅10.0～21.0cm、深さ5.5～6.5cmで、断面U字状を呈する。覆土は暗褐色土および褐色土を基調とした6層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は検出できなかった。



1. 暗褐色土(2.5YR3/4)
少量のローム粒子、多量の焼土粒を含む。
しまりがあり、粘性にとむ。

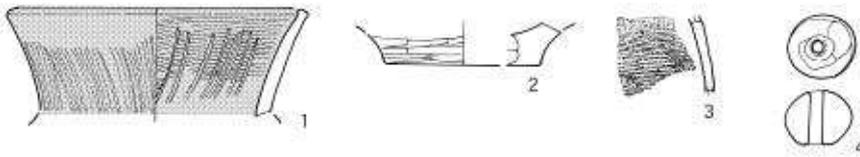
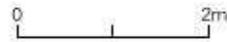


第39図 SI11炉断面図

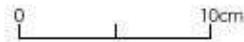


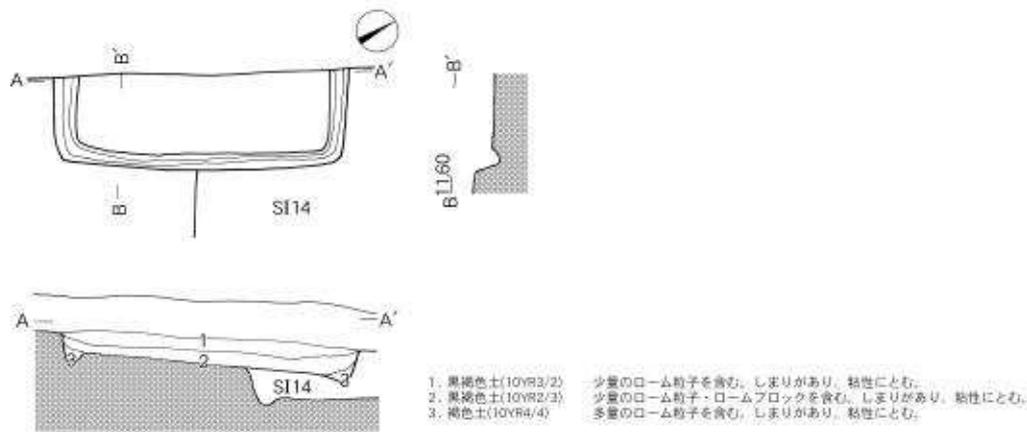
1. 暗灰色土(10YR4/1)	耕作土
1. 黒褐色土(10YR3/2)	少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 黒褐色土(10YR2/2)	少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
3. 黒褐色土(10YR3/2)	少量のローム粒子-ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。

第38図 SI11実測図

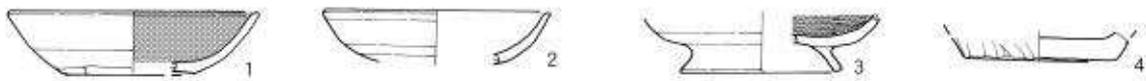
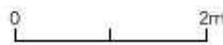


第40図 SI11出土遺物

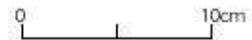




第41図 SI12実測図



第42図 SI12出土遺物

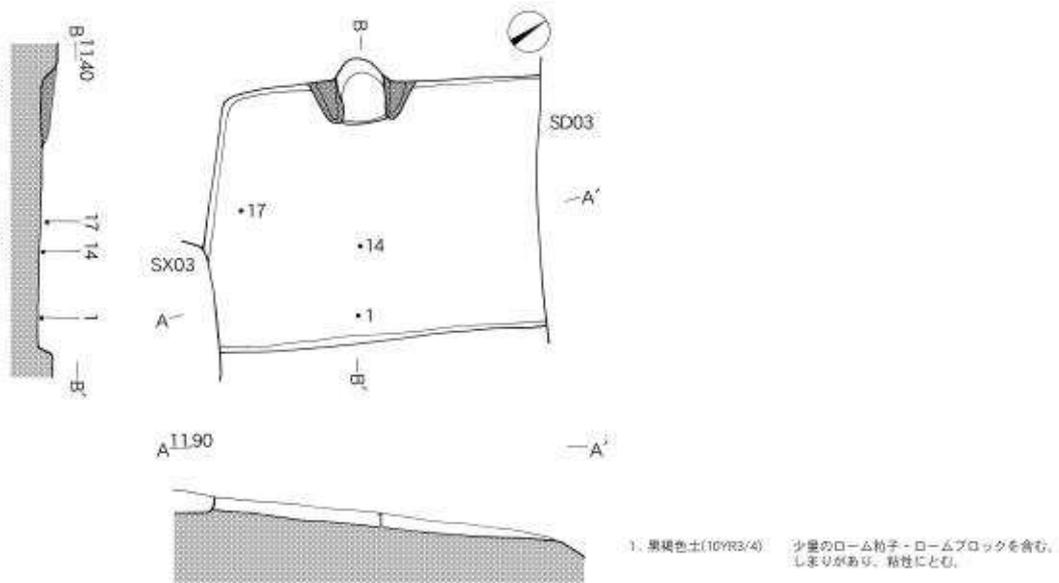


遺物は住居跡南部で出土しており、土師器、須恵器、瓦が検出された。1～11は土師器である。1～6は坏で、いずれもロクロ成形である。1は墨書土器で、「口井」と習書されている。二次底部面は回転ヘラケズリで底部も回転ヘラケズリである。また内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。2は二次底部面が手持ちヘラケズリで、内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。3も内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。4は二次底部面が手持ちヘラケズリである。6も二次底部面は手持ちヘラケズリで、内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。7は壺である。高台はハの字状に開き、底面は回転糸切りである。内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。8・9は甕の底部破片である。8は木葉痕がみられる。10～17は須恵器である。10・11は坏で、ロクロ成形で、二次底部面は手持ちヘラケズリである。11の底部は回転糸切りである。12～17は甕である。12～13は外面平行タタキで調製されている。なお、13の側面は砥石として利用している。17は格子状のタタキである。18は瓦の小破片である。平瓦で凹面は布目痕である。

これら出土遺物のうち、1は9世紀第2～3四半期、7は9世紀後半から10世紀前半に比定され、本跡の時期は9世紀後半期と考えられる。

SI15 (第48～50図)

調査D区南部、4-W区に位置する。斜面構築のため南東部床面の半分以上は既に削平され、検出できなかった。残存状態からみて平面形は方形を呈するものと推定される。検出した規模は東西軸2.79m、南北軸1.60mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN-31°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大28.0cmである。柱穴および壁溝は検出できなかった。覆土は褐色土の単層であり、自然堆積の状態を示していた。カマドは北西壁中央に付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を16.5cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ64.0cm、検出された



第43図 SI13実測図

0 2m



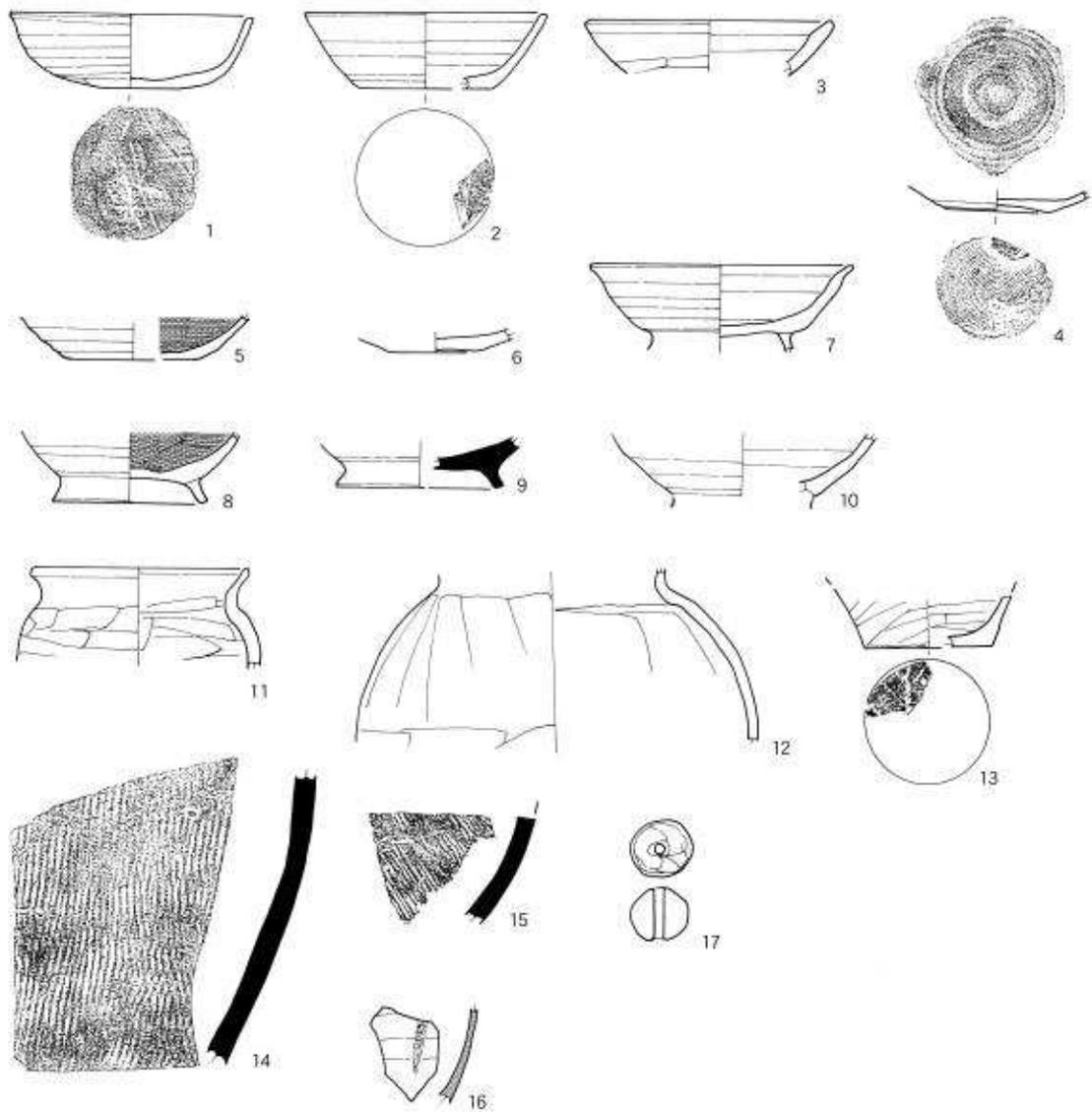
第44図 SI13カマド実測図

0 1m

両袖部の最大幅112.0cmを測る。袖部はにぶい黄褐色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ49.5cm、幅66.0cm、深さ1.0cmの楕円形を呈し、浅い楕円状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物は住居跡カマド脇から纏まって出土しており、土師器、須恵器が検出された。1・2は土師器である。1は坏で、体部が内彎気味に開く。2は甕の口縁部破片で、くの字状に外反する。口唇端部が積み上げられている。3・4は須恵器である。3は坏である。ロクロ成形で、底部は回転ヘラ切りである。新治窯産である。4は長頸瓶で、ロクロ成形である。高台は短く真下に伸び、体部は内彎しながら立ち上がり、頸部は直立する。底部は切り離した後、高台を貼付ける。

これら出土遺物のうち、3・4は9世紀後半期に比定されており、本跡の時期は9世紀後半期と考えられる。



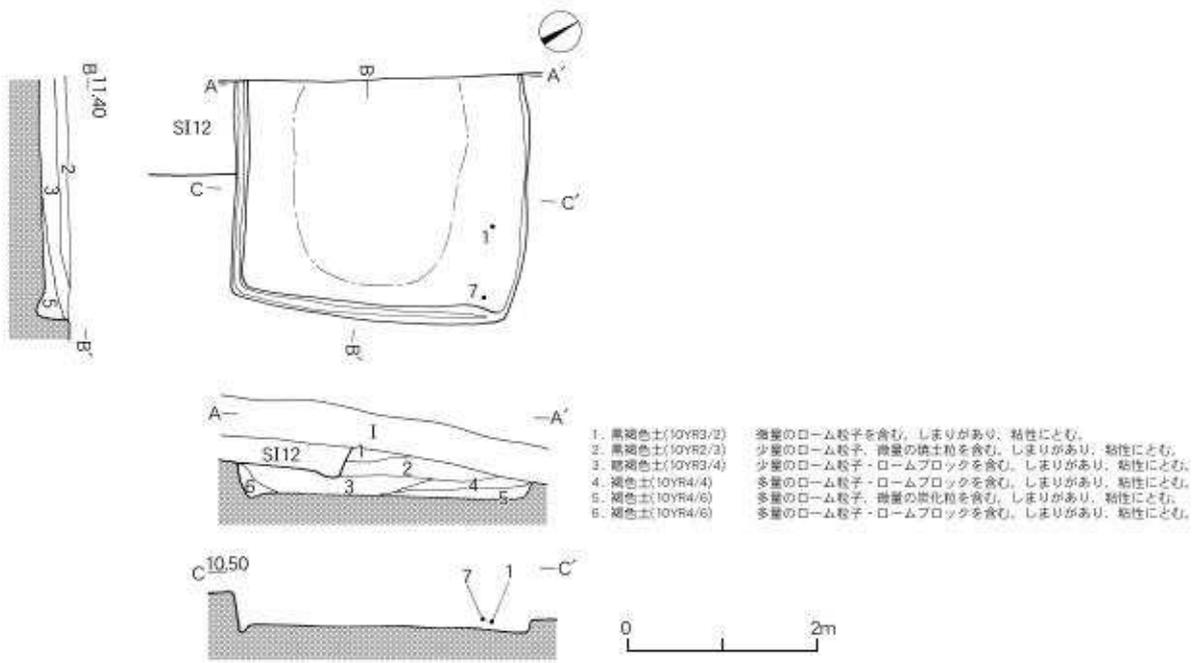
第45図 SI13出土遺物

0 10cm

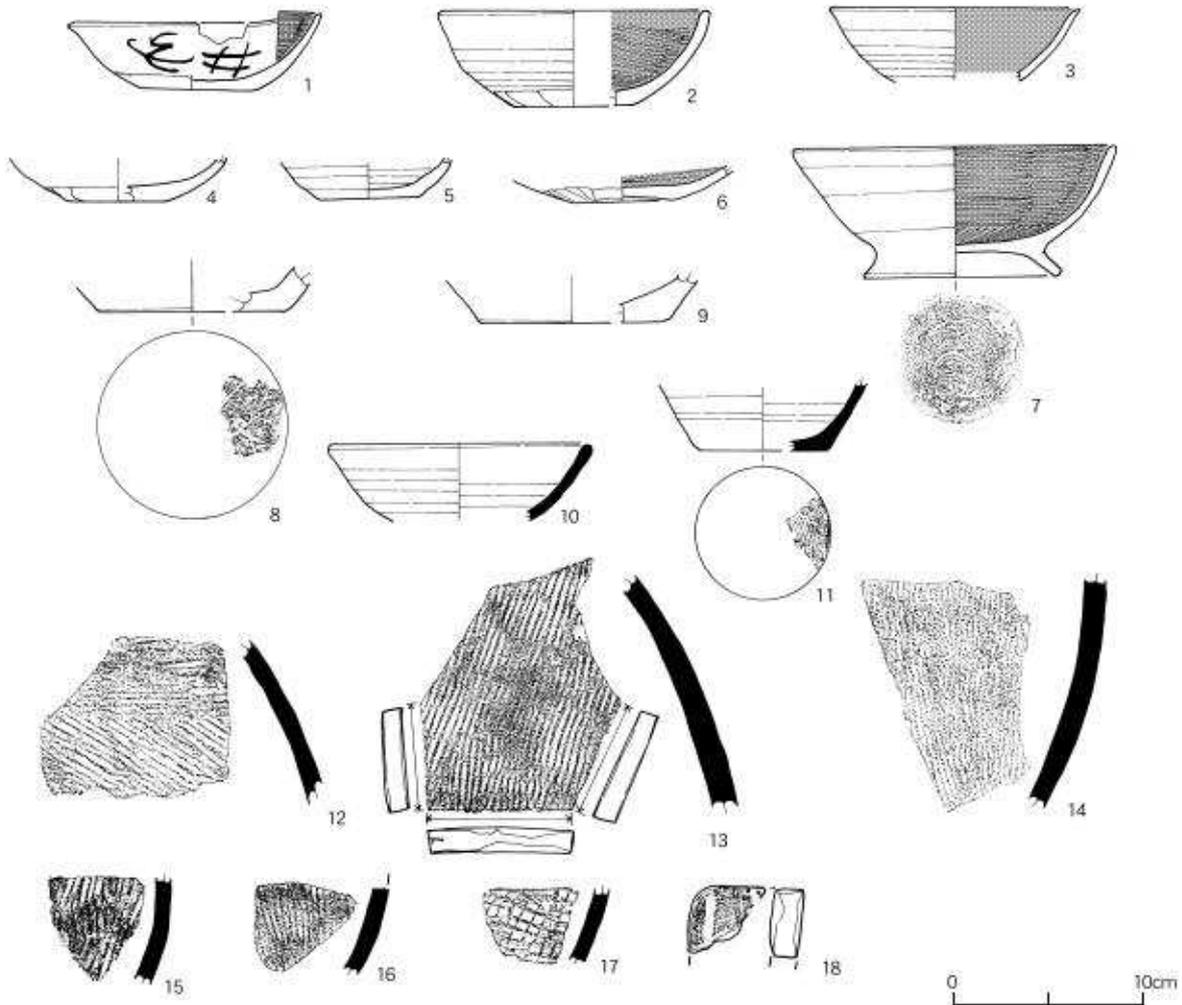
SI16 (第51・52図)

調査A区の北端、14-A・B区に位置し、西側半分が未調査区域に延びている。平面形は、残存部から判断して方形を呈するものと推定でき、検出された規模は東壁辺3.0m、北壁辺3.10mを測る。カマドは確認していないが、北西壁辺に設置してあるものとする、主軸方向はN-56°-Wを指す。床面は平坦で、ほぼ全面硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大28.0cmである。柱穴および壁溝は検出できなかった。覆土は黒褐色土を基調とした6層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は検出できなかった。

遺物は住居跡北部で纏まって出土しており、土師器、須恵器、紡錘車が検出された。1～6は土師器で、1は坏である。ロクロ成形で、墨書土器である。底部に習書されているものの、判読できない。二次底部面は回転ヘラケズリで、底部も回転ヘラケズリである。2～6は甕である。2は体部が緩やかに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。体部下半は縦位のヘラナデである。3・4も同様で、口唇部端は



第46図 SI12実測図



第47図 SI14出土遺物

短く摘み上げられている。5・6は底部破片で、5は木葉痕がみられる。7は須恵器である。7の外表面は平行タタキで調製されている。8・9は土製紡錘車である。8は上面の径5.18cm、下面の径3.38cm、高さ1.53cm、孔径0.81cm、重さ44.20gである。上面の縁辺には使用時のものと推定される剥離痕がほぼ均等にみられる。下面および側面は丁寧に作られている。側面と下面の一部に黒色処理痕が残る。9は上面の径6.08cm、下面の径3.78cm、高さ2.33cm、孔径0.83cm、重さ72.0gである。上面の一部に欠損部が認められるが、摩耗状態からみて使用時のものであろう。下面はほぼ平坦である。また側面は下面寄りにヘラケズリ痕がみられ、面取りしている。

これら出土遺物のうち、1は9世紀後半に比定され、本跡の時期は9世紀後半期と考えられる。

SI17 (第53図)

調査B区の中央西部、11-H、12-H区に位置する。南側でSB13と重複する。また北東側が緩傾斜面のため全体的に覆土が薄く、遺構確認面で既に一部の床面が露出あるいは削平されている状態であった。残存している床面から判断して平面形は方形を呈するものと推定でき、検出された規模は東西軸2.94m、南北軸3.32mを測る。カマドは北西壁に設置されており、主軸方向はN-36°-Eを指す。床面の残存部はほぼ平坦で、南西部に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大5.0cmである。柱穴および壁溝は検出できなかった。覆土は床面上に堆積していた暗褐色土のみであるが、自然堆積の状態を示していた。カマドは北西壁中央南部に付設され、遺存状態は不良で火床部のみ残存していた。煙道部は壁を20.0cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は被熱により赤変硬化していた火床部のみで、長さ65.0cm、幅60.0cmの円形を呈し、掘り込みはなく、深さは床面と同レベルである。既に袖部の痕跡は確認できなかった。

本跡から遺物の出土はないものの、住居跡の形態をみると、カマドの設置が認められること一辺3m前後の規模をもつことから、9世紀後半から10世紀前半の時期と推定する。

SI18 (第54・55図)

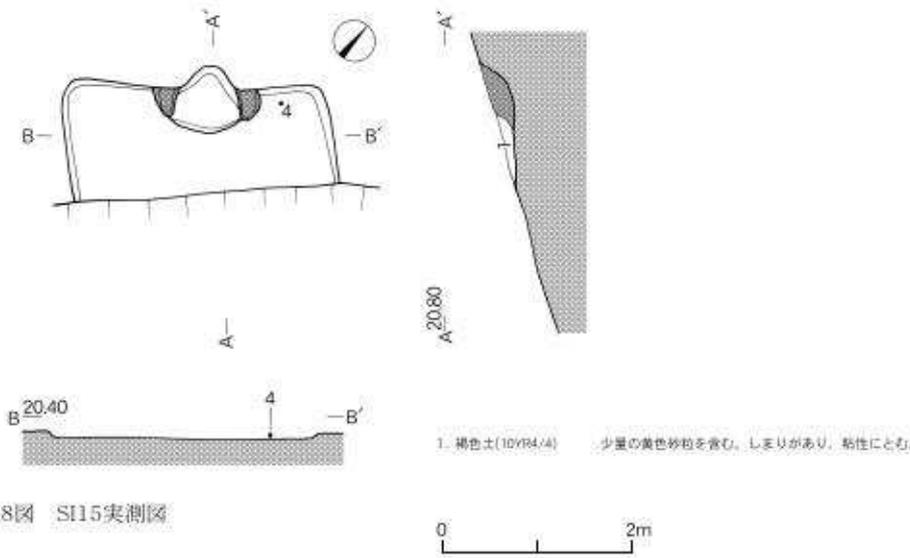
調査A区の南東隅、14-F区に位置する。東側約半分がSD03によって切られている。平面形は、残存部から判断して方形を呈するものと推定でき、検出された規模は東西軸2.20m、南北軸4.13mを測る。炉址は検出されていないが、北東壁辺に設置されているものとする、主軸方向はN-33°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、全体的に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大6.2cmである。また南西壁際中央に楕円形を呈した貯蔵穴が設置されていた。規模は長軸63.0cm、短軸47.0cm、深さ40.6cmを測り、底面は鍋底状を呈していた。壁溝は検出部で北西壁辺および南西壁辺に構築されており、幅14.0~24.0cm、深さ2.0~8.8cmで断面U字状を呈する。覆土は黒褐色土と暗褐色土の3層に分層でき、自然堆積の状態を示していた。柱穴および炉址は確認できなかった。

遺物は床面直上に散存する状況で出土し、古墳時代前期の埴・壺・甕である。1は埴の口縁部破片である。内傾気味に立ち上がり、内外面ともヘラナゲで、赤彩が施されている。2は壺の口縁部破片である。内面は横位のハケ調製である。内外面ともに赤彩が施されている。3~5は甕である。3は小型甕であろう。外面口縁はオサエにより調製され、右下がりのハケである。4も小型甕の胴部破片である。やや下膨らみの形状を呈する。外面にハケが施されている。5は輪積甕の口縁破片である。3段の輪積装飾にナゲが施されている。内面は横位のハケ調製である。6は胴部破片で右下がりのハケが施されている。

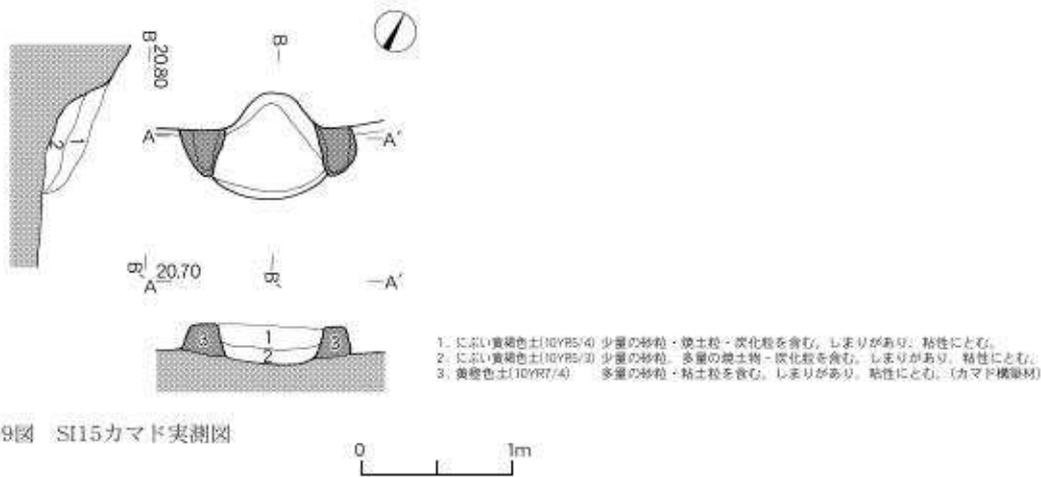
これら出土遺物は、古墳時代前期後半に比定され、本跡の時期も古墳時代前期と考えられる。

SI19 (第56~58図)

調査B区の北東端、13-G、14-G区に位置する。南東側約半分がSD03によって切られている。平面形は、残存部から判断して方形を呈するものと推定でき、検出された規模は東西軸3.42m、南北軸2.39mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN-60°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大31.3cmである。壁溝はカマドを中心にして北西壁辺、北東壁辺と南西壁辺の北側で構築されており、幅13.0~30.0cm、深さ7.2~13.4cmで断面U字状を呈する。覆土



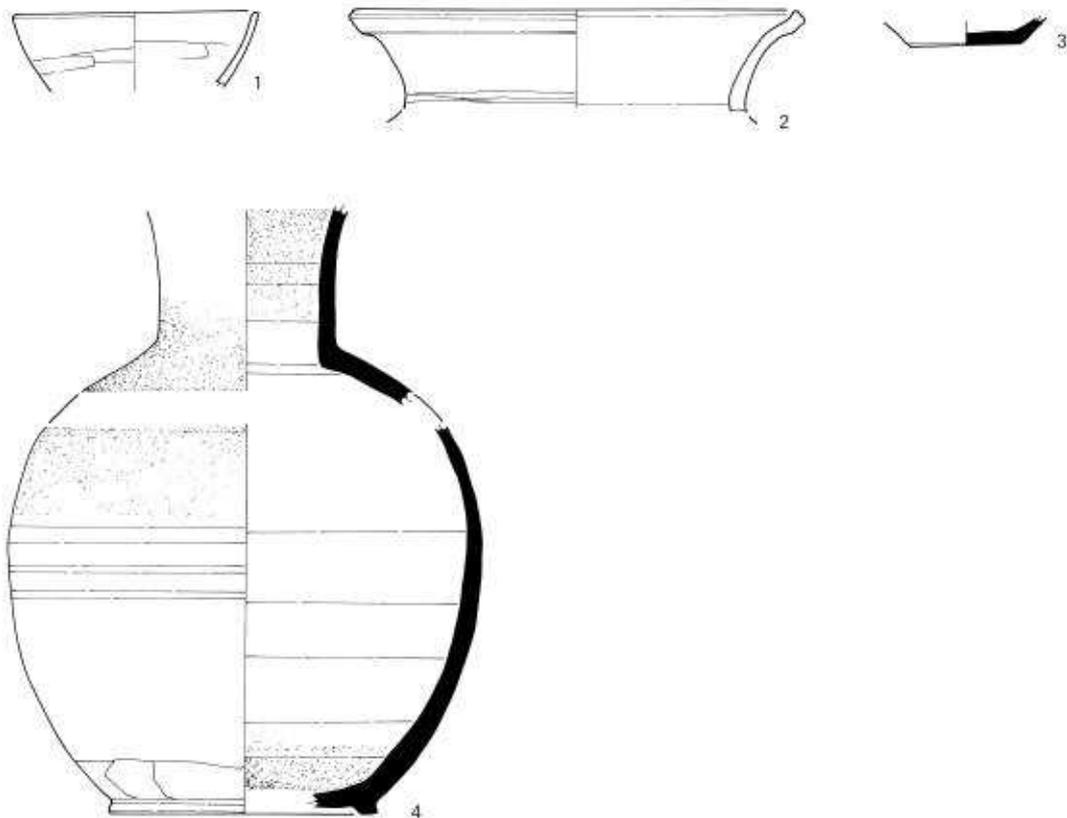
第48図 SI15実測図



第49図 SI15カマド実測図

は黒褐色土を基調とした4層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は確認できなかった。カマドは北西壁中央に付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を28.0cm程三角形に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ86.5cm、検出された両袖部の最大幅87.5cmを測る。袖部はにぶい黄褐色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ66.0cm、幅59.0cm、深さ11.0cmの円形を呈し、浅い挿鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物はカマドを中心に北西壁際でまとまって出土しており、土師器、須恵器が検出された。1～7は土師器である。いずれも甕で、1は体部が僅かに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。2は口径が広い甕で、口唇部端は短く摘み上げられている。3は体部が大きく内彎し、やはり口唇部端は短く摘み上げられている。4～7は胴部下半および底部破片である。4は胴部が大きく内彎して立ち上がる。いずれも底部破片で木葉痕がみられる。8～19は須恵器である。8～13は坏で、ロクロ成形である。8～12の底部は回転ヘラ切りで、13の二次底部面は回転ヘラケズリである。14は有台坏で底部はヘラ切りである。15・16は盤である。高台は貼付で、15の底部は回転ヘラケズリである。17・18は蓋である。17は擬宝珠状のつまみが付き、天井



第50図 SI15出土遺物



部は回転ヘラケズリである。19は甕で、外面は平行タタキである。

これら出土遺物のうち、8・10・11は9世紀第1四半期に比定され、本跡の時期は9世紀前半期と考えられる。

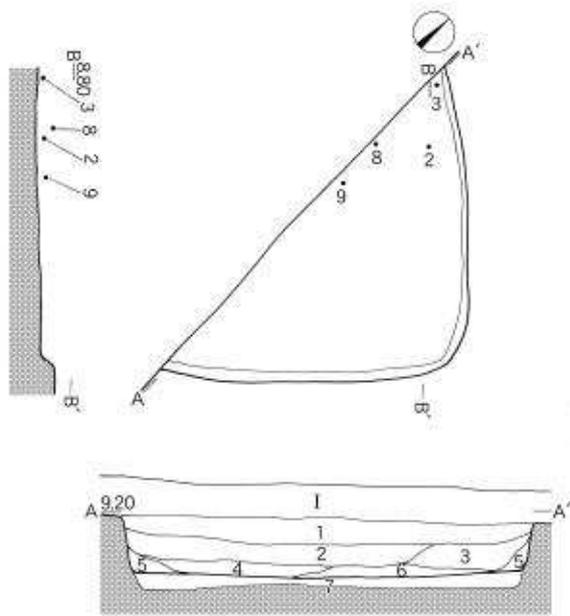
SI20 (第59図)

調査B区の南西部、10-I・J区に位置する。住居跡北西部でSX09に切られ、北東壁辺は現代の攪乱により破壊されている。さらに北側が緩傾斜しており、遺構の確認面で既に一部の床面が露出する状態であった。しかし、平面形は、大きく改変するものではなく、残存部から判断して東西方向に長い長方形を呈するものと推定でき、検出された規模は東西軸4.27m、南北軸3.76mを測る。炉址の位置が確認できないが、SX09と重複する北西壁辺に設置しているものとする、主軸方向はN-46°-Wを指す。床面は検出面ではほぼ平坦で、南西部では硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大6.0cmである。壁溝は南西壁辺北部のみ構築されており、幅14.0~21.0cm、深さ1.5~2.0cmで、断面U字状を呈する。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積の状態を示していた。柱穴は4本検出され、いずれも主柱穴で円形を呈している。その規模はP1が径50.0×40.0cm、深さ31.3cm、P2が径25.0×23.0cm、深さ10.5cm、P3が径34.0×33.0cm、深さ19.8cm、P4が径30.0×27.0cm、深さ34.8cmである。

本跡からは遺物の出土はないものの、住居跡の形態から判断して古墳時代前期の時期と推定する。

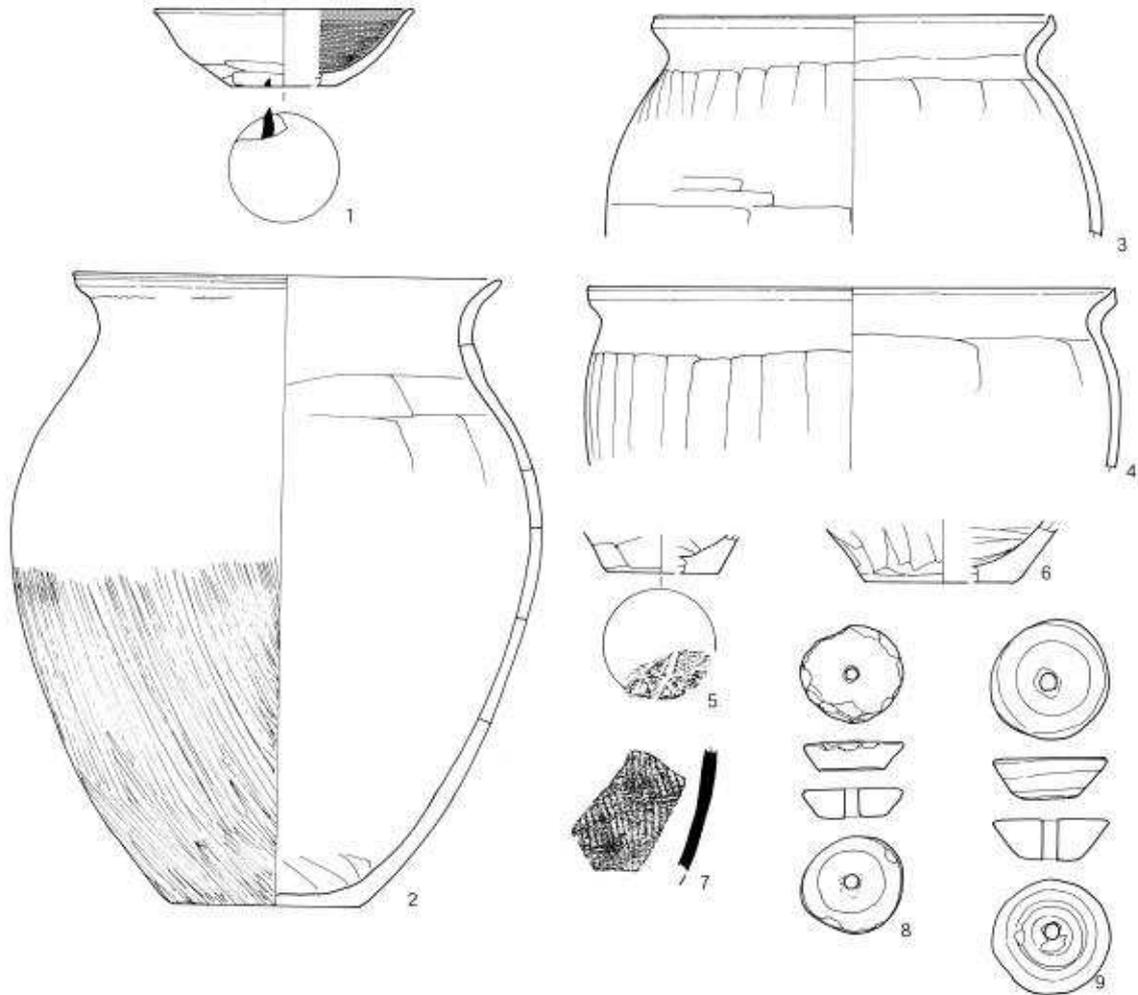
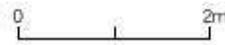
SI21 (第60・61図)

調査B区の西部、11-G区に位置する。西側半分以上が未調査区域に伸びているため全形を窺い知ることができ



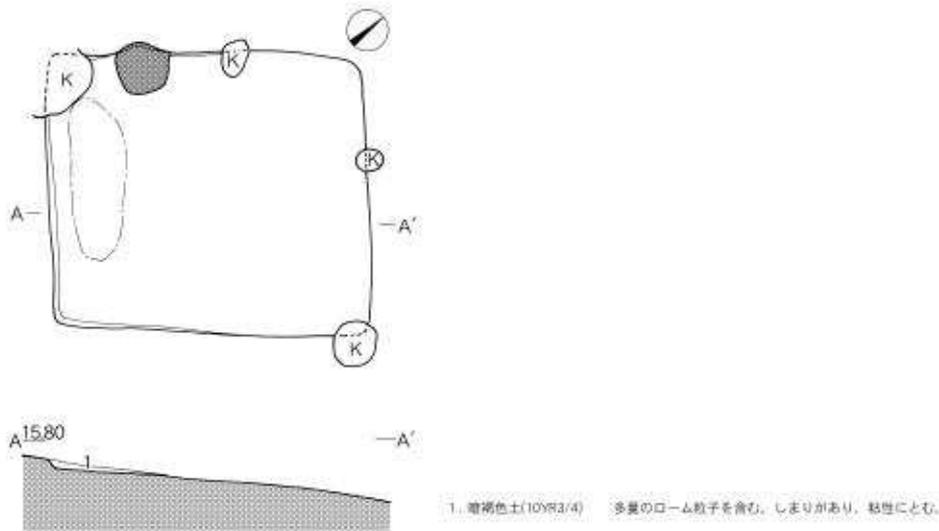
- | | |
|------------------|--|
| 1. 褐色土(10YR4/1) | 耕作土 |
| 2. 黒褐色土(10YR3/2) | 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 3. 黒褐色土(10YR2/3) | 少量のローム粒子・ロームブロック・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 4. 暗褐色土(10YR3/3) | 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 5. 黒褐色土(10YR3/1) | 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 6. 暗褐色土(10YR3/3) | 少量のローム粒子・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 7. 暗褐色土(10YR3/4) | 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 (粘床煉土) |

第51図 SI16実測図



第52図 SI16出土遺物





第53図 SI17実測図

0 2m

ない。確認された規模は東西軸0.78m、南北軸2.24mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは確認できないが、北壁辺に設置されているものとする、主軸方向はN-28°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、床全面で硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大22.0cmである。住居跡覆土は黒褐色土を基調とする自然堆積の状態を示していた。壁溝および柱穴は検出されていないが、南東隅に円形を呈した貯蔵穴と推定される付帯施設が検出された。やはり西側半分が未調査区域に伸びているものの、確認されたその規模は東西62.0cm、南北52.0cm、深さ29.3cmを測り、底面は鍋底状で覆土は3層に分層できる。

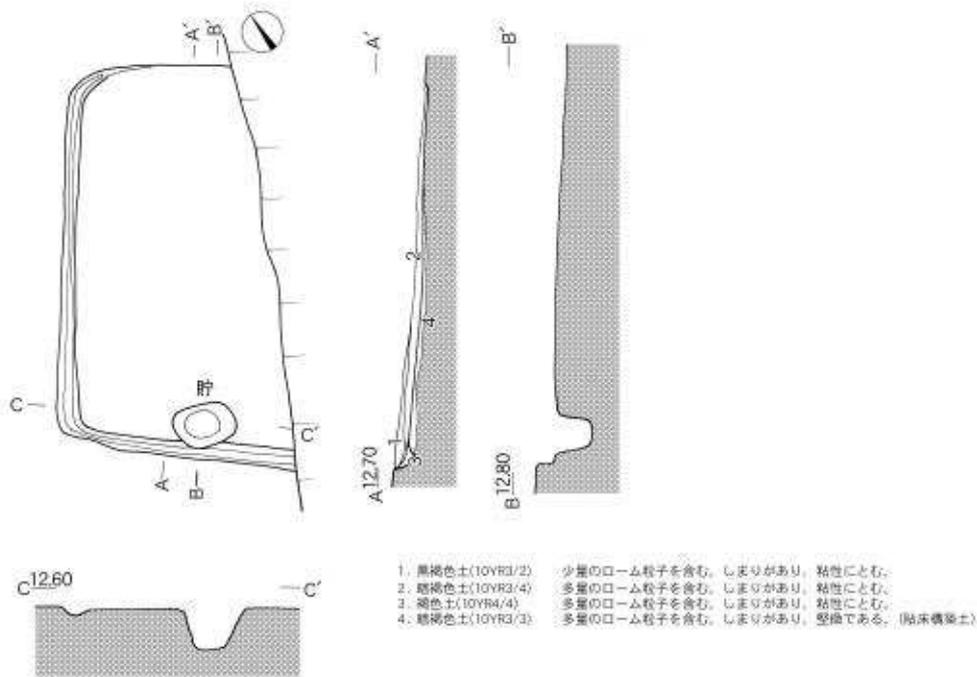
遺物は床面直上に散存する状況で出土し、土師器高台付坏・甕、須恵器甕が出土している。1は土師器塊で、高台は貼付で底部は回転ヘラケズリである。また坏部内面はヘラミガキの後黒色処理を施している。2は土師器甕の口縁部破片で、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。3は須恵器甕の胴部破片である。木葉下窯産である。これら少量の出土遺物のうち、1は9世紀に比定され、本跡の時期も9世紀と考えられる。

SI22 (第62~64図)

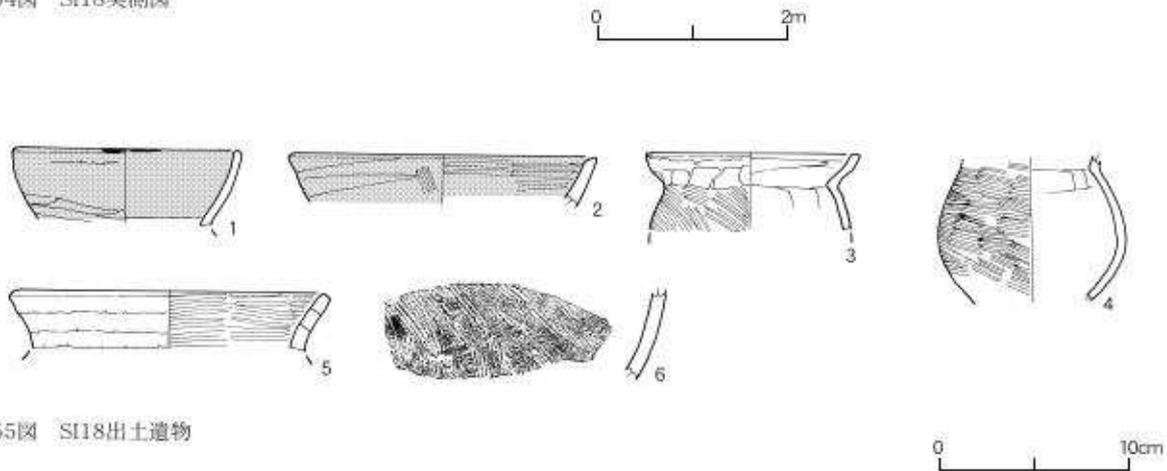
調査B区南西部、10-I、11-I区に位置する。住居跡覆土が薄く、遺構の確認面で既に北東部の床面が露出する状態であった。残存している床面から判断して平面形は方形を呈するものと推定される。その規模は東西軸2.70m、南北軸2.71mを測る。カマドは北西壁やや南西部に設置されており、主軸方向はN-71°-Wである。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められるものの、北東部は明瞭ではない。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大7.0cmである。壁溝および柱穴は構築されていない。覆土は黒褐色土の単層で自然堆積の状態を示していた。カマドは北西壁やや中央南西部に付設され、遺存状態は普通である。煙道部は壁を50.5cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ98.0cm、検出された両袖部の最大幅104.0cmを測る。袖部はにぶい黄橙色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ87.0cm、幅59.5cm、深さ9.0cmの楕円形を呈し、浅い插鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

遺物は床面直上に散存する状況で出土し、土師器甕と土錘を検出した。1は甕の体部破片で、ヘラナデ調製が施されている。2は紡錘状を呈した管状土錘である。径2.81cm、孔径1.19cm、厚さ4.25cm、重さ36.10gを測る。上端が先細りとなっている。一方向からの穿孔である。

時期は確定できないが、9世紀代と推定される。



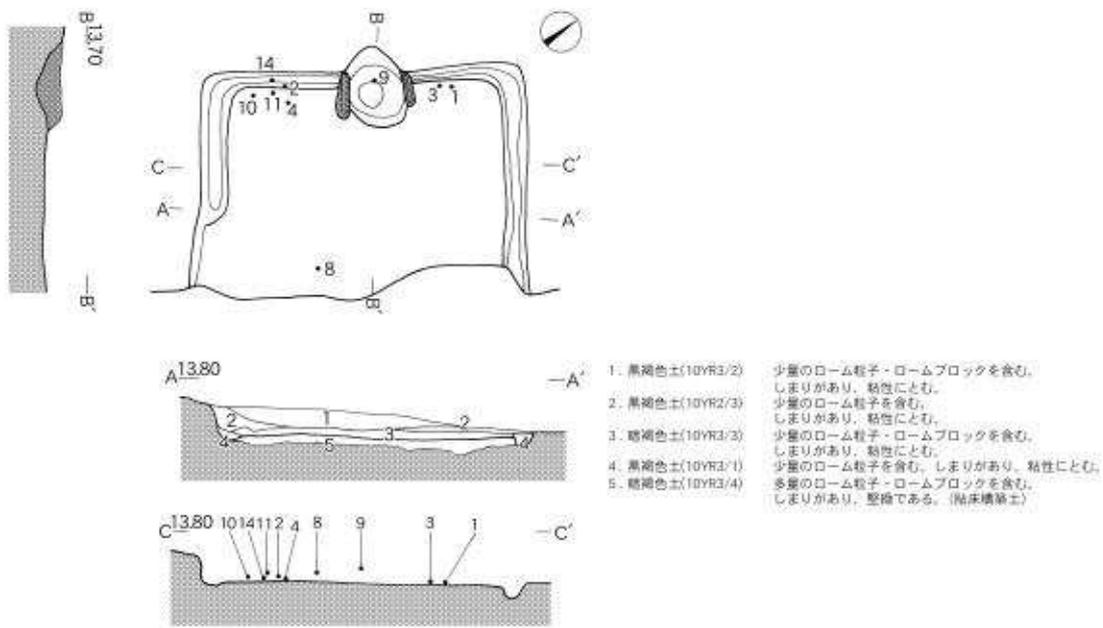
第54図 SI18実測図



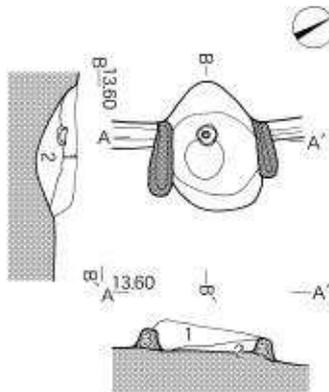
第55図 SI18出土遺物

SI23 (第65・66図)

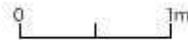
調査B区の南西部、10-H・I、11-I区に位置する。北西隅付近が未調査区域に延びており、また数か所木根痕等による攪乱を受けているものの、全形を窺い知ることができる。平面形は方形を呈し、規模は東西軸5.62m、南北軸5.37mを測る。カマドは確認していないが、北西壁辺に設置してあるものとする、主軸方向はN-42°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、中央部に明瞭な硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大29.0cmである。柱穴は2本一組みとなる8本が検出された。いずれも支柱穴で、基本的な配置は4本である。まず床面精査段階で外側の柱穴4本(P1～P4)が検出され、硬化面除去の段階で内側に4本(P5～P8)の柱穴が確認された。内側は明らかに貼床され塞がれていたため、本跡は拡張住居跡であることが判明した。まず新期の外側柱穴の規模はP1が径53.0×42.0cm、深さ50.0cm、P2が径48.0×41.0cm、深さ50.8cm、P3が径48.0×46.0cm、深さ54.5cm、P4が径52.0×42.0cm、深さ26.0cmと比較的大きく掘削されている。また内側で古期の柱穴の規模はP5が径33.0×27.0cm、深さ59.0cm、P6が径32.0×(25.0)cm、深さ62.5cm、P7が径42.0×



第56図 SI19実測図

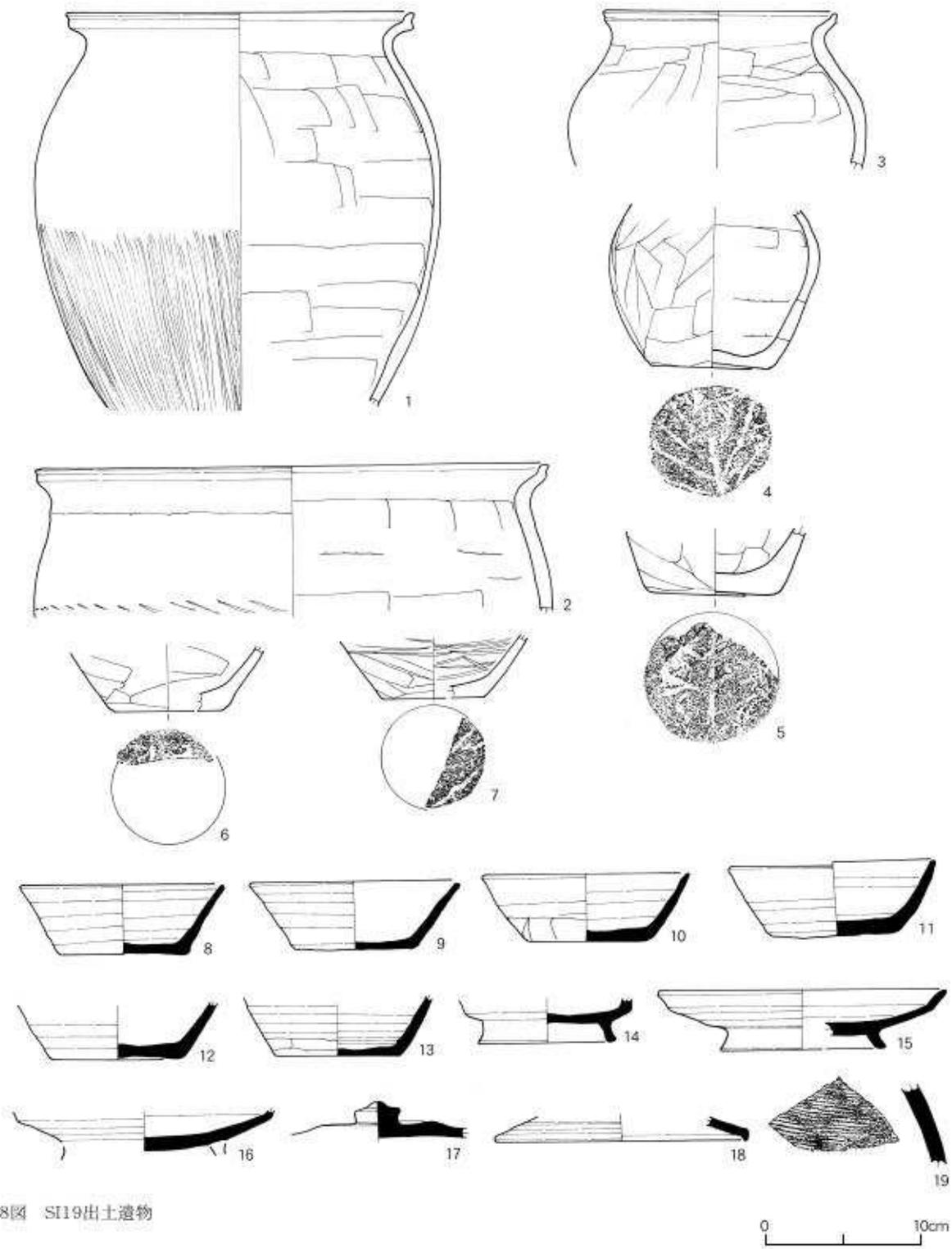


第57図 SI19カマド実測図



31.0cm、深さ62.0cm、P8が径26.0×25.0cm、深さ62.0cmである。壁溝は北東壁辺の一部に間欠部がみられるものの、ほぼ全周し、その規模は幅12.0～34.0cm、深さ2.0～17.0cmで、断面U字状を呈する。なお、壁溝の拡張痕跡は確認できなかった。覆土は黒褐色土を基調とした2層に分層され、自然堆積の状態を示していた。

遺物は住居跡で散在して出土しており、土師器、須恵器、土錘、石製品が検出された。1～8は土師器である。1・2は坏である。1は口縁部が内傾し、黒色処理が施されている。2は体部が内彎気味に立ち上がる。3は塊である。体部が内彎して立ち上がり、底部に木葉痕をもつ。4～8は甕である。5は体部が内彎して立ち上がり、口縁部が強く外反する。4は体部が直線的に外傾し、口縁部は強く外反し、端部が摘み上げられる。6は小型の甕である。7は底部破片である。9は須恵器蓋である。擬宝珠状のつまみが付く。10は瓶の底部破片である。湖西産

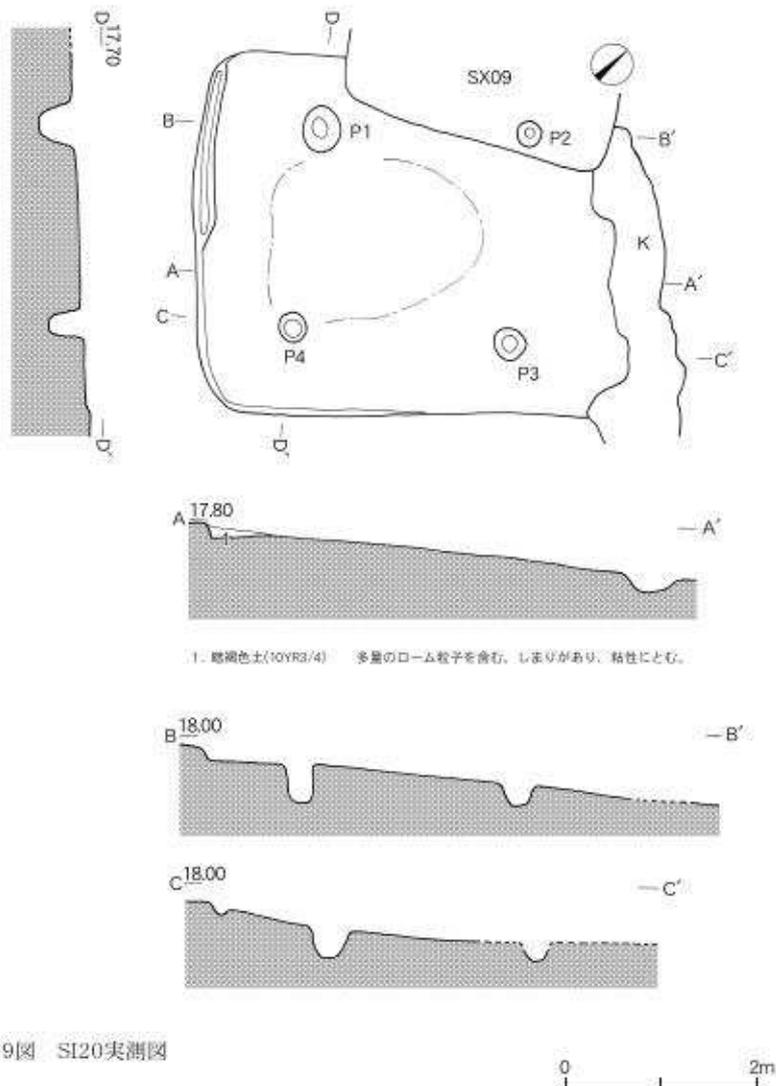


第58図 SI19出土遺物

0 10cm

である。11は管状土錘である。径2.29cm、孔径0.71cm、厚さ2.64cm、重さ14.30gを測る。上下面は平坦であるが、一部欠損部が認められる。12は石英製の礫器である。長さ11.36cm、幅9.29cm、厚さ6.45cm、重さ884.0gを測る。粗い調製剥離が施されている。

これら出土遺物のうち、9は7世紀第4四半期に比定され、本跡の時期も7世紀後半と考えられる。

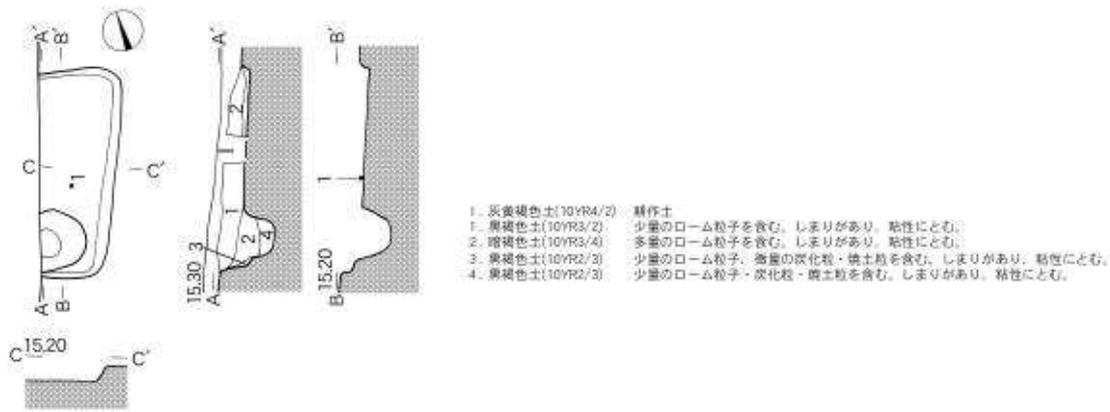


第59図 SI20実測図

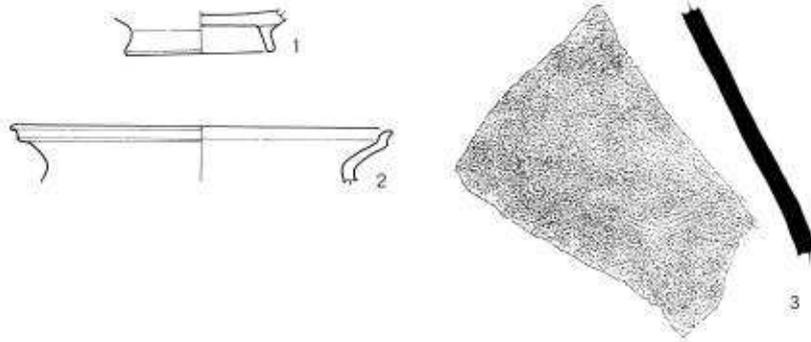
SI24 (第67・68図)

調査B区の西端、10-H、11-H区に位置する。西側半分以上が未調査区域に延びており、北部がSI25によって切られ、SB16と重複している。残存部から平面形は方形を呈するものと推定され、検出された規模は東西軸2.21m、南北軸4.60mを測る。炉址の位置が確認できないが、未調査区域内の北壁辺に設置しているものとする、主軸方向はN-28°-Eを指す。床面は検出面ではほぼ平坦で、中央部で硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大73.5cmである。壁溝は南壁辺で構築されており、幅17.0~25.0cm、深さ7.5cmで、断面U字状を呈する。なお、南東隅で南北に長い楕円形を呈した貯蔵穴が設置されていた。規模は長軸119.0cm、短軸85.0cm、深さ32.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がり、底面は平坦であった。覆土中より多量の遺物が出土している。また住居跡覆土は黒褐色土と暗褐色土を基調とした7層に分層され、自然堆積の状態を示していた。柱穴は検出できなかった。

遺物は貯蔵穴およびその周辺でまとまって出土している。土師器、土錘および台石が検出された。1~3は罎である。1は内彎する胴部に口縁部が開く。外面胴部はハラケズリで、外面と内面口縁部に赤彩が施されている。2は胴部上半の破片である。中位にハラナデが施され、赤彩されている。3は底部破片で、赤彩されている。4は高



第60図 SI21実測図

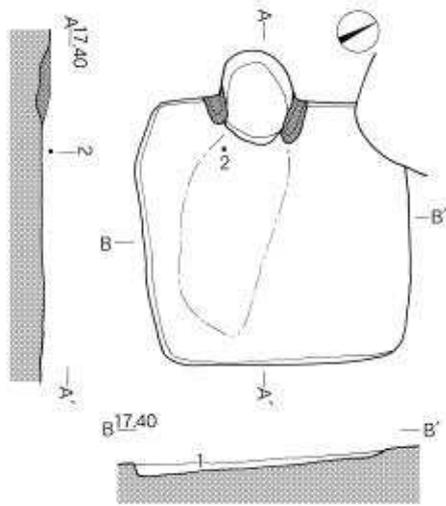


第61図 SI21出土遺物



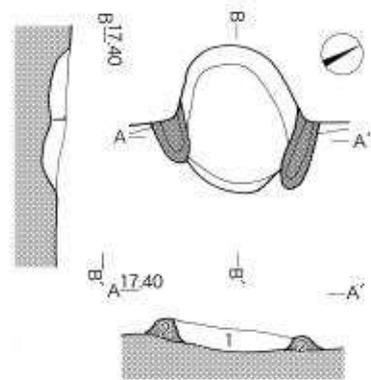
坏の坏部破片である。内外面ともに赤彩が施されている。5～7は器台である。いずれも小型器台で、5は中央の貫通孔と脚部に円形透し孔を三方に有する。受部内面と脚部外面はミガキが、受部外面はヘラナデが施されている。脚部内面以外は赤彩がみられる。6は受部の破片である。受部内面はミガキが施され、赤彩がみられる。7は脚部破片で中央の貫通孔がある。外面は赤彩が施されている。8～10は壺である。8は折返し口縁の口縁部破片である。外面は縦位のミガキ、頸部は横位と縦位のミガキ、内面は横位のミガキが施され、赤彩されている。9は「く」の字屈曲の口縁部破片である。外面が縦位のハケがみられ、赤彩されている。10はやや下膨らみの胴部で、外面は右下がりのハケで、外面に赤彩が施されている。11は底部破片である。12は甕の胴部である。右下がりのハケが施されている。13・14は管状土錘である。13は径2.01cm、孔径0.60cm、厚さ2.57cm、重さ11.94gを測る。円筒状を呈し、上面は平坦で、下面は摩耗し一部欠損している。14は径2.05cm、孔径0.71cm、厚さ2.62cm、重さ13.10gを測る。円筒状を呈し、比較的丁寧な作りである。15は角閃片岩製の台石である。長さ21.85cm、幅35.35cm、厚さ6.50cm、重さ8,305.0gを測る。扁平な自然石を利用しており、両端を欠損するものの、略長方形の組板状を呈する。表面の磨面は顕著ではぼ平坦である。また図の上・下側面にも磨面が認められる。

これら出土遺物は、古墳時代前期後半に比定され、本跡の時期も古墳時代前期と考えられる。



1. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

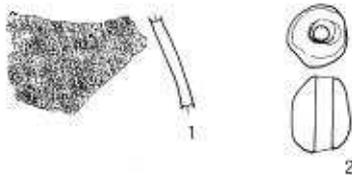
第62図 SI22実測図



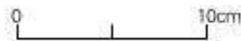
1. ぶい黄褐色土(10YR5/3) 少量のローム粒子・粘土粒、多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 褐色土(10YR4/4) 少量のローム粒子・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。(カマド構築材)



第63図 SI22カマド実測図



第64図 SI22出土遺物

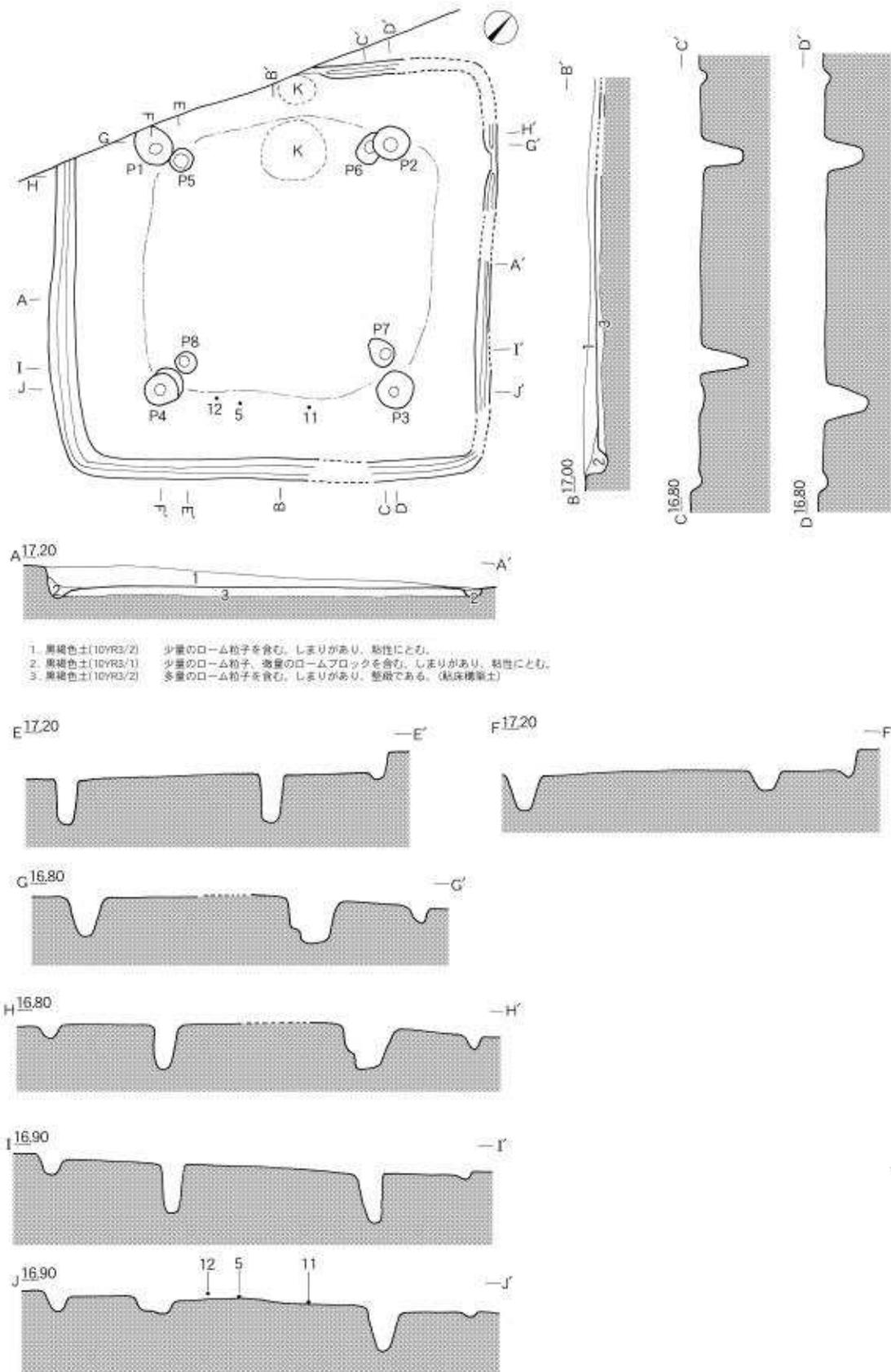


SI25 (第69～71図)

調査B区の西端、11-H区に位置する。南部でSI24を切り、SB16と重複している。平面形は南北に長い長方形を呈する。規模は東西軸3.06m、南北方軸3.40mを測る。カマドが北西壁辺中央に設置しており、主軸方向はN-65°-Wを指す。床面は検出面ではほぼ平坦で、カマド前面から床面中央部で硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大37.5cmである。壁溝および柱穴は構築していない。また住居跡覆土は黒褐色土と暗褐色土の2層に分層され、自然堆積の状態を示していた。カマドは北西壁中央に付設され、遺存状態は良好である。煙道部は壁を15.0cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ115.0cm、検出された両袖部の最大幅125.0cmを測る。袖部はにぶい黄褐色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ81.5cm、幅47.0cm、深さ7.0cmの楕円形を呈し、浅い楕鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

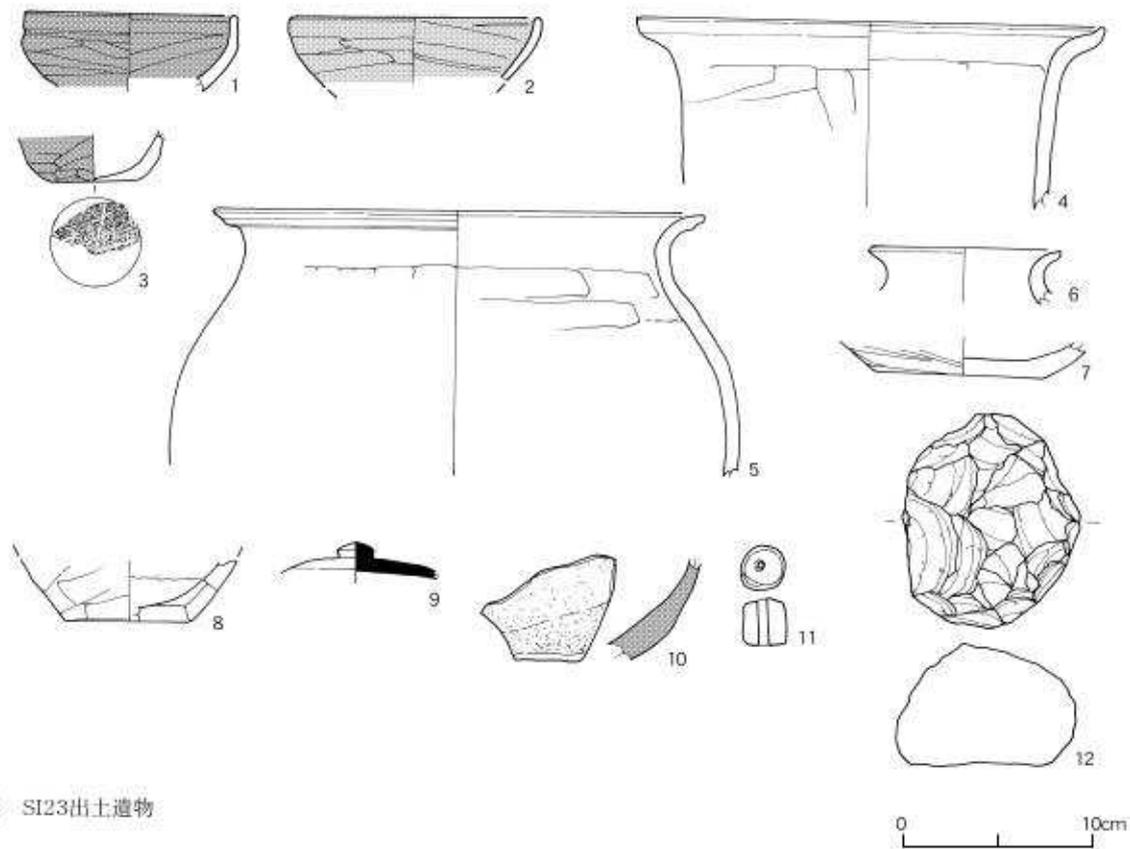
遺物は床面直上に散存する状況で出土し、土師器環・甕、須恵器環・蓋・高環・甕が出土している。土師器環はロクロ成形で内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。2～5は甕で、2・3は口縁部破片で、体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇部端は短く摘み上げられている。4・5は底部破片で木葉痕がみられる。6～10は須恵器である。6は環で、ロクロ成形である。二次底面は手持ちヘラケズリで新治窯産である。7・8は蓋である。天井部は回転ヘラケズリである。9は高環の脚部である。自然軸が掛かっている。10は甕の胴部破片で、外面平行タタキで調製されている。

これら出土遺物のうち、6は9世紀第2四半期に比定され、本跡の時期も9世紀中葉と考えられる。



第65図 SI23実測図

0 2m



第66図 SI23出土遺物

SI26 (第72～74図)

調査B区の北部、11-G、12-G・H区に位置する。西隅に掘立柱建物跡SB07の柱穴が重複している。平面形は方形を呈し、その規模は東西軸2.85m、南北軸2.14mを測る。カマドは北西壁中央に設置されており、主軸方向はN-57°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、カマド前面から床中央に硬化面が認められる。壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は最大15.0cmである。壁溝および柱穴は構築されていない。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積の状態を示していた。カマドは北西壁中央に付設され、煙道部は壁を24.0cm程半円形状に掘り込んでいる。規模は炊口部から煙道部までの長さ71.0cm、検出された両袖部の最大幅73.5cmを測る。袖部にはぶい黄橙色粘土と砂の混土で構築されている。火床部は長さ61.0cm、幅56.0cm、深さ6.5cmの略円形を呈し、浅い挿鉢状に掘り込み、底面は被熱により赤変硬化している。

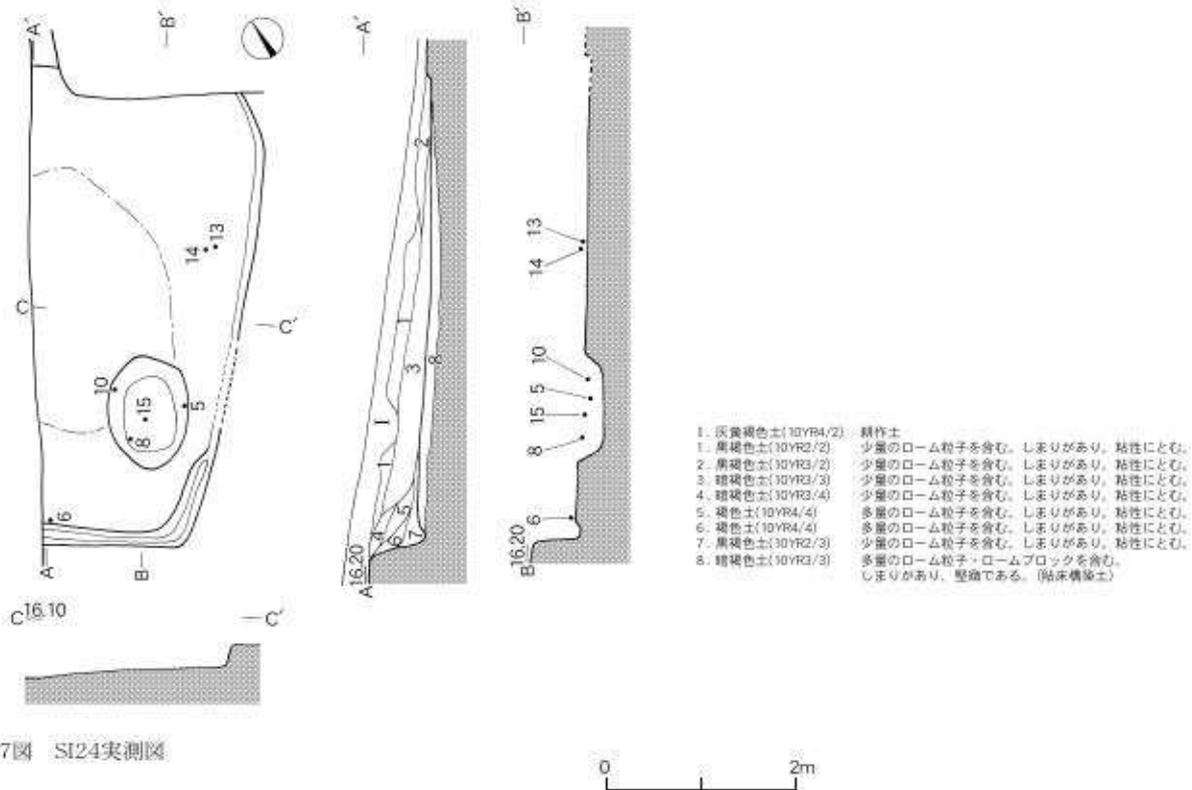
遺物は床面直上に、須恵器有台坏が出土している。ロクロ成形で底部は回転ヘラケズリで、高台は貼付である。

これら出土遺物は9世紀代に比定され、本跡の時期も9世紀と考えられる。

第4節 掘立柱建物跡

SB01 (第75・76図)

調査B区中央西部、11・12-I区に位置する。桁行3間×梁行2間の建物跡で、北隅でSI03と、東隅でSI02と重複しているものの、遺存状態は比較的良好である。検出された柱穴は10基で総柱または側柱建物である。規模は長軸595.0cm、短軸340.0cmを測る。長軸方向はN-65°-Wを指す。柱間の寸法は、桁行が170.0cmや220.0cm、梁行が160.0cmや180.0cmを測る。柱穴の平面形態は、円形、楕円形、長方形を呈する。また柱穴の深さについてはばらつきがみられる。10基の柱穴の規模は、P1は56.0×42.0cm、深さ42.4cmの長方形、P2は



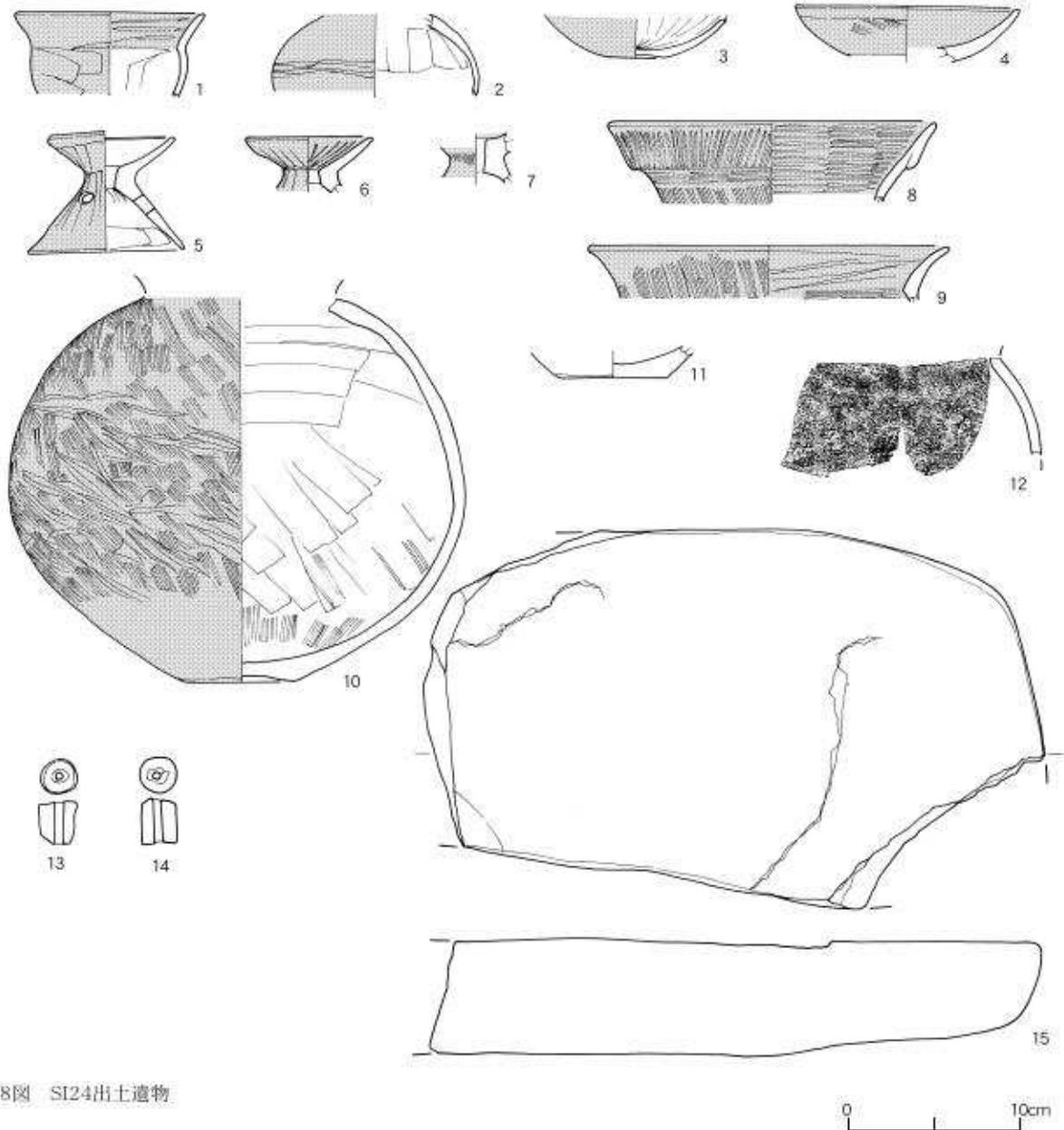
第67図 SI24実測図

40.0×33.0cm、深さ27.7cmの楕円形、P3は45.0×35.0cm、深さ23.3cmの長方形、P4は66.0×50.0cm、深さ106.0cmの円形、P5は27.0×25.0cm、深さ3.5cmの円形、P6は50.0×46.0cm、深さ23.3cmの隅丸方形、P7は27.0×25.0cm、深さ3.5cmの円形、P8は49.0×44.0cm、深さ47.9cmの円形、P9は48.0×31.0cm、深さ21.0cmの長方形、P10は54.0×47.0cm、深さ22.3cmの円形をそれぞれ測る。なお、P10は床支えとなる柱穴であり、SI02内に柱穴が検出できれば総柱建物として確認が得られると考えられる。

柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種と言っても差し支えない。しかし、柱の痕跡を示す土層の堆積や最下部の締めりを有する土層は検出できなかった。出土遺物としては、P7から土師器甕と須恵器環が出土している。1は土師器甕の口縁部破片で、口縁が強く外反し、端部摘み上げられている。2は須恵器環で、二次底部面は手持ちヘラケズリで、底部はヘラケズリである。新治窯産である。これら出土遺物は9世紀中葉に比定され、本跡の時期も9世紀中葉と考えられる。

SB02 (第77図)

調査B区中央北部、12-H区に位置する。4基の柱穴が検出されたのみである。北部にはSI04、SI05が、東隅ではSI07が重複しているため、全体を窺い知ることができなかった。桁行2間×梁行1間の建物跡である。4基の柱穴で構成され、規模は長軸400.0cm、短軸280.0cm測る。長軸方向はN-86°-Eを指す。柱間の寸法は、桁行は、191.0cmや205.0cm、梁行は285.0cmを測る。柱穴の深さはばらつきがみられるものの、径は一定している。P1は42.0×39.0cm、深さ13.8cmの円形、P2は65.0×64.0cm、深さ11.3cmの円形、P3は55.0×52.0cm、深さ43.5cmの円形、P4は35.0×32.0cm、深さ35.7cmの円形をそれぞれ測る。柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種である。しかし、柱の痕跡を示す土層の堆積や最下部の締めりを有する土層は検出できなかった。また出土遺物も検出できなかった。しかし、柱穴の規模からみて古代の建物跡とみられる。



第68図 SI24出土遺物

SB04 (第78図)

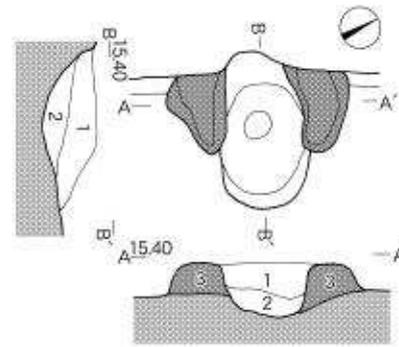
調査A区南部、13-E・F区に位置する。2棟重複建物と推定できるが、明瞭な根拠に欠ける。まず柱列からみるとP1、P2、P3が桁行2間の建物跡が推定できる。規模は360.0cmを測る。長軸方向はN-19°-Wを指す。柱間の寸法は、180.0cmである。柱穴の深さはばらつきがみられるものの、径は一定している。P1は36.0×32.0cm、深さ27.4cmの円形、P2は34.0×31.0cm、深さ50.7cmの円形、P3は33.0×30.0cm、深さ37.3cmの円形を測る。一方西側に展開する建物はP4とP5の2基で、長軸方向はN-41°-Wを指す。柱間の寸法は、180.0cmである。また柱穴の規模はP4が42.0×35.0cm、深さ17.5cmの円形、P5が27.0×26.0cm、深さ35.3cmの円形である。

いずれも出土遺物が検出できず、柱筋が整わないことから中世の建物跡とみられる。



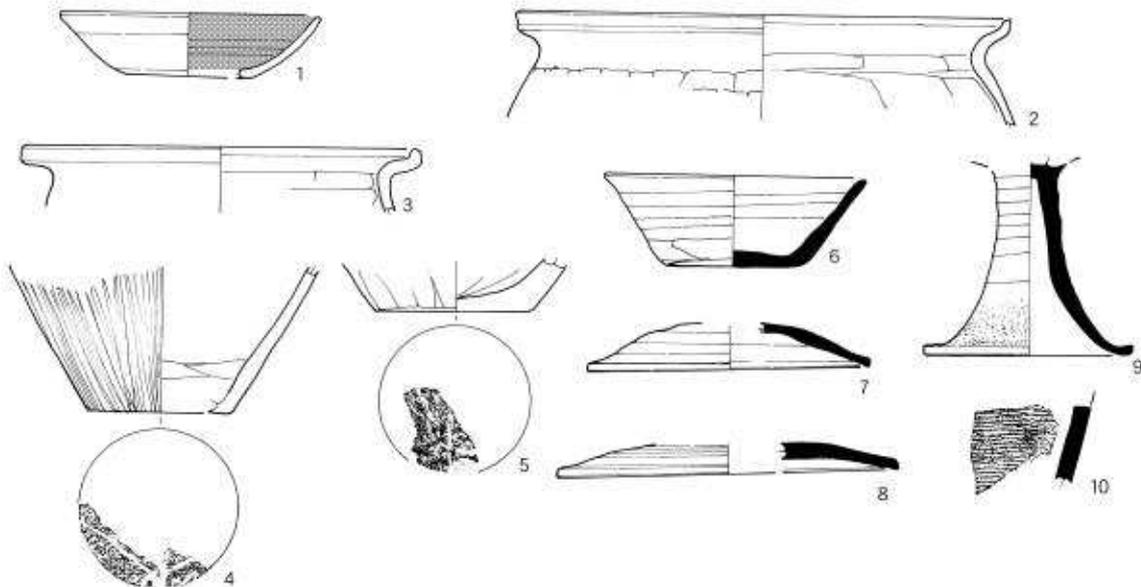
1. 暗褐色土(10YR3/4) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとも。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子、多量の粘土粒を球状に含む。しまりがあり、粘性にとも。
3. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、堅強である。(粘床構築土)

第69図 SI25実測図



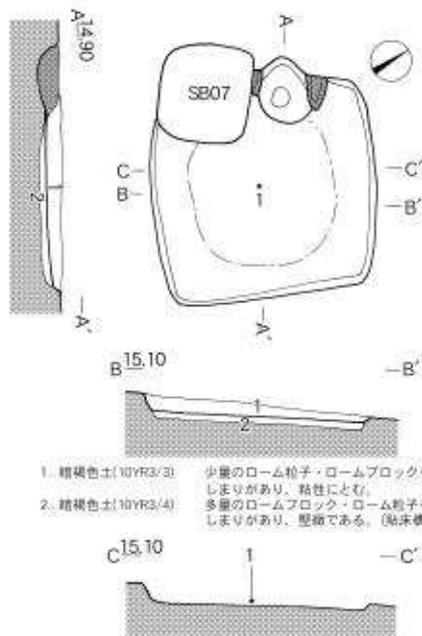
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量のローム粒子・粘土粒、多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとも。
2. 灰黄褐色土(10YR4/3) 少量のローム粒子、多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとも。
3. 灰黄褐色土(10YR5/4) 多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとも。(カマド構築材)

第70図 SI25カマド実測図

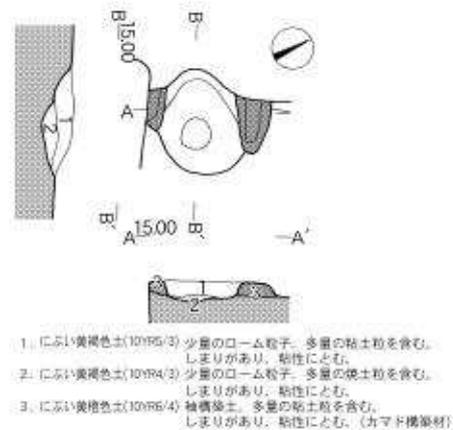


第71図 SI25出土遺物





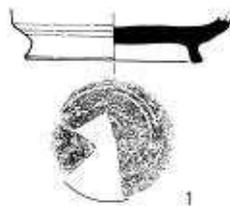
第72図 SI26実測図



第73図 SI26カマド実測図

1. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 暗褐色土(10YR3/4) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、堅硬である。(粘土質砂土)

1. にふい黄褐色土(10YR5/3) 少量のローム粒子。多量の粘土粉を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. にふい黄褐色土(10YR4/3) 少量のローム粒子。多量の粘土粉を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
3. にふい黄褐色土(10YR5/4) 粘質砂土。多量の粘土粉を含む。しまりがあり、粘性にとむ。(カマド構築材)

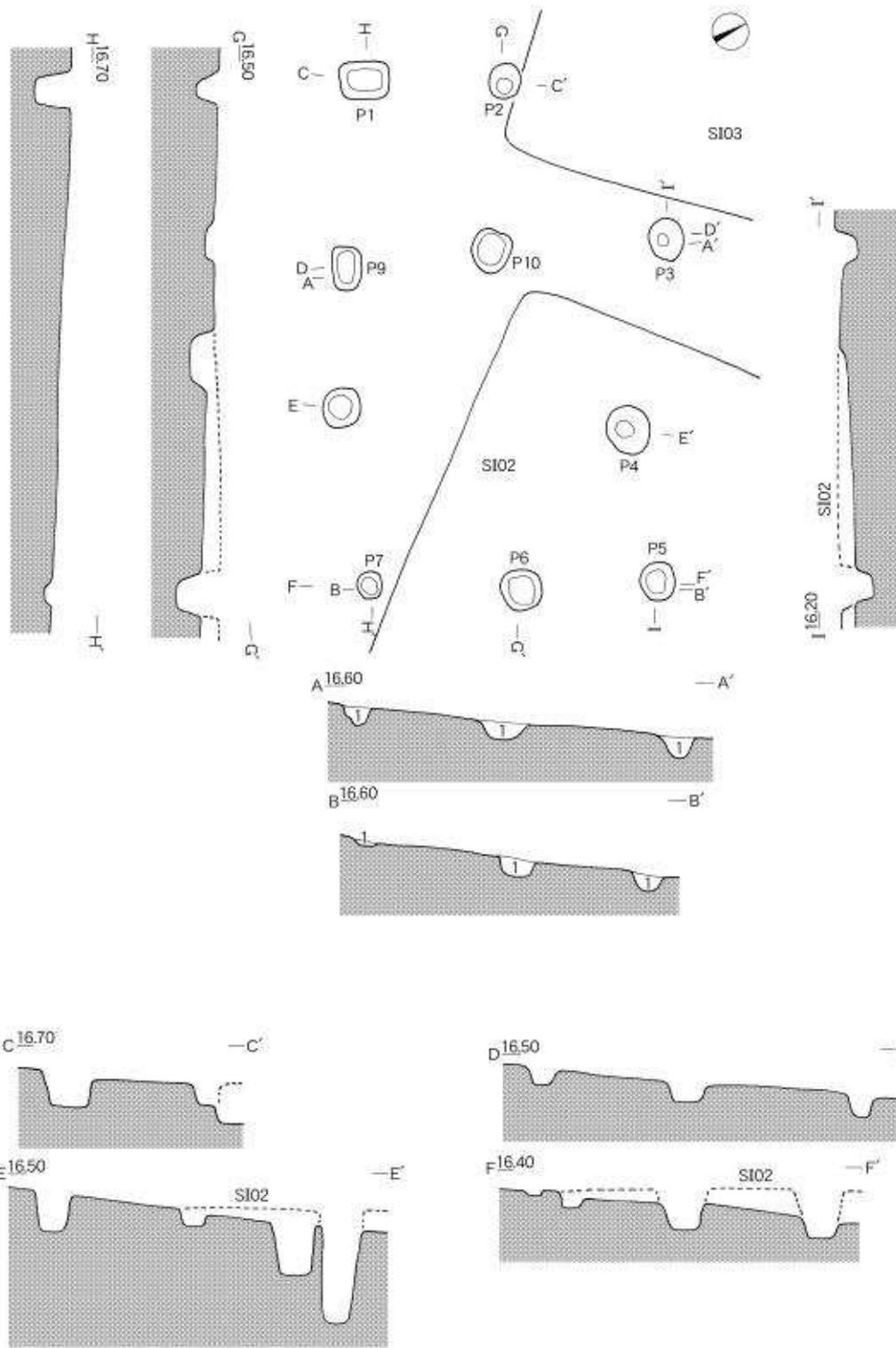


第74図 SI26出土遺物



SB05 (第79・80図)

調査A区北部、14・15-A・B区に位置する。柱筋が整わない建物跡で、8基の柱穴が検出された。概ね桁行2間×梁行2間と推定される。規模は長軸508.0cm、短軸406.0cmを測る。長軸方向はN-43°-Eを指す。柱間の寸法は、桁行は153.0cm~243.0cm、梁行は160.0cm~305.0cmを測る。柱穴の規模は、P1は50.0×48.0cm、深さ32.8cmの円形、P2は48.0×48.0cm、深さ32.5cmの円形、P3は31.0×31.0cm、深さ39.7cmの円形、P4は32.0×28.0cm、深さ17.5cmの円形、P5は60.0×50.0cm、深さ35.7cmの楕円形、P6は74.0×46.0cm、深さ61.8cmの楕円形、P7は51.0×43.0cm、深さ20.5cmの隅丸長方形、P8は61.0×34.0cm、深さ21.1cmの楕円形をそれぞれ測る。なお、P6・P8の東側の掘方は抜き取り痕である。底面に硬化された面が確認できなかったものの、柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種と言っても差し支えない。出土遺物としては、P2から須恵器蓋が、P6から須恵器杯が出土している。1は須恵器杯の底部破片である。ロクロ成形で、二次底部面は手持ちヘラケズリ、底部はヘラケズリである。2は須恵器蓋の体部破片である。口縁端部は短く折り返されている。これら出土遺物は9世紀前半に比定され、本跡の時期も9世紀前半と考えられる。



第75圖 SB01実測図



第76圖 SB01出土遺物



SB06 (第81図)

調査A区南東部、14-F区に位置する。柱筋が整わない建物跡で、6基の柱穴が検出された。概ね桁行2間×梁行1間と推定される。規模は長軸235.0cm、短軸223.0cmを測る。長軸方向はN-19°-Eを指す。柱間の寸法は、桁行は131.0cmや100.0cm、梁行は175.0cmや120.0cmを測る。柱穴の規模は、P1は27.0×25.0cm、深さ24.0cm、P2は36.0×30.0cm、深さ14.5cm、P3は32.0×28.0cm、深さ17.8cm、P4は42.0×35.0cm、深さ22.0cm、P5は30.0×23.0cm、深さ12.0cm、P6は34.0×32.0cm、深さ35.3cm、をそれぞれ測る。いずれも出土遺物が検出できず、柱筋が整わないことから中世の建物跡とみられる。

SB07 (第82・83図)

調査B区北西部、11-G・H、12-G・H区に位置する。東側でSI04、SI05、SI06を切り、西側でSI26を切り、南西隅でSB14に切られている。桁行3間×梁行2間で、10基の柱穴で構成される側柱建物である。規模は長軸7.13cm、短軸5.16cmを測る。主軸方向はN-32.5°-Eを指す。柱間の寸法は、桁行は235.0cm、梁行は260.0cmを測る。柱穴の平面形態は、方形を基調とし、その規模は、P1は102.0×100.0cm、深さ43.3cmの方形、P2は108.0×104.0cm、深さ38.8cmの方形、P3は123.0×121.0cm、深さ26.0cmの隅丸方形、P4は91.0×88.0cm、深さ49.0cmの方形、P5は107.0×79.0cm、深さ15.4cmの長方形、P6は104.0×79.0cm、深さ71.3cmの方形、P7は105.0×98.0cm、深さ52.3cmの方形、P8は98.0×93.0cm、深さ54.6cmの方形、P9は93.0×83.0cm、深さ54.9cmの方形、P10は87.0×82.0cm、深さ45.5cmの方形である。またP2のみ底面に硬化された面が確認できた。その他の柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種と言っても差し支えない。出土遺物としては、土師器、須恵器、鉄製品が出土している。1はP8埋土上層出土で、土師器甕の口縁部破片である。口縁が強く外反し、端部摘み上げられている。2～6は須恵器である。2は坏でP8埋土上層の出土である。ロクロ整形で、新治窯産である。3も坏でP6埋土上層の出土である。4は有台坏の高台の小破片で、P2埋土上層の出土である。ロクロ整形で高台貼付である。5は蓋でP3埋土上層の出土である。天井部は回転ヘラケズリで、口縁端部は短く屈曲する。6も蓋でP4埋土上層の出土である。やはり天井部は回転ヘラケズリで、口縁端部は短く屈曲する。7はP6埋土上層の出土である。鉄製品の火打金具であろうか。双頭の勾玉状を呈し、双頭部には釘穴があり、中央部は山形を呈する。幅7.85cm、頭部高さ2.33cm、中央部高さ2.01cm、厚さ0.56cm、釘穴径0.38cm、重さ29.8gを測る。これら出土遺物は8世紀末から9世紀前半に比定され、本跡の時期は9世紀前半と考えられる。

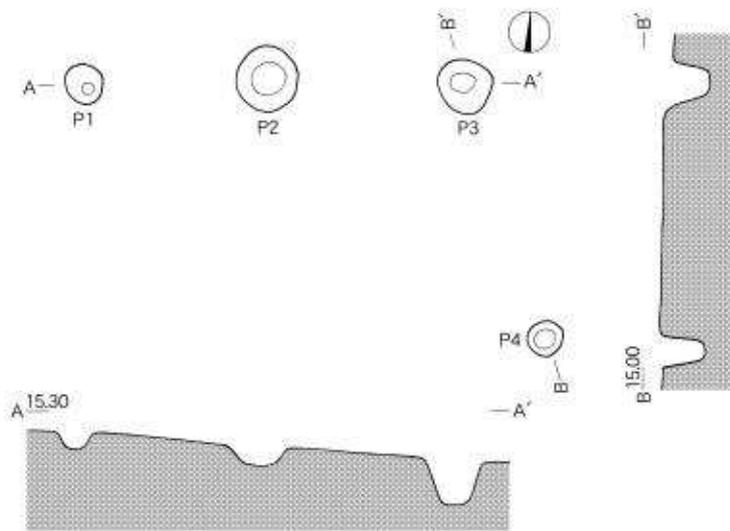
SB08 (第84図)

調査B区南西部、11-I区に位置する。西側でSI23を切っている。また北梁行の柱穴数が整わないものの、桁行3間×梁行2間の側柱建物跡と推定される。8基の柱穴で構成され、規模は長軸450.0cm、短軸412.0cmを測る。長軸方向はN-59°-Eを指す。柱間の寸法は、桁行は、200.0～248.0cm、南梁行は130.0～150.0cmを測り、北桁行は412.0cmである。柱穴の平面形態は円形、楕円形、長方形である。またその規模は、P1は97.0×88.0cm、深さ21.7cmの円形、P2は69.0×67.0cm、深さ14.6cmの円形、P3は82.0×81.0cm、深さ27.9cmの円形、P4は102.0×83.0cm、深さ37.7cmの楕円形、P5は105.0×101.0cm、深さ32.8cmの方形、P6は81.0×72.0cm、深さ23.8cmの円形、P7は82.0×72.0cm、深さ30.0cmの円形、P8は90.0×69.0cm、深さ30.4cmの楕円形である。また検出されたP1からP8のすべての柱穴底面には硬化された面が確認できた。

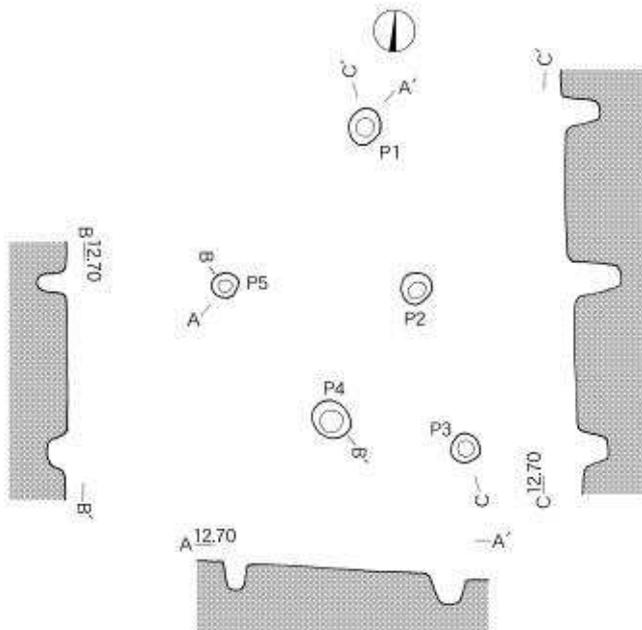
柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種と言っても差し支えない。出土遺物は検出できなかったが、SI23を切り、柱穴の規模からみて8世紀から9世紀前半の建物跡とみられる。

SB09 (第85図)

調査B区南西部、11-I区に位置する。本跡全体がSI23と重複し、さらに北東部でSB08を切って構築している。柱穴は4基検出されたにとどまり、桁行2間×梁行1間の建物跡と思われる。検出された規模は長軸395.0cm、短軸160.0cmを測るものの、梁行がさらに北西方向に延びる可能性がある。現存長軸方向N-61°-Wを指す。柱



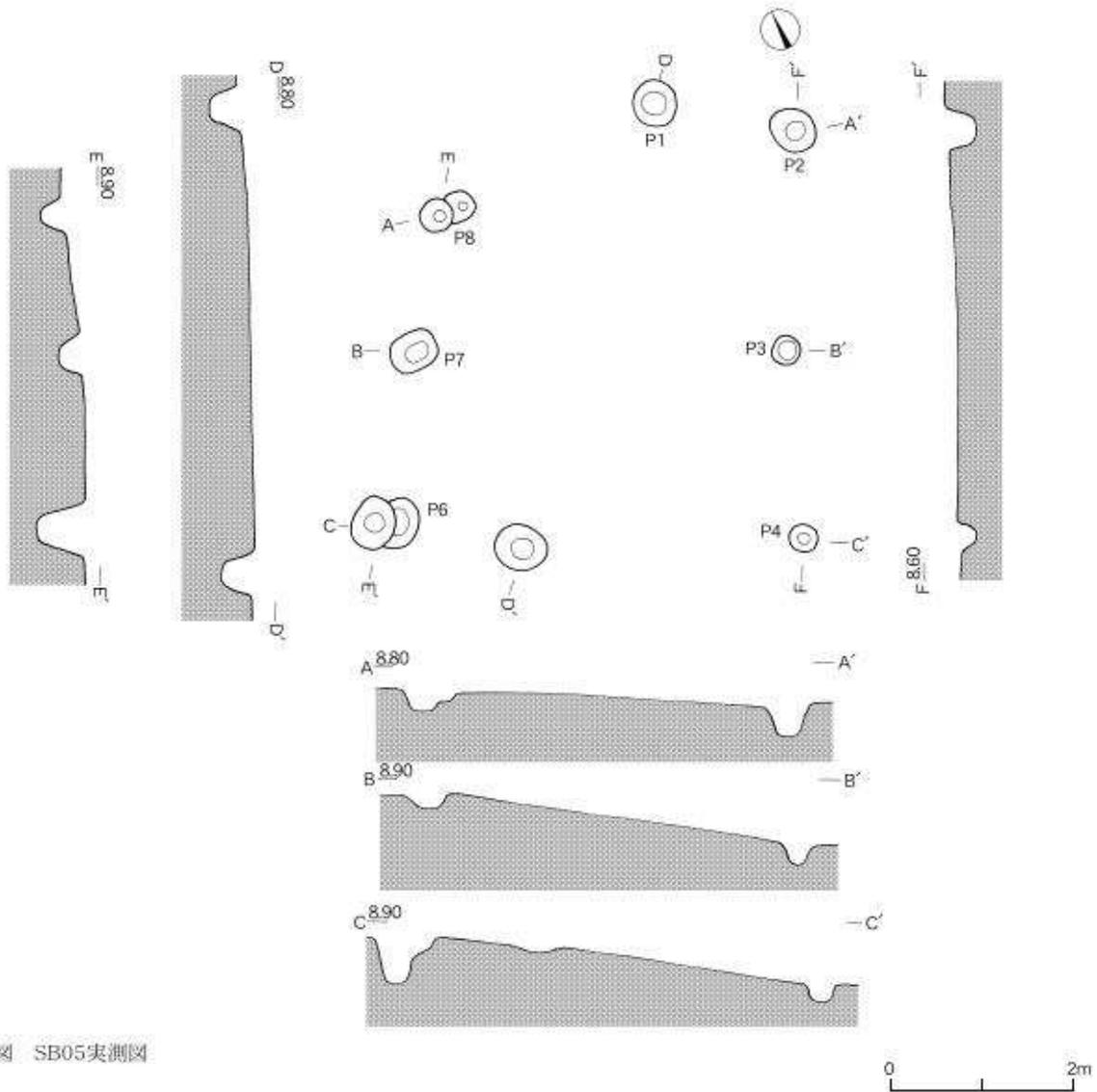
第77図 SB02実測図



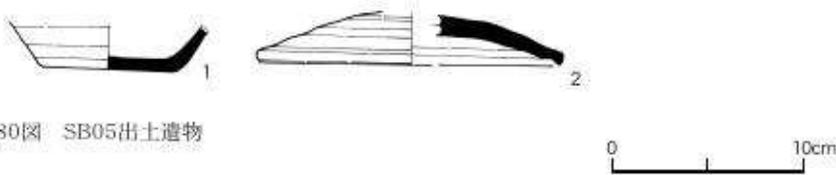
第78図 SB04実測図

間の寸法は、桁行は200.0cm、190.0cm、梁行は155.0cmである。柱穴の平面形態は、円形、楕円形と長方形である。その規模は、P1は65.0×53.0cm、深さ27.6cmの楕円形、P2は60.0×60.0cm、深さ31.1cmの円形、P3は54.0×35.0cm、深さ12.5cmの長方形、P4は44.0×42.0cm、深さ32.6cmの円形をそれぞれ測る。

柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種である。しかし、柱の痕跡を示す土層の堆積や最下部の締まりを有する土層は検出できなかった。また遺物は出土しなかったものの、柱穴の規模や柱筋から判断して中世の建物跡とみられる。



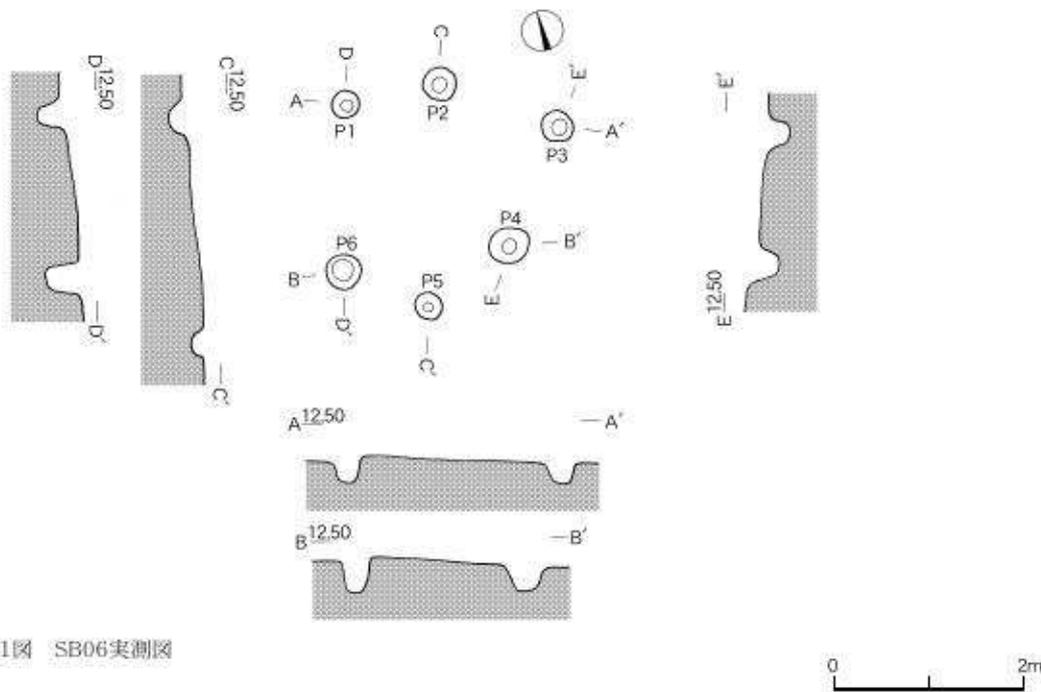
第79図 SB05実測図



第80図 SB05出土遺物

SB10 (第86図)

調査B区南部、11・12-I・J区に位置する。検出した柱穴は4本で、桁行1間×梁行1間となる。P1-P2の長い柱間を桁行とすると、桁行の柱間が336.0cm、梁行柱間が298.0cmとなり、長軸方向はN-58°-Eを指す。柱穴の平面形態は、円形と楕円形である。柱穴の規模は、P1は56.0×42.0cm、深さ51.8cmの楕円形、P2は74.0×45.0cm、深さ42.6cmの楕円形、P3は48.0×35.0cm、深さ26.3cmの円形、P4は57.0×50.0cm、深さ



第81図 SB06実測図

43.9cmの円形をそれぞれ測る。柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種である。またP2・P4の柱穴の底面には、硬化された面が確認できた。しかし、出土遺物は検出できず、柱穴の規模や柱筋から判断して中世の建物跡とみられる。

SB11 (第87図)

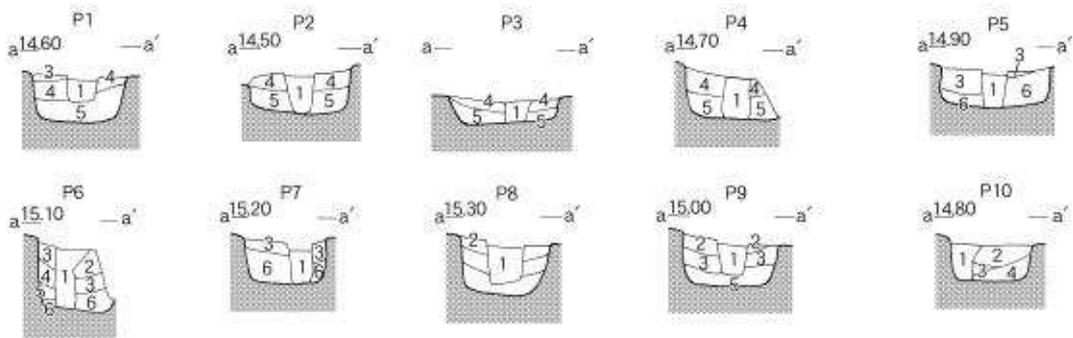
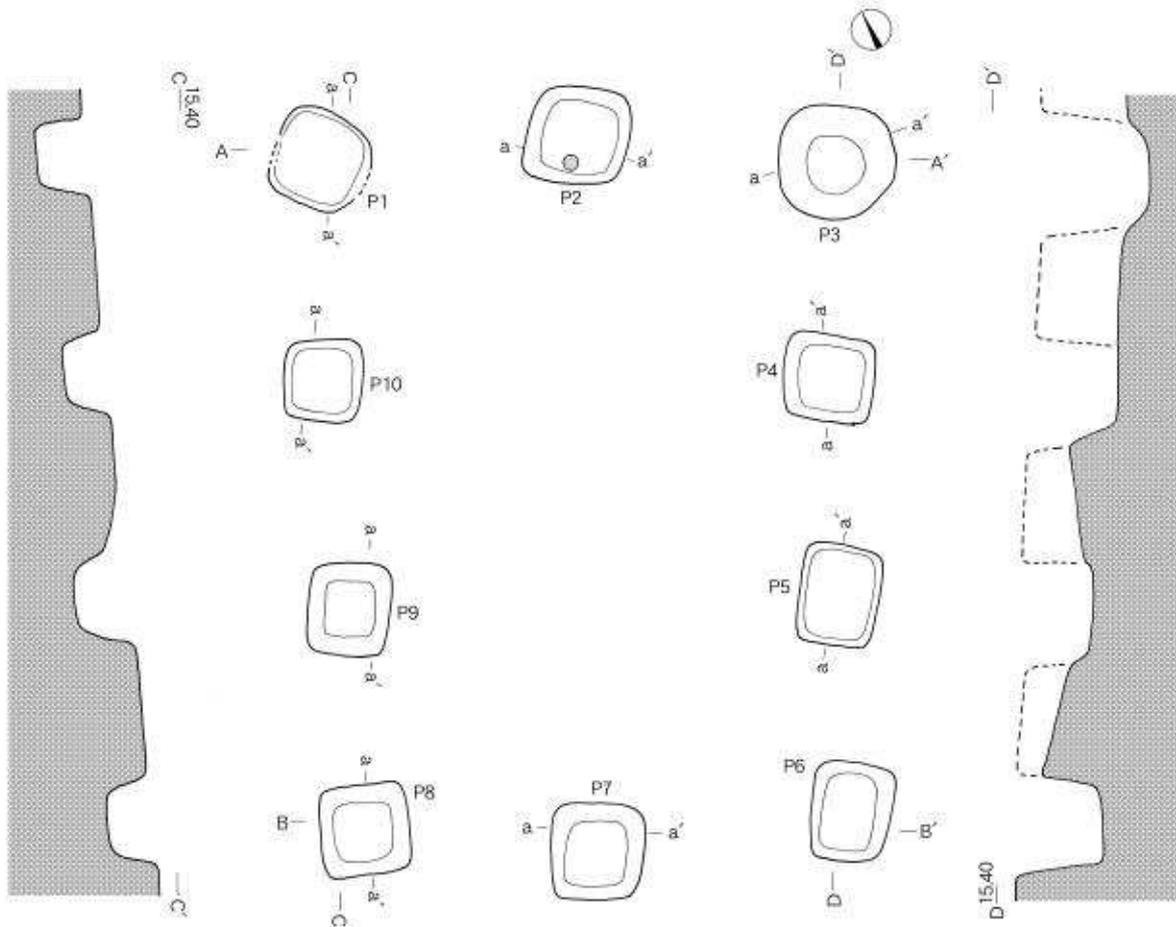
調査B区北東部、13-H区に位置する。東側が未調査区域に延びている。検出された柱穴は3基である。柱列からみるとP1、P2、P3が桁行2間の建物跡が推定できる。規模は520.0cmを測る。長軸方向はN-2°-Wを指す。柱間の寸法は、270.0cmと256.0cmである。柱穴の平面形態は、いずれも円形である。その規模は、P1は69.0×57.0cm、深さ20.7cm、P2は30.0×30.0cm、深さ14.0cm、P3は35.0×31.0cm、深さ75.2cmを測る。柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種である。しかし、柱の痕跡を示す土層の堆積や最下部の締まりを有する土層は検出できなかった。また出土遺物も検出できず、柱穴の規模からみて中世の建物跡とみられる。

SB12 (第88図)

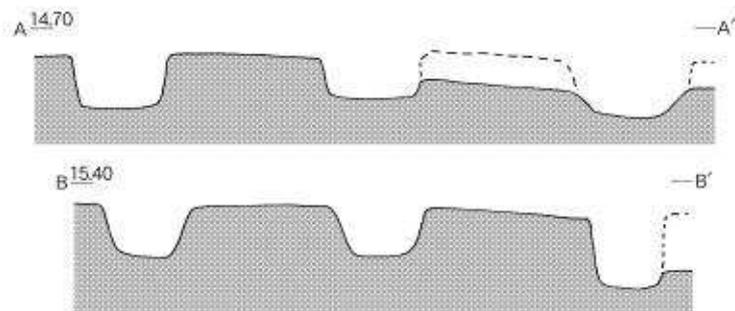
調査B区東部、13-I区に位置する。東側が未調査区域に延び、北西部でSI07と、南東部でSD03と重複しており、検出された柱穴は3基のみである。したがって現存では桁行1間×梁行1間の建物跡となる。確認された規模は長軸124.0cm、短軸116.0cmを測る。長軸方向はN-45°-Eを指す。柱穴の平面形態は、円形と楕円形である。3基の柱穴の規模は、P1は45.0×42.0cm、深さ66.5cmの円形、P2は40.0×27.0cm、深さ26.7cmの楕円形、P3は23.0×22.0cm、深さ8.3cmの円形をそれぞれ測る。柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種である。しかし、柱の痕跡を示す土層の堆積や最下部の締まりを有する土層は検出できなかった。また出土遺物も検出できず、柱穴の規模からみて中世の建物跡とみられる。

SB13 (第89図)

調査B区西部、11-H・II区に位置する。東隅でSI17と北西隅でSI24を切っている。桁行2間×梁行1間の建物

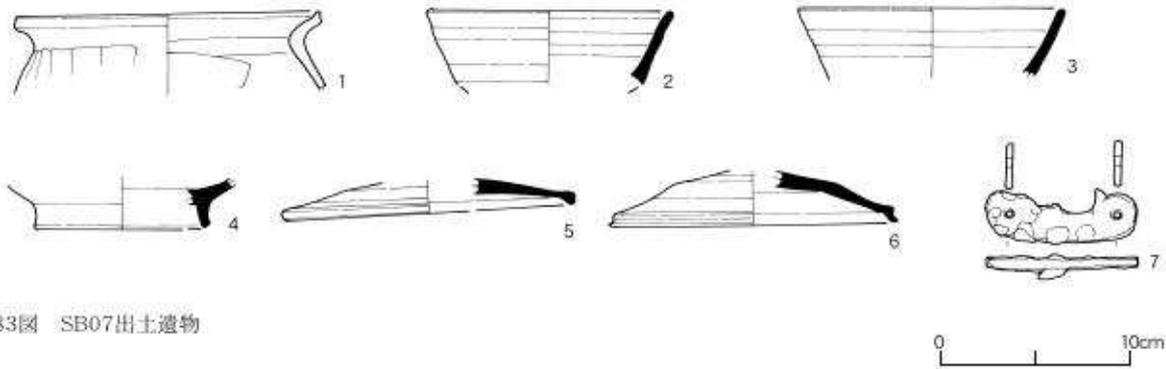


1. 濃い黄褐色土(10YR4/3) 少量のローム粒子-粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。柱痕跡。
2. 褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒子を塊状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
3. 黄褐色土(10YR5/6) 多量のローム粒子を塊状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
4. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
5. 黄褐色土(10YR5/6) 多量のローム粒子-ロームブロックを研砕に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
6. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子-ロームブロックを塊状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。



第82図 SB07実測図

0 2m



第83図 SB07出土遺物

跡で、遺存状態は比較的良好である。検出された柱穴は5基であるが、本来は6基構成の側柱建物であろうが、1基はSI25との重複によって消失した可能性がたかい。現存する規模は長軸535.0cm、短軸384.0cmを測る。長軸方向はN-51°-Wを指す。柱間の寸法は、桁行で235.0cmや300.0cm、梁行は384.0cmを測る。柱穴の平面形態は、円形、方形、長方形と統一されていない。5基の柱穴の規模は、P1は92.0×67.0cm、深さ38.7cmの長方形、P2は85.0×69.0cm、深さ18.3cmの方形、P3は71.0×65.0cm、深さ34.8cmの方形、P4は115.0×107.0cm、深さ47.0cmの方形、P5は87.0×75.0cm、深さ69.2cmの円形である。また5基すべての柱穴の底面には、硬化された面が確認できた。

柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種と言っても差し支えない。出土遺物は検出できなかったが、SI17・24を切って構築していることから10世紀前半以降の建物跡とみられる。

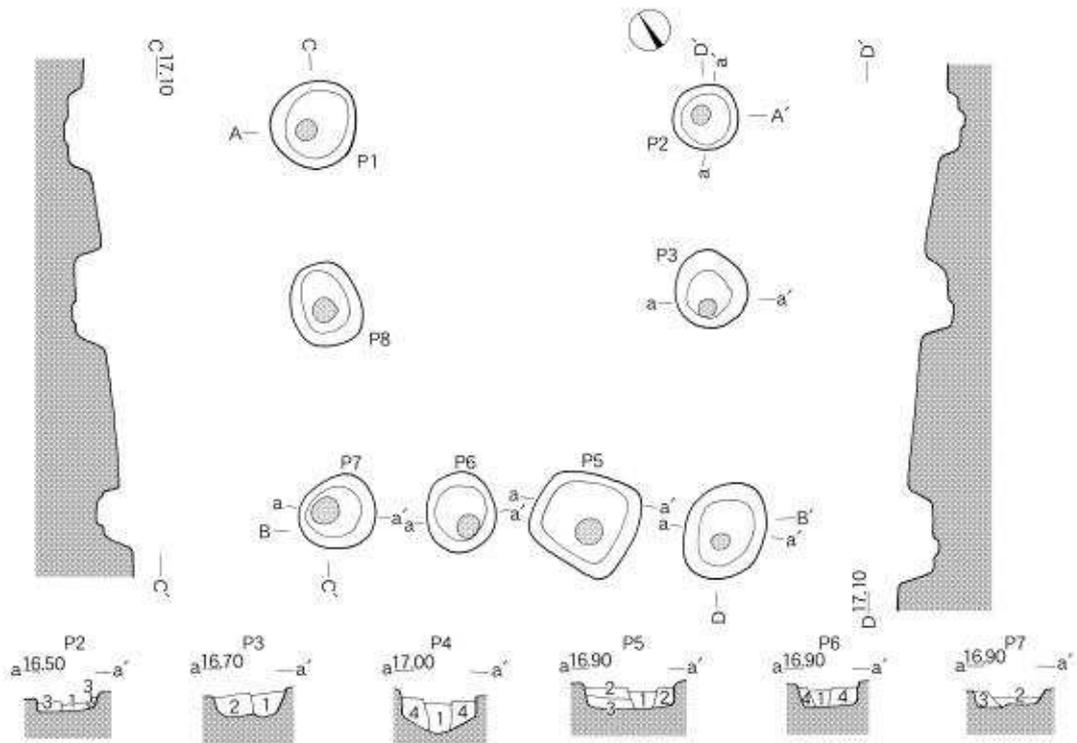
SB14 (第90図)

調査B区北西部、11-H区に位置する。SB07と重複しており、本跡が新期である。桁行1間×梁行1間の建物跡で、本跡P2がSB07のP1を切って構築している。4基の柱穴で構成され、規模は長軸215.0cm、短軸193.0cmを測る。長軸方向はN-48°-Wを指す。柱間の寸法は、桁行は215.0cmと210.0cm、梁行は193.0cmと166.0cmを測る。柱穴の平面形態は、いずれも円形である。その規模は、P1は50.0×47.0cm、深さ24.3cm、P2は48.0×42.0cm、深さ34.0cm、P3は46.0×38.0cm、深さ39.5cm、P4は62.0×53.0cm、深さ25.0cmを呈する。

柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種と言っても差し支えない。しかし、柱の痕跡を示す土層の堆積や最下部の締まりを有する土層は検出できなかった。また遺物は出土しなかったものの、柱穴の規模や柱筋から判断して中世の建物跡とみられる。

SB15 (第91図)

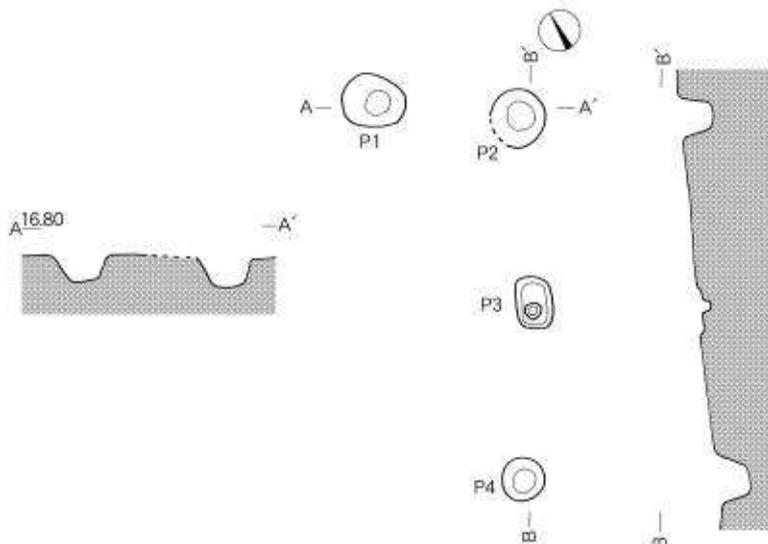
調査B区北部、12-G区に位置する。北部でSI08、SX10と重複している。新旧関係は明瞭ではないが、SI08よりも新期と推定できる。柱穴は4基検出されたにとどまり、P1とP4は樹木痕により上面が攪乱を受けている。桁行2間×梁行1間の建物跡と思われる。検出された規模は長軸260.0cm、短軸246.0cmを測る。長軸方向はN-90°の真東を向く。柱間の寸法は、桁行は、180.0cm、梁行は235.0cmを測る。柱穴の平面形態は、いずれも円形である。また柱穴の規模は、P1は35.0×33.0cm、深さ33.0cm、P2は38.0×33.0cm、深さ14.1cm、P3は32.0×28.0cm、深さ26.5cm、P4は29.0×28.0cm、深さ67.3cmを測る。柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種である。しかし、柱の痕跡を示す土層の堆積や最下部の締まりを有する土層は検出できなかった。また遺物は出土しなかったものの、柱穴の規模や柱筋から判断して中世の建物跡とみられる。



1. 黒褐色土(10YR3/1) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。粒痕跡。
2. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
3. 黄褐色土(10YR5/6) 多量のローム粒子・ロームブロックを斑状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
4. 黒褐色土(10YR3/2) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

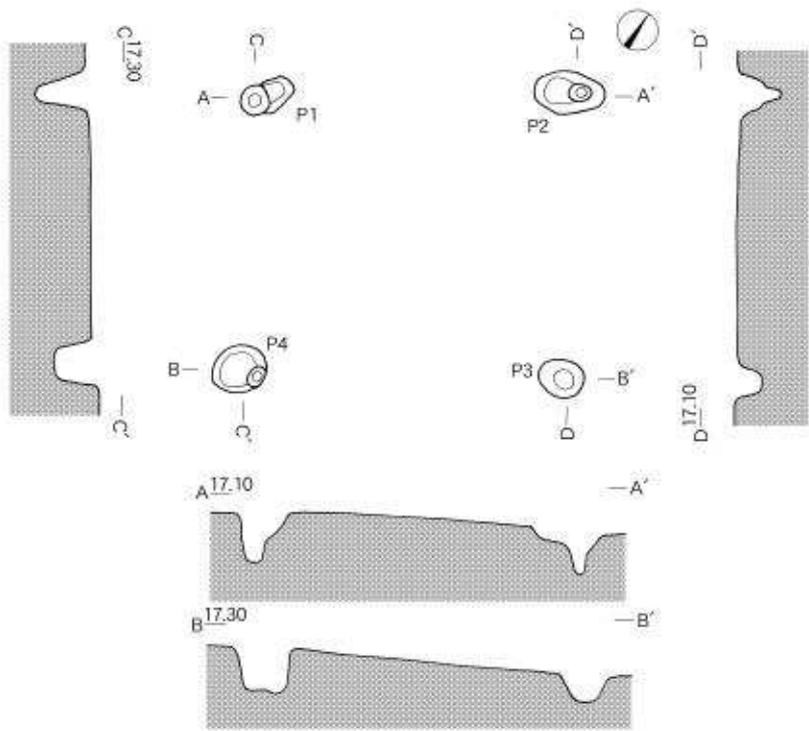
第84図 SB08実測図

0 2m

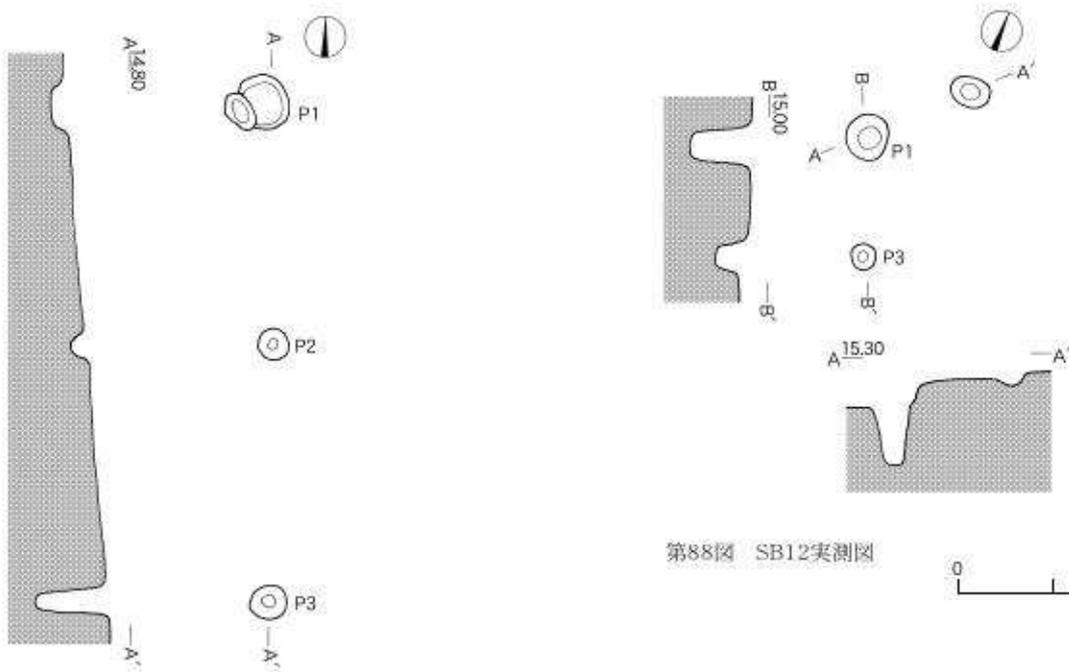


第85図 SB09実測図

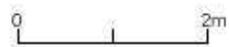
0 2m



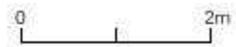
第86図 SB10実測図

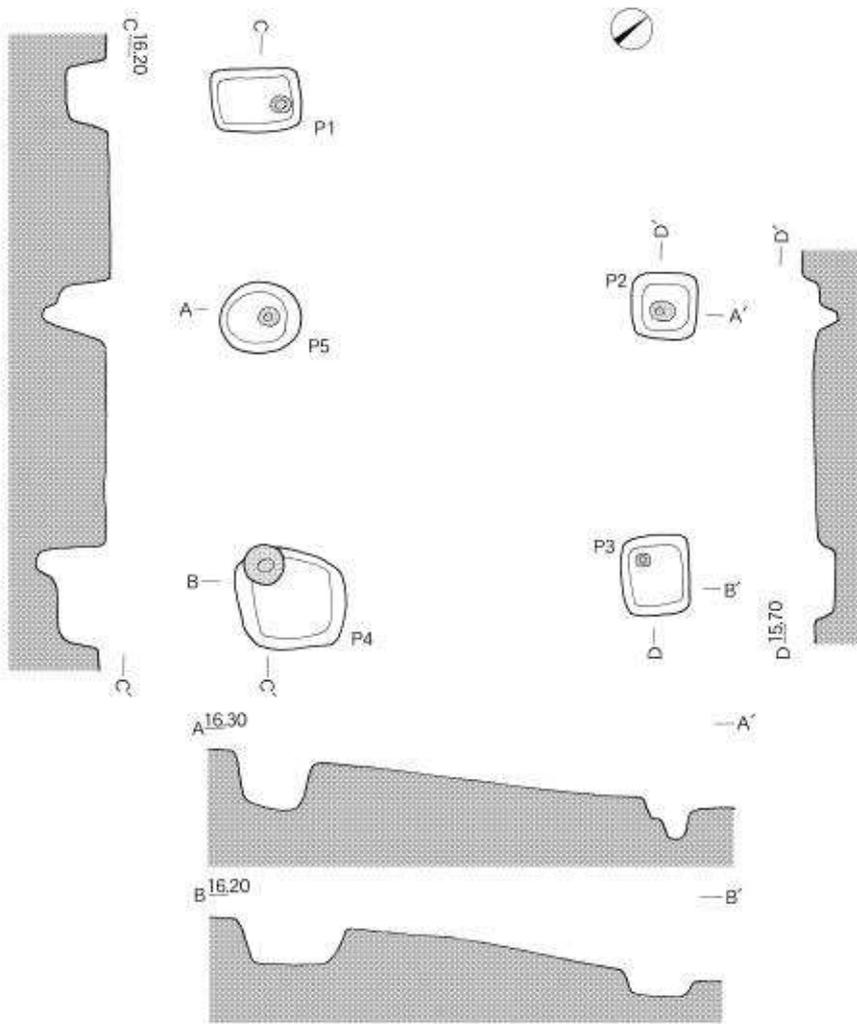


第87図 SB11実測図

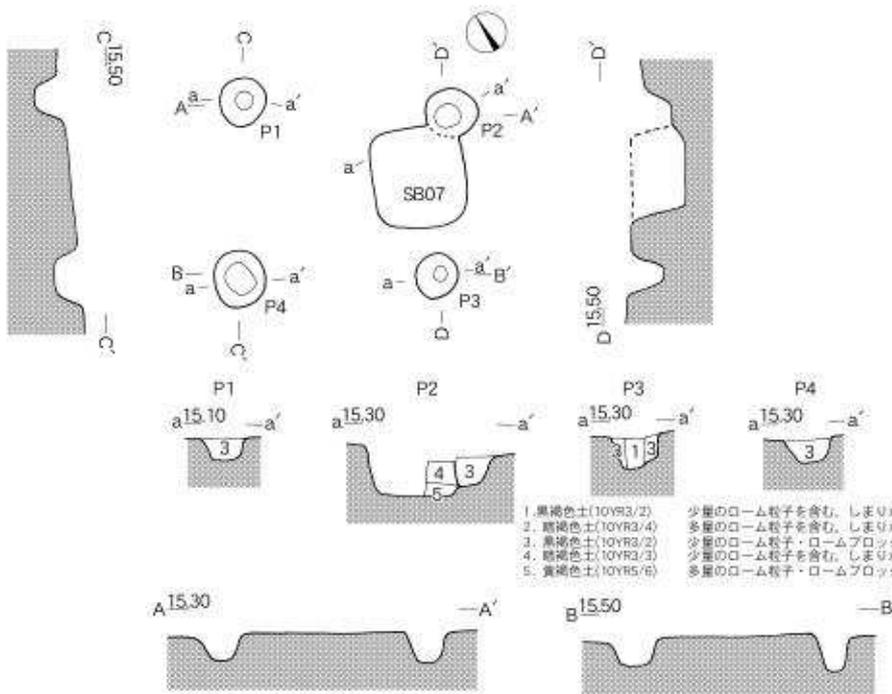


第88図 SB12実測図



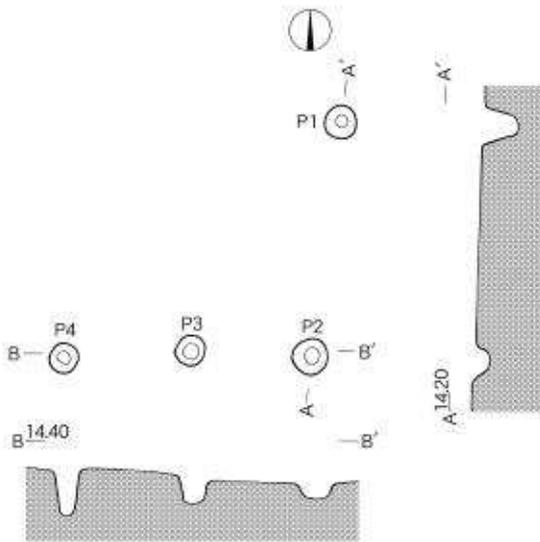


第89図 SB13実測図

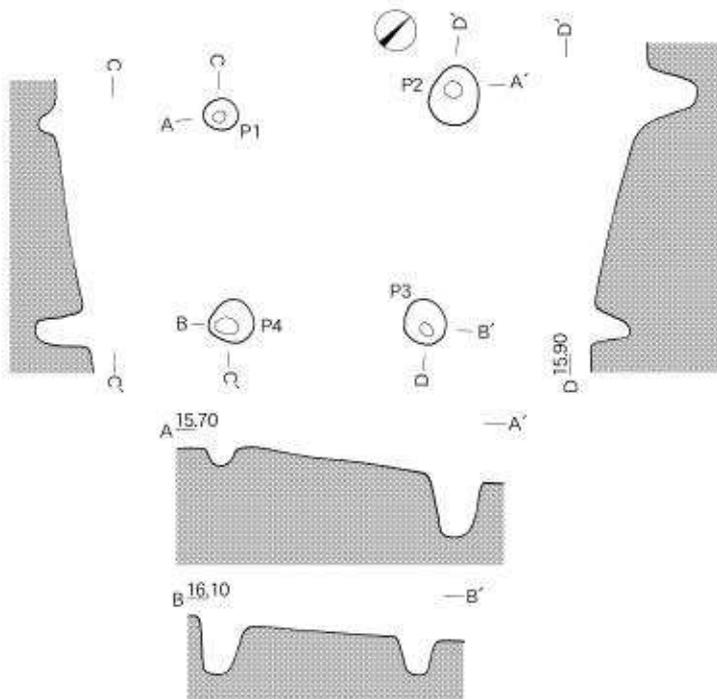


第90図 SB14実測図

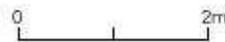




第91図 SB15実測図



第92図 SB16実測図



SB16 (第92図)

調査B区西部、11-H区に位置する。SI24およびSI25と重複している。新旧関係は明瞭ではないものの、2軒の竪穴住居跡よりも新期と推定でき、しかも柱筋が整わない。検出した柱穴は4基で、桁行1間×梁行1間となる。柱間が220.0~255.0cmとP2がやや北方向に突出している。P1~P4の長い柱間を桁行とすると、長軸方向は

N - 40° - Wを示す。柱穴の規模はP1が35.0×32.0cm、深さ17.0cmの円形、P2が65.0×49.0cm、深さ55.5cmの楕円形、P3が42.0×42.0cm、深さ36.8cmの円形、P4が47.0×42.0cm、深さ57.6cmの円形をそれぞれ測る。柱穴の覆土は、竪穴住居跡の覆土とほぼ同種である。しかし、柱の痕跡を示す土層の堆積や最下部の締まりを有する土層は検出できなかった。また出土遺物も検出できなかった。しかし、柱穴の規模や柱筋から判断して中世の建物跡とみられる。

第5節 井戸跡

SE01 (第93図)

調査A区東部、15 - E区に位置する。SD03内の北部にあたり、西に向かって屈曲する底面から検出されたもので、SD03の確認面から本跡確認面まで218.0cmの比高差がある。素掘り井戸の平面形は東西に長い楕円形を呈し、東西軸142.0cm、南北軸131.0cmを測り、湧水層上面まで157.0cmで、ここまで掘り下げたものの、完掘までには至らなかった。壁面はほぼ垂直の筒状で、東側が若干オーバーハングしている。覆土は8層まで分層できた。出土遺物がなく、時期は明瞭ではないが、SD03と直接関連するものであり、本跡の時期は中世である。

SE02 (第94・95図)

調査A区西部、14 - C・D区に位置する。SD03内の北部で、西から東に向かって屈曲する底面から検出されたものである。SD03の確認面から本跡確認面まで60.0cmの比高差がある。素掘り井戸の平面形は南北に長い楕円形を呈し、東西軸221.0cm、南北軸283.0cmを測り、湧水層上面まで60.0cmで、ここまで掘り下げたものの、完掘までには至らなかった。壁面はほぼ垂直の筒状である。出土遺物として第95図1は、常滑の壺・甕類の胴部破片で、中世である。本跡の時期は中世である。

第6節 竪穴状遺構

1 地下式坑

SX01 (第96・97図)

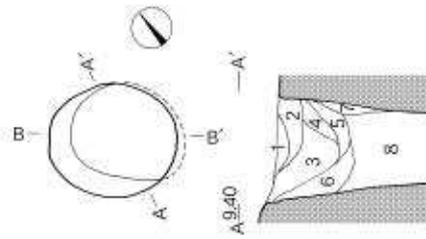
調査A区南東部、15 - E・F区に位置する。東部が未調査区域に延び、北部がSX02を切って構築している。平面形は、地下室である方形主室の東壁辺に方形の竪坑が接続する形態で、検出された全長310.0cmを測る。竪坑を基準にした主軸方向はN - 66° - Wを指す。主室は南北がやや長い方形を呈し、上面の東西軸250.0cm、南北軸252.0cm、下面の東西軸171.0cm、南北軸190.0cm、深さ155.0cmを測る。竪坑の平面形も方形で、東壁辺のほぼ中央で接続している。規模は東西軸78.0cm、南北軸108.0cm、深さ107.0cmである。この竪坑から直接主室部に連結され、主室は一段下がっている。その比高差は58.0cmを測る。主室の壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、上面で内傾する。天井部は確認できなかった。覆土の締りは比較的良好で、レンズ状を呈する自然堆積である。

遺物は覆土中層から上層にかけて出土している。1は土師質土器小皿で、底部破片である。ロクロ整形で底部回転系切りである。13世紀から14世紀に比定される。2は渥美焼の甕で口縁部破片である。口縁が大きく外反する。中世である。本跡の時期は中世である。

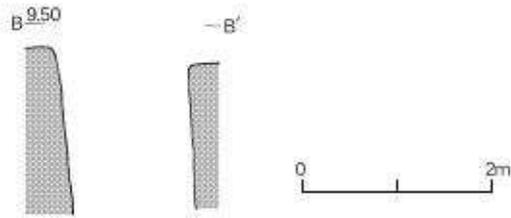
SX06 (第104・105図)

調査A区東部、15 - D・E区に位置する。平面形は、地下室である長方形の主室の東壁辺に楕円形の竪坑が接続する形態で、検出された全長304.0cmを測る。竪坑を基準にした主軸方向はN - 68° - Wを指す。主室は南北が長く、東壁辺が外側に膨らむ長方形を呈し、上面の東西軸220.0cm、南北軸234.0cm、下面の東西軸194.0cm、南北軸214.0cm、深さ89.0cmを測る。竪坑の平面形は東西に長い楕円形で、東壁辺南寄りに接続している。規模は東西軸95.0cm、南北軸98.0cm、深さ72.0cmである。この竪坑から直接主室部に連結され、主室は一段下がっている。その比高差は25.0cmを測る。主室の壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、上面で内傾する。天井部は確認できなかった。覆土の締りは比較的良好で、レンズ状を呈する自然堆積である。

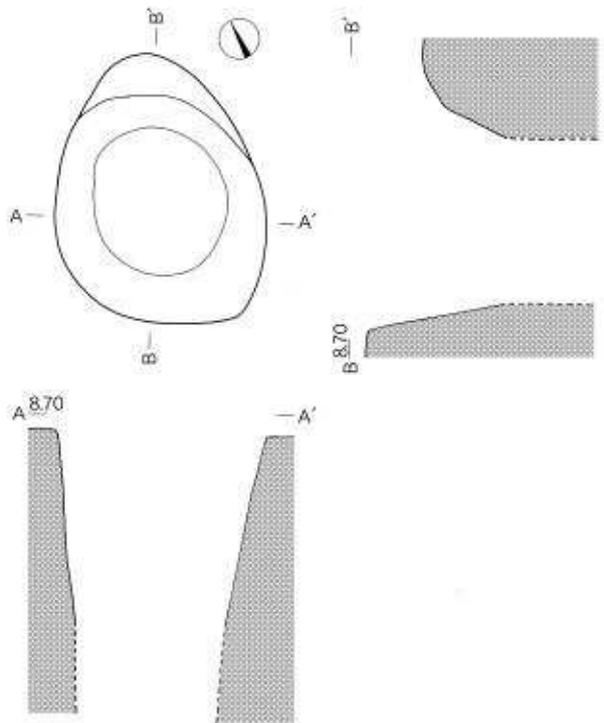
出土遺物として、土師器と磁器が検出された。1・2は土師器である。1は甕の底部である。底部はヘラケズリ



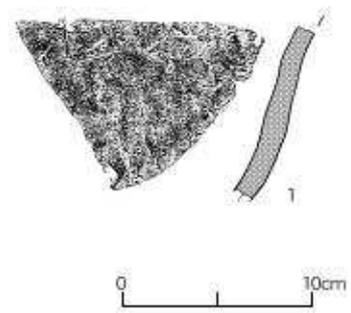
1. 濃い黄褐色土(10YR5/2) 少量のローム粒子、多量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量のローム粒子粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
3. 褐色土(10YR3/4) 少量のローム粒子、微量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
4. 濃い黄褐色土(10YR4/2) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
5. 濃い黄褐色土(10YR5/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
6. 暗褐色土(10YR3/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
7. 褐色土(10YR4/5) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
8. 黄灰色土(10YR4/1) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。



第93図 SE01実測図



第94図 SE02実測図



第95図 SE02出土遺物

で、内面はヘラナデである。2は足高台塊の高台部破片である。底部は回転ヘラキリで、高台は貼付けである。10世紀後半に比定される。3は龍泉窯系青磁鉢類の口縁部破片である。中世で13世紀から14世紀に比定される。本跡の時期は中世である。

2. 方形・円形竪穴状遺構

SX02 (第96・97図)

調査A区南東部、15-E区に位置する。南部でSX01に切られている。平面形は南北に長い楕円形を呈し、検出された規模は東西軸306.0cm、南北軸362.0cm、深さは6.3cmである。主軸方向はN-16°-Eを指す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の2層で、自然堆積である。

出土遺物として覆土中から陶器が検出された。1は常滑焼の壺甕類の底部破片で、底径が16.0cmを測る。中世である。本跡の時期は中世である。

SX03 (第99・100図)

調査A区南部、13・14-E区に位置する。北西部でSK20に切られている。平面形は方形を呈し、その規模は東西軸242.0cm、南北軸256.0cm、深さは53.0cmである。主軸方向はN-35°-Eを指す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土および暗褐色土の4層である。

出土遺物として、土師器・須恵器が検出された。1～5は土師器、6は須恵器である。1～3は坏で、ロクロ整形である。1の底部回転ヘラケズリで、内面は黒色処理が施されている。2は内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。3は二次底部が手持ちヘラケズリで、底部も回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。4・5は塊である。4は底部が回転糸切りで、内面ヘラミガキの後、黒色処理を施している。5は内面にヘラ記号がみられる。6は甕の肩部付近の破片である。外面は平行タタキ、内面は青海波紋である。これらは10世紀後半に比定され、本跡の時期も10世紀後半と推定される。

SX04 (第101・102図)

調査A区南部、14-E区に位置する。北東部が緩傾斜面に掛かるため、遺構の確認で既に床面が露出し、壁が削平されている状態であった。確認された平面形は南北に長い長方形を呈し、規模は東西軸242.0cm、南北軸242.0cm、深さは9.7cmである。主軸方向はN-31°-Wを指す。柱穴は3本検出され、いずれも円形を呈する。北西隅のP1は径62.0×54.0cm、深さ67.2cm、南西隅のP2は径45.0×40.0cm、深さ45.7cm、南部のP3は径42.0×40.0cm、深さ25.2cm、P4が径38.0×32.0cmである。底面は平坦であるが、明瞭な硬化面は確認できなかった。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆積である。

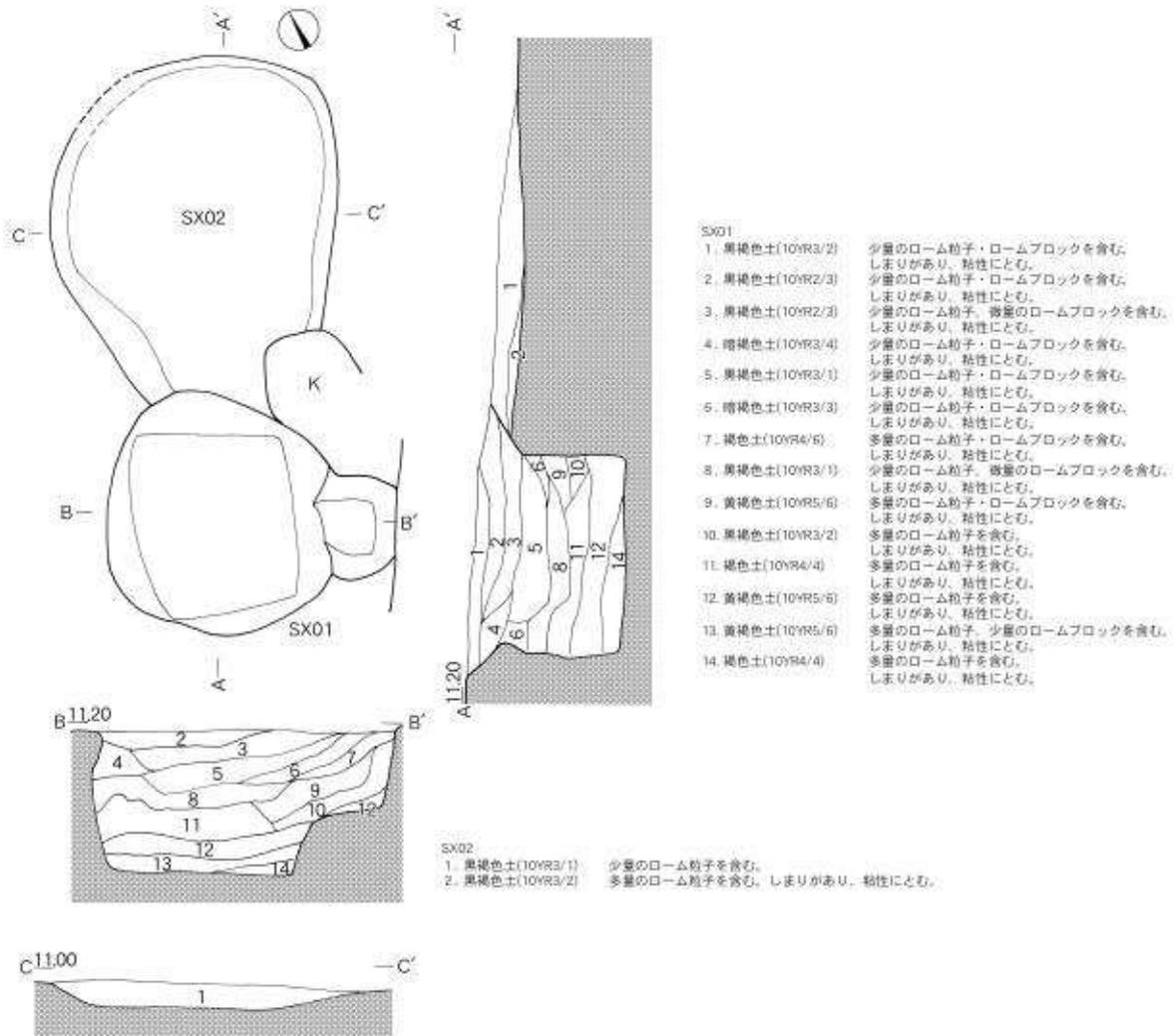
出土遺物として、土師質土器が出土している。1は壺甕類の底部破片である。底径は16.0cmを測る。なお、外面に筋状の切り込みがみられるが、人為的である。中世に比定され、本跡の時期は中世である。

SX05 (第103図)

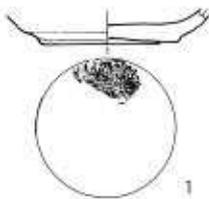
調査A区南西部、13-E区に位置する。北東部が緩傾斜面に掛かるため、遺構の確認で既に大半の床面が露出し、壁が削平されている状態であった。確認された平面形は南北に長い長方形を呈し、規模は東西軸424.0cm、南北軸383.0cm、深さは12.2cmである。主軸方向はN-45°-Eを指す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。残存している壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に中世土坑の可能性が高い。

SX07 (第106図)

調査E区北東部、3-X区に位置する。南部が傾斜面に掛かるため、遺構の確認で既に大半の床面が露出し、壁



第96図 SX01・02実測図

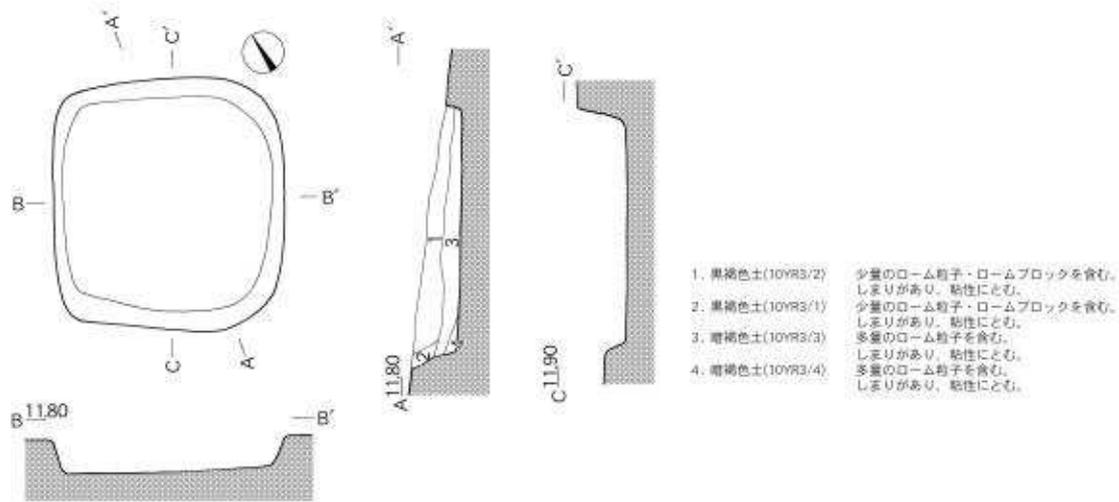


第97図 SX01出土遺物



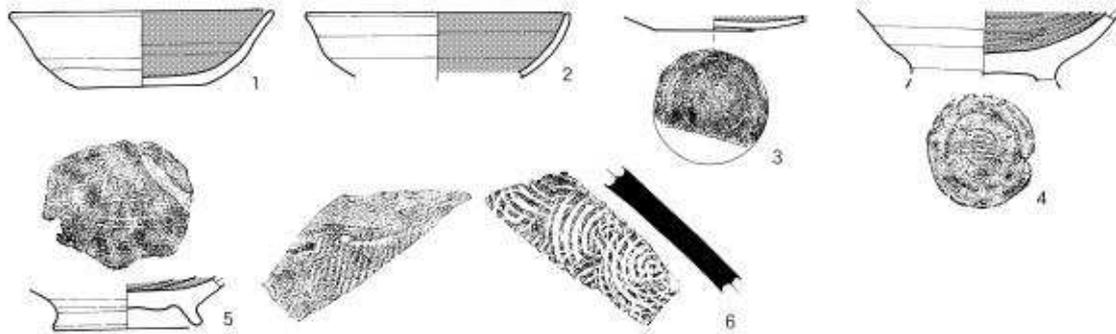
第98図 SX02出土遺物





第99図 SX03実測図

0 2m



第100図 SX03出土遺物

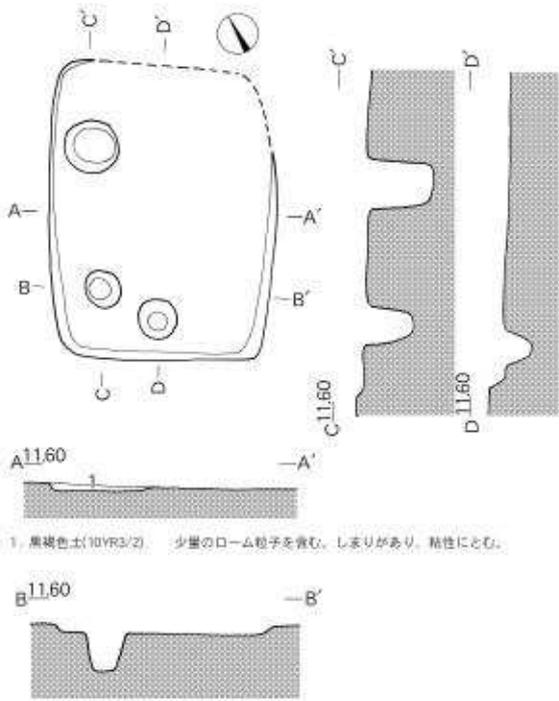
0 10cm

が削平されている状態であった。確認された平面形は南北に長い長方形を呈し、規模は東西軸200.0cm、南北軸171.0cm、深さは16.0cmである。主軸方向はN-26°-をW指す。北西部に柱穴が検出された。P1で径36.0×31.0cm、深さ15.5cmの円形である。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。残存している壁面は外傾して立ち上がる。

出土遺物がなく、明瞭ではないが、形態的に中世土坑の可能性が高い。

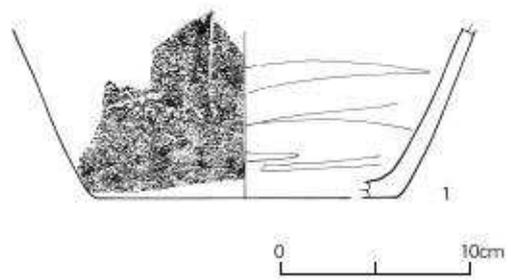
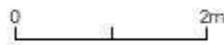
SX08 (第107・108図)

調査B区北部、12・13-G・H区に位置する。覆土中央東寄りでSK03に切られ、また北東部が緩傾斜面に掛かるため、遺構の確認で既に床面が露出し、壁が削平されている状態であった。確認された平面形は南壁辺が僅かにカーブをもつ方形を呈し、規模は東西軸380.0cm、南北軸342.0cm、深さは16.0cmである。主軸方向はN-22°-Eを指す。底面は平坦であるが、明瞭な硬化面は確認できなかった。壁面は外傾して立ち上がり、壁溝は削平された北東隅辺を除き全周し、その規模は幅12.0~25.0cm、深さ4.3~6.5cmで、断面U字状を呈する。また南

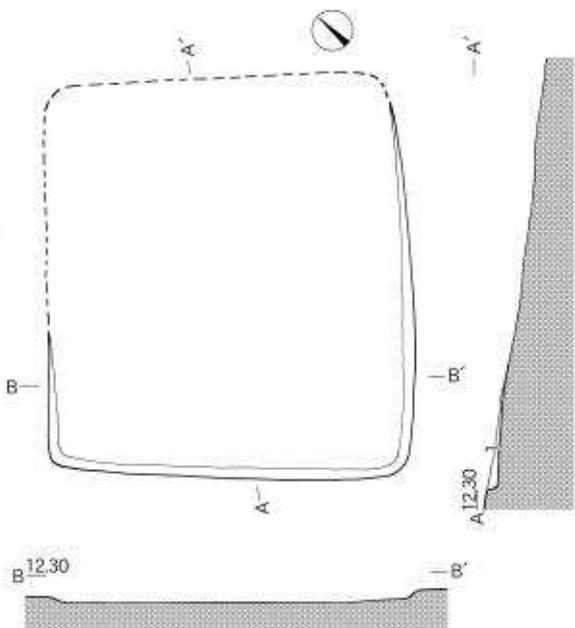


1. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

第101図 SX04実測図

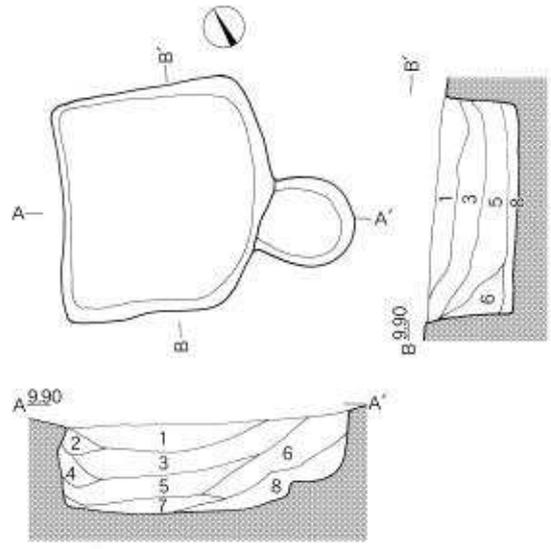
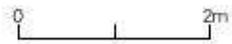


第102図 SX04出土遺物



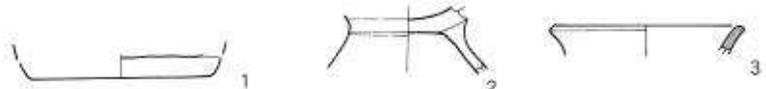
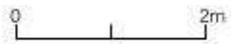
1. 褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

第103図 SX05実測図



- 1. 褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 2. 黒褐色土(10YR3/1) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 3. 暗褐色土(10YR3/4) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 4. 黒褐色土(10YR3/1) 多量のローム粒子・ロームブロックを球状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 5. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 6. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 7. 褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 8. 黒褐色土(10YR2/3) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。

第104図 SX06実測図



第105図 SX06出土遺物



東隅に円形のピットが構築されている。規模は径61.0×60.0cm、深さ33.5cmを測る。底面は平坦である。

出土遺物として、土師器・須恵器が検出された。1～6は土師器である。1・2は皿で、ロクロ整形である。1は底部が回転系切りである。2も同様で底部は回転系切りである。3・4は壺である。3は底部回転系切り、内面はヘラミガキの後、黒色処理が施される。4は口縁部が外反する。底部回転系切りで、高台は貼付けである。5・6は甕である。5は底部破片で、外面ヘラケズリで、底部は木葉痕である。6は胴部破片で、ヘラケズリが施されている。7は須恵器甕の胴部破片である。平行タタキが施されている。これらは10世紀から11世紀に比定される。

SX09 (第109図)

調査B区南西部、10-I・J区に位置する。北西隅が未調査区域に延びており、南部でSI20を切って構築している。また北東部が緩傾斜面に掛かるため、遺構の確認で既に床面が露出し、壁が削平されている状態であった。検出された平面形は南北に長い長方形を呈し、規模は東西軸380.0cm、南北軸294.0cm、深さは9.5cmである。主軸方向はN-30°-Wを指す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。残存している壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に中世土坑の可能性が高い。

SX10 (第110図)

調査B区北西部、12-G区に位置する。南部でSI08を切って構築している。平面形は南北に長い楕円形を呈し、規模は東西軸198.0cm、南北軸239.0cm、深さは32.5cmである。主軸方向はN-24°-Eを指す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。残存している壁面は外傾して立ち上がる。覆土は灰黄褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に中世土坑の可能性が高い。

SX11 (第111図)

調査B区北西部、12-G区に位置する。北東部が緩傾斜面に掛かるため、遺構の確認で既に床面が露出し、北西壁が削平されている状態であった。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は東西軸340.0cm、南北軸280.0cm、深さは20.0cmである。主軸方向はN-59°-Wを指す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。残存している壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に中世土坑の可能性が高い。

第7節 堀・溝跡

SD01 (第112・113図)

調査B区南東部、12-I・J・K区に位置する。南北方向に走行する区画溝である。調査区の東端に沿うため、溝東側の大半は未調査区域に延びており、西縁辺のみ確認されている。12-K区の中央部から北東方向(N-29°-E)へ直線的に走行する。断面形は逆台形状を呈するものと推定され、確認面では60°～70°前後の急外傾で立ち上がる。確認された規模は最大幅52.0cm、底面幅41.0～48.0cm、最大の深さ24.2cm、検出長は17.49mを測る。方向性からみて北部のSD03との関連が指摘される。

出土遺物として土師質土器が検出されている。1は皿で、約1/4を残存している。口径14.2cm、器高3.2cm、底径8.0cmを測り、ロクロ整形で底部回転系切りである。13世紀に比定される。2は内耳鍋の底部破片である。底径は18.5cmを測る。ヘラナデ整形されている。15世紀から16世紀に比定される。本跡の時期は15世紀から16世紀と推定される。

SD02 (第114・115図)

調査B区南東部、12・13-I・J・K区に位置する。南北方向に走行する区画溝である。北部でSI02を切って構築されており、ほぼSD01と並走して走行する。12-J区南西隅から北東方向(N-40°-E)へ直線的に延び、13-I区からほぼ直角(N-29°-E)に東へ折れ曲がる。断面形は浅いU字状溝で、検出された規模は幅65.0～109.0m、

底面幅31.0～91.0cm、深さ1.0～27.8cm、検出長は18.70mを測る。

出土遺物として瓦質土器が出土している。1は瓦質土器の壺甕類の底部破片である。ヘラナデ整形が施されている。中世である。本跡の構築時期は中世であろう。

SD03 (第116～122図)

調査A・B区東部、13-G・H・I、14-C・D・E・F・G、15-C・D・E・F、16-B・C区に位置する。調査B区では東端に沿うため、堀の東側は未調査区域に入り、西縁辺のみ確認されている(第121図)。また調査A区では北端が未調査区域に延びている。堀の形態が明瞭なのは調査A区であり、ここはまた中世の遺構が集中しているところでもある(第116図)。高位部である調査B区では直線的に北東方向(N-23°-E)へ延びて行く。さらに低位部の調査A区ではほぼ中央部で楕円に屈曲する。まず北東方向(N-23°-E)から北西方向(N-56°-W)へ折れ曲がり、11m先から直角に北東方向(N-23°-E)へ向きを変え、さらに9m先から直角に南東方向(N-116°-E)へ屈曲して、10m先から本来の北東方向(N-23°-E)の走行に戻る。北部は一旦間欠する部分もみられるが、本来は接続されていたものと思われる。断面形は箱葉研堀の逆台形状を呈し、覆土はレンズ状を呈する自然堆積である。規模は幅85.0～470.0cm、底面幅51.0～113.0cm、深さcm、検出長は18.0～221.5cmを測る。

出土遺物として、土師質土器、陶器、土製品が検出された。1～4は土師質土器である。1は小皿で、口唇部にスス状の油煙痕が残存している。灯明皿として使用されたものである。口径8.0cm、器高1.6cm、底径6.0cmを測り、ロクロ整形で底部回転系切りである。13世紀に比定される。2は皿の底部破片である。ロクロ整形で見込にナデ整形がみられる。15世紀から16世紀である。3は壺甕類の底部破片である。底径は20cmを測る。15世紀から16世紀である。4も壺甕類の胴部破片である。内面に煙しを掛けている。時期は不明である。5～7は常滑焼甕の破片である。5は口縁部破片で口縁端部の折り返し幅狭く2cm前後で、口径は46.0cmを測る。6型式(1250～1300)に比定される。8も常滑焼甕の胴部破片である。9は管状土錘である。約半分を欠損している。径3.93cm、孔径1.40cm、高さ4.55cm、重さ69.5gを測る。円筒状を呈し、上下面は平坦で、側面は粗い仕上げである。本跡の構築時期は中世である。

SD04 (第116・117・119・123図)

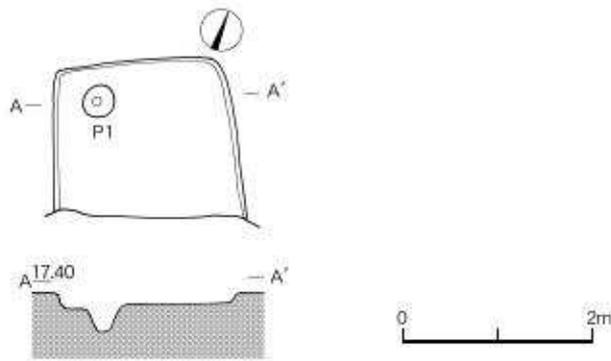
調査A区中央東部、15-D・E区に位置する。南北方向に走行する短い区画堀である。SD03およびSD05と重複しており、SD05を切って、SD03に切られている。本跡は埋め戻しされており、新期のSD03によって走行を改変された痕跡と判断した。したがって、埋め戻し以前はSD03と直行するように連結していたものと推定される。15-E区の北端から15-D区の北端に直線的に走行する(N-29°-E)。断面形は箱葉研堀の逆台形状を呈し、規模は幅121.0～350.0cm、底面幅85.0～164.0cm、深さ37.5～118.0cm、検出長は11.20mを測る。

遺物は土師器と灰釉陶器が覆土中より出土している。1は土師器碗である。ロクロ整形で、底部は回転ヘラ切りである。内外面ともヘラミガキが施され、内面は黒色処理である。2は灰釉陶器の皿である。ロクロ整形で底部は回転系切りで、見込に軸が掛かっている。時期は不明である。本跡の構築時期は切りあい関係からみて中世である。

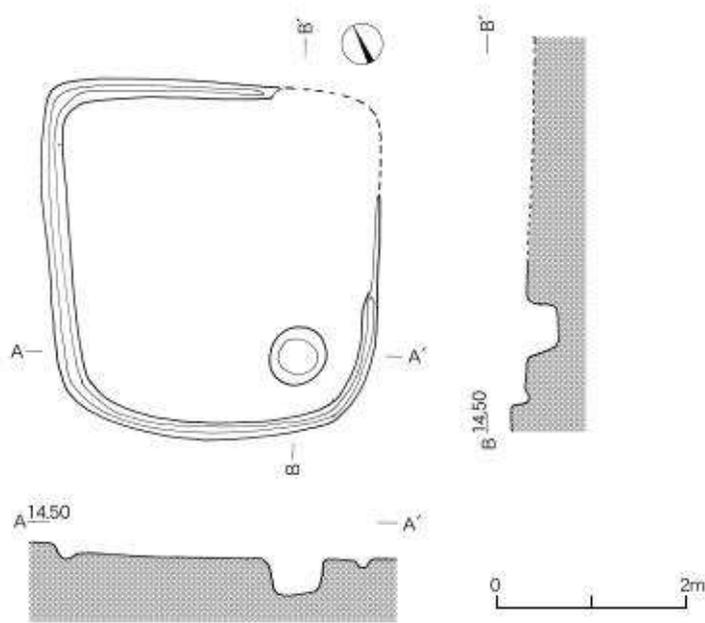
SD05 (第116・119・124図)

調査A区東部、15-D・E区に位置する。東西方向に走行する区画堀である。東部が未調査区域に延びており、西端でSD04と連結する。SD04と同様に埋め戻しの堀で、SD04に切られている。走行方向はN-65°-Wである。断面形は箱葉研堀の逆台形状を呈し、規模は幅181.0～219.0cm、底面幅61.0～83.0cm、深さ103.0～108.0cm、検出長は5.23mを測る。

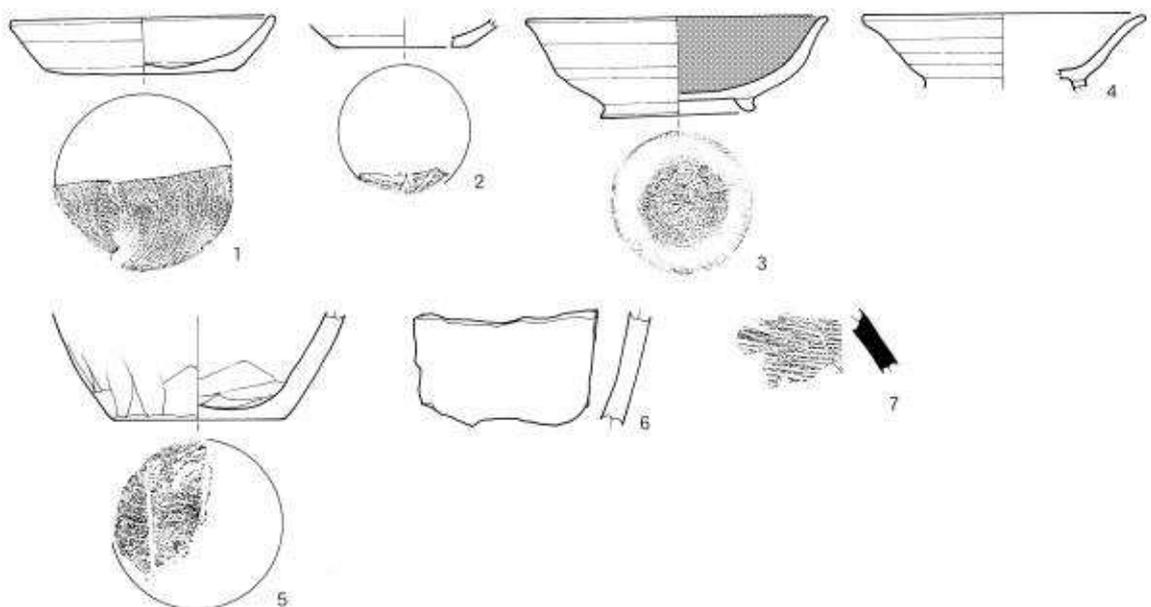
遺物は土師質土器小皿と鉄製品が覆土上面から出土している。1は土師質土器小皿で、口縁部端の一部が欠損するものの、ほぼ完形品である。口径7.9cm、器高3.0cm、底径5.4cmを測り、ロクロ整形で底部回転系切りである。13世紀から14世紀に比定される。2は鉄棒である。長さ15.23cm、幅5.73cm、重さ19.5gを測る。直線的に延びる鉄棒で、断面は方形である。本跡の構築時期は中世である。



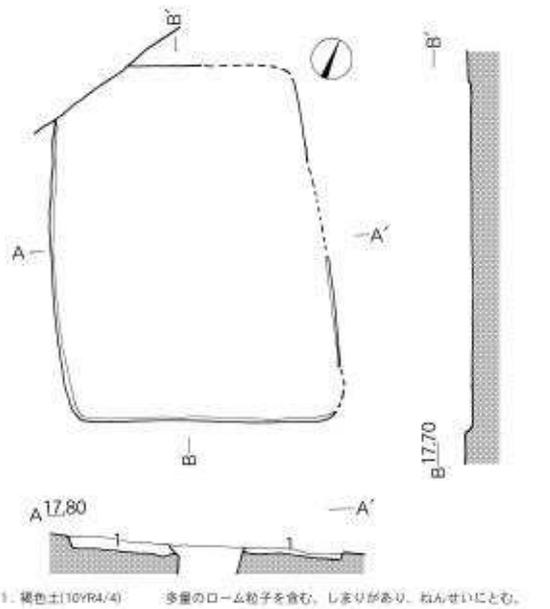
第106図 SX07実測図



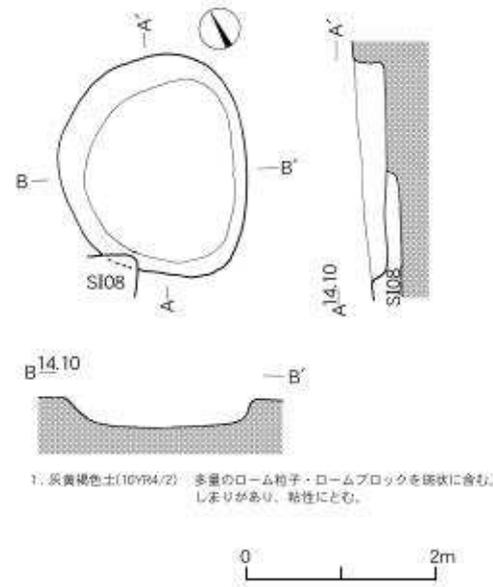
第107図 SX08実測図



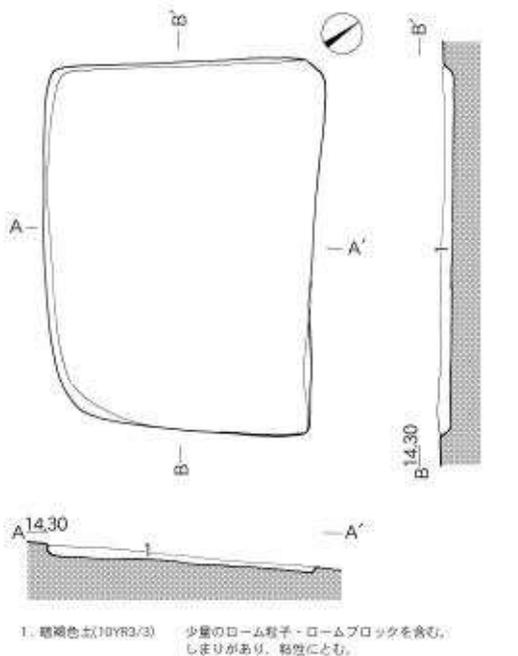
第108図 SX08出土遺物



第109図 SX09実測図



第110図 SX10実測図



第111図 SX11実測図

SD06 (第125・126図)

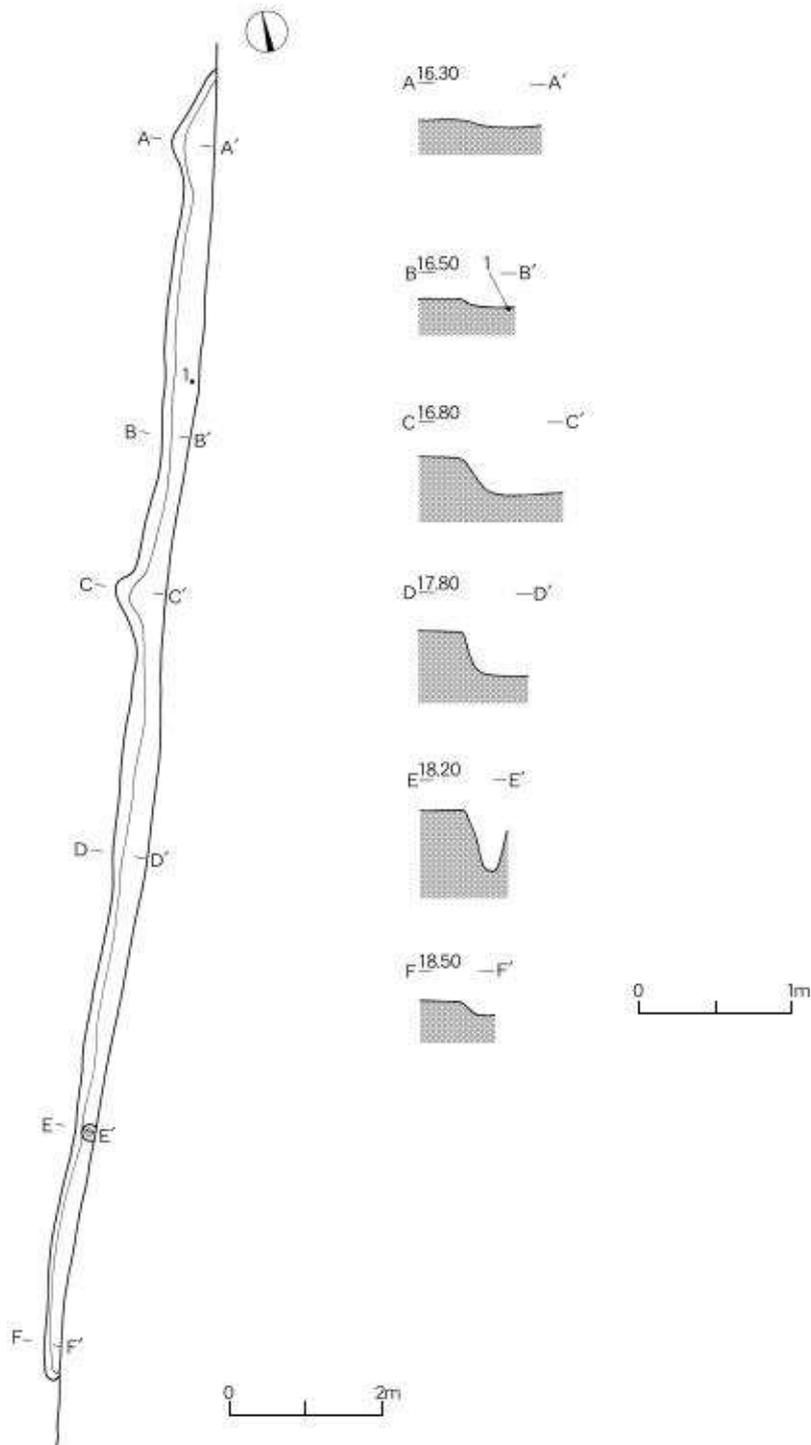
調査A区北西端部、14-A区に位置する。東西方向に走行する区画堀で、両端はそれぞれ未調査区域に延びている。直線的な堀で、その走行方位はN-71°-Wを指す。断面形は緩い逆台形を呈している。検出された規模は最大幅89.0cm、底面幅62.0~71.0cm、深さ40.0~42.0cm、検出長は10.07mを測る。

出土遺物として陶器が覆土中より検出された。1は渥美(窯)焼の甕である。口縁部破片で大きく口縁が外反する。2・3は常滑焼の甕で、胴部破片である。いずれも中世である。本跡の構築時期は中世である。

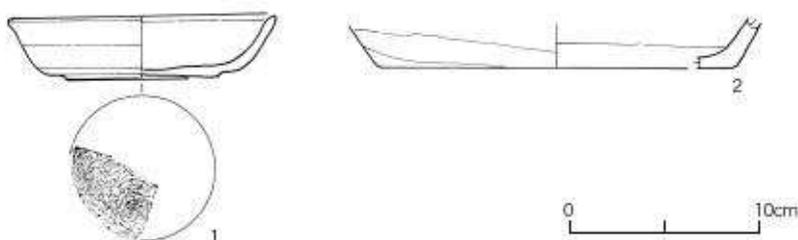
SD07 (第127図)

調査D区南西部、3-V区に位置する。くの字状に屈曲する区画溝である。北東-南西方向(N-35°-E)から、屈曲して南東-北西方向(N-55°-W)へ走行する。断面形は逆台形を呈し、規模は幅29.0~40.0cm、底面幅21.0~31.0cm、深さは16.0cm、検出長は4.98mを測る。

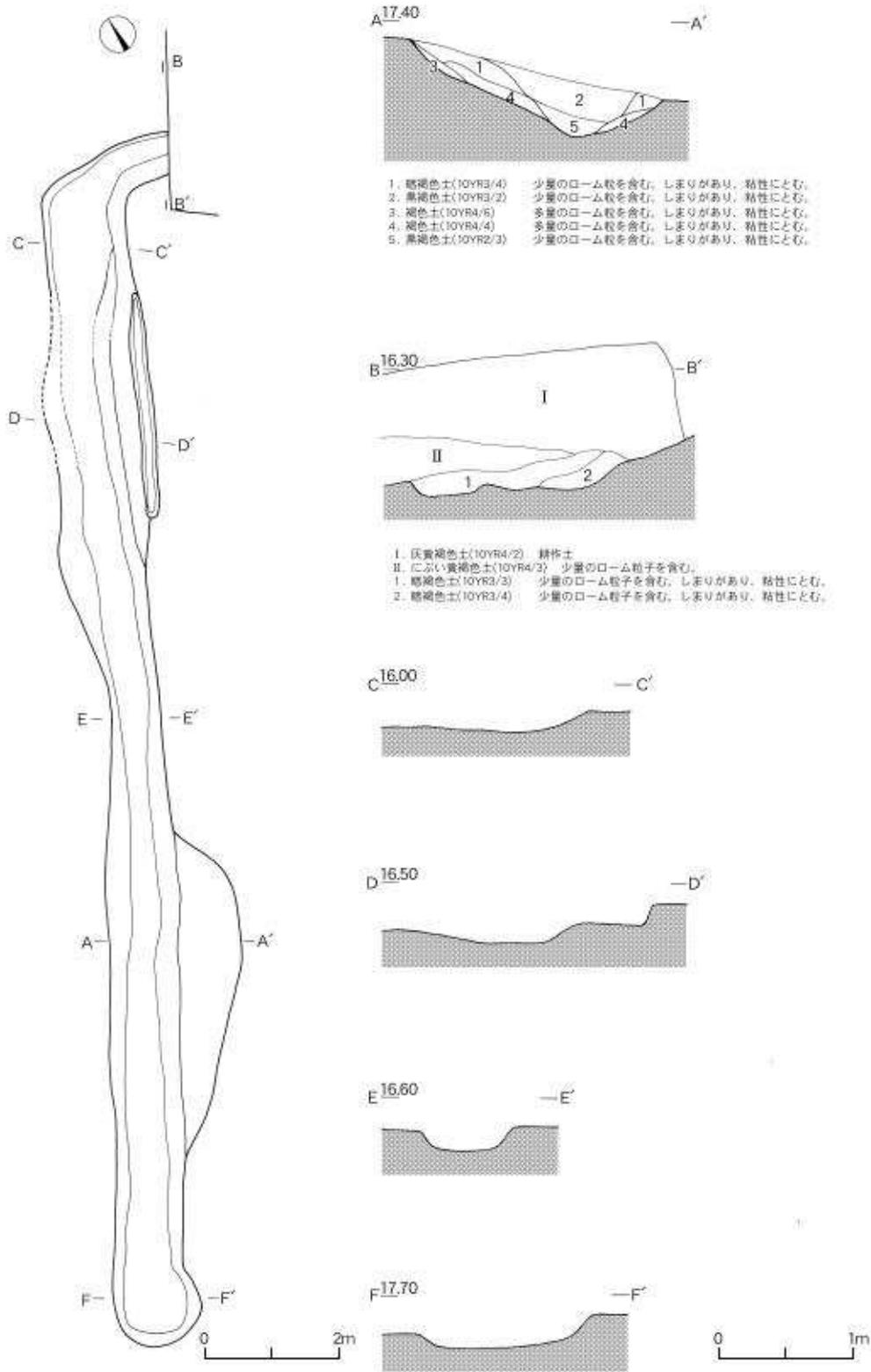
遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。本跡の構築時期は中世であろう。



第112図 SD01実測図



第113図 SD01出土遺物



第114図 SD02実測図



第115図 SD02出土遺物

SD08 (第128図)

調査D区南西部、3-V区に位置する。SD08と南へ3m離れて並行している。東西方向の区画溝である。走行方位はN-65°-Wを指す。断面形は台形を呈し、規模は幅38.0~50.0cm、底面幅28.0~40.0cm、深さ14.0~28.0cm、検出長は2.08mを測る。

遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。本跡の構築時期は中世であろう。

SD09 (第129図)

調査D区南部、4-U・V、5-V区に位置する。ほぼ谷底筋に沿って走行する直行溝で、高位部の北西方向から低位部の南東方向に走る。走行方位はN-40°-Wを指す。断面形は台形を呈し、規模は幅20.0~51.0cm、底面幅8.0~20.0cm、深さ23.0cm、検出長は16.52mを測る。

遺物は土師器細片が出土したのみで、掲載遺物はない。本跡の構築時期は中世であろう。

第8節 土坑

SK01 (第130・132図)

調査B区北部、13-G区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸133.0cm、短軸131.0cm、深さ18.3cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は緩い外傾状に立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆積である。

出土遺物として土師器杯の体部破片である(第132図1)。1はロクロ整形で、二次底部面は回転ヘラケズリ、底部ヘラケズリである。内面ヘラミガキの後、黒色処理が施されている。9世紀後半に比定され、本跡の時期も9世紀後半と考えられる。

SK02 (第130図)

調査B区北部、12-G区に位置する。平面形は南北に長い楕円形を呈し、規模は長軸95.0cm、短軸80.0cm、深さ6.9cmである。長軸方向はN-29°-Eを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に古代の土坑の可能性が高い。

SK03 (第130図)

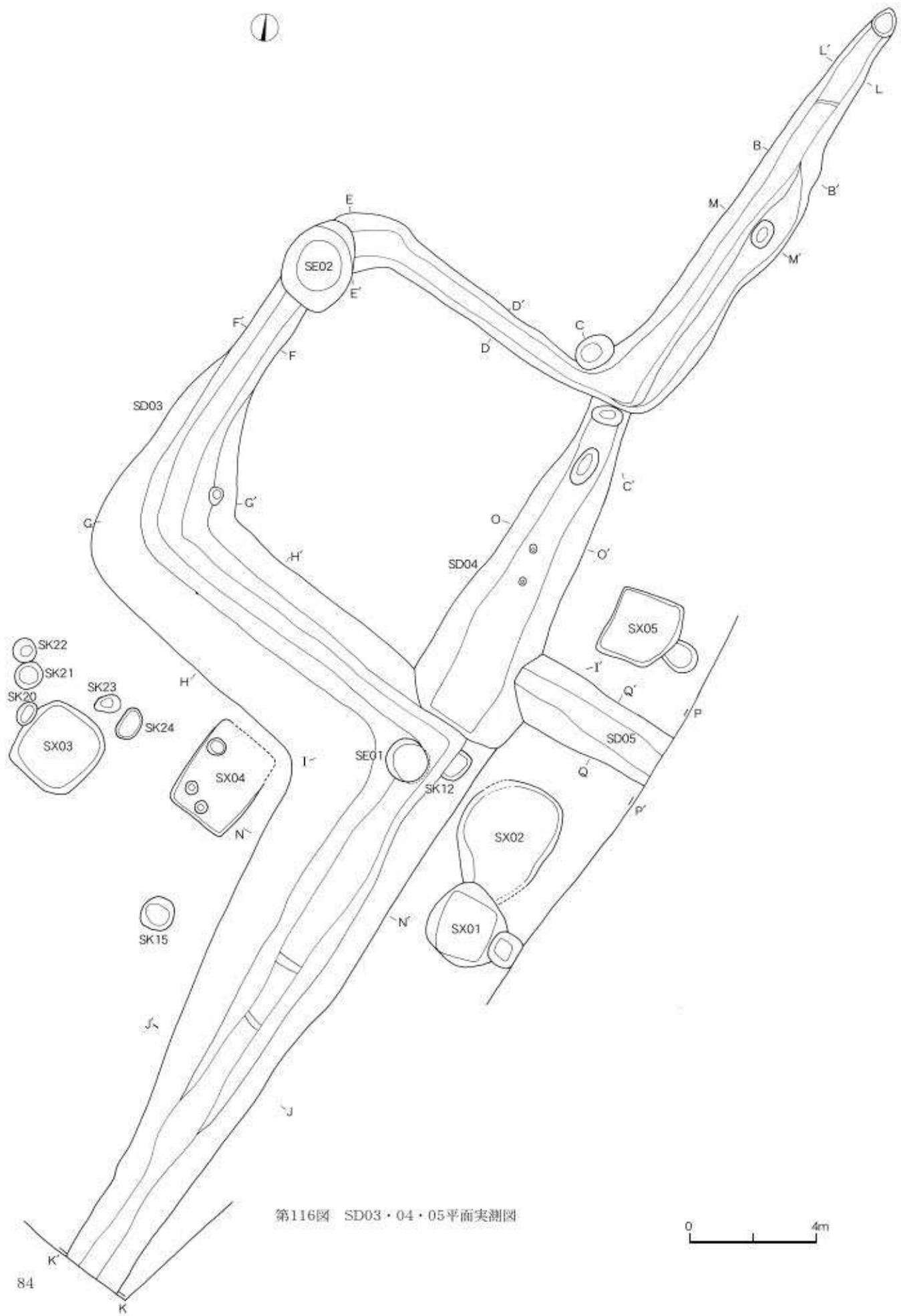
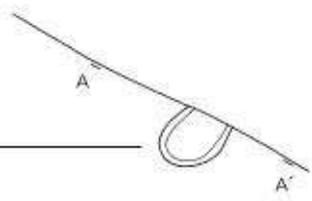
調査B区北部、13-G・H区に位置する。SX08を切って構築している。平面形は東西に長い楕円形で、規模は長軸105.0cm、短軸81.0cm、深さ31.8cmである。長軸方向はN-84°-Wを示す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる逆台形を呈する。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に古代の土坑の可能性が高い。

SK12 (第130図)

調査A区東部、15-E区に位置する。西側半分以上はSD03と重複し、本跡が新期である。確認された平面形は隅丸長方形と推定できる。規模は、東西軸112.0cm、南北軸212.0cm、深さ27.0cmである。長軸方向はN-29°-Eを示す。底面は平坦である。北部床面から人骨である骨粉および歯が出土した。骨粉は周囲から歯が検出されていることから頭蓋骨と推定される。歯の遺存状態も不良で鑑定には耐えられない状況であった。ここでは少なくとも墓であることのみ判明した。なお、土坑内には棺桶などの建造物の痕跡が確認できないことから直埋葬と推定される。頭部を北部に置く、側臥屈葬であろう。人骨以外の遺物は検出されなかったが、中世に比定できる。

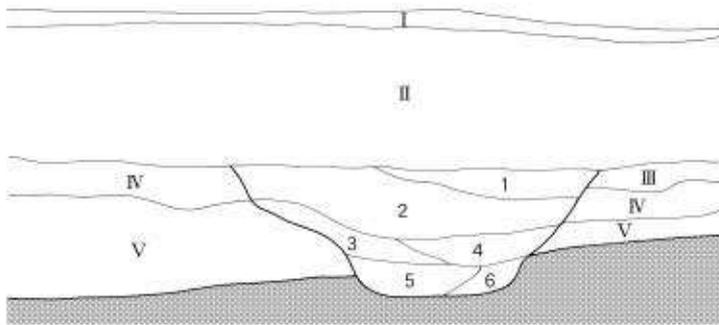
SK15 (第130図)

調査A区南部、14-E・F区に位置する。平面形は円形で、その規模は長軸106.0cm、短軸103cm、深さ



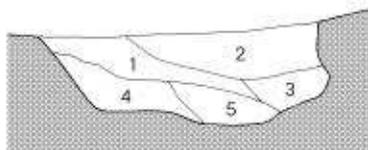
第116圖 SD03・04・05平面実測圖

A 9.30 SD03 —A'



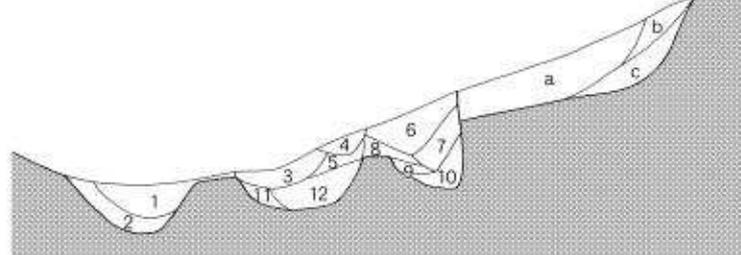
- I. 灰黄褐色土(10YR5/2) 耕作土
- II. 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量のローム粒子を含む。
- III. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 少量のローム粒子を含む。
- IV. 褐色土(7.5YR4/4) 少量のローム粒子を含む。
- V. 黒色土(7.5YR2/1) 少量のローム粒子を含む。
- 1. 暗褐色土(10YR3/4) 少量のローム粒子、微量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 2. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子、微量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 3. 黒褐色土(10YR2/3) 少量のローム粒子、微量の粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 4. 黒褐色土(10YR2/2) 微量のローム粒子・ロームブロック・粘土粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 5. 黒褐色土(10YR2/2) 少量のローム粒子、微量の粘土粒・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 6. 黒褐色土(10YR3/1) 少量のローム粒子、微量の粘土粒・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。

B 8.10 SD03 —B'



- 1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 多量の黄褐色凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 2. 褐色土(10YR4/1) 少量の黄褐色凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 3. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 多量の黄褐色凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 4. 暗褐色土(10YR3/3) 少量の黄褐色凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 5. 暗褐色土(10YR3/4) 多量の黄褐色凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

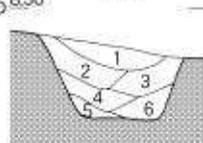
C 9.20 SD03 SD04 —C'



- SD03
- 1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 2. 褐色土(10YR4/1) 微量の凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 3. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 4. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 多量の凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 5. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 6. 暗褐色土(10YR3/2) 少量の凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 7. 黒褐色土(10YR2/3) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 8. 褐色土(10YR4/5) 多量のローム粒子、少量の凝灰質泥岩粒を球状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 9. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 多量の凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 10. 黒褐色土(10YR3/2) 少量の凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 11. 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量のローム粒子を球状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - 12. 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量のローム粒子・凝灰質泥岩粒を球状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。

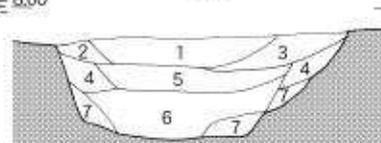
- SD04
- a. 黒褐色土(10YR3/1) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - b. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
 - c. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。

D 8.30 SD03 —D'



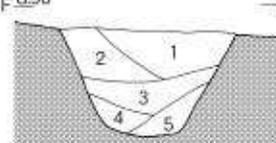
- 1. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 2. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 3. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子・少量の凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 4. 黒褐色土(10YR3/1) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 5. 暗褐色土(10YR3/4) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 6. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

E 8.60 SD03 —E'



- 1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 微量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 3. 明黄褐色土(10YR5/5) 多量の凝灰質泥岩粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 4. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 5. 暗褐色土(10YR3/4) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 6. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 7. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。

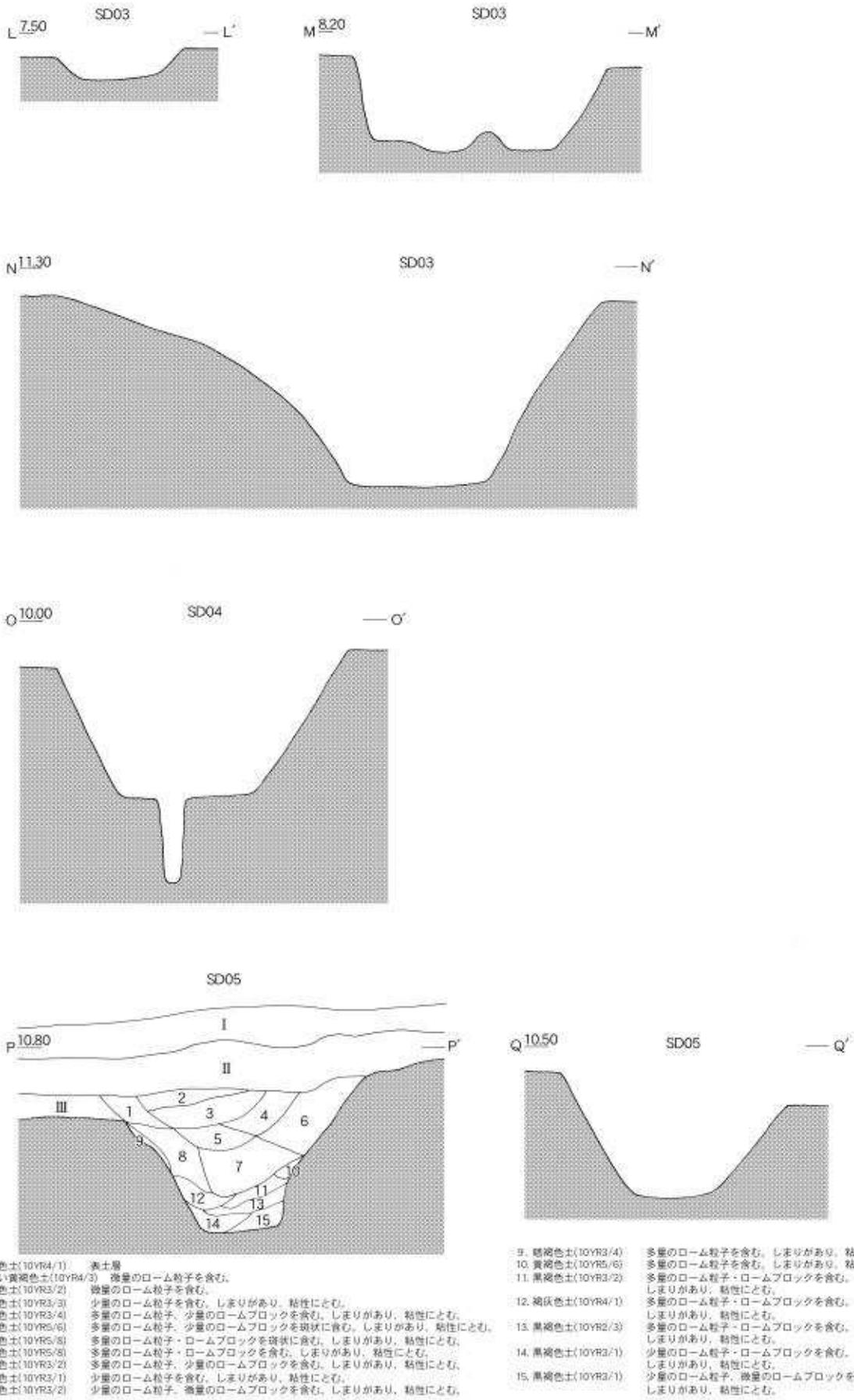
F 8.90 SD03 —F'



- 1. 黄褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 2. 黄褐色土(10YR3/1) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 3. 暗褐色土(10YR3/3) 多量のローム粒子・少量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 4. 暗褐色土(10YR3/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
- 5. 褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

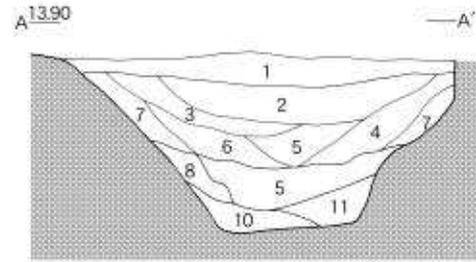
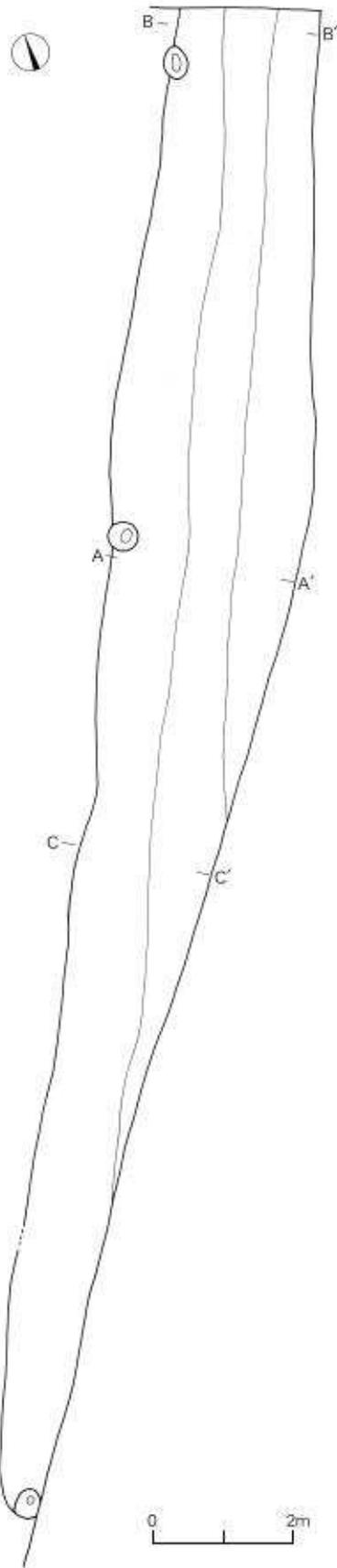
第117図 SD03・04断面実測図



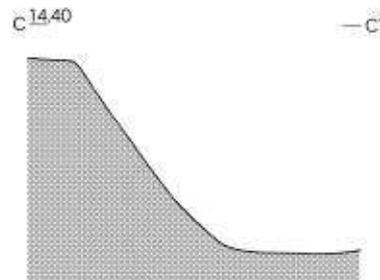
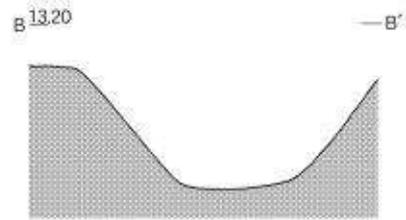


第120図 SD03・04・05断面実測図



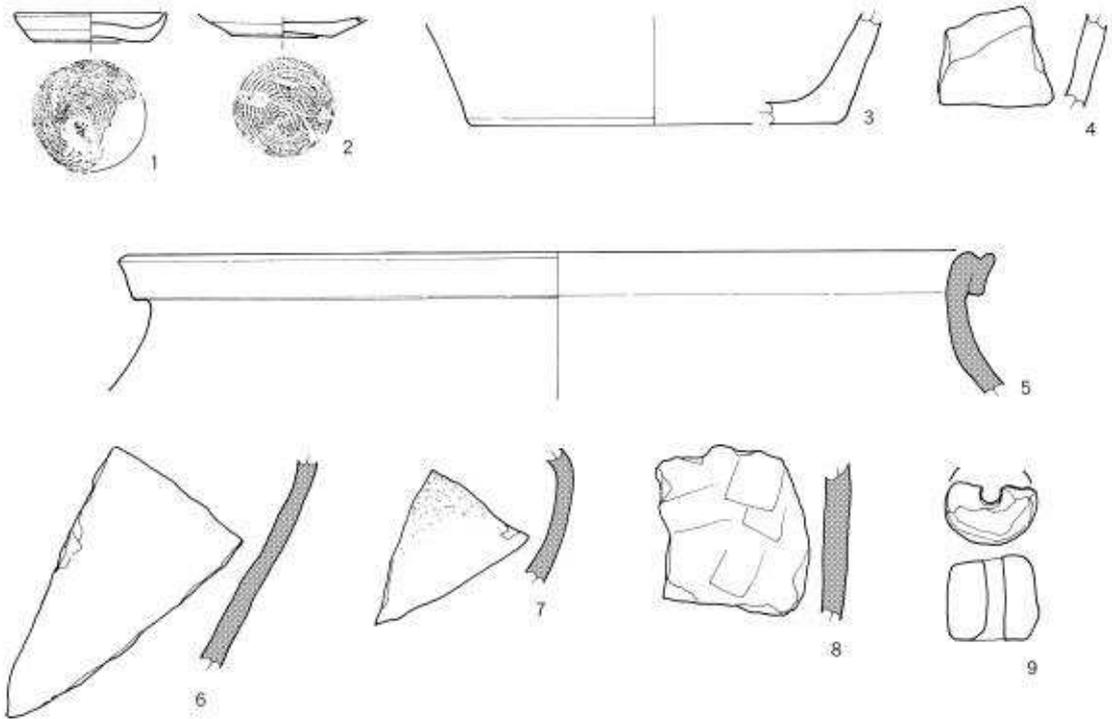


- | | |
|-------------------|-------------------------------------|
| 1. 暗褐色土(10YR3/3) | 少量のローム粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 2. 暗褐色土(10YR3/4) | 少量のローム粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 3. 黒褐色土(10YR3/2) | 少量のローム粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 4. 暗褐色土(10YR3/3) | 少量のローム粒・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 5. 暗褐色土(10YR3/4) | 少量のローム粒。微量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 6. 褐色土(10YR4/4) | 少量のローム粒・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 7. 暗褐色土(10YR3/3) | 多量のローム粒・少量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 8. 褐色土(10YR4/4) | 少量のローム粒を含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 9. 褐色土(10YR4/4) | 少量のローム粒。微量のロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。 |
| 10. 暗褐色土(10YR3/4) | 多量のローム粒を含む。 |
| 11. 褐色土(10YR4/4) | 多量のローム粒を含む。 |



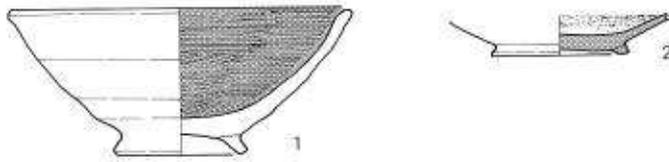
第121図 SD03 (B区) 実測図





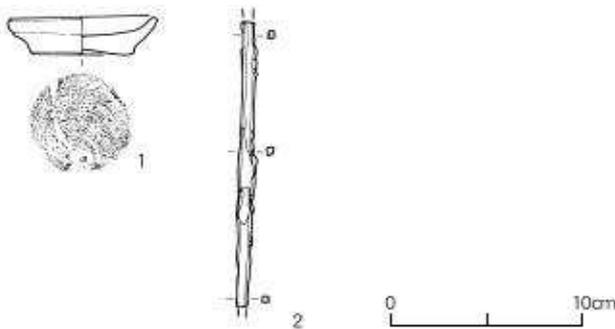
第122図 SD03出土遺物

0 10cm



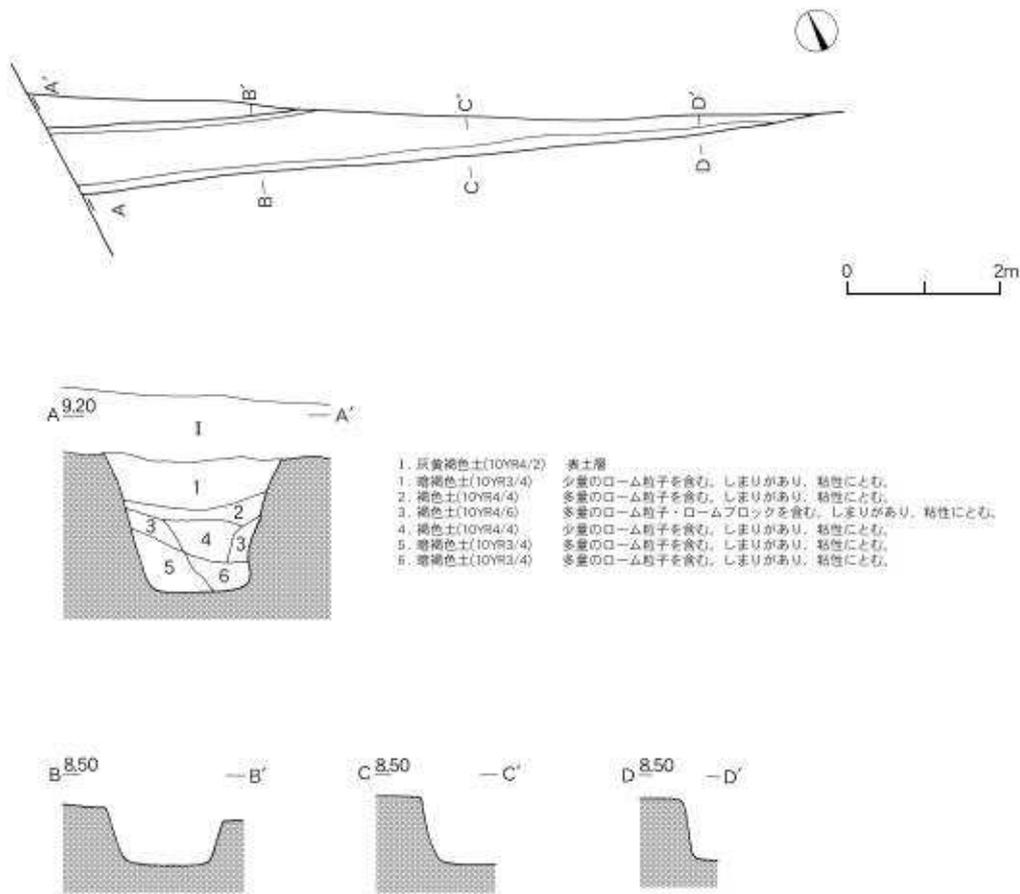
第123図 SD04出土遺物

0 10cm



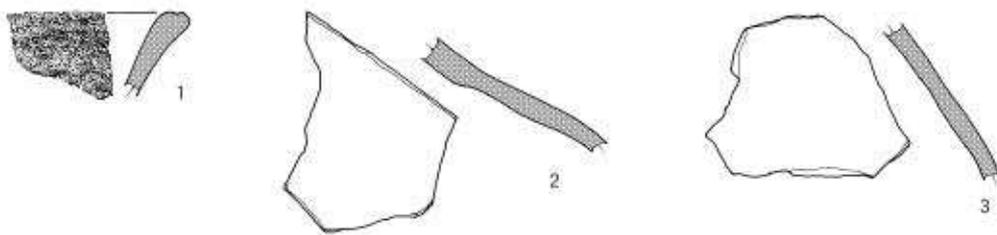
第124図 SD05出土遺物

0 10cm



第125図 SD06実測図

0 1m



第126図 SD06出土遺物

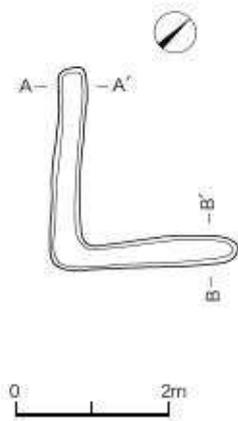
0 10cm

66.0cmである。底面は鍋底状を呈し、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は垂直気味に立ち上がる。

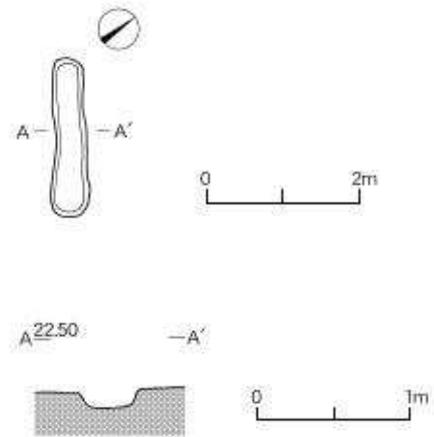
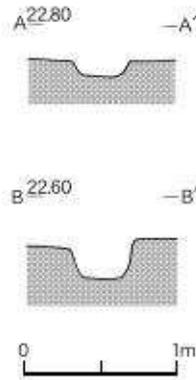
出土遺物として土師器杯の体部破片である(第132図2)。2はロクロ整形で、二次底部面は体部回転ヘラケズリである。内面ヘラミガキを施している。9世紀に比定され、本跡の時期も9世紀と考えられる。

SK20 (第130図)

調査A区南部、13-E、14-E区に位置する。南東部でSX03を切って構築している。平面形は南北に長い楕円



第127図 SD07実測図



第128図 SD08実測図

形を呈し、規模は長軸77.0cm、短軸57.0cm、深さ20.6cmである。長軸方向はN - 30° - Eを指す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土と褐色土の自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に中世土坑の可能性が高い。

SK21 (第131図)

調査A区南部、13 - E区に位置する。SI13に切られている。平面形は円形を呈し、検出された規模は長軸78.0cm、短軸57.0cm、深さ23.0cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は黒褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、切り合い関係や覆土の状況などから9世紀代の可能性が高い。

SK22 (第131・132図)

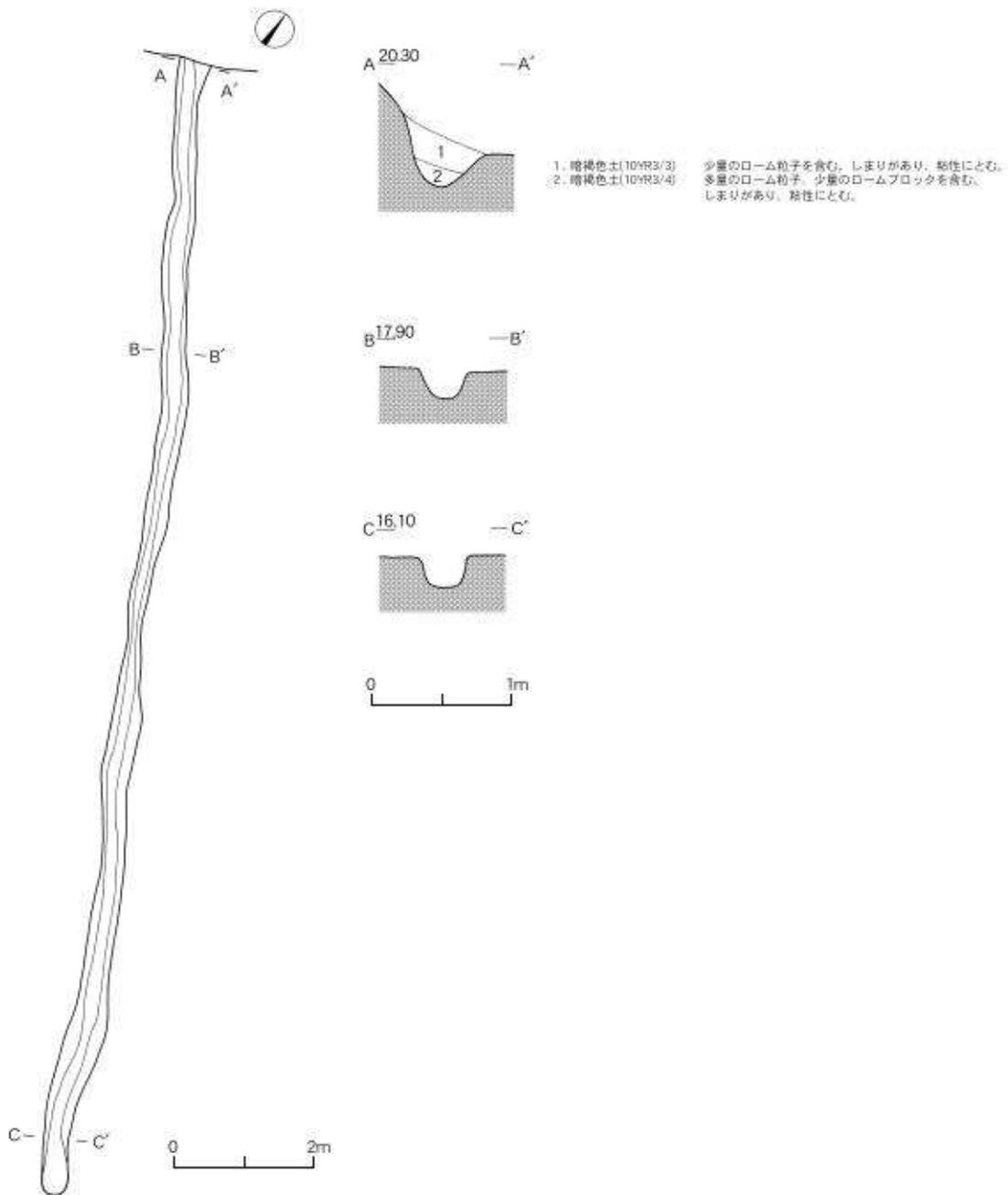
調査A区南部、13 - E区に位置する。SI13に切られている。平面形は円形を呈し、検出された規模は長軸75.0cm、短軸43.0cm、深さ31.0cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物として土師器杯の体部破片である(第132図3)。ロクロ整形で、内面ヘラミガキの後、黒色処理が施されている。9世紀代に比定され、本跡の時期も9世紀と考えられる。

SK23 (第131・132図)

調査A区南部、14 - E区に位置する。SI13に切られている。平面形は東西に長い楕円形を呈する。規模は長軸77.0cm、短軸58.0cm、深さ30.5cmである。長軸方向はN - 80° - Eを指す。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積である。を示す。出土遺物として土師器碗の底部破片である(第132図4)。ロクロ整形である。9世紀に比定され、本跡の時期も9世紀と考えられる。

SK24 (第131図)

調査A区南部、14 - E区に位置する。西部で攪乱を受けている。平面形は南北長い楕円形を呈する。規模は長軸167.0cm、短軸158cm、深さ25.0cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層で、自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の

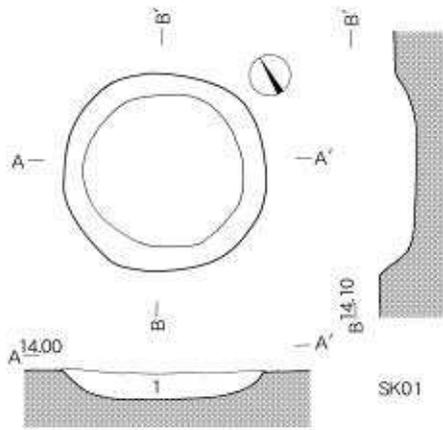


第129図 SD09実測図

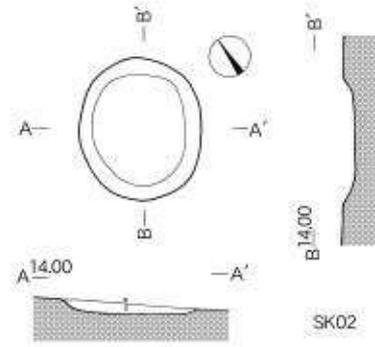
状況や形態的に中世土坑の可能性が高い。

SK26 (第131図)

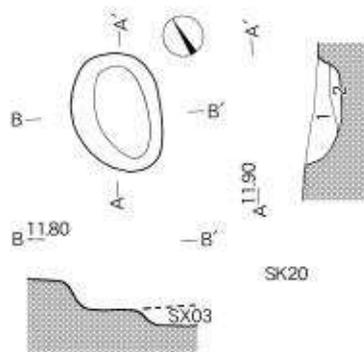
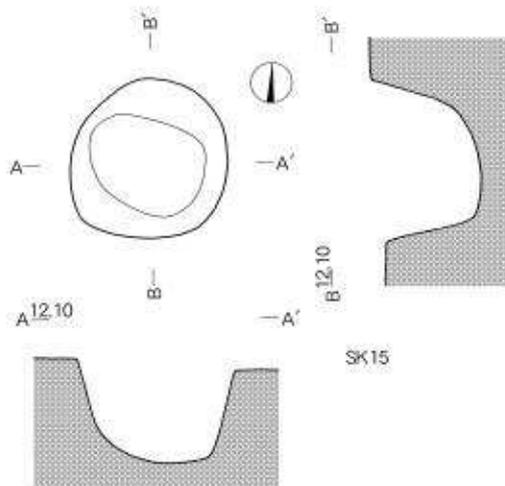
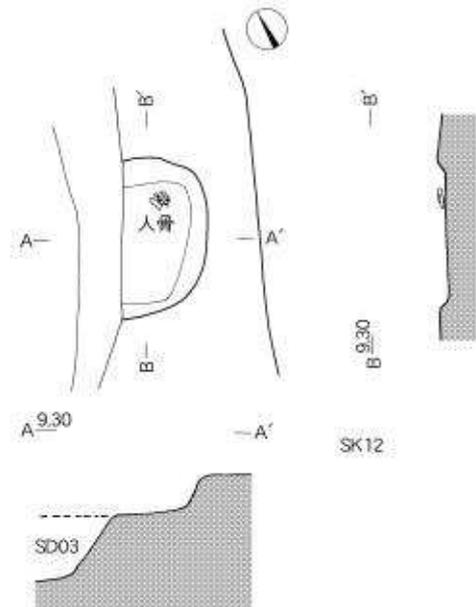
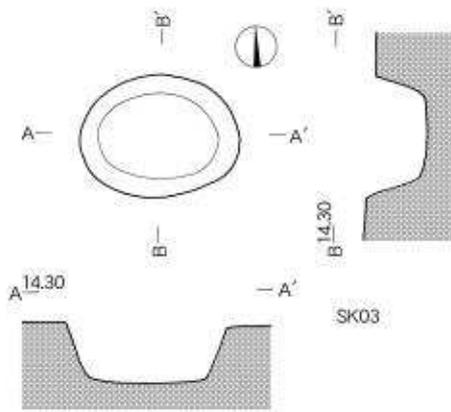
調査D区南部、4-V区に位置する。平面形は方形を呈し、規模は長軸88.0cm、短軸87.0cm、深さ22.1cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土と明黄褐色土の自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に中世土坑の可能性が高い。



1. 黒褐色土(10YR3/1) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。



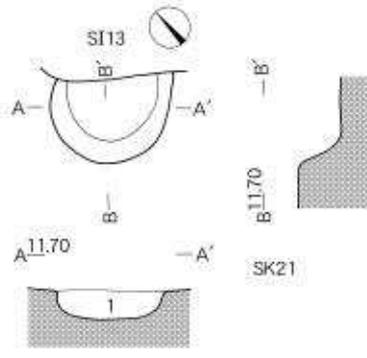
1. 暗褐色土(10YR3/3) 少量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。



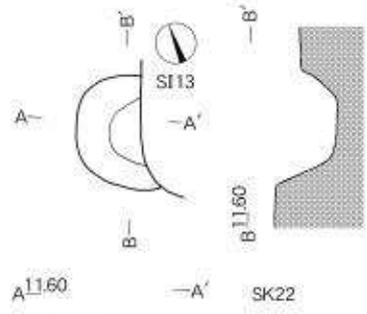
1. 褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 暗褐色土(10YR3/4) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

第130図 SK01～03・12・15・20実測図

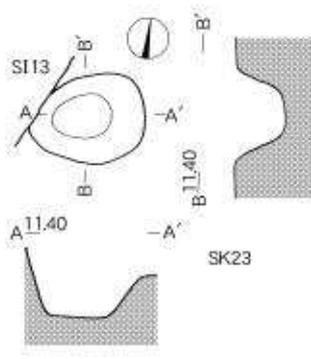




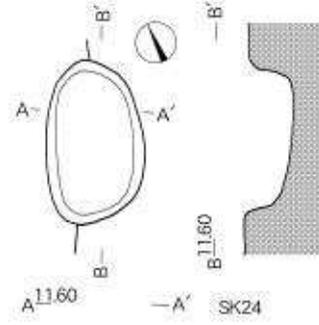
1. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。



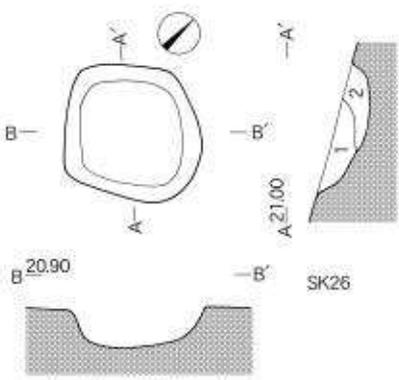
1. 黒褐色土(10YR3/2) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。



SK23

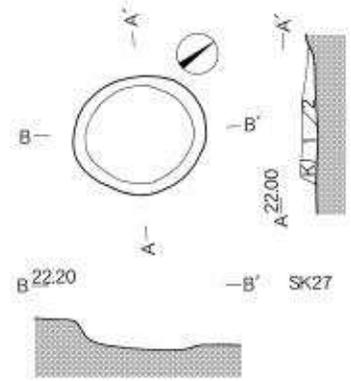


1. 暗褐色土(10YR3/4) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。



SK26

1. 褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒子・ロームブロックを含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 明黄褐色土(10YR7/6) 少量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。

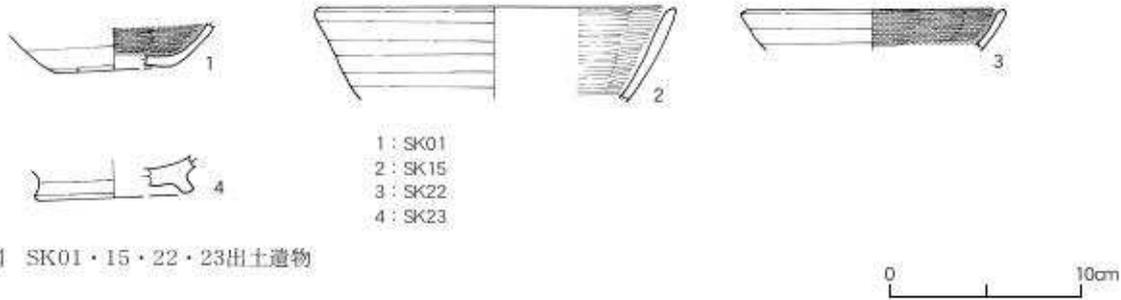


SK27

1. 褐色土(10YR3/4) 多量のローム粒子を含む。しまりがあり、粘性にとむ。
2. 褐色土(10YR4/4) 多量のローム粒子を斑状に含む。しまりがあり、粘性にとむ。

第131図 SK21~24・26・27実測図





第132図 SK01・15・22・23出土遺物

SK27 (第131図)

調査D区南西部、4-V区に位置する。平面形は円形を呈し、規模は長軸86.0cm、短軸77.0cm、深さ19.3cmである。底面は平坦であるが、硬化面や踏み固めた痕跡は認められない。壁面は外傾して立ち上がる。覆土は褐色土の自然堆積である。出土遺物がなく、明瞭ではないが、覆土の状況や形態的に中世土坑の可能性が高い。

第9節 調査A区のトレンチ調査 (第6・134図)

調査A区は、調査区の北側にあたる。当該地では古墳時代や古代の竪穴住居跡、中世の堀跡、掘立柱建物跡、地下式坑、方形竪穴状遺構などが検出されている。この西端中央部に幅0.5m、長さ12.4mの南北方向のトレンチを設定した。南から北へ傾斜する緩斜面地の溺れ谷調査のためである。表土層上部から約1.5mで黒褐色土が検出されたが、遺物は全く出土せず、遺物包含層ではないことが判明した。また下層からも遺構は検出できなかったため、溺れ谷における整地をはじめとする土地利用や文化層の確認はできなかった。

第10節 調査C区のトレンチ調査 (第7図)

調査C区は、8-Q・R区にあたる。南へ傾斜する斜面地で、ここに幅1.2m、長さ5mのL字状を呈するトレンチを設定して調査を実施した。遺構・遺物は検出できず、現代の攪乱層と溺れ谷と思われる自然地形を確認した。

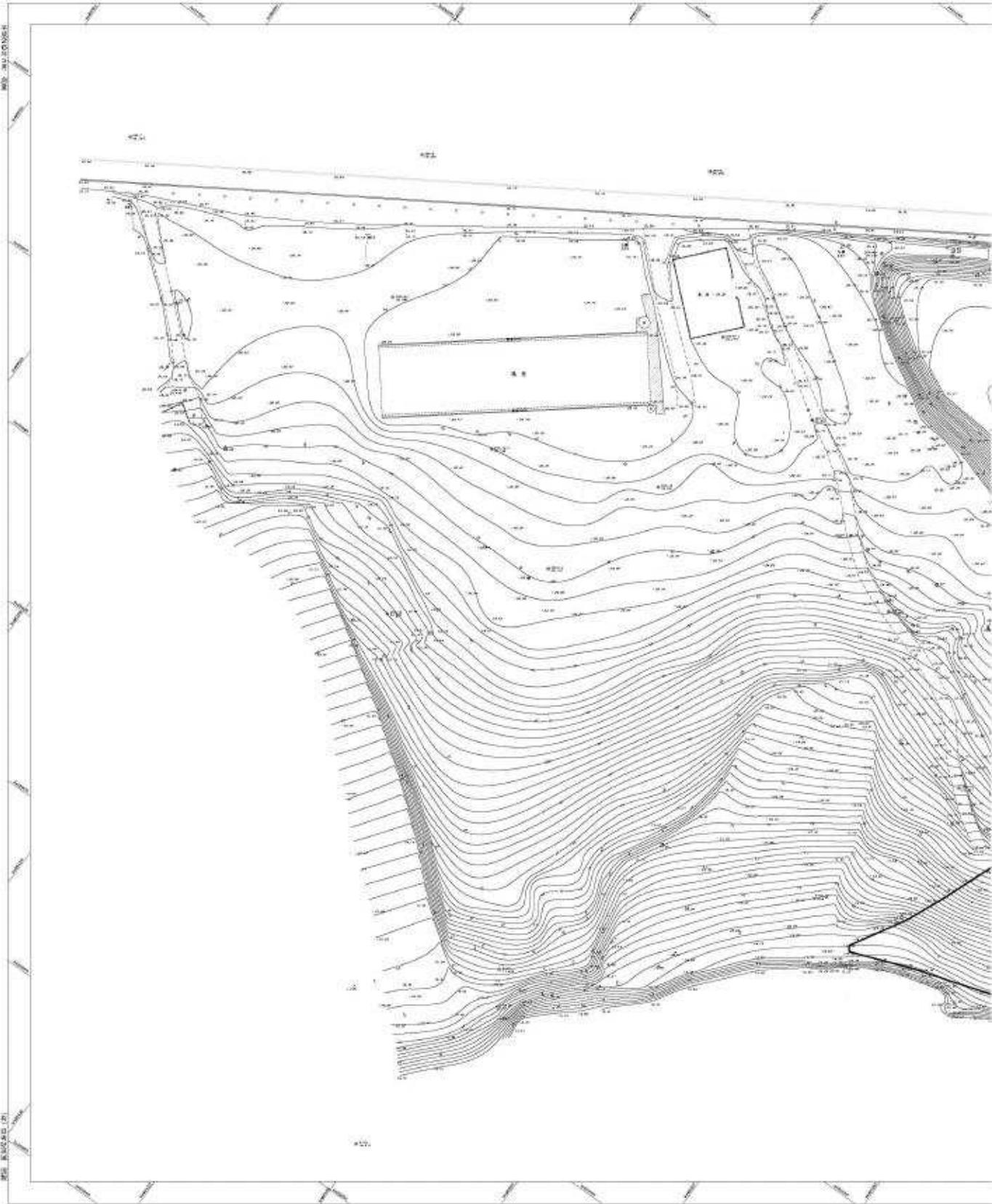
第11節 調査D区のトレンチ調査 (第7・133・135・136図)

調査D区のトレンチ調査は、調査区南西端に沿って幅1m、長さ19mのトレンチを設定した。谷部の調査で中世以前の整地面の検出が目的であった。しかし、南部でSD09が確認されただけで、上層の攪乱を除きいずれも自然堆積層であった。したがって、遺構・遺物は検出できなかった。

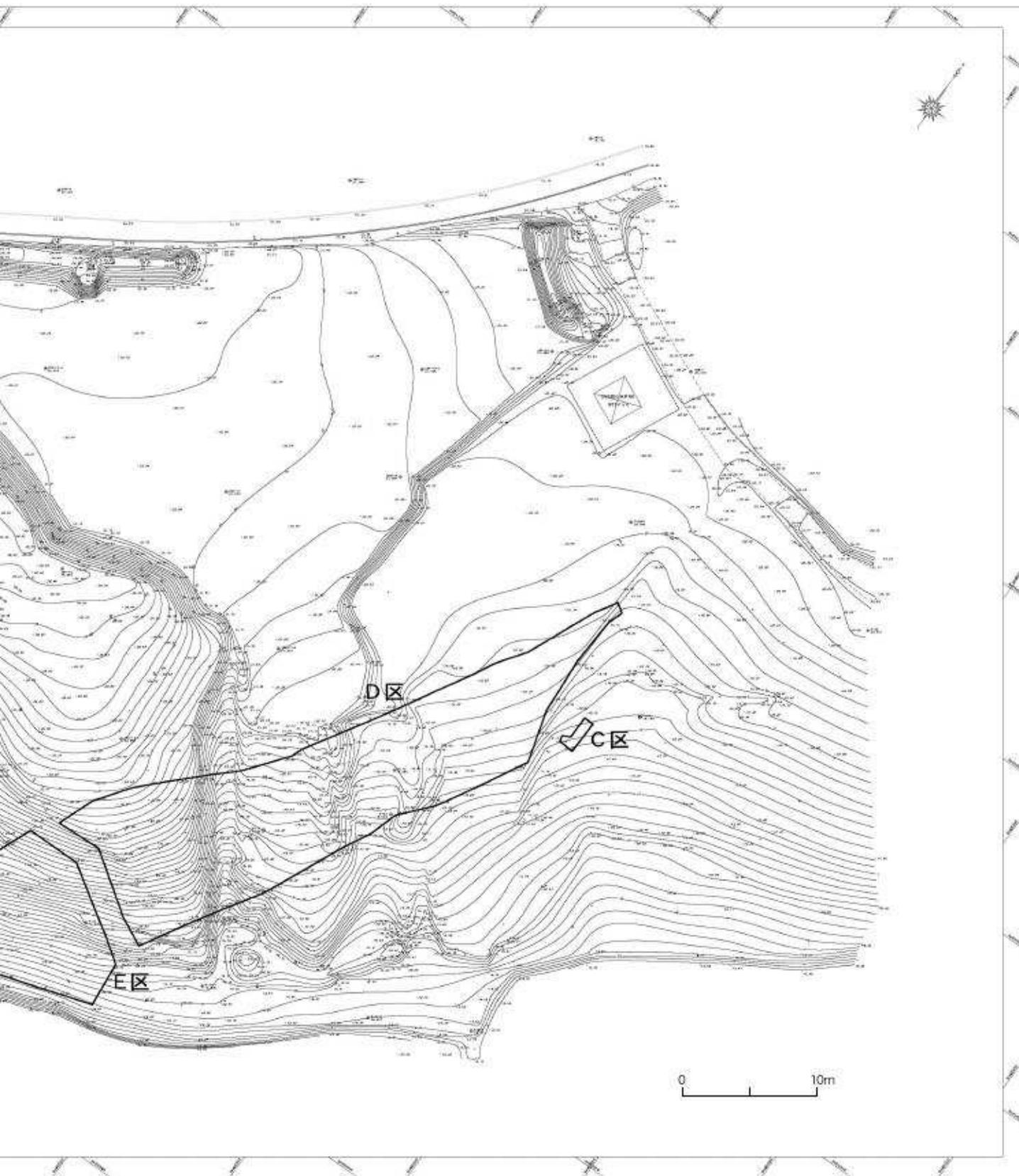
第12節 古墳時代以降の遺構外出土遺物 (第137図)

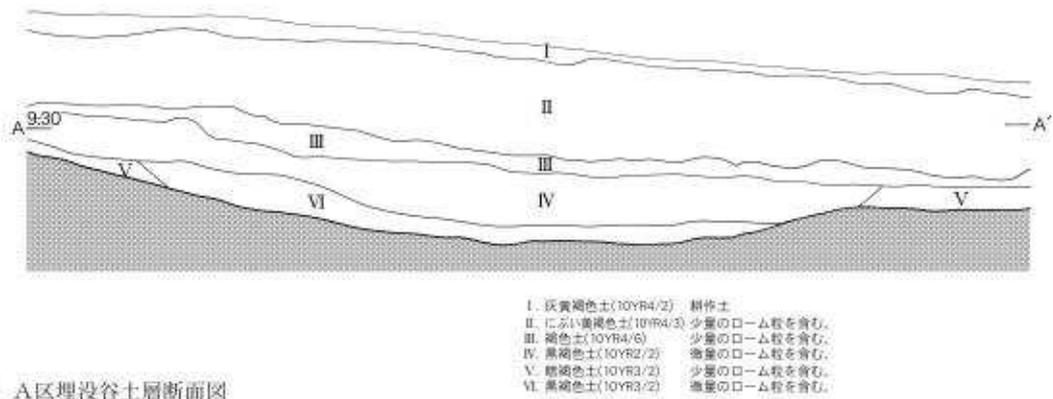
古墳時代以降の遺構外出土遺物として、土師器、須恵器、土師質土器、陶器が検出されており、まとめて掲載した。図示した資料は時期別とし、内訳は1～12は古墳時代前期、13～18は奈良・平安時代、19・20は中世遺物である。また出土位置はそれぞれ個別に括弧書きで示している。

1・2は高坏である。1は坏部で塊形を呈する。内外面にヘラミガキが施されている。2は脚部破片である。円形透し孔(径1.0cm)が上下2段に施されている。現存では上段1、下段2であるが、それぞれ3カ所の6カ所施されているものと推定される。また外面は赤彩である。3は器台の受け部である。坏形を呈し、内外面ともハケで、赤彩が施されている。4は口縁部が短く垂直気味に立ち上がり、体部が球形を呈する小型壺である。5・6は壺の頸部破片である。5はくの字状に外反する口縁部で、赤彩が施されている。6は頸部に刻みを有した粘土紐が巡る。7は埴の肩部破片である。ヘラナデ整形されている。8は底部破片である。9～12は甕である。9は口縁部がくの字状に外反する。内外面ともハケである。10も口縁部がくの字状に外反する。11は頸部破片で、内外面はハケ

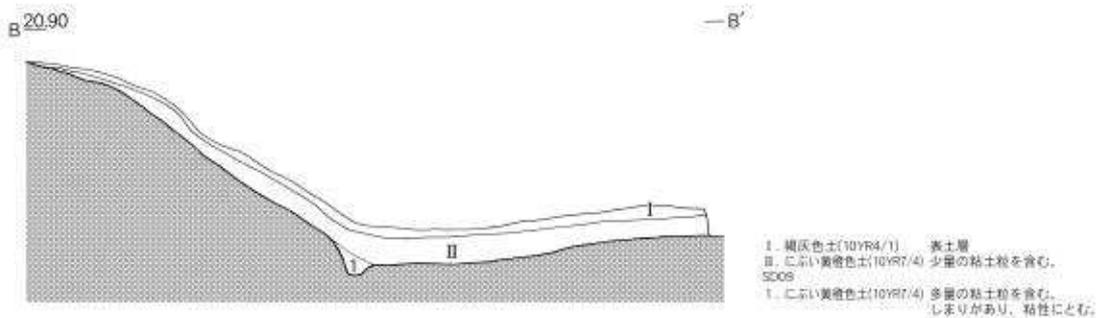


第133圖 弥陀ノ台遺跡南西部地形測量圖





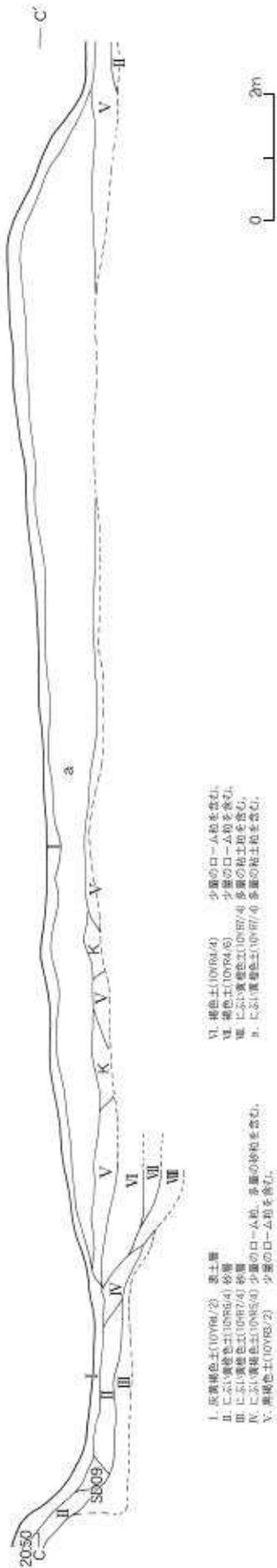
第134図 A区埋没谷土層断面図



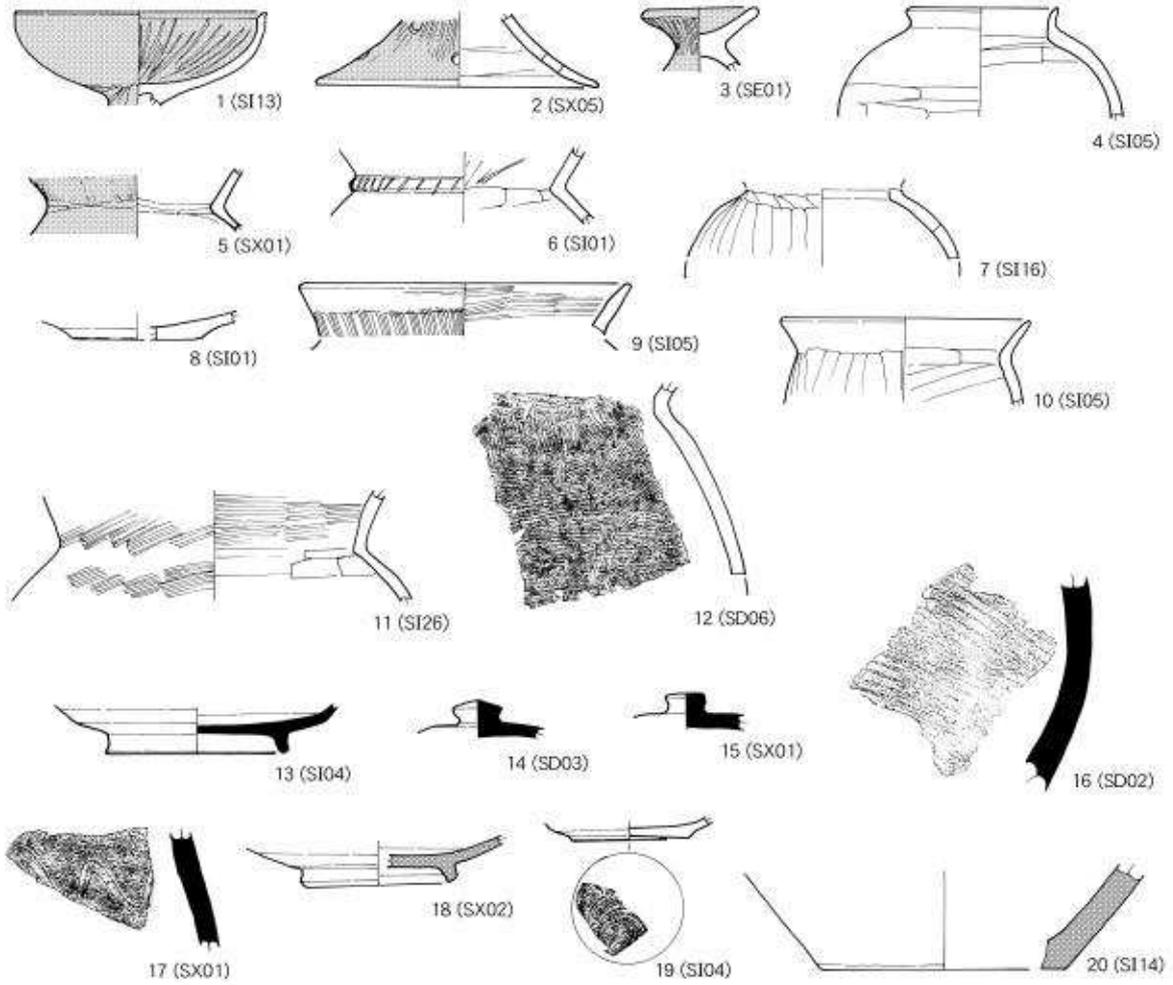
第135図 D区中央部土層断面図

である。12は胴部破片で、ハケが施されている。13～17は須恵器である。13は盤の高台部破片である。底部は回転ヘラケズリである。8世紀後半に比定される。14・15は蓋のつまみ部破片である。擬宝珠状のつまみが付く。16・17は甕の胴部破片である。平行タタキで調製されている。18は灰釉陶器の高台付皿である。猿投窯で10世紀に比定される。19・20は中世である。19は土師質土器小皿で、底部回転糸切りである。20は常滑の底部破片である。被熱している。中世後半に比定される。

(小川和博・遠藤啓子・大淵由紀子)



第136図 C区埋没谷土層断面図



第137図 古墳時代以降の遺構外出土遺物

0 10cm

第5章 まとめ

1. はじめに

今回調査対象となった弥陀ノ台遺跡は、石岡市の東端で、園部川の右岸に位置している。平成11年の市内遺跡分布調査でも注目された遺跡のひとつであった。とくに「東西に谷津を望む台地裾の傾斜地」(石岡市教育委員会2001)で、しかも北面に形成された遺跡であるからである。これには園部川の存在が大きいと推測される。

さて、今回4,950㎡の面積を調査し、北側斜面部で大半の遺構が検出されている。竪穴住居跡26軒、掘立柱建物跡15棟、井戸跡2基、方形・円形竪穴状遺構9基、地下式坑2基、堀・溝9状、土坑墓1基、土坑11基である。これら遺構の時期は古墳時代前期、古墳時代後期、奈良・平安時代、中世と長期に亘って営まれた遺跡であることが判明した。

2. 古墳時代前期の竪穴住居跡について

いわゆる五領期に相当する竪穴住居跡は、SI03・04・07・11・18・20・24の7軒検出された。調査B区の中央部を中心に、高位面のなかで平坦部に集中している。これは南北の高位・低位部に集落が展開するのではなく、調査区の東側と西側に広がる可能性を示している。立地からみると検出された7軒が集落の中心となることは確実である。なお、これら7軒はいずれも他時期の遺構と重複しているか、あるいは未調査区域に延びており、完掘された住居跡は皆無であった。それでも現状では竪穴の平面形は十分に把握できる。また出土遺物をみる限り、大きな時間差はないが、ほぼ同時に存在したかは不明である。ここで改めて7軒の竪穴住居跡を概観すると下記のとおりとなる。

第2表 古墳時代前期の竪穴住居跡計測表

住居番号	平面形	東西軸	南北軸	方位	主柱穴	炉	貯蔵穴	その他
SI03	長方形	6.08	5.76	N-44°-W	4	地床炉	有	入口・間仕切
SI04	長方形	6.03	6.37	N-32°-W	3(4)	地床炉	有	
SI07	長方形	4.55	4.80	N-47°-W	0	地床炉	無	
SI11	長方形	6.95	(3.67)	N-34°-E	2(4)	地床炉	不明	
SI18	長方形	(2.20)	4.13	N-33°-E	0	不明	有	
SI20	長方形	4.27	3.76	N-46°-W	4	不明	不明	
SI24	長方形	(2.21)	4.60	N-28°-E	0	不明	有	

※単位：m、()：現存値

ここで主軸方位からみて、内部施設である炉址および柱穴の位置関係について触れたい。SI03とSI04およびSI07の3軒は本遺跡の基本形である。まずSI03は炉址の位置からみて横長の長方形となる。炉址もこの主軸線上の短軸に沿って構築されている。一方SI04は正方形に近いようにみえるが、縦長の長方形である。やはり炉址は主軸線上の長い楕円形を呈する。またSI07は無柱穴住居で、縦長の長方形である。SI03をa類とすると、ほかにSI11、20が相当する。またSI04をb類とすると1例のみである。さらにSI07をc類とすると、ほかにSI18・24が相当する。少なくともSI03・04・07の3軒は隣接して構築されており、3軒一組という有機的な関係を示唆している。

なお、出土遺物からみると、器種構成はSI03が最も纏まっている。高坏・器台・壺・甕・埴のほか、粗製土器が検出されている。とくに器台に完形品がある。第18図2は器受部が直線的に外傾して開き、脚部も直線的である。また同図3の器受部の下端には稜をもつ。同様にSI24にも出土しており、第68図5はSI03出土例と類似する。器台のみで編年の基準にはならないが、取手市大山I遺跡の編年を参考資料とすると第3号住居跡および第30号住居跡の出土例と類似しており前期「Ⅲ段階」に比定されるものである(菱沼1999)。

3. 奈良・平安時代の竪穴住居跡について

本遺跡における集落の主体である奈良・平安時代の遺構として竪穴住居跡16軒、掘立柱建物跡6棟、方形竪穴状遺構2基、土坑4基である。ここで改めて竪穴住居跡を概観すると下記のとおりである。

第3表 奈良・平安時代の竪穴住居跡計測表

住居番号	平面形	東西軸	南北軸	方位	支柱穴	カマド位置	時期
SI01	方形	4.66	4.85	N-53°-W	4	北西壁	9C前半
SI05	方形	3.71	3.50	N-58°-W	0	北西壁	9C第1
SI06	方形	4.32	4.14	N-60°-W	4	北西壁	8C第3
SI08	方形	(3.62)	4.85	N-57°-W	3(4)	北西壁	8C前半
SI09	方形	2.98	3.15	N-58°-W	0	北西壁	9C前半
SI12	方形	(1.00)	3.08	N-31°-E	0	—	10C前半
SI13	長方形	3.48	(2.67)	N-59°-W	0	北西壁	9C前半
SI14	方形	3.55	(2.58)	N-57°-W	0	—	9C後半
SI15	方形	2.79	(1.60)	N-31°-W	0	北西壁	9C後半
SI16	方形	3.00	3.10	N-56°-W	0	—	9C後半
SI17	方形	2.94	3.32	N-36°-E	0	北西壁	10C前半
SI19	方形	3.42	(2.39)	N-60°-W	0	北西壁	9C前半
SI21	方形	(0.78)	2.24	N-28°-E	0	—	9C
SI22	方形	2.70	2.71	N-71°-W	0	北西壁	9C
SI25	長方形	3.06	3.40	N-65°-W	0	北西壁	9C中葉
SI26	方形	(2.85)	6.37	N-32°-W	0	北西壁	9C

※単位：m、()：現存値

以上16軒の構築年代は、竪穴住居跡から出土している土器の年代により判断したもので、8世紀前半から10世紀前半にかけてである。従来から検討されてきた住居跡の属性の共通性から構築時期の同時存在の可能性が高まることは事実であるが、土器編年が精緻にわたる昨今では、こうした形態の類似性だけの状況証拠だけでは解決できない問題も多く単純ではない。しかし、属性の類似性は、とくに出土遺物の少なさを充欠することは確かである。

今回奈良・平安時代とした16軒の住居跡以外に前代の住居跡が3軒検出されている。SI02・10・23である。いずれも7世紀後半に比定したものである。SI10は4.34×3.95mと若干規模が小さくなるが、それでも8・9世紀代の住居跡と比較した場合、大きい方である。ましてSI02・23は一边5mを超えている。8世紀代になると2軒確認されている。SI08が8世紀前半で、SI06が8世紀後半である。一边4m台の4本支柱穴である。ついで9世紀前半となると7軒となる。大半が一边3m台の小型住居となり、無支柱穴住居となるが、SI01のみ4m台の4本柱住居である。ここで出土遺物をみても、須恵器のうち新治窯産で9世紀前半に比定されている坏の出土から当該住居跡の年代を決定したが、確実に伴うその他の坏や蓋などのうち8世紀第3四半期のものも出土しており、本跡は他の6軒よりも古い8世紀に近い年代を与えても良いかも知れない。この時期掘立柱建物が構築されるなど、本遺跡の最盛期を迎える。次の9世紀中葉から後半は竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡1棟が相当する。規模などは前代の様相をそのまま踏襲している。なお、SI15は9世紀後半に比定されている住居跡であるが、本跡のみ集落の中心から外れて単独構築されている。中心地から南西150mの斜面地立地し、かつて問題となった「離れ国分」を想起させる(中山1976)。10世紀になると無カマド住居とみられる建物がある。ここでは方形竪穴状遺構としたSX03・10が相当する。これらを住居跡とするかは今後の課題としたい。

4. 中世の遺構について

調査A区の斜面部では大規模な堀跡が検出された。遺物量は少ないが13世紀から16世紀の中世の土器や陶器が出土している。また堀跡の周辺には関連するとみられる地下式坑や竪穴状遺構、井戸跡、掘立柱建物跡や土坑が確認されている。まず堀跡は園部川に向かって緩傾斜する舌状台地の東縁辺部に沿って掘削されている。SD01・03が相当する。さらに北部を区画するのがSD06であり、調査A区全体が1区画となることは明確である。また小範

園の確認であるが、東部のSD05の存在によりさらに2区画あることは確実であり、ここでは少なくとも3区画の存在が確認された。しかし、残念ながら周辺には土塁や堀などの痕跡は確認できず、対岸の宮田館跡のように城館跡として周知されていたわけではないため、全体の区画が不明である。したがって今回は調査による成果のみとなる。

東を区画するSD03と北を区画するSD06に囲まれた1区画は、立地からみて主郭となる可能性は高い。しかし、南側区画が検出されず、また西区画の存在は不明であることから全体の縄張りが見えてこない。ここではSD03の関連についてのみ触れたい。SD03は規模も大きく、台地東縁辺に沿って掘削されている。斜面下部でも深度は浅くならないことから、当時も同じような地形を呈していたことが推測される。また北部において一辺10mほどの枡形に屈曲させている。ここで報文中でも触れたようにSD04およびSD05の存在が問題である。調査においてこの3条が重複していることが確認された。その切り合い関係は古い順からSD05→SD04→SD03(第119図)となり、少なくともSD04は埋め戻しの堀であった。そのことから、もともとSD03は北東方向へ直線的に延びる堀であったが、枡形の張出し部を構築する際にSD04を埋め戻したものと推定される。これは大規模な改修工事であったことを意味する。

園部川流域における中世の動態については、対岸の宮田館跡を調査した田村雅樹氏の論考に詳しい。宮田館跡は園部川を挟んで真東へ900mの位置に築城されている。そして調査のなかでとくに16世紀における宮田館跡の堀の改修理由に触れ「この時期は園部氏と大掾氏の抗争が激化した時期に相当する」(田村2013)との指摘がある。本跡におけるSD03の改修時期も符合することから、宮田館跡の堀改修と同時に実行されたものと推測できる。

今回の調査では、北面する舌状台地の斜面部で、古墳時代から古代の拠点集落跡が検出され、さらに中世の大規模な館跡の一角を明らかにできた。もともと中世の館跡は周知されていなかったため大きな成果が得られたことになる。今後は北斜面という遺跡の立地の通念にとらわれず、多くの遺構が存在することを念頭に置きながら調査していくことが必要であろう。

(小川和博・大淵由紀子)

参考文献

石岡市教育委員会2001「石岡市遺跡分布調査報告」

佐々木義則2000『武田石高遺跡 奈良・平安時代編』(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告 第19集)

田村雅樹2013『主要地方道玉里水戸線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書 宮田館跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第374集)

中山吉秀1976「離れ国分考」『古代』61号 早稲田大学考古学会

菱沼良幸1999「北相馬台地における古墳時代前期の土器様相」『研究ノート』8号(財)茨城県教育財団

第4表 弥陀ノ台遺跡出土遺物観察表

S01出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	壁	19.6	(11.3)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	褐色	雲母・石英・長石	口縁1/6残存	
2	土師器	壁	18.0	(4.8)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	明赤褐色	石英・長石	口縁1/12残存	
3	土師器	壁	20.8	(5.2)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にふい褐色	石英・長石	口縁一部残存	
4	土師器	壁	-	(4.0)	9.6	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、木葉痕。	にふい黄褐色	石英・長石	底部1/3残存	
5	土師器	壁	-	(1.1)	9.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、木葉痕。	褐色	石英・長石	底部1/4残存	
6	須恵器	坏	14.0	(3.8)	-	ロク口整形。	灰色	石英・長石	体部1/8残存	
7	須恵器	坏	12.0	(3.4)	-	ロク口整形。	灰色	石英・長石	口縁1/8残存	新治窯産
8	須恵器	坏	-	(2.3)	6.0	ロク口整形。底部ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	底部1/4残存	新治窯産
9	須恵器	蓋	15.0	(1.6)	-	外面天井部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	口縁1/12残存	
10	須恵器	蓋	17.0	(1.7)	-	外面天井部回転ヘラケズリ。	灰色	海綿骨針・石英・長石	口縁1/6残存	
11	須恵器	蓋	(10.0)	(2.1)	-	外面ロク口整形。回転ヘラケズリ。	灰白色	黒色粒子・チャート・石英・長石	1/6残存	
12	須恵器	壁	-	(5.1)	-	ロク口整形。	灰白色	雲母・石英・長石	頸部1/6残存	
13	須恵器	壁	-	-	-	外面平行タタキ。	灰褐色	石英・長石	体部破片	
14	須恵器	壁	-	-	-	外面平行タタキ。	灰色	石英・長石	体部破片	
15	須恵器	壁	-	-	-	外面平行タタキ。	灰色	石英・長石	体部破片	

S02出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	14.0	(3.4)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	赤褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/12残存	
2	土師器	坏	-	-	-	外面ヘラナデ、スス付着。内面ヘラナデ。	黒褐色	海綿骨針・石英・長石	胴部破片	

S03出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	14.0	(3.8)	-	外面横ナデヘラケズリ、内面ヘラナデ。	にふい黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
2	土師器	器台	7.4	6.0	10.8	外面ヘラナデ、ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。	赤褐色	石英・長石	口縁部1/4、底部2/3残存	赤彩
3	土師器	器台	7.1	7.4	10.8	外面ヘラナデ、脚部ヘラケズリ、内面ヘラミガキ、脚部ヘラナデ。	赤色	海綿骨針・石英・長石	口縁部・底部1/2残存	赤彩
4	土師器	器台	-	(2.8)	10.0	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	赤色	黒色粒子・石英・長石	脚部1/4残存	赤彩
5	土師器	高坏	-	(2.5)	-	外面ヘラナデ、内面脚部ヘラナデ。	明赤褐色	石英・長石	脚上部残存	赤彩
6	土師器	壺	17.0	(5.4)	-	外面ヘラナデ、ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	明黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁1/4残存	赤彩
7	土師器	壺	(18.0)	(4.9)	-	外面ヘラナデ、ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	にふい黄褐色	海綿骨針・黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	赤彩
8	土師器	壺	14.8	(2.9)	-	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	赤褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/6残存	赤彩
9	土師器	壁	21.4	(6.3)	-	外面ハケ、ヘラナデ、内面ハケ、ヘラナデ。	にふい黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部3/4残存	
10	土師器	壁	17.4	(4.8)	-	外面ハケ、ヘラナデ、内面ハケ、ヘラナデ。	橙色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/2残存	
11	土師器	壁	11.8	(3.9)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面ハケ、ヘラミガキ、ヘラナデ。	にふい黄褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/6残存	
12	土師器	壁	10.0	(3.0)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面ハケ、ヘラナデ。	灰褐色	石英・長石	口縁部1/4残存	
13	土師器	壁	15.8	(5.8)	-	外面ハケ、ヘラケズリ、内面ハケ、ヘラナデ。	黒褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/4残存	
14	土師器	小型壺	7.6	7.9	3.0	外面横ナデ、ハケ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	完存品	
15	土師器	小型壺	10.0	9.3	3.6	外面横ナデ、ハケ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ハケ、ヘラナデ。	にふい黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4、底部残存	
16	土師器	小型壺	10.0	8.1	2.8	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄褐色	雲母・黒色粒子・石英・長石	体部1/3残存	
17	土師器	小型壺	-	(5.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面ハケ、ヘラナデ。	にふい黄褐色	雲母・石英・長石	体部1/8残存	
18	土師器	小型壺	-	(3.0)	-	外面ハケ、内面ヘラナデ。	にふい黄褐色	雲母・石英・長石	体部1/10残存	
19	土師器	埴	-	(1.7)	2.6	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	にふい黄褐色	石英・長石	底部残存	
20	土師器	小型壺	-	(1.8)	2.8	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	黒褐色	石英・長石	底部残存	
21	土師器	壺	-	(1.2)	5.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	灰黄褐色	海綿骨針・石英・長石	底部残存	
22	土師器	壺	-	(1.7)	6.2	外面ハケ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	灰褐色	石英・長石	底部1/4残存	
23	土師器	壺	-	(1.7)	6.4	外面ハケ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	橙色	石英・長石	底部残存	
24	土師器	壺	-	(1.7)	6.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	明赤褐色	石英・長石	底部残存	

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
25	土師器	甕	-	-	-	外面ハケ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒褐色	海綿骨針・石英・長石	体部破片	
26	土師器	甕	-	-	-	外面ハケ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒褐色	海綿骨針・石英・長石	体部破片	
27	土師器	甕	-	-	-	外面ハケ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒褐色	海綿骨針・石英・長石	体部破片	
28	土師器	甕	-	-	-	外面ハケ、内面ヘラナデ。	黒褐色	石英・長石	体部破片	
29	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	黒褐色	石英・長石	体部破片	
30	土師器	小形土器	6.7	5.9	3.4	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・海綿骨針・石英・長石	口縁部・体部・底部一部残存	赤彩
31	土師器	小形土器	7.4	4.4	4.4	外面押さスヘラケズリ、内面ハケ、ヘラナデ。	黄褐色	海綿骨針・石英・長石	瓦存品	
32	土師器	小形土器	7.4	4.6	4.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	にぶい黄褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/3残存 底部残存	
33	土師器	小形土器	8.1	(3.1)	-	外面ヘラケズリ、内面ハケ、ヘラナデ。	にぶい褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/6残存	
34	土師器	小形土器	12.0	(2.8)	-	外面ヘラナデ、内面ヘラケズリ。	橙色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/6残存	
35	土師器	小形土器	-	(2.3)	4.0	外面ハケ、ヘラケズリ、内面ハケ、ヘラナデ。	淡黄褐色	海綿骨針・石英・長石	底部残存	

SD4出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	埴	11.0	(3.8)	-	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	赤色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/10残存	赤彩
2	土師器	埴	11.2	(6.0)	-	外面横ナデヘラケズリ、ヘラミガキ、内面ハケ、ヘラミガキ、ヘラナデ。	明黄褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/12残存	
3	土師器	埴	-	(1.6)	2.4	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	にぶい褐色	石英・長石	底部1/4残存	
4	土師器	埴	-	(1.4)	2.5	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ、底部ヘラナデ。	明赤褐色	石英・長石	底部残存	赤彩
5	土師器	高坏	-	(4.8)	-	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	にぶい赤褐色	石英・長石	脚上部残存	赤彩
6	土師器	高坏	-	(3.0)	-	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	淡黄褐色	石英・長石	脚上部残存	
7	土師器	壺	-	(15.5)	8.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	淡黄褐色	海綿骨針・石英・長石	底部残存	
8	土師器	壺	-	(2.0)	5.8	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部穿孔。	にぶい褐色	石英・長石	底部残存	
9	土師器	壺	-	(1.5)	4.6	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	明赤褐色	スコリア・石英・長石	底部1/2残存	赤彩
10	土師器	甕	20.2	23.0	6.5	外面横ナデ、ハケ、ヘラケズリ、内面ハケ、ヘラナデ。	黒褐色	石英・長石	体上部1/2欠損	
11	土師器	甕	20.0	(10.0)	-	外面ハケ、横ナデヘラケズリ、内面ハケ、ヘラナデ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	
12	土師器	甕	17.6	(4.8)	-	外面ハケ、ヘラナデ、内面ハケ、ヘラナデ。	にぶい黄褐色	黒色粒子・海綿骨針・石英・長石	口縁部残存	赤彩
13	土師器	甕	13.8	(2.1)	-	外面ハケ、ヘラナデ、内面ハケ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	
14	土師器	甕	-	(11.3)	-	外面ハケ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	体上部残存	スス付着
15	土師器	甕	-	(2.0)	5.4	外面ヘラケズリ、ヘラナデ、内面ヘラナデ。	にぶい黄褐色	石英・長石	底部残存	
16	土師器	甕	-	(1.7)	6.8	外面ハケ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	黒褐色	海綿骨針・石英・長石	底部破片	
17	土師器	甕	-	(1.2)	5.3	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	橙色	石英・長石	底部3/4残存	
18	土師器	甕	-	(2.0)	5.4	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラナデ。	淡黄褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/2残存	
19	土師器	甕	-	(3.5)	14.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラナデ。	暗赤褐色	黒色粒子・石英・長石	底部破片	
20	土師器	甕	-	-	-	外面ハケ、内面ヘラナデ。	暗赤褐色	チャート・石英・長石	割部破片	

SD5出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	-	(3.8)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面ヘラナデ。	黒褐色	海綿骨針・石英・長石	体部1/6残存	黒色処理
2	土師器	甕	21.0	(6.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁1/5残存	
3	土師器	甕	23.0	(5.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁1/6残存	
4	土師器	甕	-	(10.0)	7.8	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木炭痕。	にぶい褐色	雲母・石英・長石	底部残存	
5	須恵器	坏	13.0	4.7	6.6	二次底部面回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り後ヘラケズリ。	黄灰色	黒色粒子・石英・長石	1/2残存	
6	須恵器	坏	13.0	4.3	7.8	二次底部面手持ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	1/3残存	ヘラ記号 新治窯産
7	須恵器	坏	12.2	3.7	6.6	二次底部面手持ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	1/4残存	新治窯産
8	須恵器	坏	14.0	4.8	8.0	二次底部面手持ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	1/4残存	新治窯産
9	須恵器	坏	11.0	4.1	6.0	口ケ口整形。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	1/6残存	新治窯産
10	須恵器	坏	13.0	3.2	7.0	二次底部面手持ヘラケズリ。	灰白色	雲母・石英・長石	1/8残存	
11	須恵器	坏	10.0	(2.4)	-	口ケ口整形。	灰色	石英・長石	口縁一部残存	
12	須恵器	坏	-	(2.7)	7.6	二次底部面手持ヘラケズリ、底部ヘラ切り。	灰色	石英・長石	底部1/2残存	底部ヘラ記号

番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
13	須恵器	坏	-	(2.1)	8.0	二次底部面手持ヘラケズリ、底部ヘラ切り。	灰褐色	石英・長石	底部1/4残存	
14	須恵器	有台坏	14.4	5.5	9.4	ロク口整形。底部ヘラ切り、高台貼付け。	灰色	石英・長石	口縁一部、 底部1/3残存	
15	須恵器	有台坏	-	(2.2)	9.4	ロク口整形。底部ヘラ切り。	灰色	石英・長石	底部ほぼ残存	
16	須恵器	蓋	-	(2.3)	9733.1	天井部回転ヘラケズリ。	褐灰色	石英・長石	天井部残存	
17	須恵器	蓋	20.0	(1.4)	-	ロク口整形。	灰色	黒色粒子・石英・長石	体部1/8残存	
18	須恵器	高坏	-	(10.5)	11.2	ロク口整形。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部残存	
19	須恵器	壁	20.2	(35.0)	14.4	外面平行タタキ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	青灰色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/3残存 底部ほぼ残存	
20	須恵器	壁	-	(19.0)	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰色	石英・長石	体上部1/4残存	

S06出土土器

番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	壁	23.2	(8.3)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	明赤褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/4残存	
2	土師器	壁	22.2	(4.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	石英・長石	口縁部1/8残存	
3	土師器	壁	21.0	(4.5)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
4	土師器	壁	-	(12.0)	-	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	淡橙色	雲母・石英・長石	体部1/6残存	
5	土師器	壁	-	(4.0)	10.0	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	黒褐色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	
6	土師器	壁	-	(2.8)	8.4	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	黒褐色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	
7	土師器	壁	-	(1.5)	9.6	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部木葉痕ヘラケズリ。	にぶい橙色	雲母・チャート・石英・長石	底部2/3残存	
8	土師器	壁	-	-	-	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	黒褐色	雲母・石英・長石	胴部破片	
9	須恵器	坏	14.4	3.7	8.0	二次底部面ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰白色	雲母・石英・長石	口縁一部、 底部1/2残存	新治窯産
10	須恵器	坏	14.0	(2.9)	-	ロク口整形。	灰色	石英・長石	口縁1/10残存	
11	須恵器	高台坏	12.6	4.9	8.8	底部回転ヘラケズリ、高台貼付け。	灰白色	雲母・石英・長石	口縁一部、 底部残存	新治窯産
12	須恵器	有台坏	16.6	6.7	10.6	底部回転ヘラケズリ、高台貼付け。	灰色	雲母・石英・長石	口縁部一部、 底部1/4残存	新治窯産
13	須恵器	盤	20.0	4.5	12.3	底部回転ヘラケズリ、高台貼付け。	緑灰色	石英・長石	口縁部1/2、 底部残存	新治窯産
14	須恵器	盤	18.0	(3.0)	-	ロク口整形。	灰色	海綿骨針・石英・長石	体部1/8残存	新治窯産
15	須恵器	盤	20.0	(2.6)	-	ロク口整形。	青灰色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/6残存	
16	須恵器	蓋	-	(2.0)	-	ロク口整形。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	ツマミ破片	新治窯産
17	須恵器	蓋	15.0	(2.2)	-	天井部回転ヘラケズリ。	灰褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁1/16残存	
18	須恵器	蓋	10.0	(1.4)	-	天井部回転ヘラケズリ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	口縁1/13残存	
19	須恵器	蓋	13.8	(2.3)	-	ロク口整形。外面天井部回転ヘラケズリ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	体部1/8残存	
20	須恵器	蓋	-	(1.3)	-	底部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	天井部残存	
21	須恵器	壁	23.0	(7.5)	-	ロク口整形。	灰色	石英・長石	口縁1/4残存	
22	須恵器	壁	29.0	(4.1)	-	外面横ナデ、平行タタキ、内面横ナデ、ヘラナデ。	黄灰色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/8残存	No25と同一 新治窯産
23	須恵器	壁	-	(4.8)	-	外面ヘラナデ、平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	体部1/8残存	
24	須恵器	壁	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰白色	チャート・雲母・石英・長石	胴部破片	新治窯産
25	須恵器	壁	-	-	-	外面横ナデ、平行タタキ、内面ヘラナデ。	黄灰色	石英・長石	体部破片	No22と同一 新治窯産
26	須恵器	壁	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	青黒色	石英・長石	体部破片	新治窯産
27	須恵器	壁	-	-	-	外面ヘラケズリ、内面ハケ、底部ヘラケズリ。	灰白色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	
28	須恵器	坏	-	(1.7)	8.0	二次底部面外面手持ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰色	雲母・石英・長石	底部残存	

S07出土土器

番号	種別	器種	計測値(cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	小型壺	7.4	5.0	1.0	外面ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面ハケ、ヘラケズリ、ヘラミガキ、ヘラナデ。	黒褐色	石英・長石	口縁部1/3欠損、 底部残存	
2	土師器	埴	-	(6.5)	2.6	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	橙色	海綿骨針・石英・長石	底部残存	赤彩
3	土師器	高坏	-	(2.9)	-	外面ヘラナデハケ、内面ヘラナデ、脚部内面ヘラナデ。	橙色	石英・長石	脚部破片	
4	土師器	壺	(10.0)	(2.6)	-	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	橙色	石英・長石	口縁部1/10 残存	
5	土師器	壁	-	(12.0)	7.4	外面ハケ、ヘラナデヘラケズリ、内面ヘラナデ、 底部ヘラケズリ。	黒褐色	海綿骨針・石英・長石	体部下半部 残存	

S108出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	15.2	4.1	4.5	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	明赤褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/3欠損	スス付着
2	土師器	壺	-	(2.2)	7.8	底部回転ヘラ切り、高台貼付け。	明赤褐色	海綿骨針・石英・長石	底部2/3残存	黒色処理
3	土師器	甕	14.0	(7.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	明赤褐色	雲母・チャート・石英・長石	口縁部1/2残存	赤彩
4	土師器	甕	15.4	(5.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	明赤褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/3残存	赤彩
5	土師器	甕	16.0	(5.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/5残存	
6	土師器	甕	26.0	(10.0)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/4残存	
7	土師器	甕	-	(7.2)	9.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	にぶい赤褐色	石英・長石	底部残存	
8	土師器	甕	-	(7.0)	8.2	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	褐色	石英・長石	底部1/2残存	赤彩
9	土師器	甕	-	(8.8)	-	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	体底部1/4残存	
10	土師器	甕	-	(3.2)	10.0	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	底部一部残存	
11	土師器	甕	-	(2.7)	(7.0)	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	にぶい褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/3残存	
12	須恵器	坏	15.6	4.3	9.2	二次底部回転ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	灰色	石英・長石	口縁部1/2欠損	新治窯産
13	須恵器	蓋	-	(1.5)	-	天井部回転ヘラケズリ、ツマミ貼付け。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	天井部残存	
14	須恵器	甕	27.5	(5.2)	-	外面横ナデヘラナデ、平行タタキ、内面横ナデ。	暗青灰色	石英・長石	口縁部破片	
15	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	褐色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	
16	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	黒色	雲母・石英・長石	体部破片	
17	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	18と同一 個体
18	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	17と同一 個体

S109出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	14.0	(2.9)	-	外面ヘラナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	にぶい褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/8残存	
2	土師器	坏	-	(2.2)	8.4	回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ。	にぶい褐色	石英・長石	底部1/2残存	黒色処理
3	土師器	坏	-	-	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色	石英・長石	口縁部破片	黒色処理
4	土師器	甕	23.0	(24.8)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	灰黄褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/4残存	
5	土師器	甕	22.0	(5.9)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	
6	土師器	甕	21.0	(4.0)	-	外面ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/6残存	
7	土師器	甕	20.2	(4.2)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/7残存	
8	土師器	甕	16.0	(5.5)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/10 残存	
9	土師器	甕	-	(2.8)	10.0	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	にぶい褐色	チャート・石英・長石	底部1/9残存	
10	須恵器	坏	14.0	4.5	8.2	二次底部面手持ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	灰色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/3残存 底部1/2残存	新治窯産 ヘラ記号
11	須恵器	坏	12.8	3.8	8.0	二次底部面手持ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	暗青灰色	石英・長石	1/4残存	
12	須恵器	坏	-	(2.0)	8.0	底部ヘラケズリ。	褐色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	新治窯産
13	須恵器	坏	-	(2.0)	8.0	二次底部面手持ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰白色	雲母・石英・長石	底部1/6残存	新治窯産
14	須恵器	壺	19.4	4.4	12.2	底部回転ヘラケズリ、高台貼付け。	灰黄色	雲母・石英・長石	口縁1/3残存 底部1/2残存	新治窯産
15	須恵器	壺	21.8	(2.1)	-	口ロ整形。	灰黄褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/6残存	
16	須恵器	壺	-	(2.3)	13.0	底部回転ヘラケズリ、高台貼付け。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部1/5残存	
17	須恵器	有台坏	-	(1.1)	-	底部回転ヘラケズリ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	中心部破片	
18	須恵器	蓋	15.0	(1.8)	-	天井部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	口縁部1/12 残存	
19	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰白色	石英・長石	体部破片	
20	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	灰色	雲母・石英・長石	体下部破片	新治窯産

S110出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	15.8	(4.1)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	口縁2/3残存	
2	土師器	坏	12.0	(3.1)	-	外面横ナデヘラケズリ、内面横ナデ。	にぶい褐色	海綿骨針・石英・長石	体部1/12残存	黒色処理
3	土師器	坏	15.0	(4.3)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	黒色処理
4	土師器	坏	15.2	(3.9)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ。	にぶい黄褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/4残存	

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
5	土師器	壺	15.4	(9.2)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	灰褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/2残存	
6	土師器	壺	15.8	(4.7)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/4残存	
7	土師器	壺	22.0	(3.4)	-	外面横ナデ、内面横ナデ。	黒褐色	石英・長石	口縁部1/8残存	
8	土師器	壺	-	(11.0)	8.2	外面ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	橙色	石英・長石	底部残存	スス付着
9	土師器	壺	-	(8.3)	8.0	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部ヘラナデ。	橙色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	
10	須恵器	壺	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	自然釉

S11出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	15.0	(5.8)	-	外面横ナデ、ハケ目、内面ハケ目、ヘラミガキ。	赤色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/8残存	赤彩
2	土師器	壺	-	(2.3)	8.0	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	にぶい褐色	スコリア・石英・長石	底部1/5残存	
3	土師器	壺	-	-	-	外面ハケ目、内面ヘラナデ。	赤褐色	雲母・石英・長石	胴部破片	

S12出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	13.2	3.3	6.6	外面手持ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	橙色	海綿骨針・石英・長石	1/6残存	黒色処理
2	土師器	坏	12.0	(2.7)	-	ロク口整形。	にぶい褐色	石英・長石	口縁部1/7残存	
3	土師器	壺	-	(2.9)	8.4	内面ヘラナデ、黒色処理。	浅黄褐色	石英・長石	底部1/3残存	黒色処理
4	土師器	壺	-	(1.3)	8.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	暗赤褐色	石英・長石	底部のみ残存	

S13出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	13.2	3.9	7.0	底部ヘラケズリ。	褐灰色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/2残存	
2	土師器	坏	13.0	4.1	7.6	底部ヘラケズリ。	にぶい黄褐色	海綿骨針・石英・長石	1/8残存	
3	土師器	坏	12.8	(2.8)	-	ロク口整形、外面横ナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	黒褐色	石英・長石	体部1/4残存	
4	土師器	坏	-	(1.2)	6.0	底部回転糸切り。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	底部残存	
5	土師器	坏	-	(2.4)	6.8	ロク口整形、外面ナデ、内面ヘラミガキの後内黒処理。	灰白色	石英・長石	体部1/4残存	黒色処理
6	土師器	坏	-	(1.1)	4.4	二次底部面手持ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	黄褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/2残存	
7	土師器	壺	14.2	(4.7)	-	底部回転ヘラ切り、高台粘付け。	橙色	雲母・石英・長石	口縁一部残存	
8	土師器	壺	-	(3.8)	8.2	底部回転ヘラケズリ、高台粘付け、内面ヘラミガキ。	浅黄褐色	雲母・石英・長石	底部1/2残存	黒色処理
9	須恵器	有台坏	-	(2.7)	9.0	底部回転ヘラケズリ、高台粘付け。	灰黄褐色	石英・長石	底部一部残存	
10	土師器	壺	-	(3.3)	6.9	ロク口整形、内面ヘラミガキ。	橙色	雲母・石英・長石	体部1/8残存	
11	土師器	壺	11.7	(5.5)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/6残存	
12	土師器	壺	-	(3.4)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい橙色	石英・長石	体部1/6残存	
13	土師器	壺	-	(2.6)	7.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	黒褐色	石英・長石	底部1/6残存	
14	須恵器	壺	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	木葉下黒塗 自然釉
15	須恵器	壺	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰白色	雲母・石英・長石	胴部破片	
16	陶器	瓶	-	-	-	ロク口整形。	灰褐色	黒色粒子・石英・長石	瓶破片	撥灰産 灰釉

S14出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	13.5	4.2	6.1	二次底部面回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	明赤褐色	雲母・石英・長石	ほぼ完存品	墨書土器、 黒色処理
2	土師器	坏	14.4	5.1	6.0	二次底部面手持ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	暗褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/8残存 底部1/4残存	黒色処理
3	土師器	坏	13.2	(3.9)	-	二次底部面回転ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。	にぶい橙色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	黒色処理
4	土師器	坏	-	(2.3)	5.2	二次底部面手持ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	にぶい黄褐色	石英・長石	底部1/2残存	
5	土師器	坏	-	(1.9)	5.0	ロク口整形、底部回転ヘラ切りの後ヘラケズリ。	橙色	海綿骨針・石英・長石	底部1/5残存	
6	土師器	坏	-	(1.3)	4.9	外面ロク口ナデ、手持ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	黒褐色	石英・長石	体部1/8残存	黒色処理
7	土師器	壺	17.0	6.9	10.4	底部回転糸切り、内面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色	石英・長石	口縁部1/2残存 底部1/2残存	黒色処理
8	土師器	壺	-	(2.6)	9.8	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	黄褐色	雲母・石英・長石	底部破片	
9	土師器	壺	-	(2.5)	10.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	にぶい黄褐色	石英・長石	底部1/4残存	
10	須恵器	坏	14.0	(4.1)	-	外面下端手持ヘラケズリ。	灰白色	石英・長石	口縁部1/8残存	

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
11	須恵器	坏	-	(3.5)	7.0	外面下端手持ヘラケズリ、底部回転糸切り。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	
12	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰黄色	雲母・石英・長石	体部破片	新治窯産
13	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	黄灰色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	木葉下窯産 磁石に利用
14	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	
15	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	にぶい褐色	石英・長石	胴部破片	
16	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰白色	石英・長石	体部破片	
17	須恵器	甕	-	-	-	外面格子目タタキ、内面ヘラナデ。	灰褐色	石英・長石	体部破片	

SI15出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	13.0	(4.1)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	赤褐色	石英・長石	体部1/8残存	
2	土師器	甕	23.0	(5.5)	-	外面横ナデ、内面横ナデ。	緑灰色	雲母・石英・長石	口縁部1/15 残存	
3	須恵器	坏	-	(1.4)	6.0	底部回転ヘラ切り。	灰オリーブ色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	
4	須恵器	長頸瓶	-	(32.2)	14.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	暗オリーブ 灰色	海綿骨針・石英・長石	頸部1/2残存 底部1/6残存	自然釉

SI16出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	13.6	4.1	5.8	二次底部面回転ヘラケズリ、底部回転ヘラケズリ、 内面ヘラミガキ。	橙色	雲母・石英・長石	口縁部1/6残存	墨書土器 黒色処理
2	土師器	甕	22.8	33.5	10.0	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ、 底部ヘラナデ。	浅黄橙色	雲母・石英・長石	体部一部欠損	
3	土師器	甕	21.0	(11.7)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/4残存	
4	土師器	甕	27.8	(9.7)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄橙色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	
5	土師器	甕	-	(2.1)	6.0	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	褐色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	
6	土師器	甕	-	(3.2)	7.8	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部1/6残存	
7	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰白色	石英・長石	胴部破片	

SI18出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	埴	12.0	(4.1)	-	外面横ナデ、内面ヘラナデ。	赤橙色	石英・長石	口縁部1/10	赤彩 スス付着
2	土師器	壺	16.0	(2.5)	-	外面ハケ、ヘラナデ、内面ハケ。	赤色	黒色粒子・石英・長石	口縁部1/12 残存	
3	土師器	甕	11.0	(4.1)	-	外面押さスハケ、内面横ナデ、ヘラナデ。	黒褐色	石英・長石	口縁部1/3残存	
4	土師器	甕	-	(7.8)	-	外面ハケ、内面ヘラナデ。	橙色	石英・長石	体部1/5残存	
5	土師器	甕	16.0	(3.1)	-	外面押さス横ナデ、内面ハケ。	黒褐色	石英・長石	口縁部1/7残存	
6	土師器	甕	-	-	-	外面ハケ、内面ヘラナデ。	黒色	チャート・石英・長石	胴部破片	

SI19出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	22.4	(25.5)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	褐色	雲母・石英・長石	口縁1/2残存	
2	土師器	甕	33.0	(9.5)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/10 残存	
3	土師器	甕	15.0	(10.0)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面横ナデ、ヘラナデ。	橙色	雲母・石英・長石	口縁1/3残存	
4	土師器	甕	-	(10.5)	7.8	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	にぶい褐色	雲母・石英・長石	口縁欠損	
5	土師器	甕	-	(4.2)	9.0	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	底部2/3残存	
6	土師器	甕	-	(4.1)	7.0	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	黒褐色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	
7	土師器	甕	-	(4.6)	6.6	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	橙色	雲母・石英・長石	底部1/2残存	
8	須恵器	坏	13.2	4.5	8.4	底部回転ヘラ切り。	灰色	雲母・石英・長石	1/2残存	
9	須恵器	坏	13.6	4.5	8.0	底部回転ヘラ切り。	橙色	黒色粒子・石英・長石	完存品	
10	須恵器	坏	13.5	4.4	8.4	外面下端手持ヘラケズリ、底部回転ヘラ切り。	灰白色	雲母・石英・長石	口縁部2/3残存 底部残存	新治窯産
11	須恵器	坏	13.4	5.0	8.4	底部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	完存品	
12	土師器	坏	-	(3.6)	8.4	底部回転ヘラ切り。	灰黄色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	
13	須恵器	坏	-	(3.7)	8.0	二次底部面回転ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	
14	須恵器	有台坏	-	(2.9)	8.8	底部回転ヘラ切り、高台貼付け。	灰色	石英・長石	底部2/3残存	
15	須恵器	甕	18.6	3.9	10.4	口々口整形、脚部貼付け。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部1/4残存	

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
16	須恵器	甕	-	(2.5)	-	底部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	底部1/4残存	
17	須恵器	蓋	-	(2.5)	-	天井部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	天井部残存	
18	須恵器	蓋	16.0	(1.5)	-	ロク口整形。	灰色	石英・長石	体部1/12残存	
19	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰色	石英・長石	胴部破片	

S21出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	-	(2.2)	7.9	底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキ後黒色処理。	にぶい黄褐色	石英・長石	底部1/6残存	黒色処理
2	土師器	甕	-	-	-	外面横ナデ。内面横ナデ。	灰褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/12残存	
3	須恵器	甕	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰色	海綿骨針・石英・長石	体部破片	木堂下窯産

S22出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	-	-	-	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	体部破片	

S23出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	11.0	(4.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	褐灰色	雲母・石英・長石	体部1/6残存	黒色処理
2	土師器	坏	13.0	(3.3)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面ヘラナデ。	赤色	黒色粒子・石英・長石	体部1/10残存	赤彩
3	土師器	坏	-	(2.5)	4.6	二次底部商手持ちヘラケズリ、底部ヘラケズリ、内面黒色処理。	にぶい橙色	海綿骨針・石英・長石	底部1/2残存	黒色処理
4	土師器	甕	24.6	(9.8)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	浅黄褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/6残存	
5	土師器	甕	25.8	(14.0)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい橙色	雲母・石英・長石	口縁部1/6残存	
6	土師器	甕	10.0	(2.8)	-	外面横ナデ、内面横ナデ。	明赤褐色	石英・長石	口縁部1/4残存	
7	土師器	甕	-	(1.8)	9.6	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部ヘラナデ。	褐色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	
8	土師器	甕	-	(3.4)	6.6	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	黒褐色	黒色粒子・石英・長石	底部3/4残存	
9	須恵器	蓋	-	(2.0)	-	天井部回転ヘラケズリ。	褐灰色	石英・長石	天井部残存	
10	陶器	瓶	-	-	-	ロク口整形。	灰オリーブ色	黒色粒子・石英・長石	体上部破片	新治窯 灰釉

S24出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	甕	11.0	(4.8)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、内面ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	体部残存	赤彩
2	土師器	甕	-	(4.6)	-	外面ハケ、ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	赤褐色	石英・長石	体上部破片 底	赤彩
3	土師器	甕	-	(2.5)	3.2	外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。	明赤褐色	石英・長石	胴部残存	赤彩
4	土師器	高坏	13.0	(3.1)	-	外面ハケ、ヘラナデ、内面ヘラナデ。	赤褐色	石英・長石	口縁部1/7残存	赤彩
5	土師器	器台	7.3	7.2	9.1	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	橙色	雲母・石英・長石	ほぼ完存品	透かし孔3個 赤彩
6	土師器	器台	7.4	(3.3)	-	外面横ナデ、ヘラナデ、ヘラケズリ、内面ハケ、ヘラミガキ。	赤褐色	石英・長石	口縁部残存	赤彩
7	土師器	器台	-	(2.8)	-	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。	にぶい赤褐色	石英・長石	中心部破片	赤彩
8	土師器	壺	19.0	(4.7)	-	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	口縁部残存	
9	土師器	壺	23.0	(3.2)	-	外面ハケ、横ナデ、内面ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	口縁部残存	赤彩
10	土師器	甕	-	(22.5)	6.2	外面ハケ、ヘラナデ、内面ヘラナデ。	橙色	黒色粒子・石英・長石	底部残存 体部1/3残存	
11	土師器	甕	-	(1.8)	6.2	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ。	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	
12	土師器	甕	-	-	-	外面ハケ、ヘラナデ、内面ヘラナデ。	橙色	チャート・石英・長石	胴部破片	

S25出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	13.8	3.3	6.6	内面ヘラミガキ。	黒褐色	石英・長石	1/8残存	黒色処理
2	土師器	甕	26.0	(5.7)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/7残存	
3	土師器	甕	20.6	(2.3)	-	外面横ナデ、ヘラケズリ、内面横ナデ、ヘラナデ。	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	
4	土師器	甕	-	(7.8)	8.6	外面ヘラケズリ、ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	底部1/3残存	
5	土師器	甕	-	(2.8)	8.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部木葉痕。	橙色	黒色粒子・石英・長石	底部1/8残存	
6	須恵器	坏	13.8	4.9	7.8	外面手持ちヘラケズリ、底部ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	ほぼ完存品	新治窯産
7	須恵器	蓋	-	(2.5)	15.0	天井部回転ヘラケズリ。	灰褐色	雲母・石英・長石	1/6残存 ツマミ欠損	
8	須恵器	蓋	-	(1.5)	18.0	天井部ヘラケズリ。	灰オリーブ色	雲母・石英・長石	1/3残存 ツマミ欠損	

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
9	須恵器	高坏	-	(10.3)	21.0	口ク口整形。	灰色	石英・長石	底部1/3残存	
10	須恵器	壺	-	-	-	外歯平行タタキ、内歯ヘラナデ。	灰色	石英・長石	胴部破片	

S26出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	須恵器	有台坏	-	(2.3)	9.0	底部回転ヘラケズリ、高台貼付け。	灰色	黒色粒子・石英・長石	底部1/3残存	ヘラ記号

SB01出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	20.0	(2.0)	-	外歯ヨコナデ、内歯ヨコナデ。	橙色	雲母・石英・長石	口縁1/10残存	P 7 出土
2	須恵器	坏	-	(3.2)	8.0	二次底部面手持ちヘラケズリ。底部ヘラケズリ。	灰色	雲母・石英・長石	底部1/4残存	P 7 出土 新治窯産

SB05出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	須恵器	坏	-	(2.2)	7.0	二次底部面手持ちヘラケズリ。底部ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	底部1/6残存	P 6 出土
2	須恵器	蓋	16.0	(2.6)	-	天井部回転ヘラケズリ。	灰色	黒色粒子・石英・長石	体部1/10残存	P 2 出土

SB07出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	16.0	(4.3)	-	外歯ヨコナデ、ヘラケズリ、内歯ヨコナデ、ヘラナデ。	橙色	雲母・石英・長石	口縁部1/6残存	P 8 出土
2	須恵器	坏	13.0	(3.9)	-	口ク口整形。	灰色	石英・長石	口縁部1/6残存	P 8 出土 新治窯産
3	須恵器	坏	14.0	(3.7)	-	口ク口整形。	灰色	石英・長石	口縁部1/8残存	P 6 出土
4	須恵器	有台坏	-	(2.7)	9.0	口ク口整形、高台貼付け。	灰色	石英・長石	底部1/5残存	P 2 出土
5	須恵器	蓋	15.0	(1.7)	-	天井部回転ヘラケズリ。	灰白色	黒色粒子・石英・長石	1/8残存	P 3 出土
6	須恵器	蓋	15.0	(2.9)	-	天井部回転ヘラケズリ。	灰色	石英・長石	口縁部1/7残存	P 4 出土

SE02出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	陶器	壺蓋類	-	-	-	外歯ヘラナデ、内歯ヘラナデ。	暗赤褐色	石英・長石	胴部破片	某清窯産

SX01出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師質土器	小皿	-	(1.4)	7.0	口ク口整形、底部回転系切り。	明黄褐色	石英・長石	底部1/6残存	
2	陶器	壺	-	-	-	ナデ。	灰白色	石英・長石・黒色粒子	口縁部破片	蓮美窯産

SX02出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	陶器	壺蓋類	-	(4.0)	16.0	外歯ヘラケズリ、内歯ヘラナデ、底部ヘラナデ。	灰赤色	石英・長石	底部1/10残存	

SX03出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	坏	14.0	4.0	6.4	底部回転ヘラ切り、内歯ヘラミガキ。	灰黄褐色	石英・長石	体部1/6残存	黒色処理
2	土師器	坏	14.0	(3.5)	-	内歯ヘラミガキの後、黒色処理。	黒褐色	石英・長石・雲母	口縁部1/10残存	黒色処理
3	土師器	坏	-	(0.6)	6.0	二次底部面手持ちヘラケズリ、底部ヘラケズリ、内歯ヘラミガキの後、黒色処理。	灰黄褐色	石英・長石・黒色粒子	底部残存	黒色処理
4	土師器	坏	-	(3.6)	-	底部回転系切り、内歯ヘラミガキの後、黒色処理。	浅黄褐色	黒色粒子・石英・長石	胴底部残存	黒色処理
5	土師器	坏	-	(5.9)	7.8	内歯ヘラミガキの後、黒色処理。	灰黄褐色	石英・長石	底部残存	黒色処理
6	須恵器	壺	-	-	-	外歯平行タタキ、内歯青濁波紋。	灰白色	石英・長石	胴部破片	

SX04出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師質土器	壺蓋類	-	(9.0)	16.0	外歯ヘラケズリ、内歯ヘラナデ。	浅黄褐色	黒色粒子・石英・長石	底部1/6残存	外面に筋状の切り込み

SX06出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	壺	-	(1.1)	9.8	底部ヘラケズリ、内歯ヘラナデ。	暗灰黄色	黒色粒子・石英・長石	底部3/4残存	
2	土師器	足高 高台碗	-	(3.6)	-	底部回転ヘラ切り、高台貼付け。	橙色	石英・長石・雲母	底部1/5残存	
3	磁器	鉢類	10.0	(1.4)	-	青磁・断面淡黄色。	緑灰色	石英・長石	口縁部1/10残存	龍泉窯系 残存

SX08出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	皿	14.0	3.0	9.0	底部回転糸切り。	にぶい橙色	石英・長石・雲母	1/2残存	
2	土師器	皿	-	(1.4)	7.0	底部回転糸切り。	にぶい橙色	石英・長石・雲母	底部1/3残存	
3	土師器	碗	16.0	5.3	8.0	底部回転糸切り。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	浅黄褐色	石英・長石・雲母	口縁部1/4残存 底部先存	黒色処理
4	土師器	碗	15.0	(3.8)	-	底部回転糸切り。高台粘付け。	浅黄褐色	海綿骨針・石英・長石	口縁部1/4残存	
5	土師器	壺	-	(5.5)	9.0	外面ヘラクスリ。内面ヘラナデ。底部木葉痕。	黒褐色	石英・長石・雲母	底部1/3残存	
6	土師器	壺	-	-	-	外面ヘラクスリ。内面ヘラナデ。	明赤褐色	石英・長石	胴部破片	
7	須恵器	壺	-	-	-	外面平行タタキ。内面ヘラナデ。	黄灰色	石英・長石	胴部破片	

SD01出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師質土器	皿	14.2	3.2	8.0	底部回転糸切り。	浅黄褐色	雲母・石英・長石	1/4残存	
2	土師質土器	内耳鍋	-	(2.6)	19.0	外面ヘラクスリ。内面ヘラナデ。	褐灰色	石英・長石	口縁部1/15 残存	

SD02出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	瓦質土器	変型類	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	褐灰色	石英・長石・雲母	胴部破片	

SD03出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師質土器	小皿	8.0	1.6	6.0	底部回転糸切り。	橙色	石英・長石・黒色粒子	2/3残存	灯明皿
2	土師質土器	皿	-	(1.0)	5.4	底部回転糸切り。	浅黄褐色	石英・長石	底部残存	
3	土師質土器	変型類	-	(6.0)	20.0	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。底部ヘラナデ。	にぶい赤褐色	石英・長石・黒色粒子	底部1/8残存	
4	土師質土器	変型類	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	浅黄褐色	石英・長石・黒色粒子	胴部破片	
5	陶器	壺	46.0	(7.6)	-	外面ヨコナデ。ヘラナデ。内面ヨコナデ。ヘラナデ。	にぶい赤褐色	石英・長石・黒色粒子	口縁部1/8残存	常滑窯産
6	陶器	壺	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	にぶい赤褐色	石英・長石・黒色粒子	胴部破片	常滑窯産 5と同一個体
7	陶器	壺	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	にぶい赤褐色	石英・長石・黒色粒子	胴部破片	常滑窯産 5と同一個体
8	陶器	壺	13.2	4.5	8.4	外面ヘラクスリ。内面ヘラナデ。	灰褐色	石英・長石	胴部破片	常滑窯産

SD04出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	碗	18.2	7.7	7.0	底部回転ヘラ切り。内面ヘラミガキの後、黒色処理。	黒褐色	石英・長石	1/2残存	黒色処理
2	陶器	皿	-	(2.1)	7.0	ロク口整形。底部回転糸切り。高台粘付け。 断面にぶい黄褐色。	灰白色	石英・長石	底部1/12残存	灰釉陶器

SD05出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師質土器	小皿	7.9	3.0	5.4	底部回転糸切り。	にぶい黄褐色	石英・長石	ほぼ完形	

SD06出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	陶器	壺	-	-	-	外面ヘラナデ。内面ヘラナデ。	灰白色	石英・長石・黒色粒子	口縁部1/15 残存	渥美窯産
2	陶器	壺	-	-	-	外面ヘラクスリ。内面ヘラナデ。	灰褐色	石英・長石	胴部破片	常滑窯産 3と同一個体
3	陶器	壺	-	-	-	外面ヘラクスリ。内面ヘラナデ。	灰褐色	石英・長石	胴部破片	常滑窯産 2と同一個体

SK01出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	杯	-	(2.3)	6.0	二次底部面回転ヘラクスリ。内面ヘラミガキの のち、黒色処理。	浅黄褐色	雲母・石英・長石	底部1/10残存	

SK15出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	碗	19.0	(5.0)	-	二次底部面回転ヘラクスリ。内面ヘラミガキ。	にぶい黄褐色	黒色粒子・石英・長石	体部1/10残存	

SK22出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	杯	14.0	(2.2)	-	ロク口整形。内面ヘラミガキののち、黒色処理。	黒褐色	石英・長石	口縁部1/8残存	

SK23出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	碗	-	(2.0)	8.0	ロク口整形。	橙色	石英・長石・雲母	底部1/6残存	

古墳時代以降の遺構外出土土器

番号	種別	器種	計測値 (cm)			器形・成形・調整等の特徴	色調	胎土	残存部位	備考
			口径	器高	底径					
1	土師器	高坏	13.3	(4.6)	-	外面ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。	黒褐色	石英・長石	外側残存	赤彩 SI13
2	土師器	高坏	-	(4.2)	16.0	外面ハケ、ヘラナデ。内面ヘラナデ。二段の透し孔。	明赤褐色	石英・長石	脚部1/4残存	赤彩 SX05
3	土師器	器台	6.0	(3.2)	-	外面ハケ、内面ハケ、ヘラナデ。	明赤褐色	石英・長石	底部完存	赤彩 SE01
4	土師器	小型壺	7.8	(5.7)	-	外面ヘラナデ、ヘラケスリ、内面ヘラナデ。	黒褐色	雲母・石英・長石	口縁部1/8残存	SD5
5	土師器	壺	-	(3.7)	-	外面ハケ、ヘラケスリ、内面ハケ、ヘラナデ。	明赤褐色	石英・長石	頸部1/8残存	赤彩 SX01
6	土師器	壺	-	-	-	外面ハケ、ヘラナデ。粘土細貼付け。内面ヘラナデ。	橙色	石英・長石	頸部1/8破片	SD1
7	土師器	壺	-	(4.2)	-	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ。	淡橙色	石英・長石	胴部破片	SI16
8	土師器	壺	-	(1.3)	6.5	外面ヘラナデ、内面ヘラナデ、底部ヘラナデ。	暗褐色	石英・長石	底部1/8残存	SD1
9	土師器	壺	19.0	(3.1)	-	外面ハケ、ヨコナデ、内面ハケ。	暗褐色	石英・長石	口縁部1/10 残存	SD5
10	土師器	壺	13.0	(4.4)	-	外面ヨコナデ、ヘラケスリ、内面ヨコナデ、ヘラナデ。	橙色	石英・長石	口縁部1/4残存	SD5
11	土師器	壺	-	(5.7)	-	外面ハケ、内面ハケ、ヘラナデ。	暗褐色	海綿骨針・石英・長石	頸部1/8残存	SD6
12	土師器	壺	-	(11.0)	-	外面ハケ、内面ヘラナデ。	橙色	石英・長石	胴部破片	SD06
13	須恵器	壺	-	(2.7)	10.0	底部回転ヘラケスリ、高音貼付け。	灰色	石英・長石	高音部1/10 破片	SD4
14	須恵器	蓋	(7.0)	(2.3)	-	つまみ貼付け、天井部回転ヘラケスリ。	灰色	石英・長石	つまみ部残存	SD02
15	須恵器	蓋	(6.0)	(2.1)	-	つまみ貼付け、天井部回転ヘラケスリ。	灰白色	石英・長石	つまみ部残存	SX01
16	須恵器	壺	-	-	-	外面平行タタキ、内面ヘラナデ。	灰色	石英・長石	胴部破片	SD02
17	須恵器	壺	-	-	-	外面波状文、内面ヘラナデ	灰色	石英・長石	胴部破片	SX01
18	陶器	壺	(2.2)	(2.2)	7.5	底部回転系切り、高音貼付け。	灰白色	石英・長石・黒色粒子	底部1/8残存	横投窯差 SX02灰釉
19	土師質 土器	高台付皿	(1.1)	(1.1)	6.0	底部回転系切り。	にぶい橙色	石英・長石	底部1/8残存	SD4
20	陶器	壺	-	-	-	外面ヘラケスリ、内面ヘラナデ。	浅黄褐色	石英・長石・黒色粒子	底部1/8残存	SI14 常滑窯差

写真図版



1. 遺跡全景（上空から）



2. 調査区A区全景（上空から）



1. 調査区全景（上空から）



2. 調査区A・B区全景（上空から）



1. 遺跡遠景 (北から)



2. 遺跡調査前近景 (北から)



1. 1次調査A・B区全景（北から）



2. 2次調査A区全景（北から）



1. 2次調査A区全景（南西から）



2. 1次調査B区全景（南西から）



1. 2次調査B区全景（北東から）



2. 1次調査D区全景（南西から）



1. 1次調査D区全景（南から）



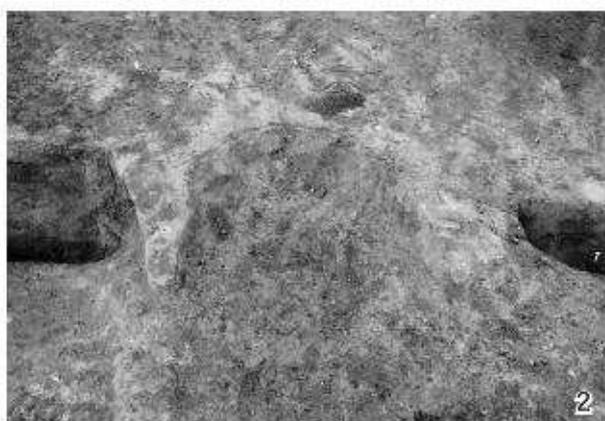
2. 調査A区基本土層（北西から）



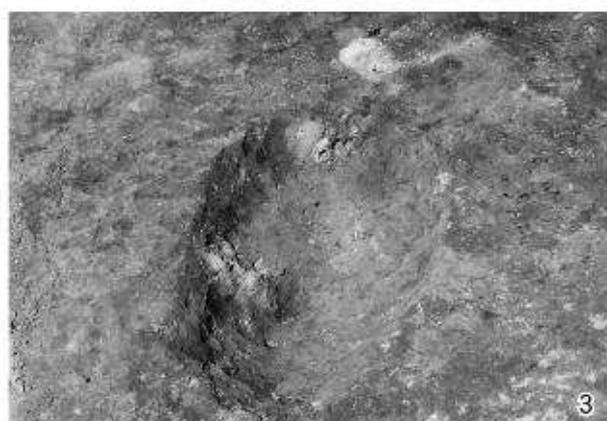
1. 南西部調査前（東から）



2. 南西部調査前（北から）

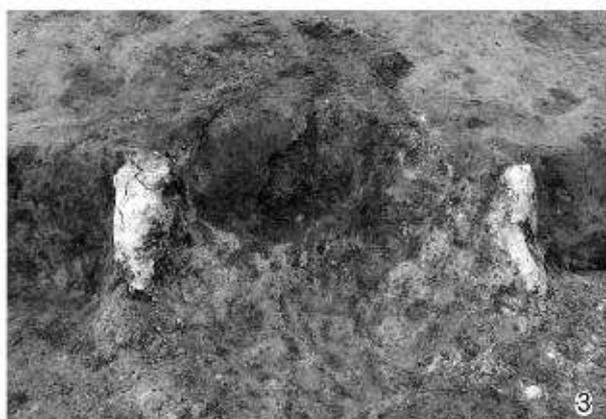


1. SI01全景（南から）
 2. SI01カマド全景（南から）
 3. SI01出土遺物状況（南から）
 4. SI02全景（南から）

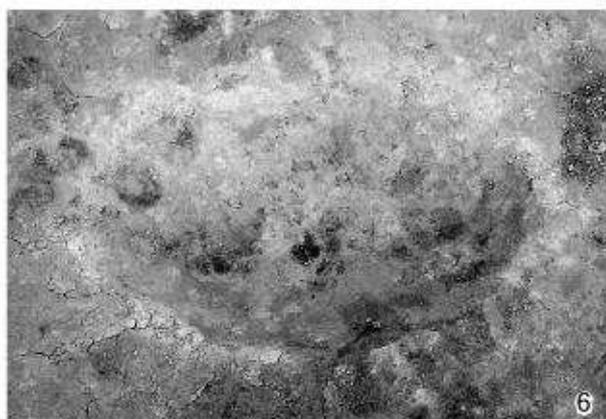


1. SI03全景 (南から)
2. SI04全景 (南から)

3. SI04炉址全景 (南から)
4. SI04出土遺物状況 (南から)

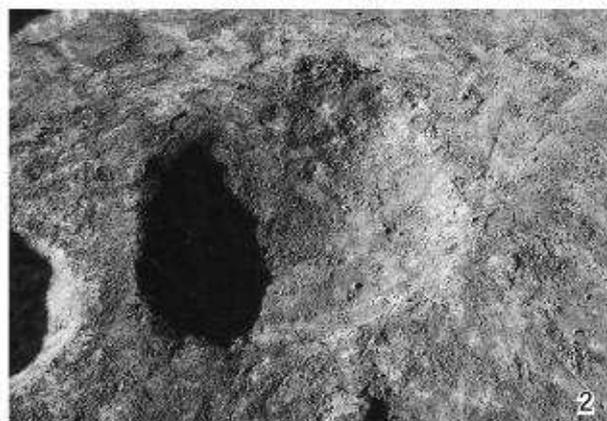


1. SI06遺物出土状況 (南から)
2. SI06カマド内遺物出土状況 (南から)
3. SI06カマド全景 (南から)
4. SI06遺物出土状況 (南から)
5. SI07全景 (東から)
6. SI07炉址 (東から)
7. SI07出土遺物状況 (真上から)



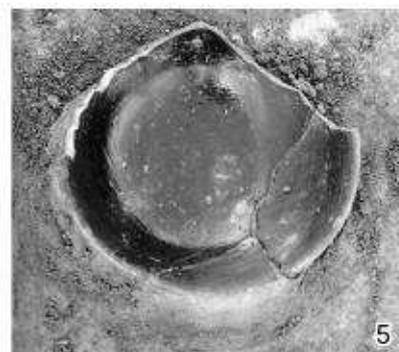
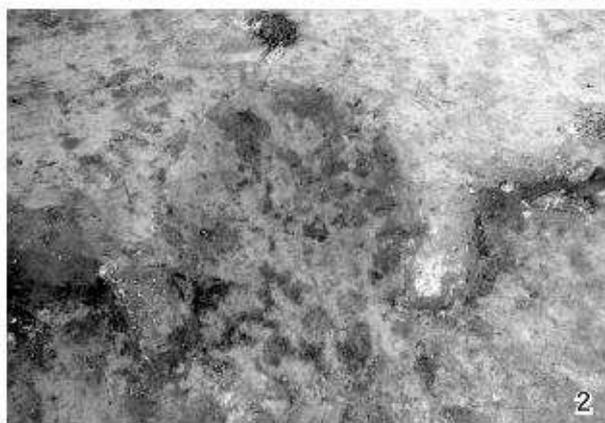


1. SI08全景 (東から)
2. SI08カマド全景 (東から)
3. SI09・10全景 (南から)
4. SI09全景 (南から)

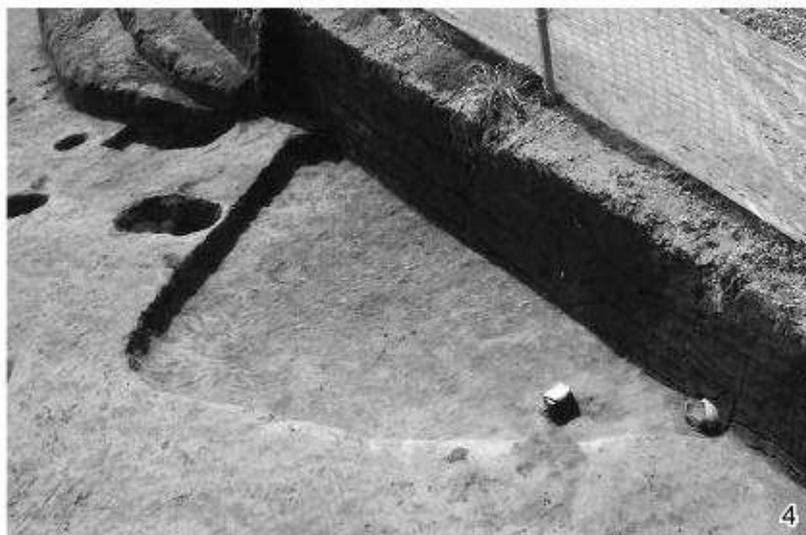


1. SI11全景 (南から)
2. SI11炉址 (南から)

3. SI11遺物出土状況
4. SI12全景 (南から)



1. SI13全景 (南から)
2. SI13カマド全景 (南から)
3. SI13出土遺物状況 (南から)
4. SI14全景 (北から)
5. SI14出土遺物状況 (南から)



1. SI15全景 (南から)
2. SI15カマド全景 (南から)
3. SI15出土遺物状況 (南から)
4. SI16全景 (北から)
5. SI16出土遺物状況 (西から)



1. SI17全景 (北から)



2. SI18全景 (西から)

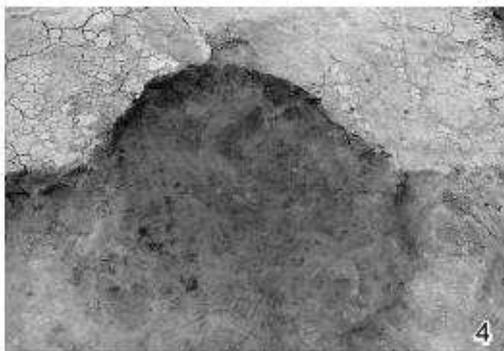


1. SI19全景 (南から)

2. SI19カマド全景 (南から)

3. SI19出土遺物状況 (南から)

4. SI20全景 (南から)

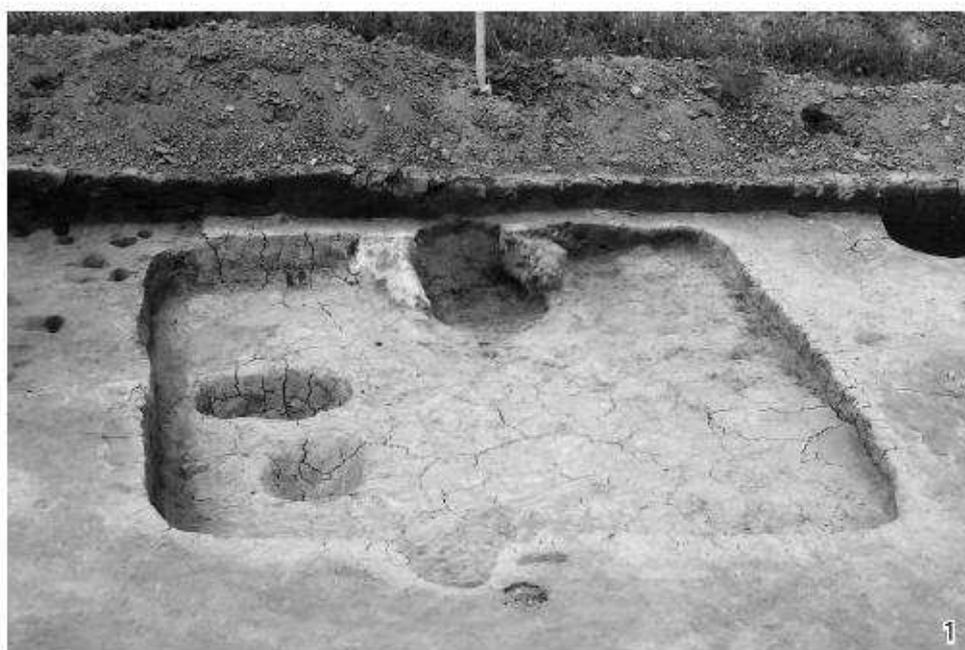


1. SI21全景 (南から)
2. SI21出土遺物状況 (西から)
3. SI22全景 (南から)
4. SI22カマド全景 (南から)



1. SI23全景 (南から)
2. SI24全景 (南から)

3. SI24出土遺物状況 (南東から)
4. SI24出土遺物状況 (南から)



1. SI25全景 (南から)
2. SI25カマド全景 (南から)
3. SI25出土遺物状況 (南から)
4. SI26全景 (南から)
5. SI26カマド全景 (南から)



1. SB01全景 (南から)
2. SB02全景 (南から)
3. SB04全景 (南から)



1. SB05全景 (南から)
2. SB06全景 (南から)
3. SB07全景 (北から)



1. SB07全景 (北から)
2. SB07柱穴 (P3) (西から)
3. SB07柱穴 (P8) (南から)
4. SB07柱穴 (P4) (南から)
5. SB07柱穴 (P10) (西から)
6. SB08全景 (南から)

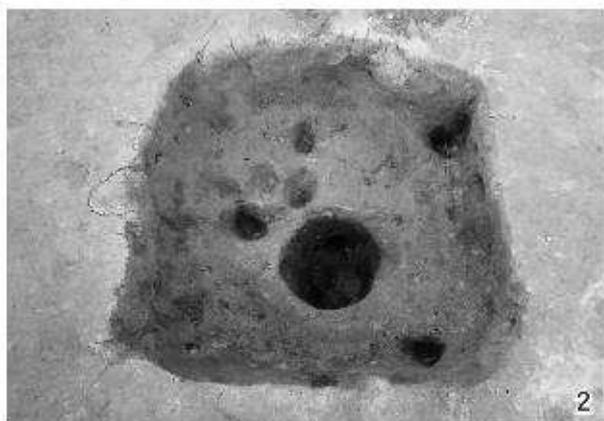


1. SB08全景 (南から)
2. SB08柱穴 (P1) (南から)

3. SB08柱穴 (P5) (南から)
4. SB09全景 (南から)



1. SB10全景 (北から)
2. SB11全景 (西から)
3. SB12全景 (南東から)

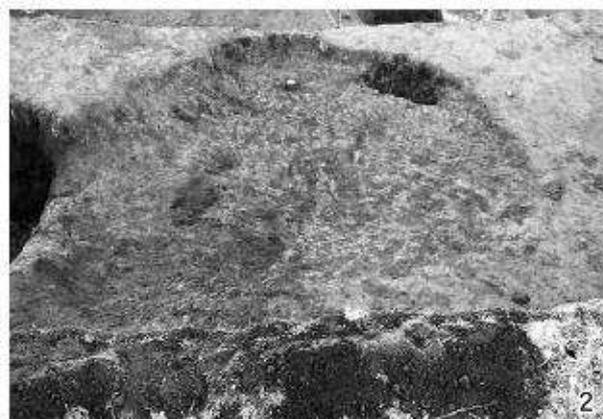
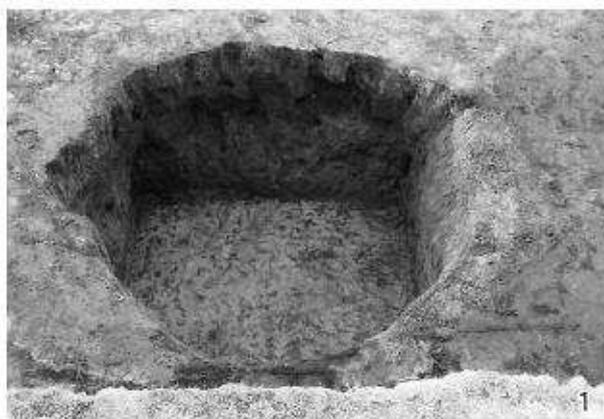


1. SB13全景 (東から) 3. SB13柱穴 (P3) (西から)
 2. SB13柱穴 (P2) (南西から) 4. SB14全景 (西から)



1. SB15全景 (西から)
2. SB16全景 (南から)

3. SE01全景 (南から)
4. SE02全景 (南から)

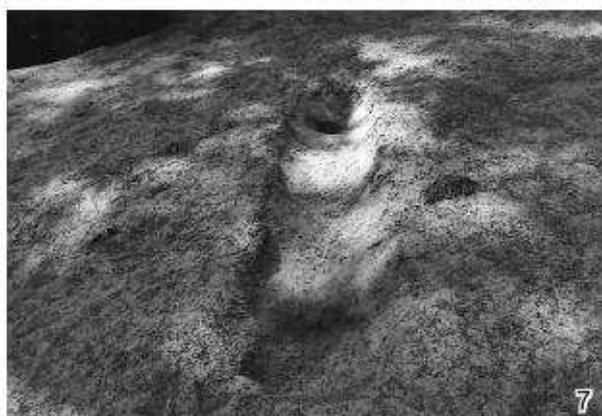


1. SX01全景 (南から) 4. SX04全景 (南から)
2. SX02全景 (南から) 5. SX05全景 (南から)
3. SX03全景 (南から) 6. SX06全景 (南から)

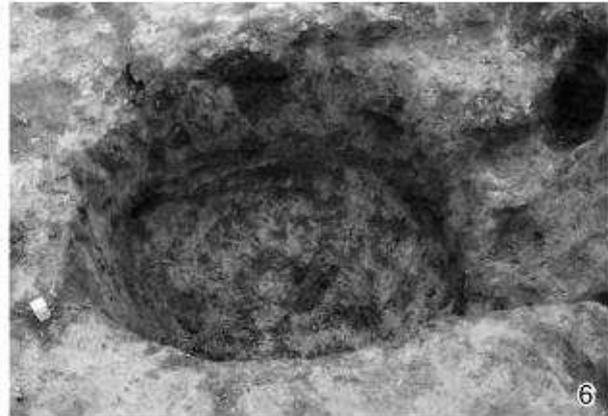
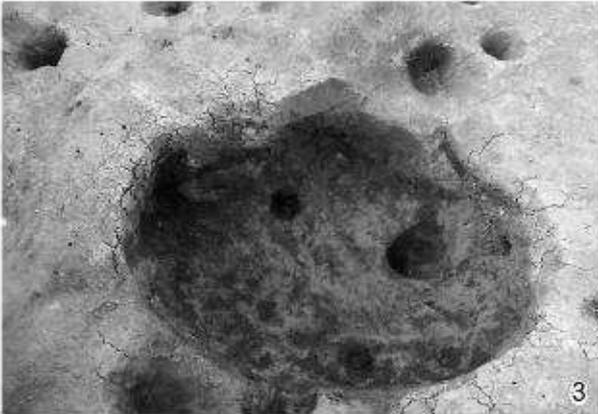
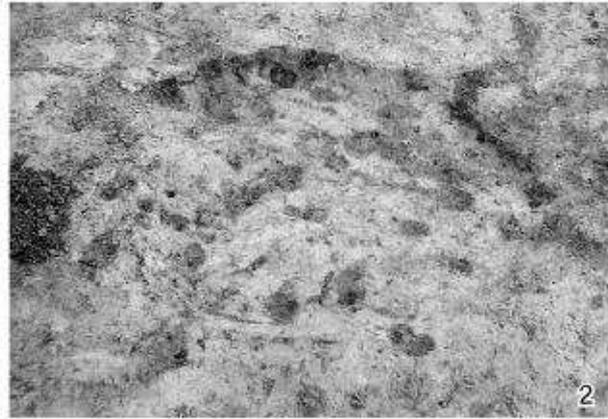
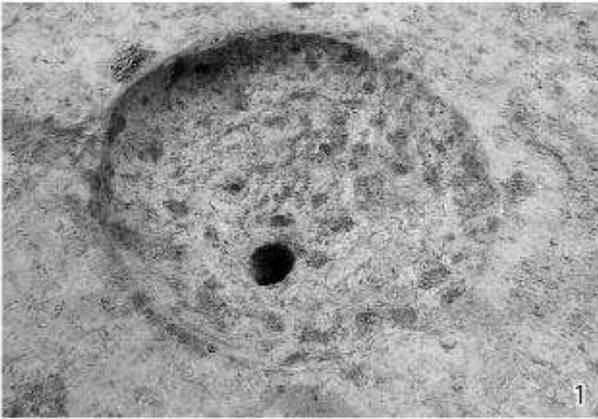
7. SX07全景 (北から)
8. SX08全景 (北から)



1. SX09全景 (南から) 4~8. SD03全景
2. SX10全景 (南から)
3. SX11全景 (東から)



1. SD02全景 (南から) 4. SD05全景 (南から) 7. SD08全景 (南から)
 2. SD03全景 (南から) 5. SD06全景 (南から) 8. SD09全景 (南から)
 3. SD04全景 (南から) 6. SD07全景 (南から)



1. SK01全景 (南から)
2. SK02全景 (南から)
3. SK03全景 (南から)

4. SK12全景 (南から)
5. SK12出土遺物状況 (南から)
6. SK15全景 (南から)

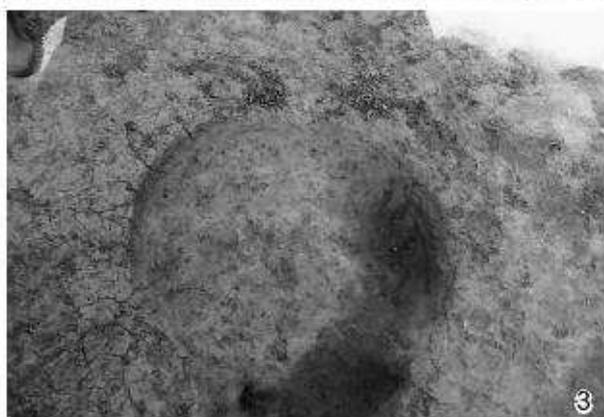
7. SK20全景 (南から)
8. SK21・22全景 (南から)



1



2



3



4



5



6

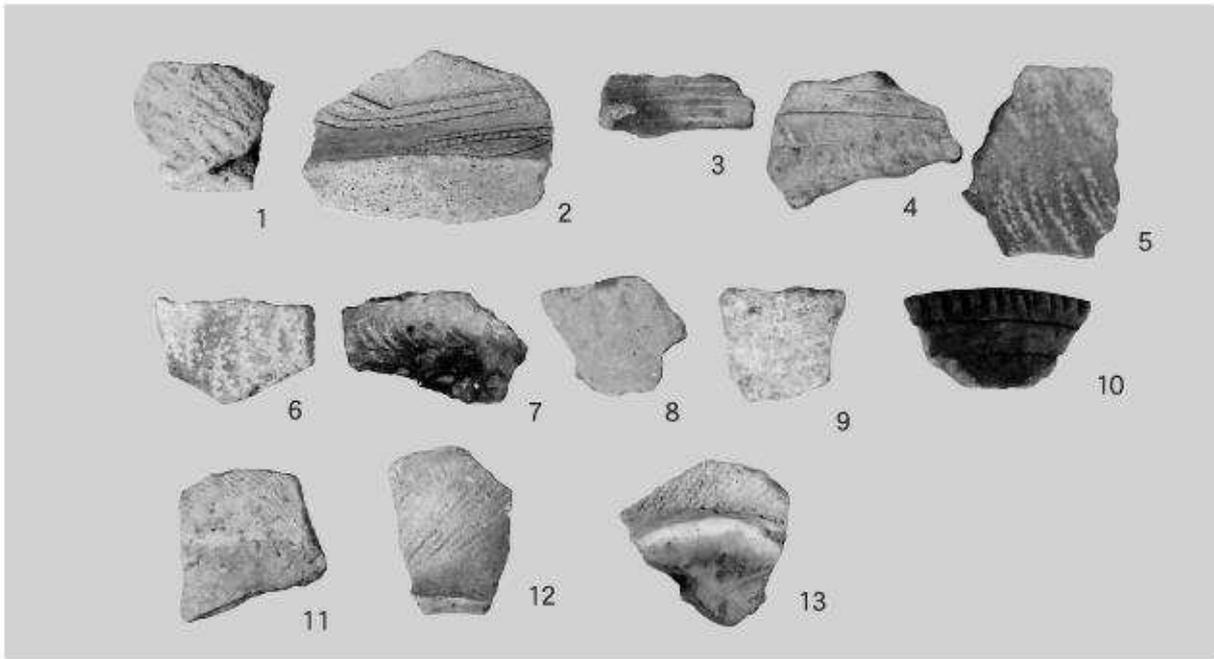


7

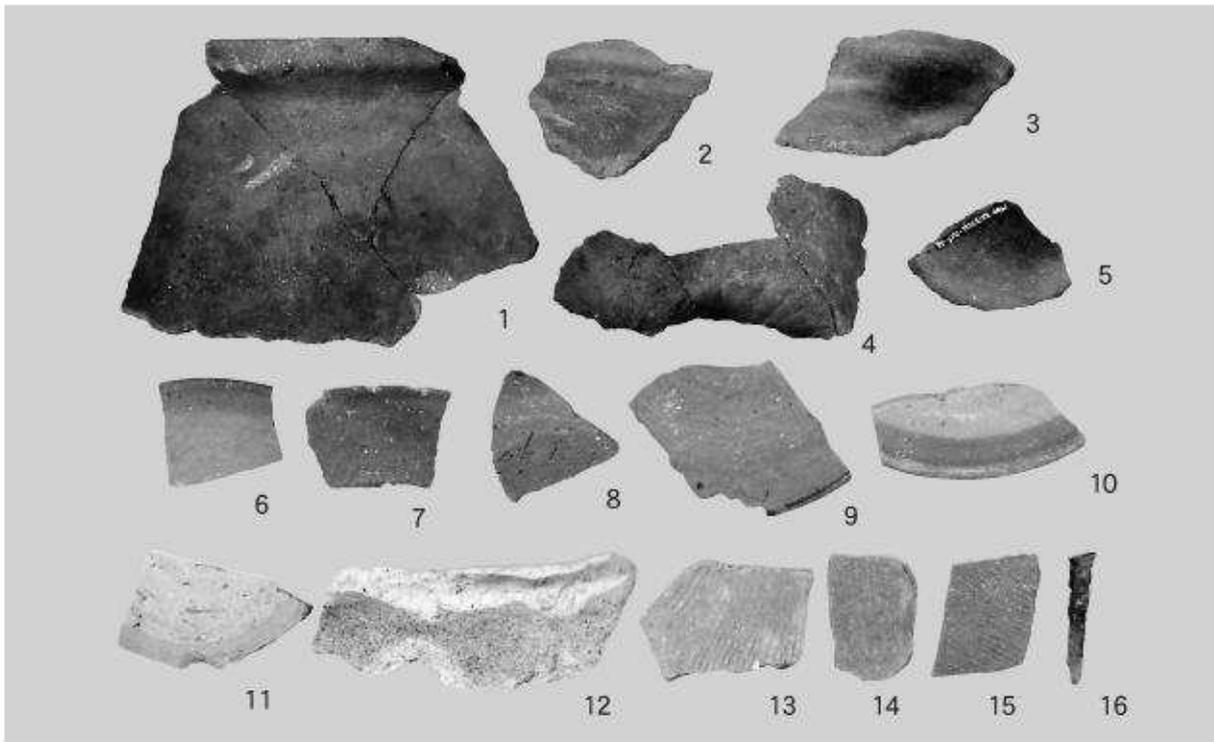


8

1. SK23全景(南から) 4. A区トレンチ(南から) 7. C区トレンチ土層(北から)
 2. SK26全景(南から) 5. C区トレンチ(1T)(北から) 8. D区埋没谷土層(南東から)
 3. SK27全景(南から) 6. C区トレンチ(2T)(西から)



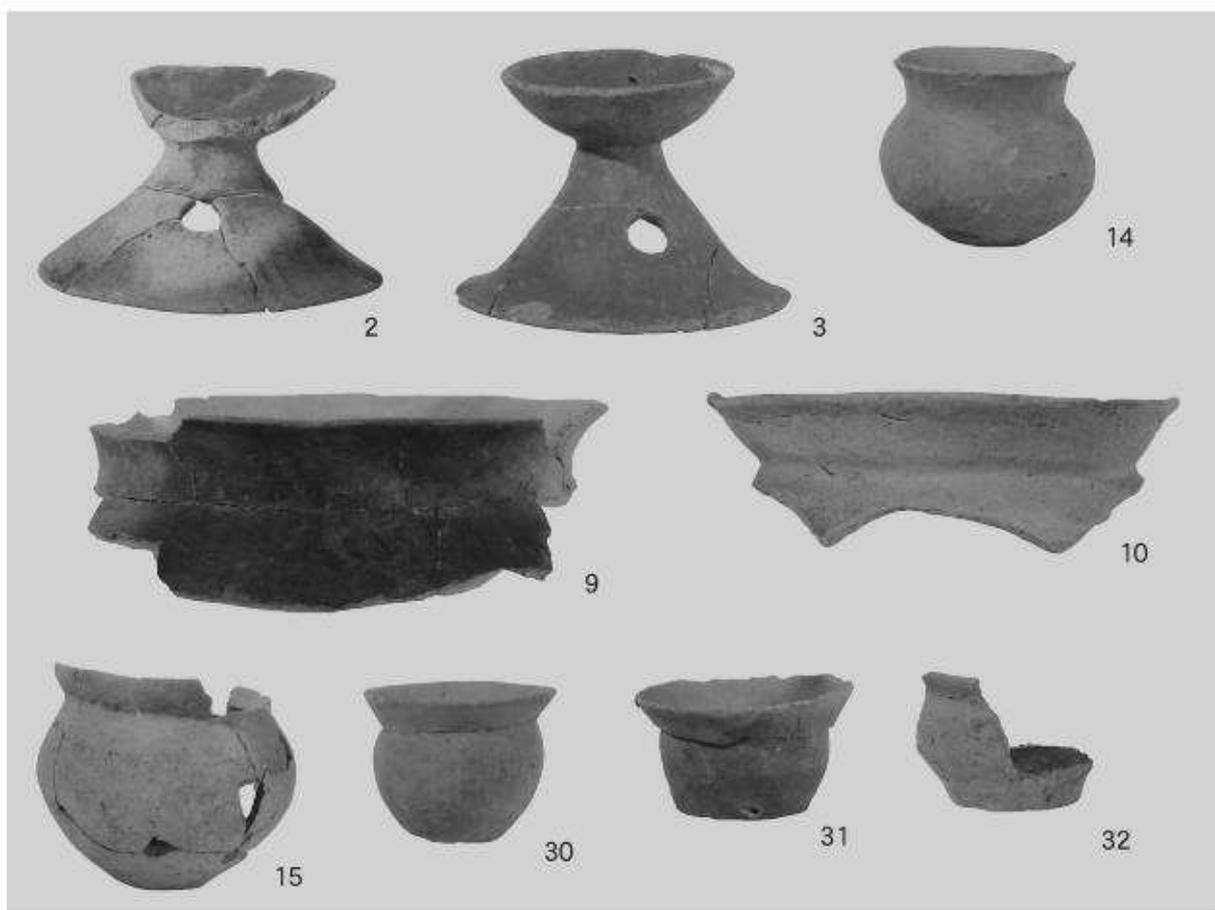
1. 遺構外出土縄文土器・弥生土器



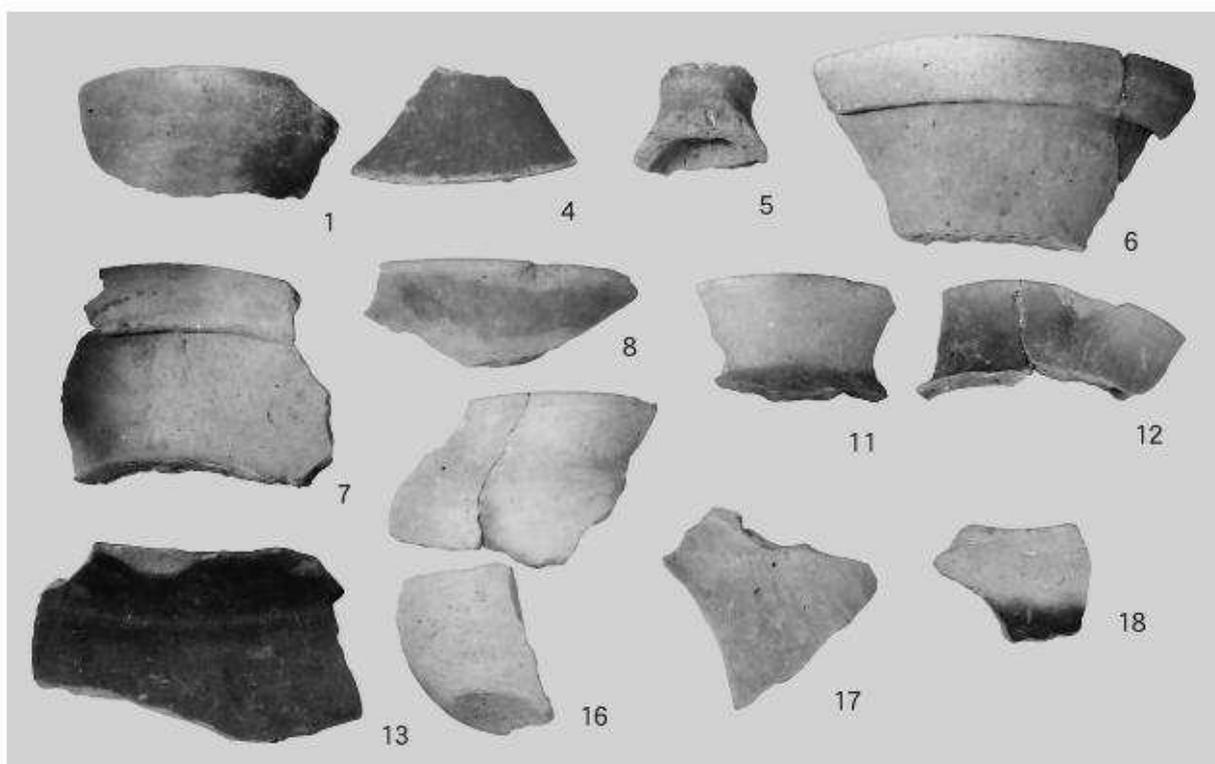
2. SI01出土遺物



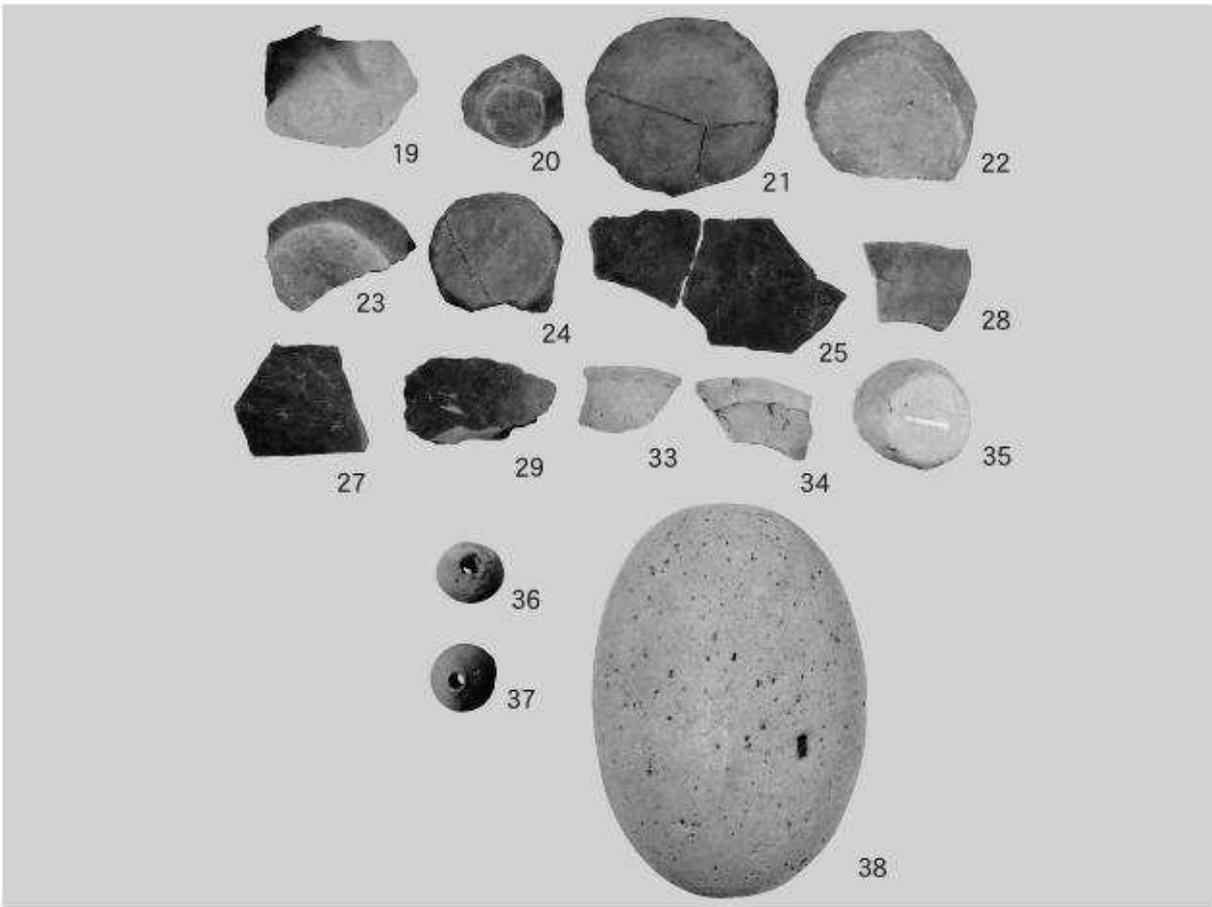
3. SI02出土遺物



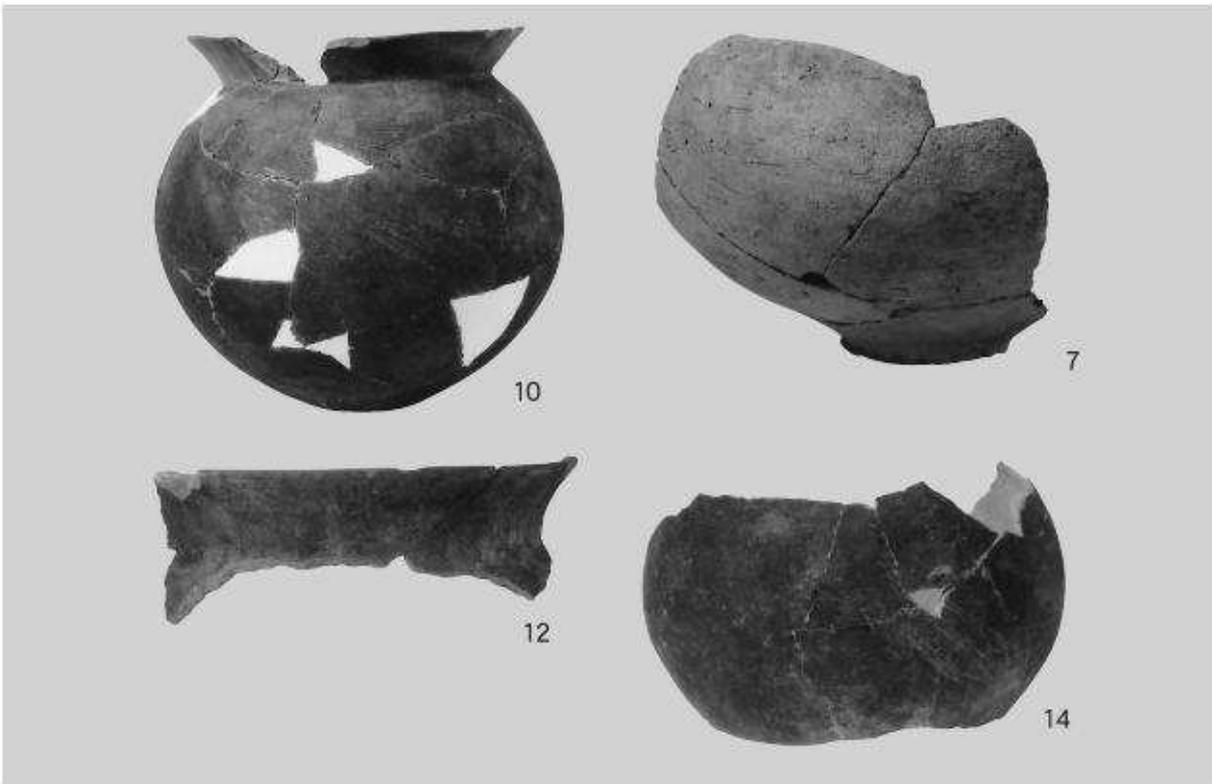
1. SI03出土遺物 (1)



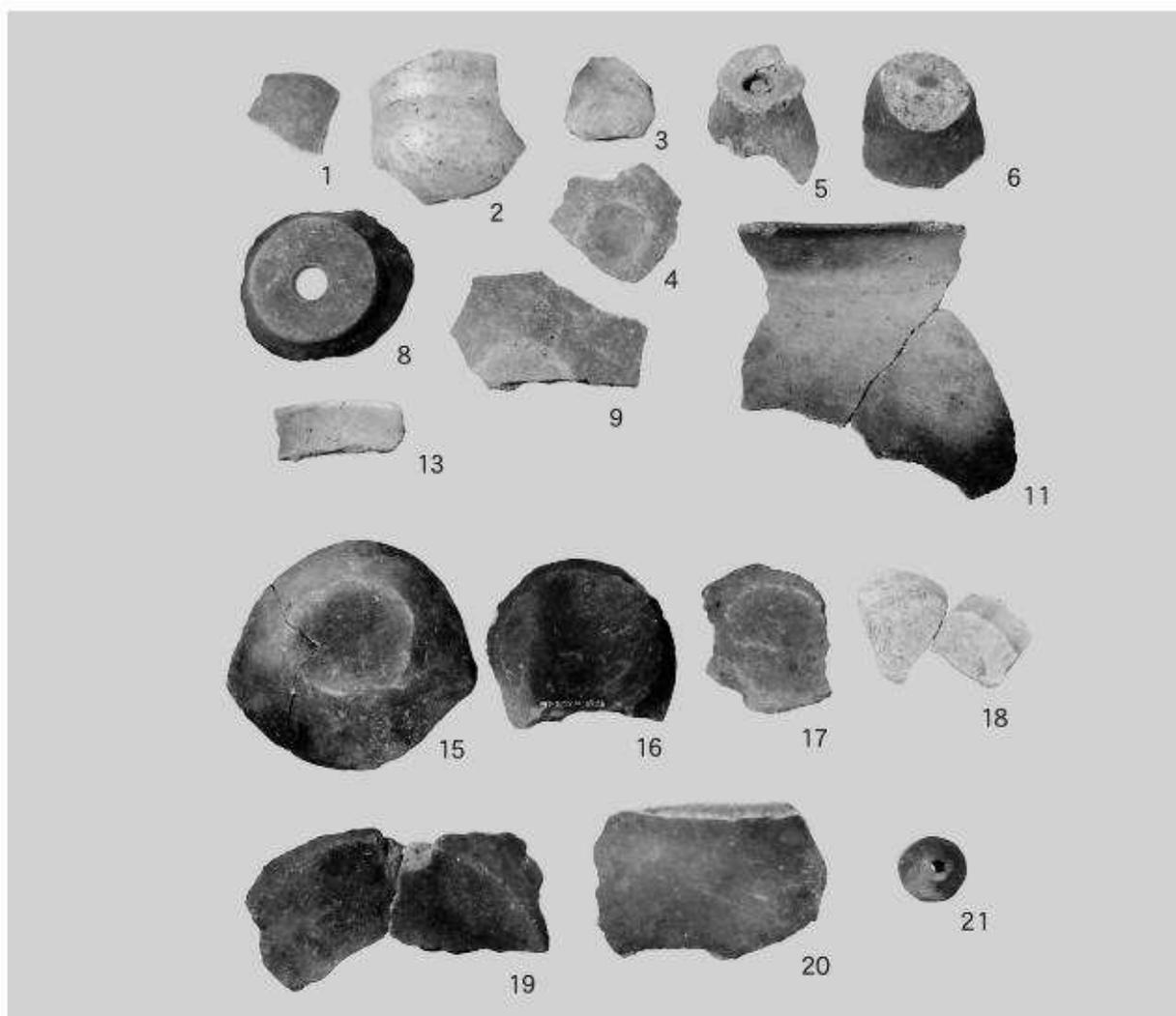
2. SI03出土遺物 (2)



1. SI03出土遺物 (3)



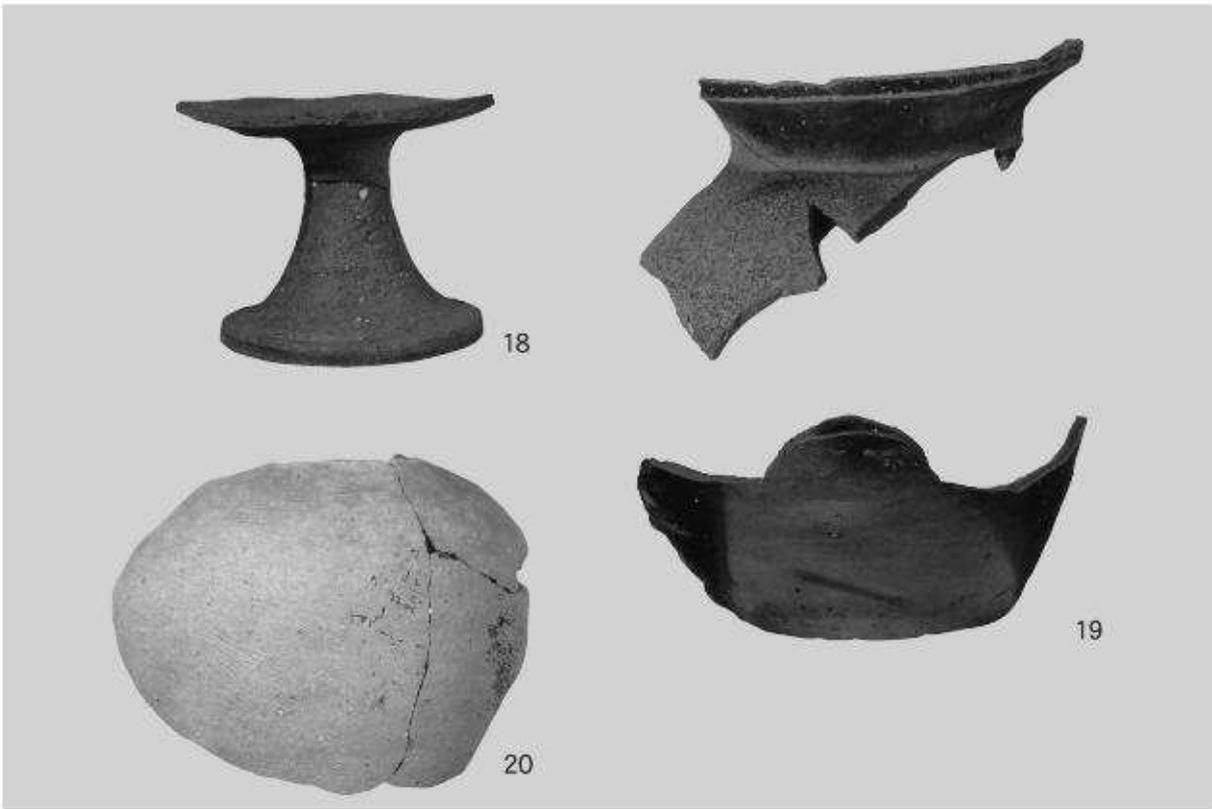
2. SI04出土遺物 (1)



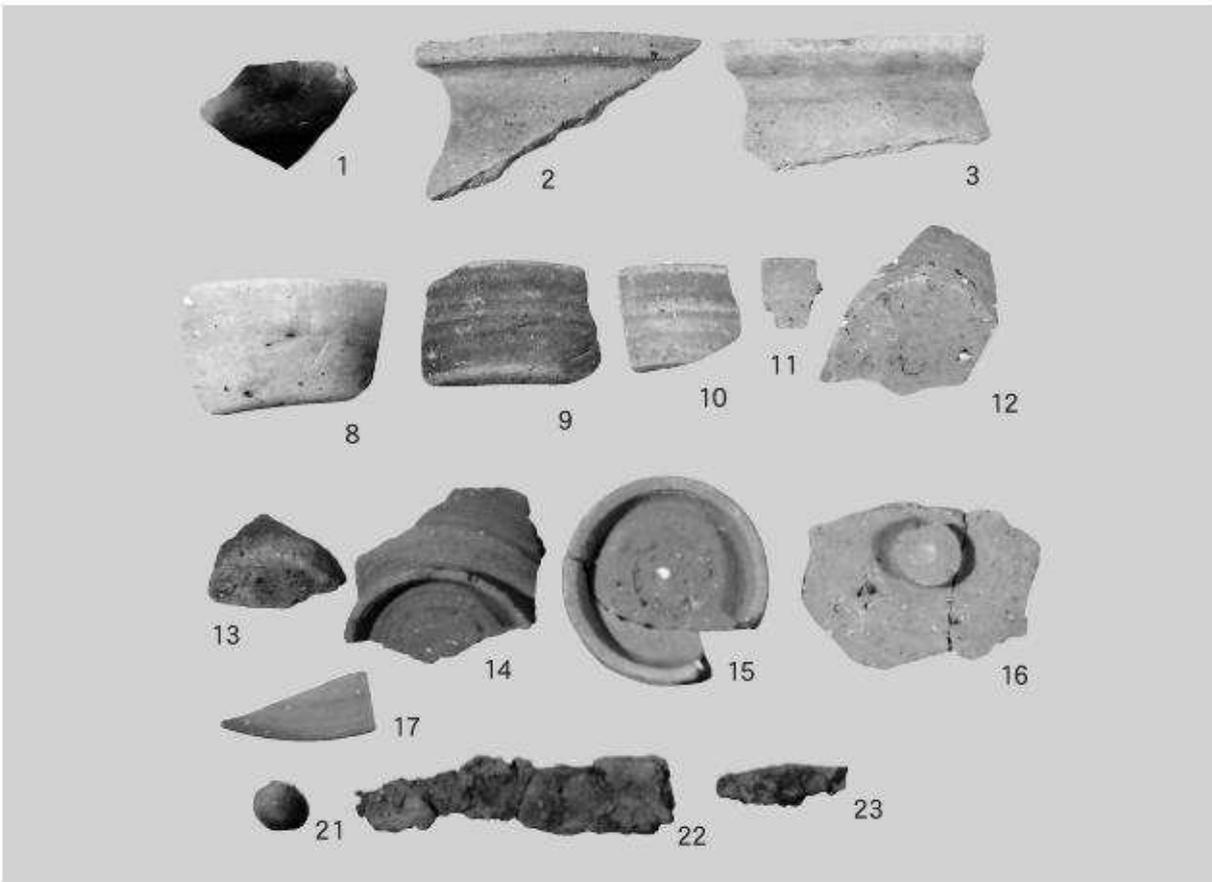
1. SI04出土遺物 (2)



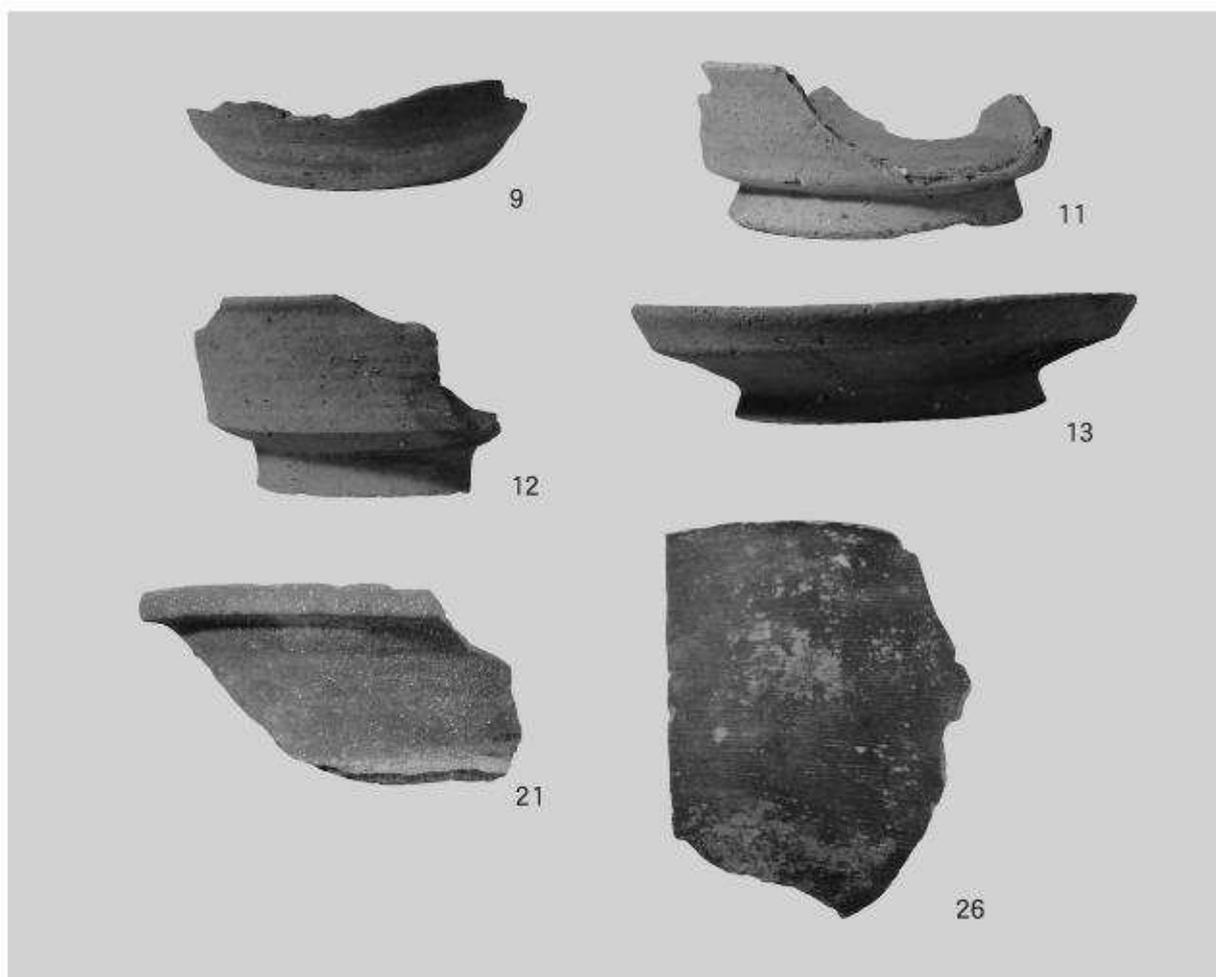
2. SI05出土遺物 (1)



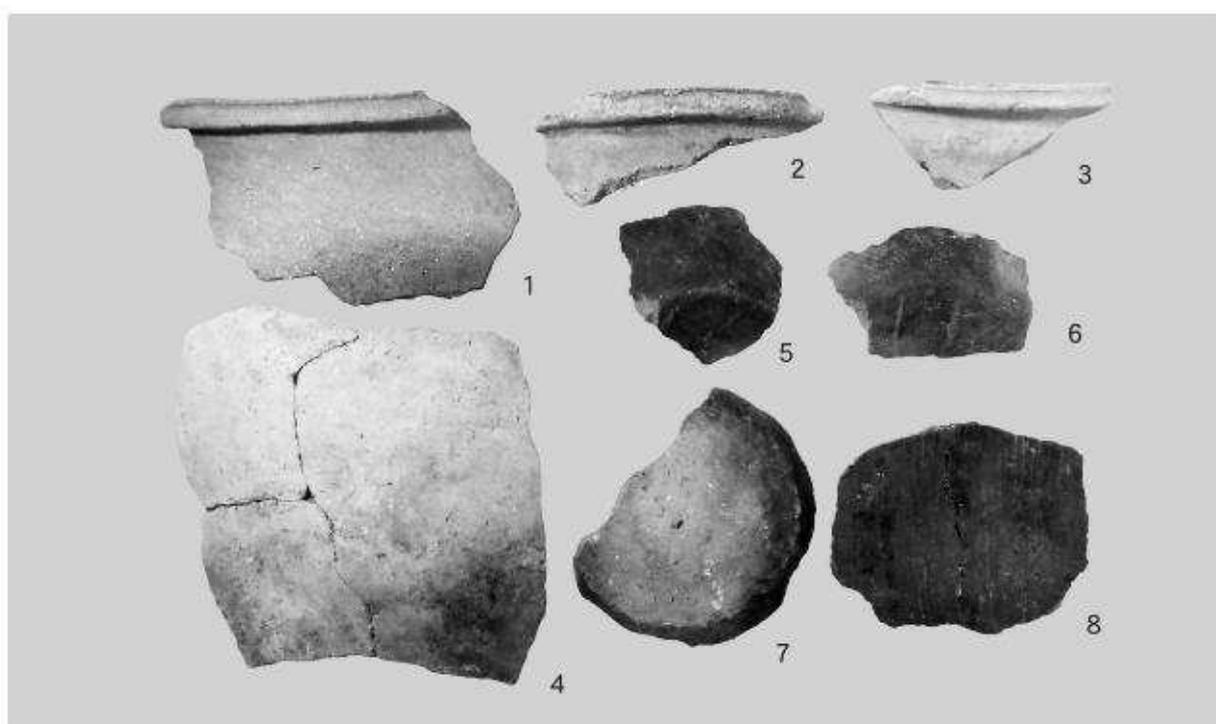
1. SI05出土遺物 (2)



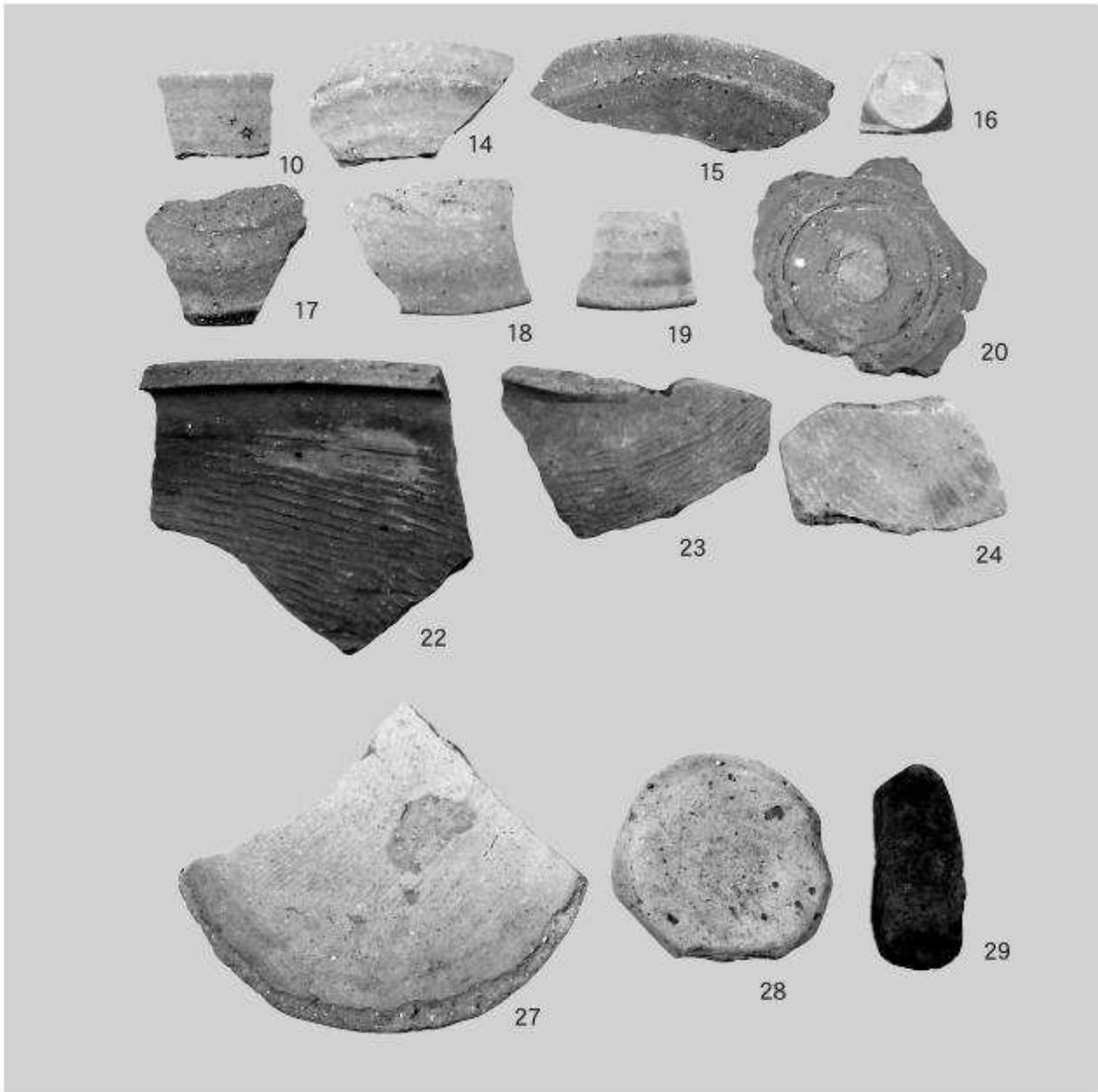
1. SI05出土遺物 (3)



1. SI06出土遺物 (1)



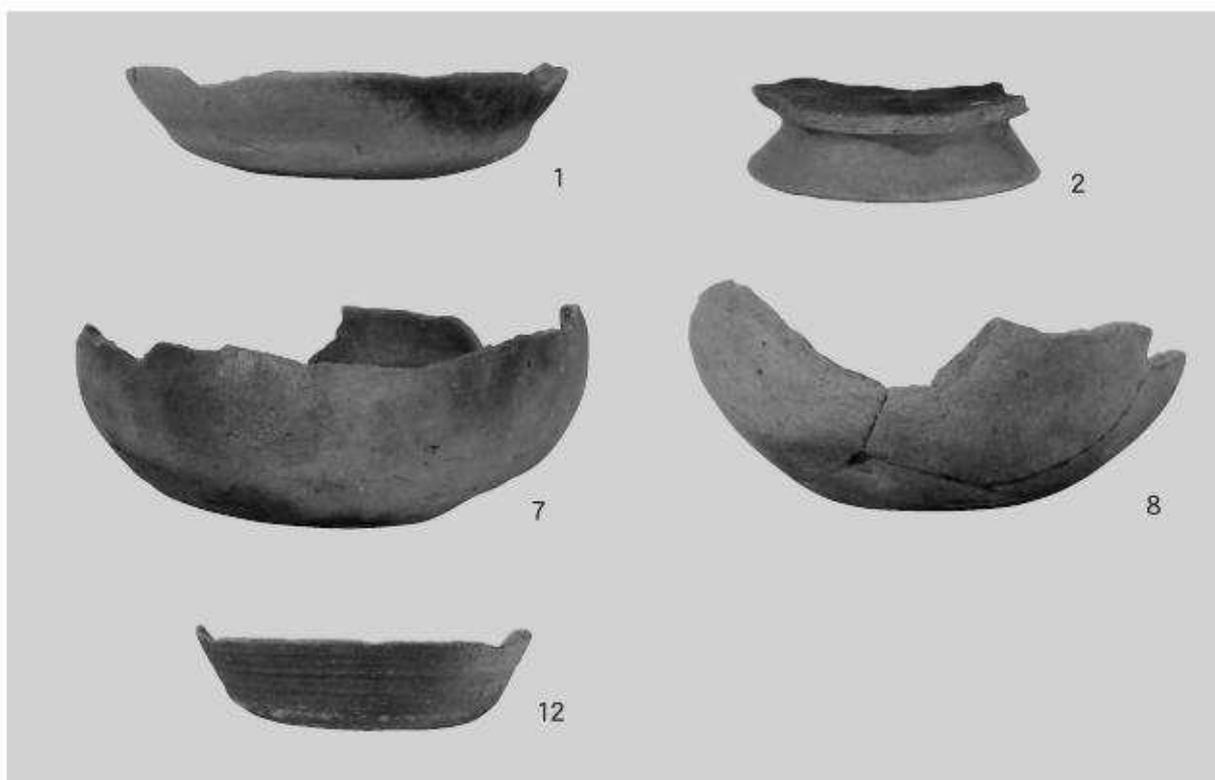
2. SI06出土遺物 (2)



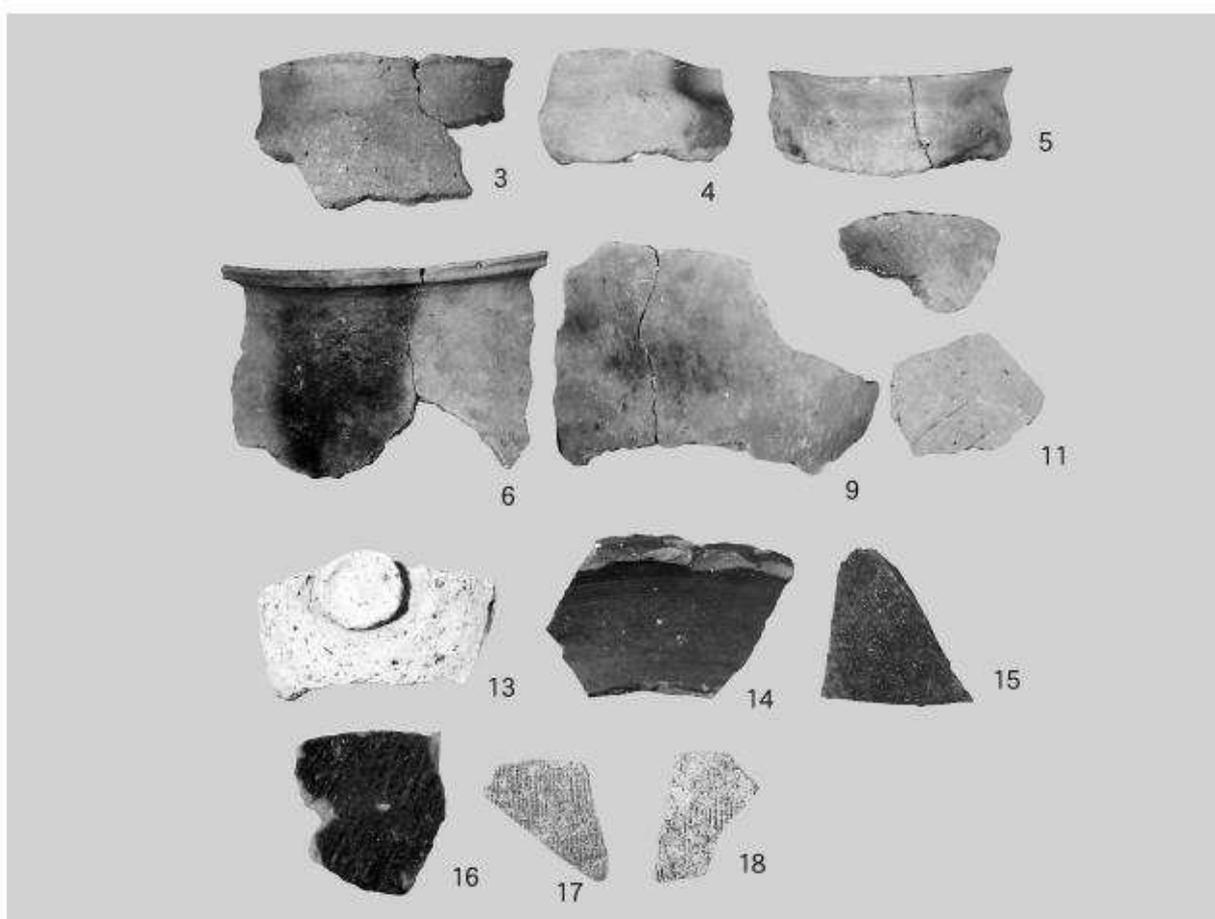
1. SI06出土遺物 (3)



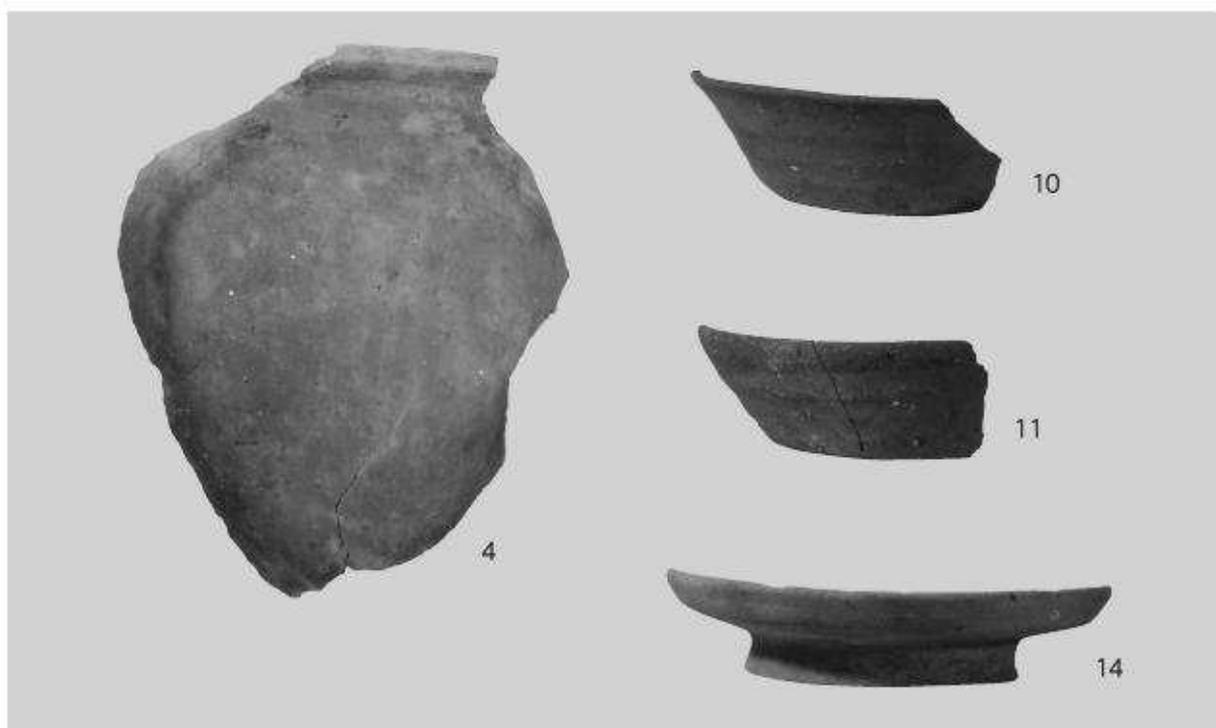
2. SI07出土遺物



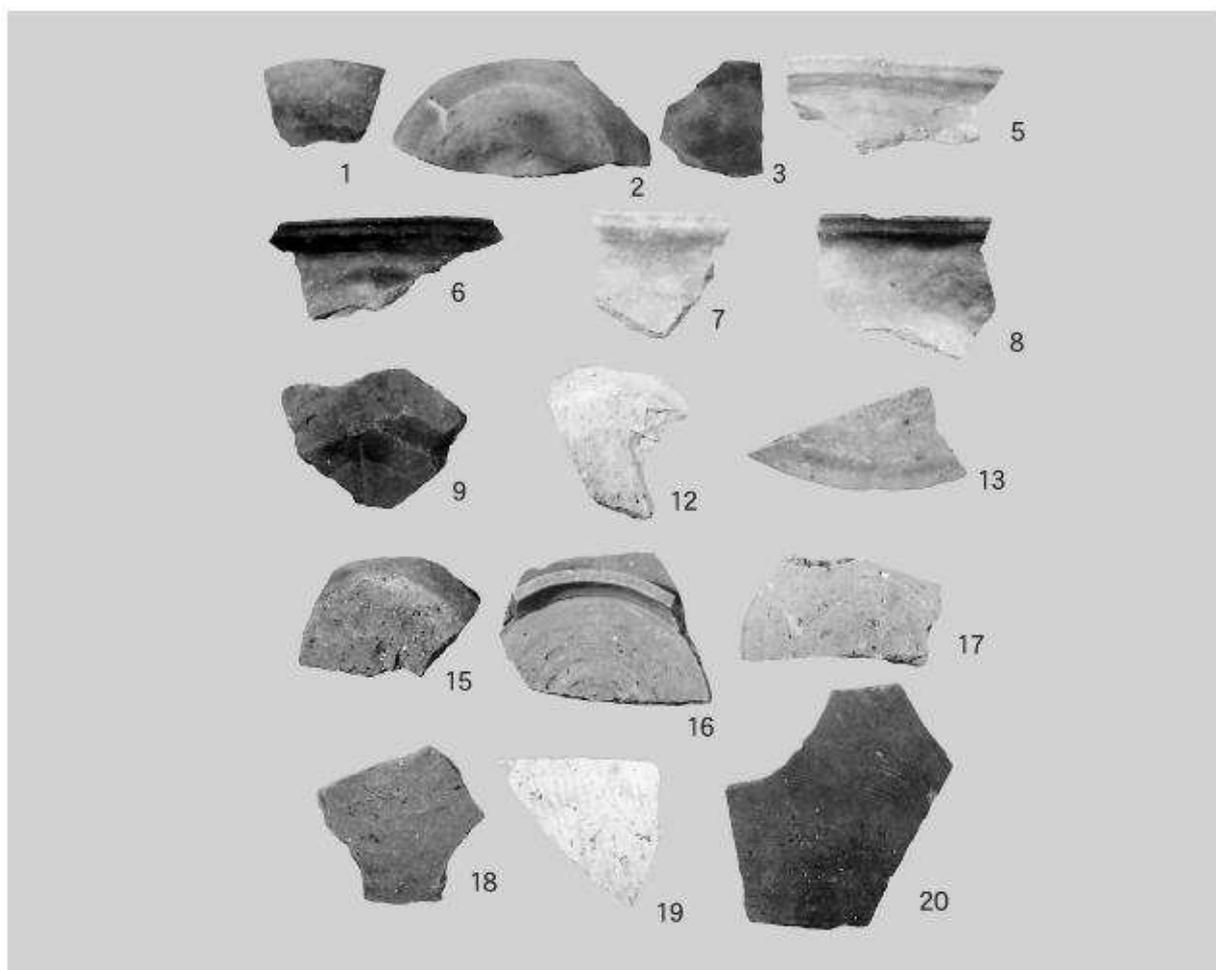
1. SI08出土遺物 (1)



2. SI08出土遺物 (2)



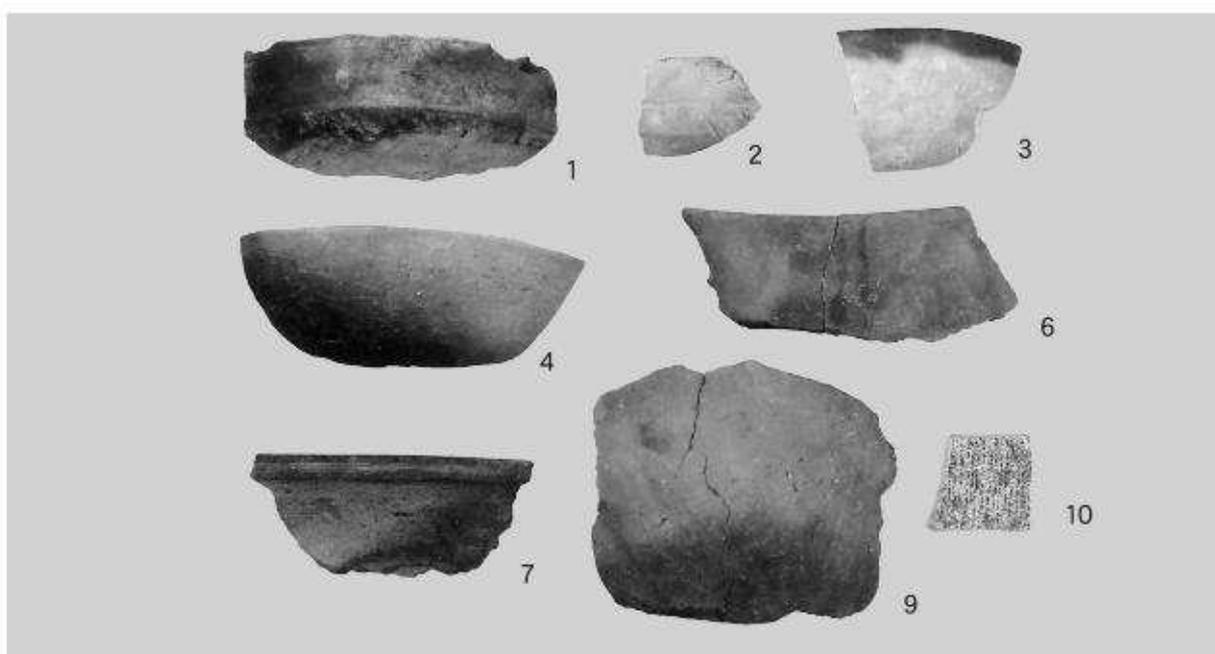
1. SI09出土遺物 (1)



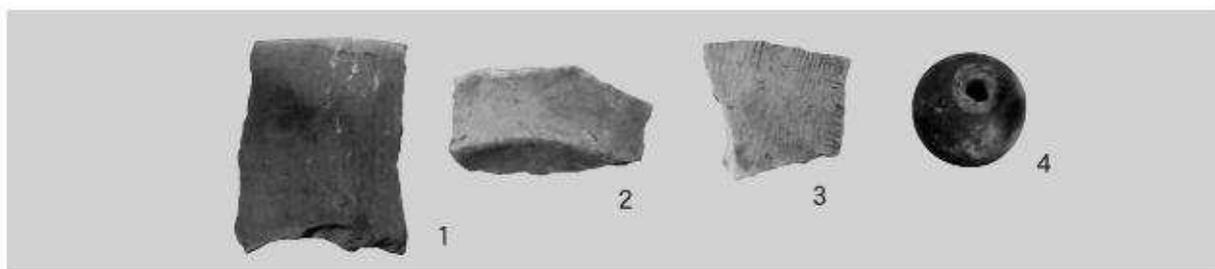
2. SI09出土遺物 (2)



1. SI10出土遺物 (1)



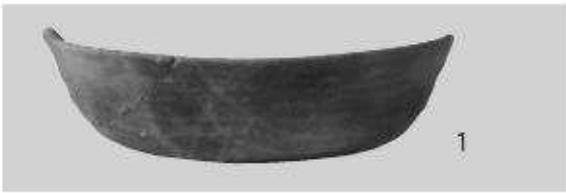
2. SI10出土遺物 (2)



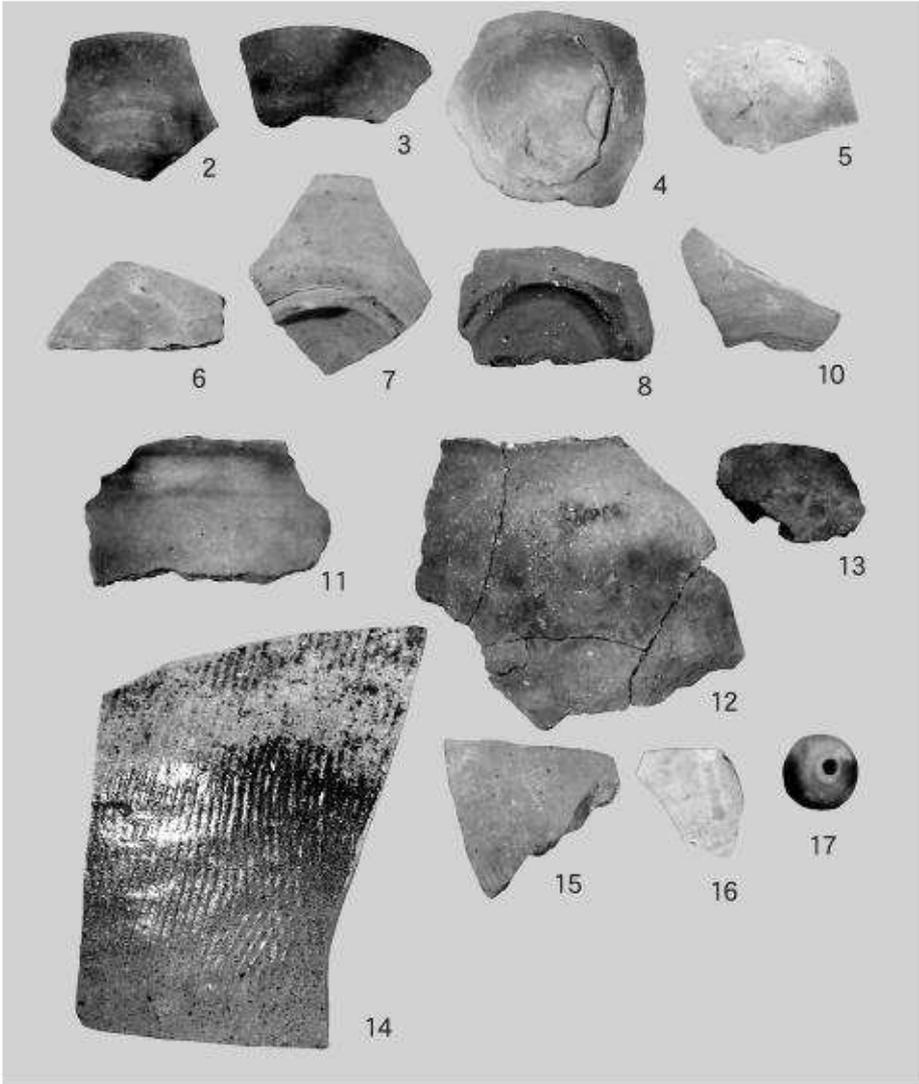
3. SI11出土遺物



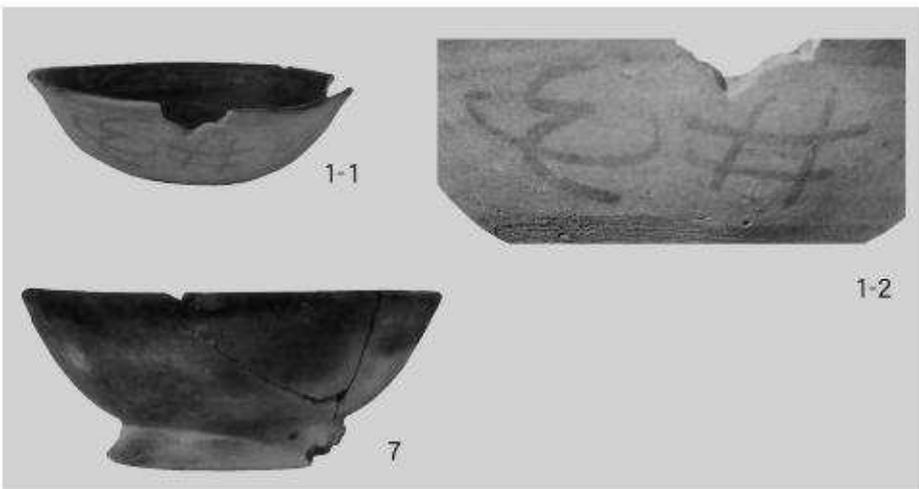
4. SI12出土遺物



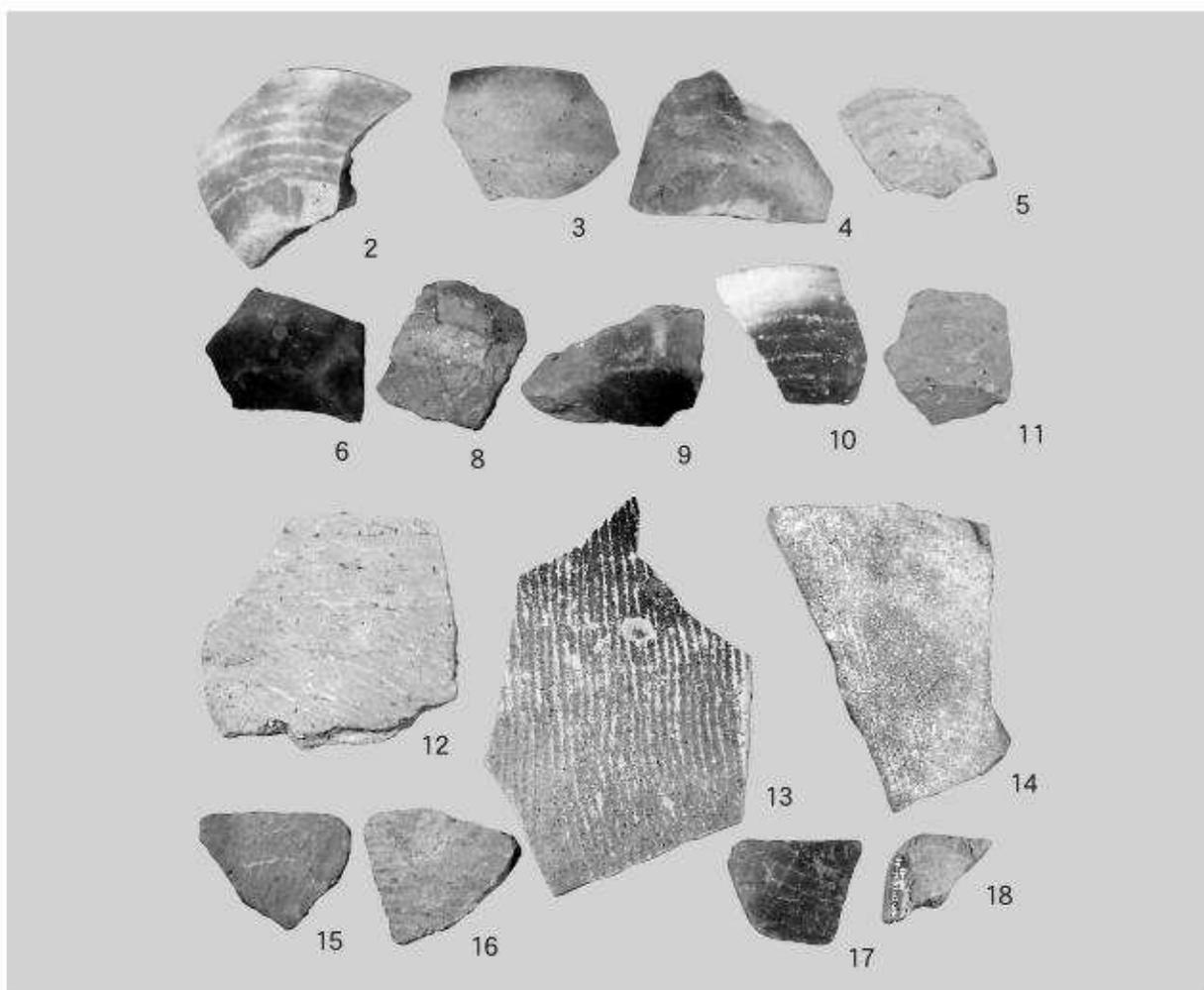
1. SI13出土遺物 (1)



2. SI13出土遺物 (2)



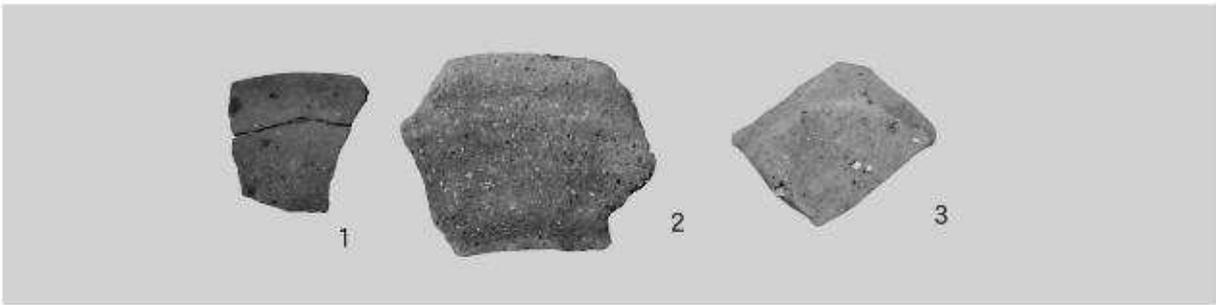
3. SI14出土遺物 (1)



1. SI14出土遺物 (2)



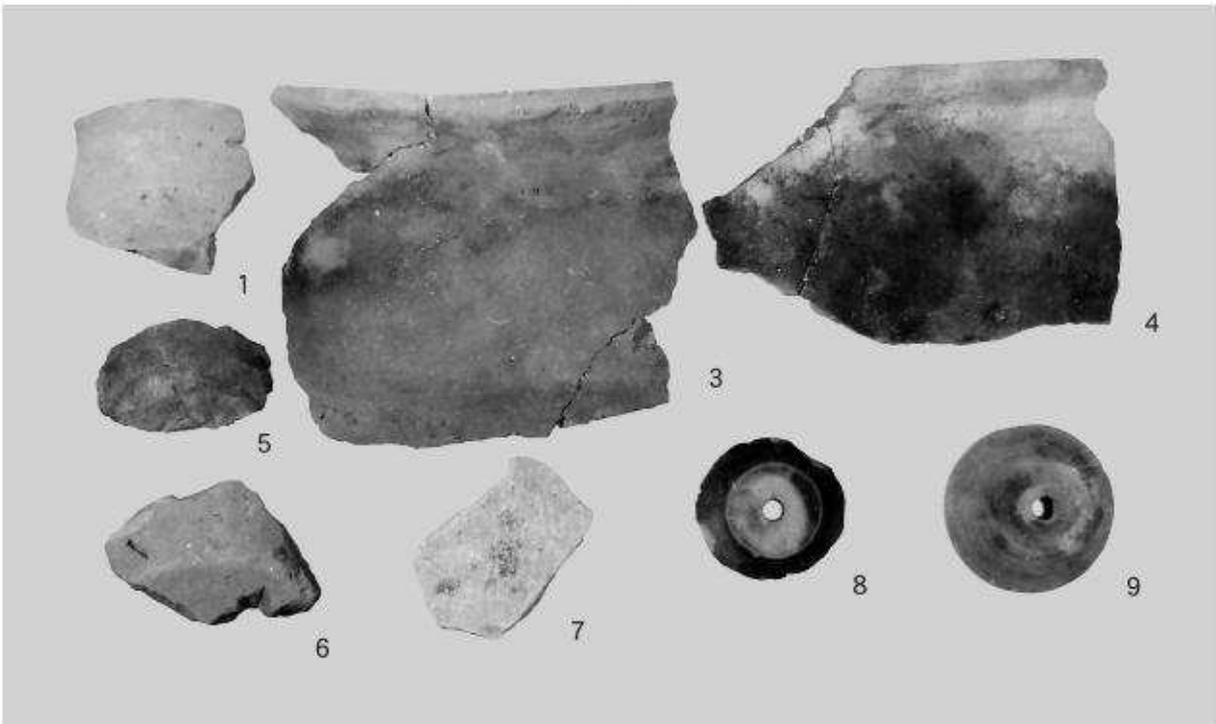
2. SI15出土遺物 (1)



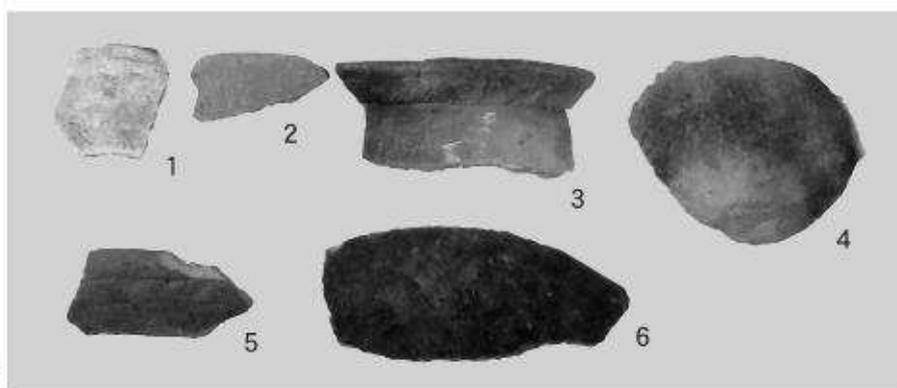
1. SI15出土遺物 (2)



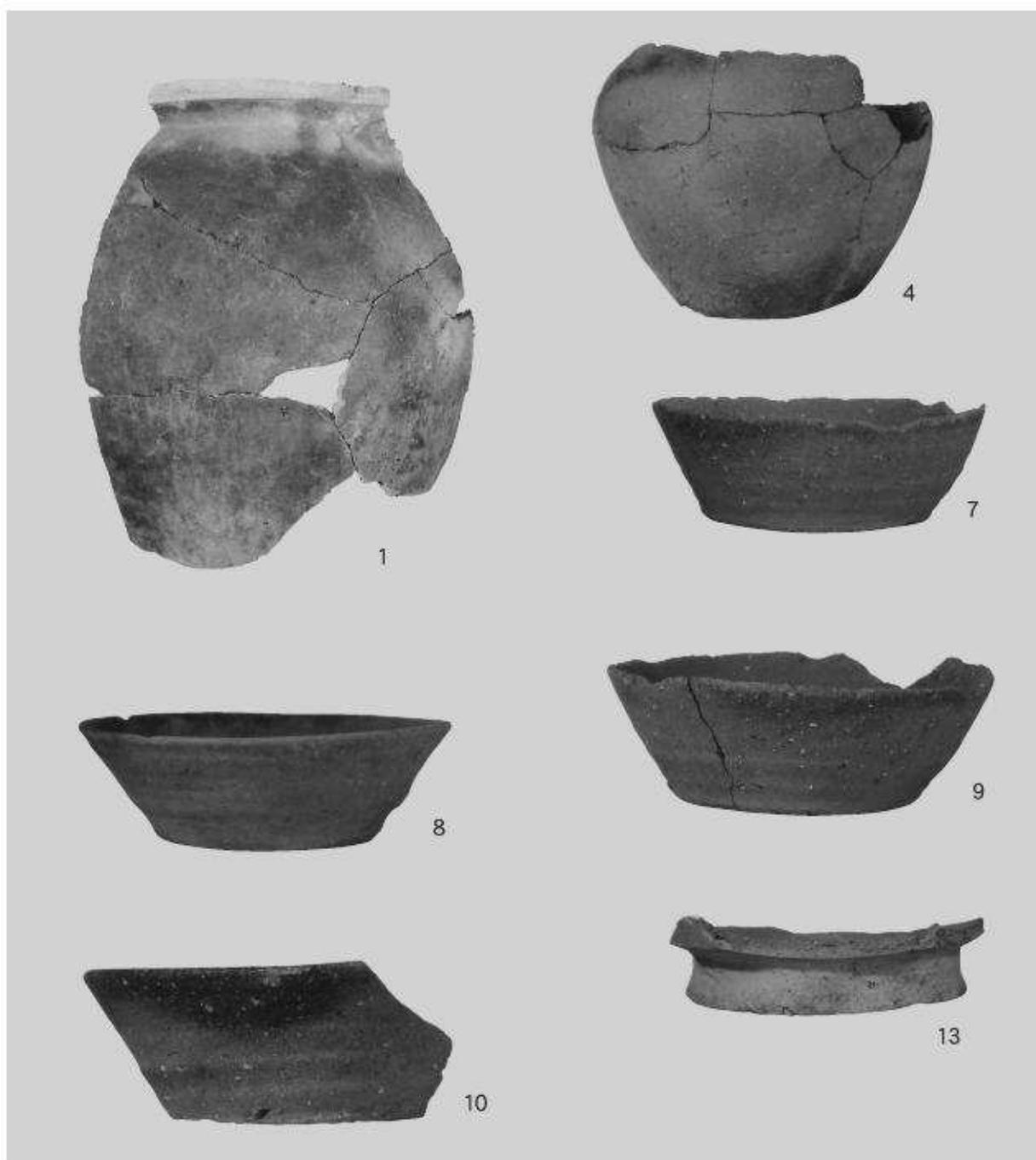
2. SI16出土遺物 (1)



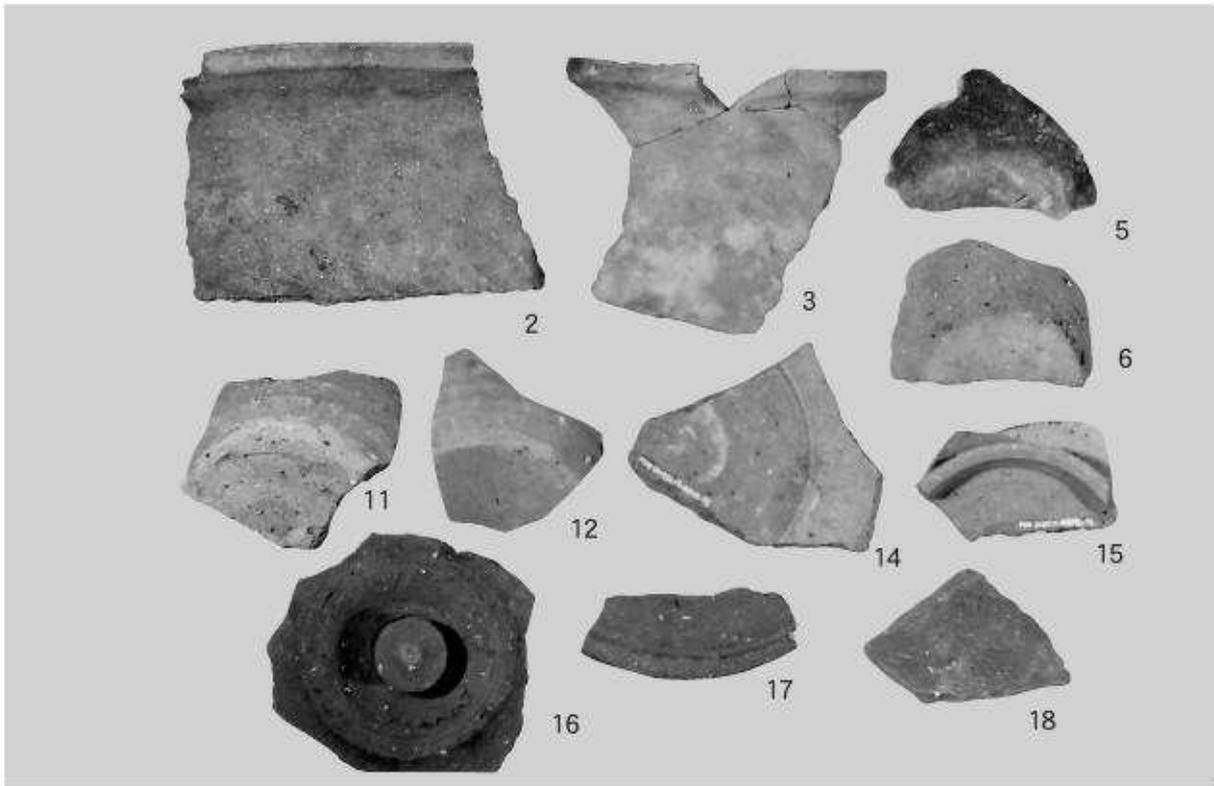
3. SI16出土遺物 (2)



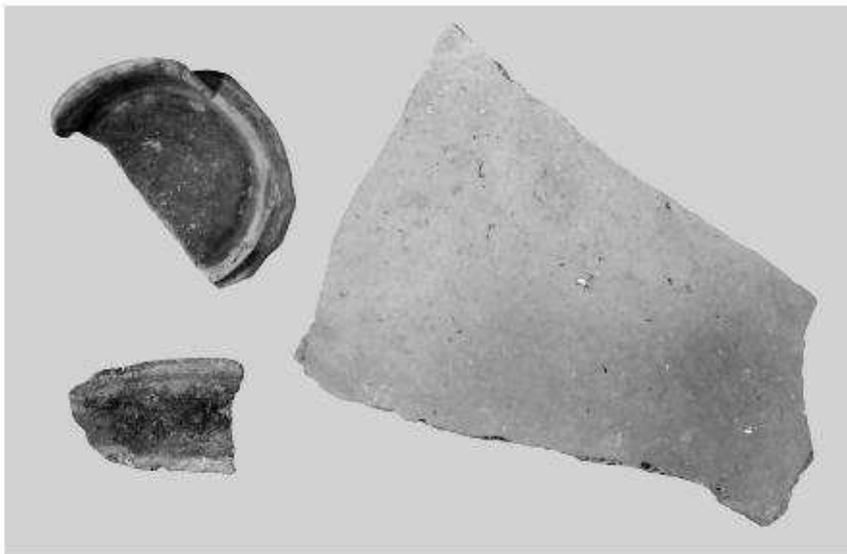
1. SI18出土遺物



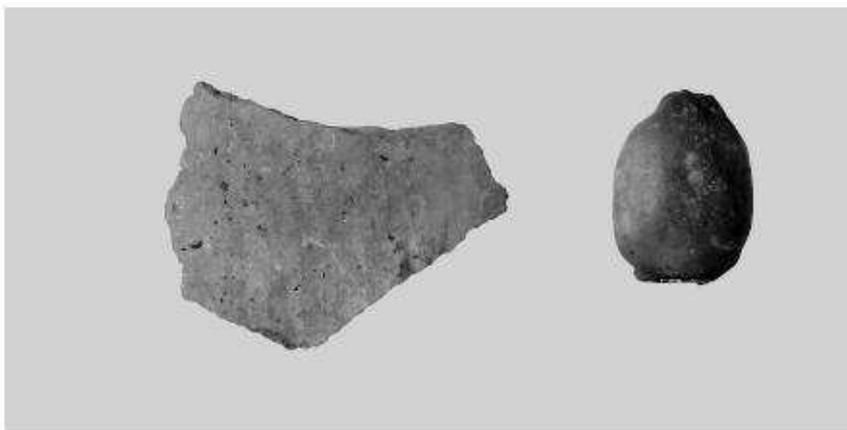
2. SI19出土遺物 (1)



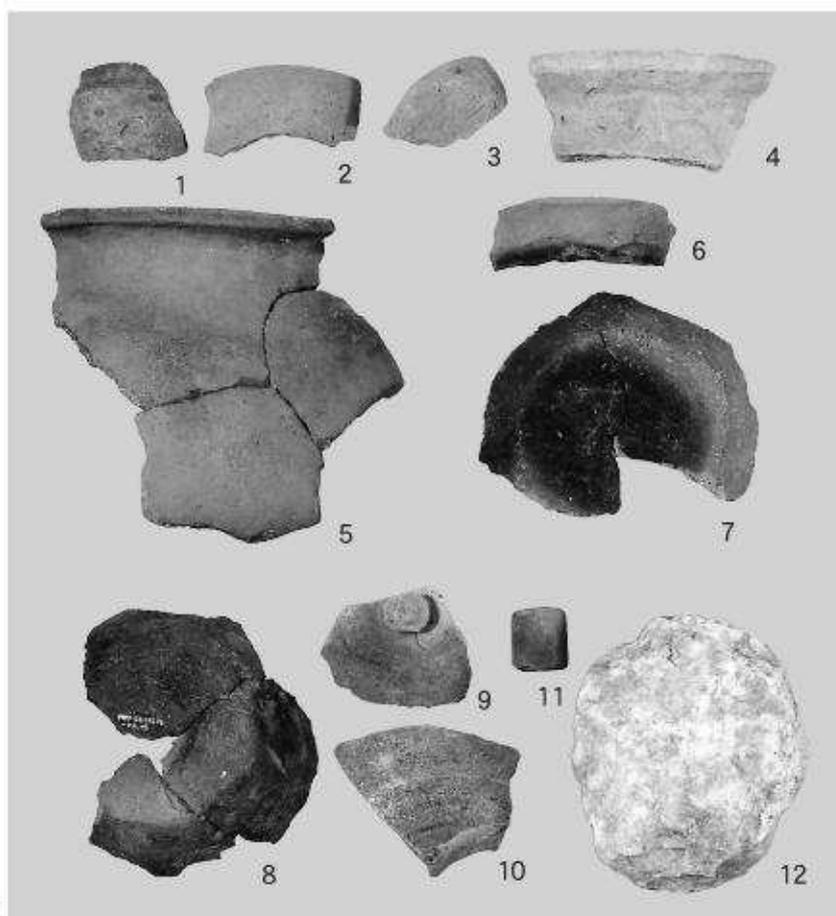
1. SI19出土遺物 (2)



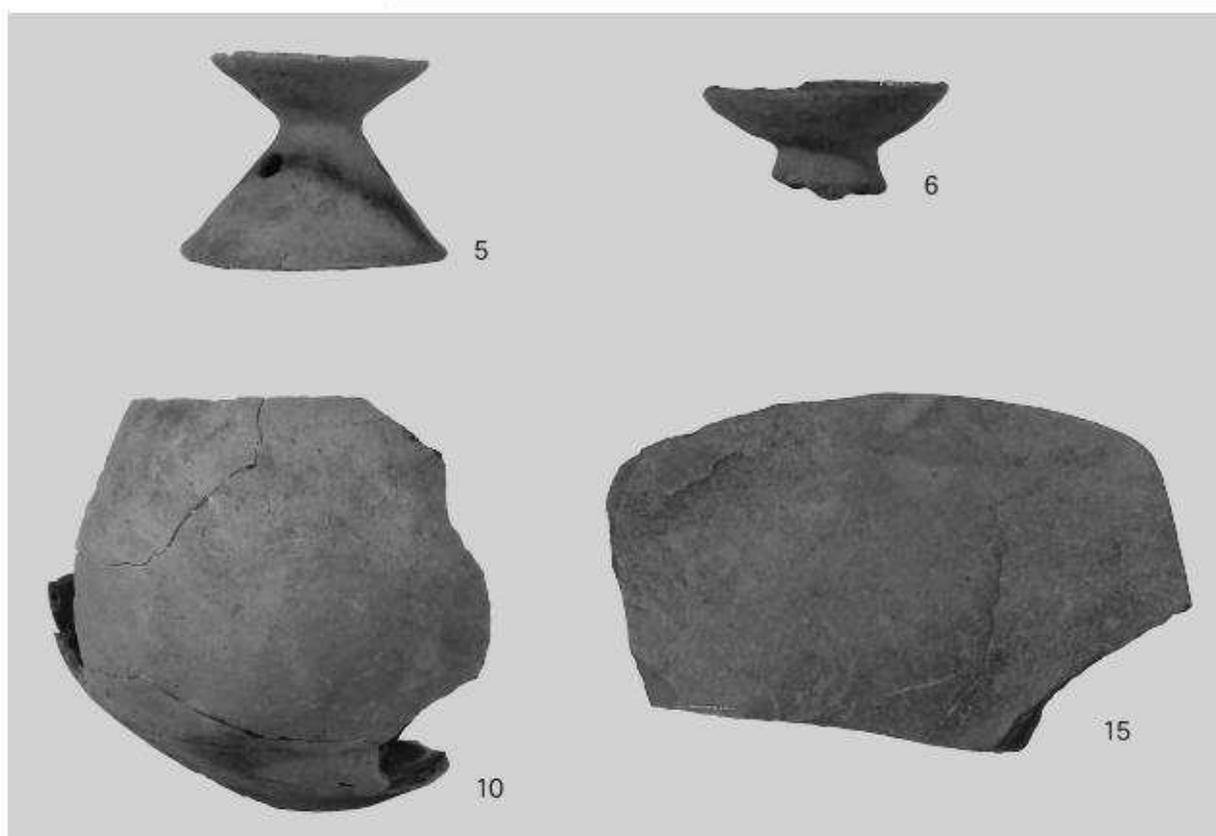
2. SI21出土遺物



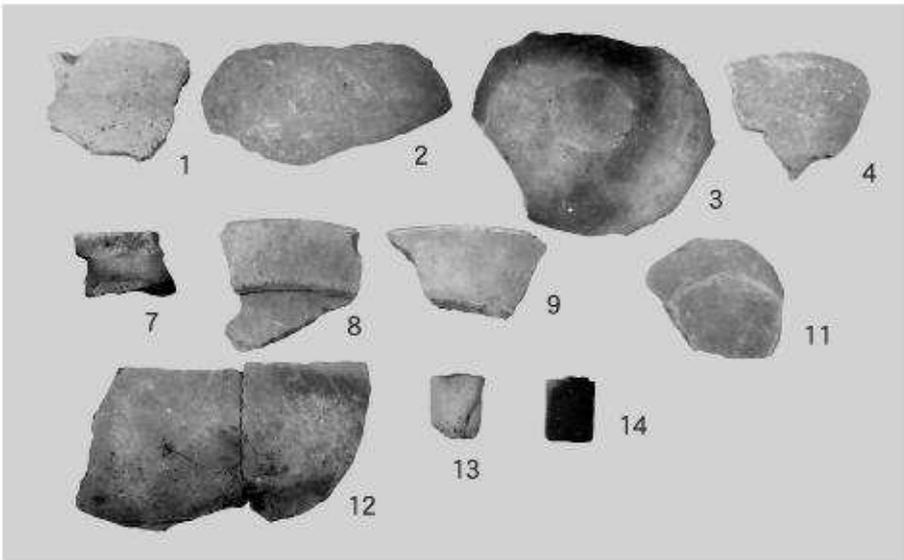
3. SI22出土遺物



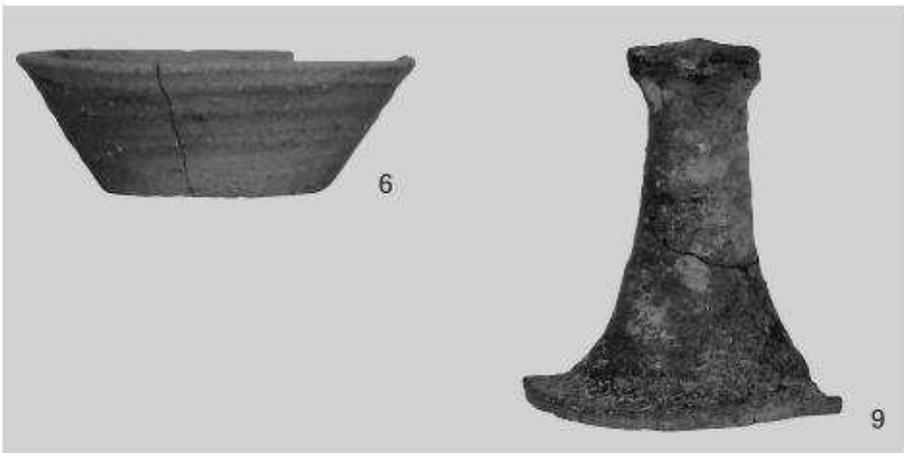
1. SI23出土遺物



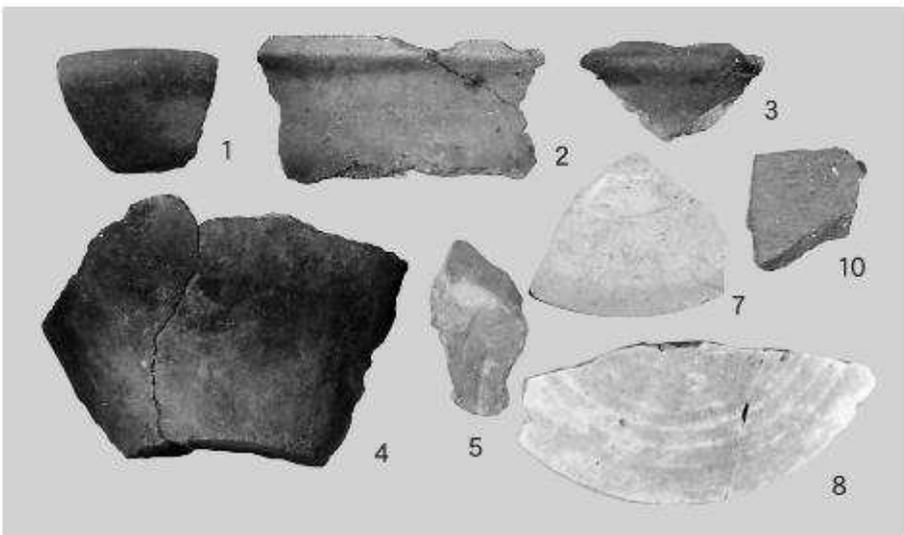
2. SI24出土遺物 (1)



1. SI24出土遺物 (2)



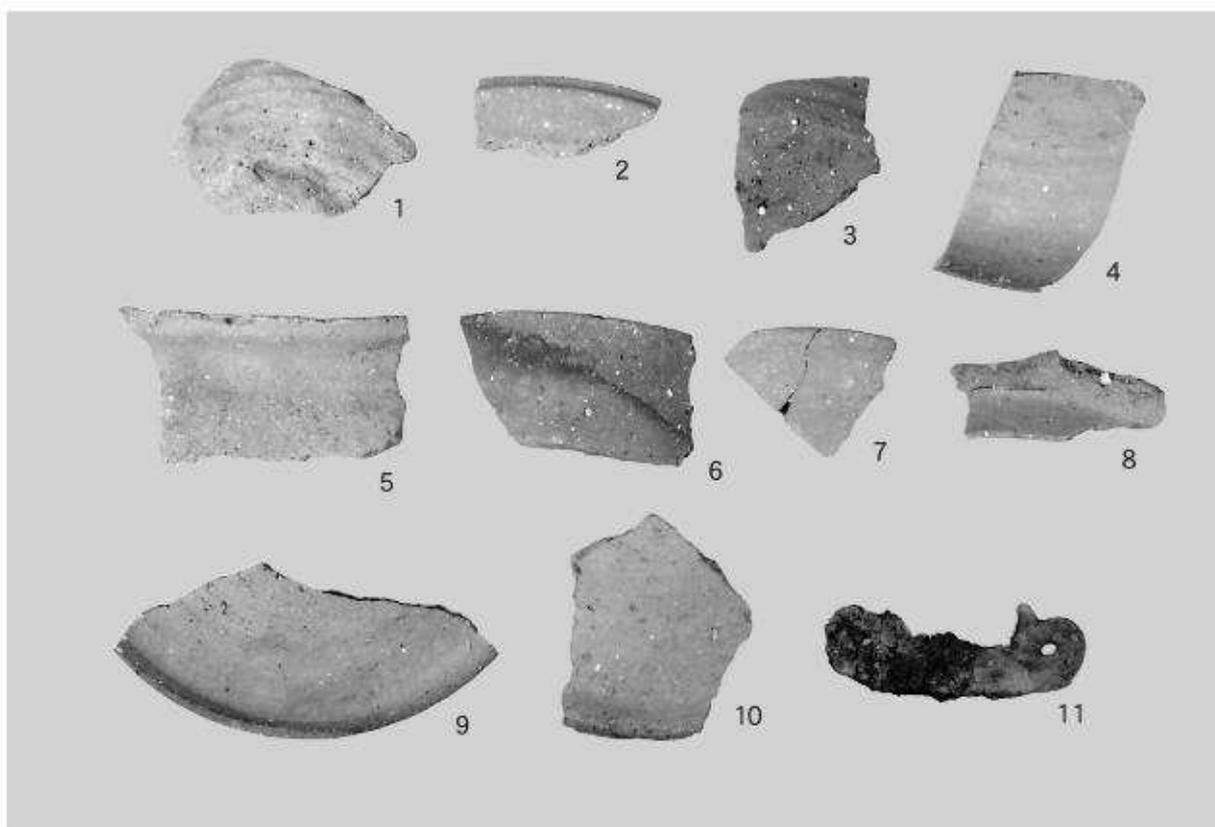
2. SI25出土遺物 (1)



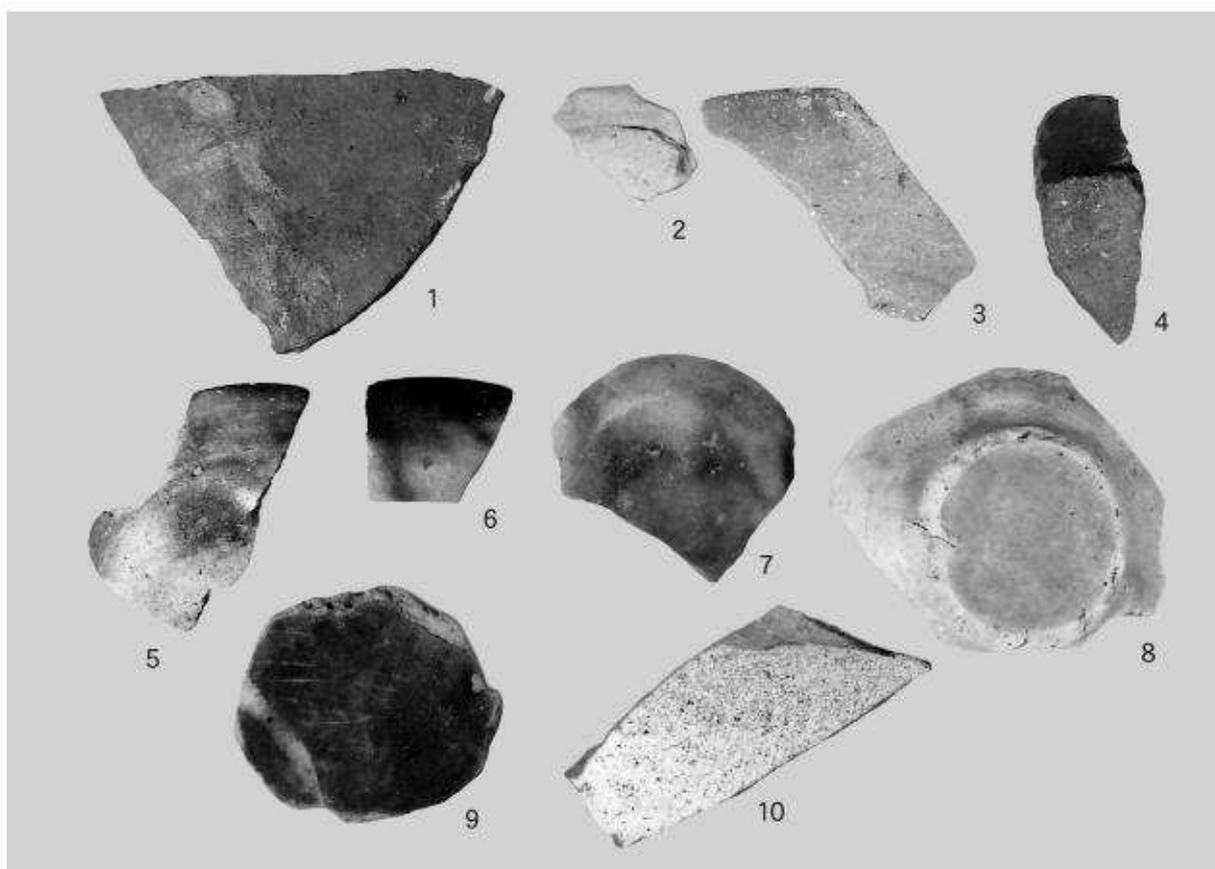
3. SI25出土遺物 (2)



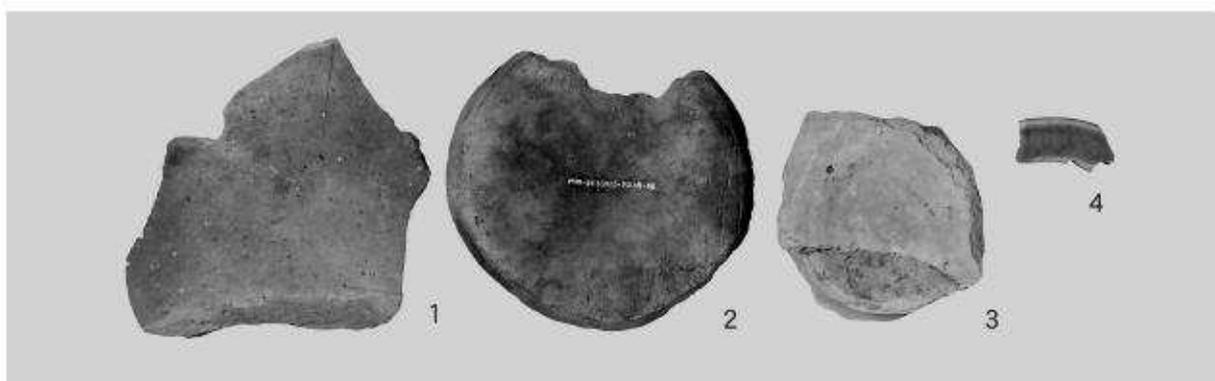
4. SI26出土遺物



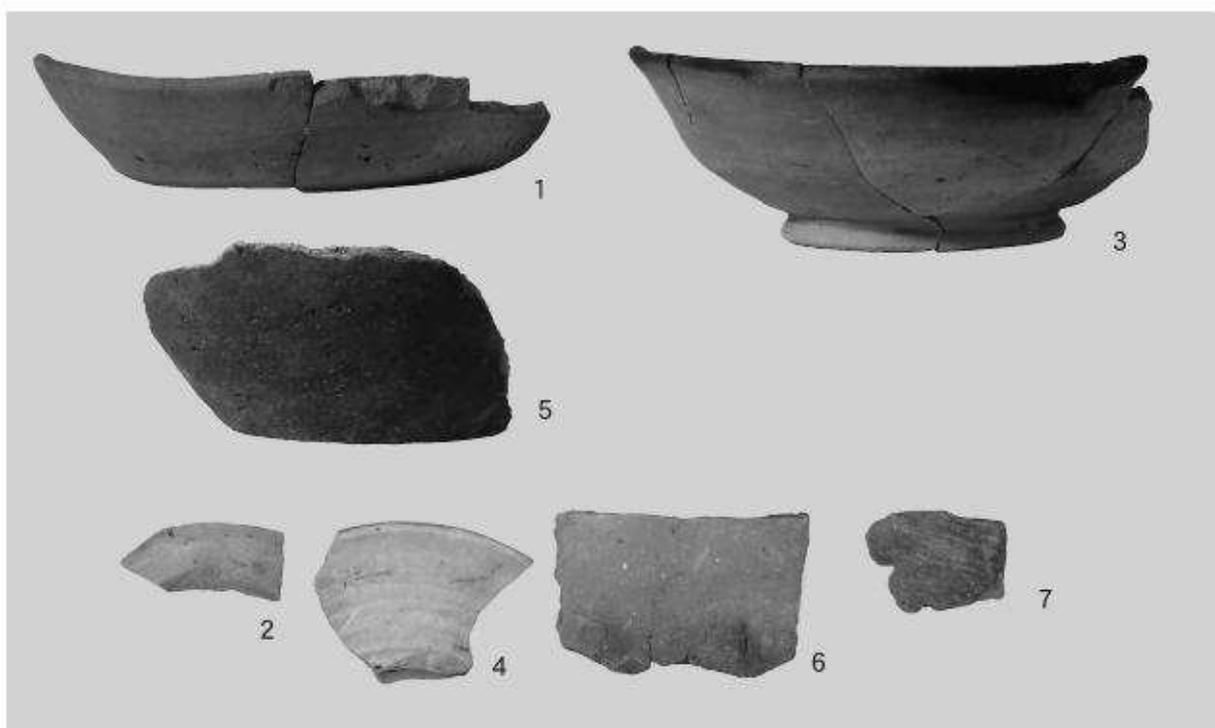
1・2：SB01出土遺物 3・4：SB05出土遺物 5～11：SB07出土遺物



1：SE02出土遺物 2・3：SX01出土遺物 4：SX02出土遺物 5～10：SX03出土遺物



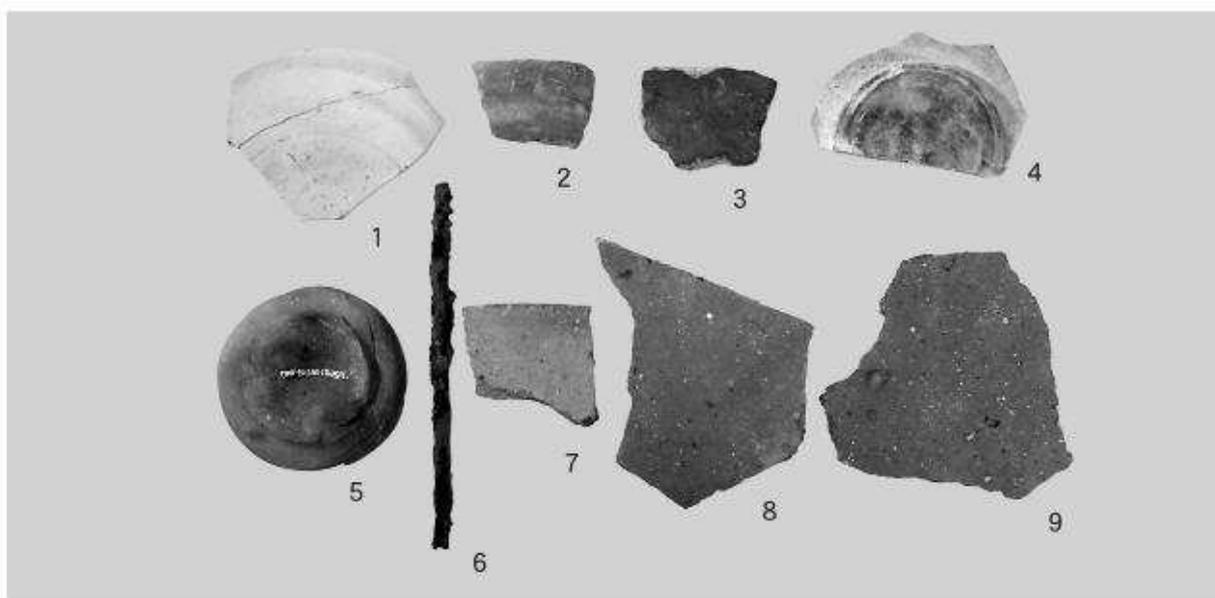
1 : SX04出土遺物 2～4 : SX06出土遺物



1～7 : SX08出土遺物

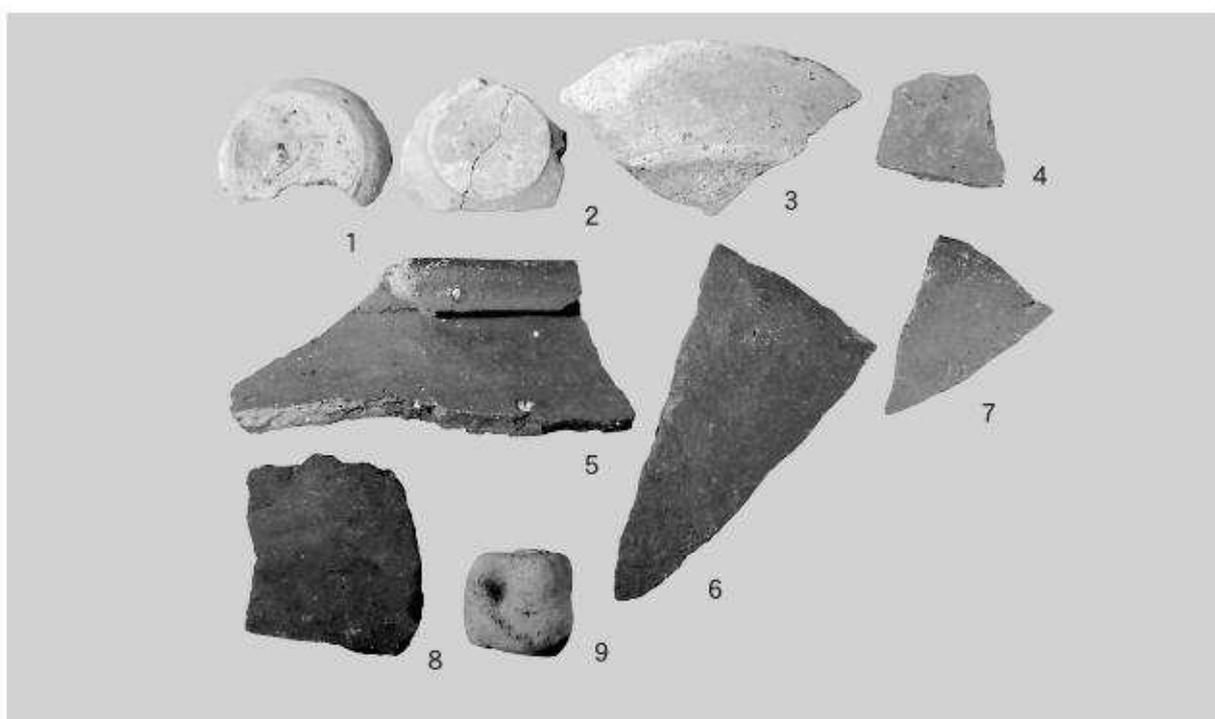


1 : SD04出土遺物



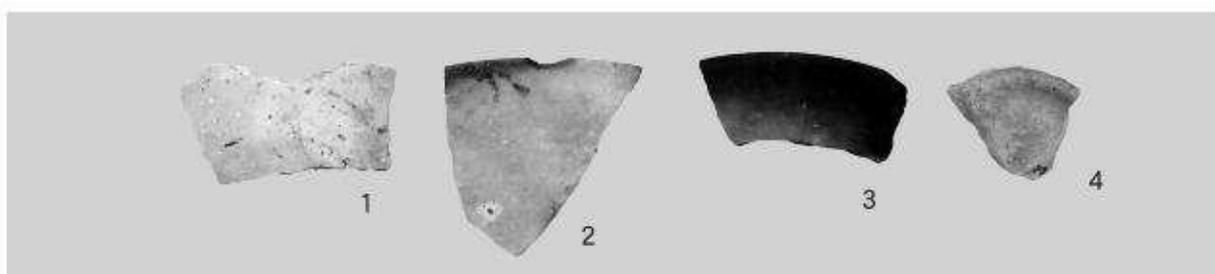
1. 溝・堀出土遺物 (1)

1・2 : SD01 3 : SD02 4 : SD04 5・6 : SD05 7～9 : SD06



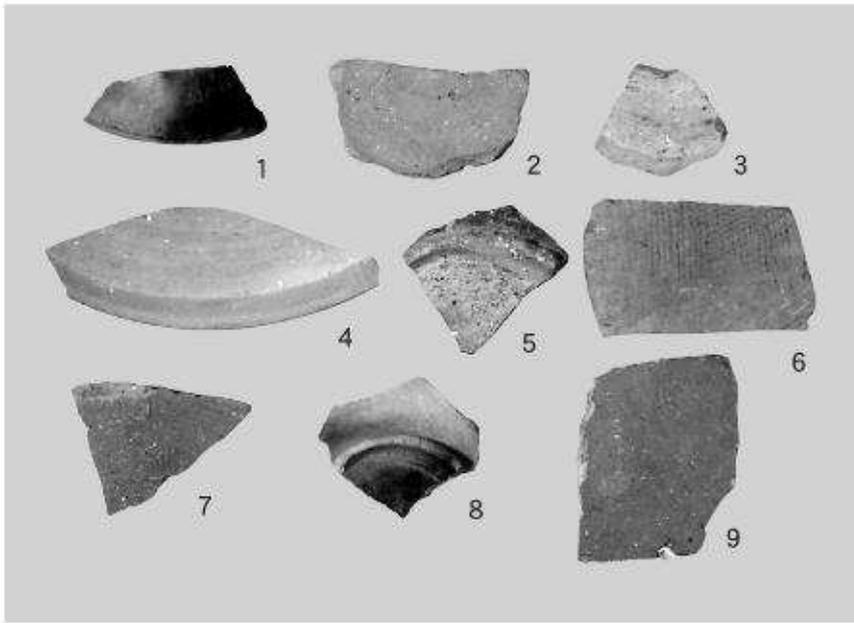
2. 溝・堀出土遺物 (2)

1～9 : SD03



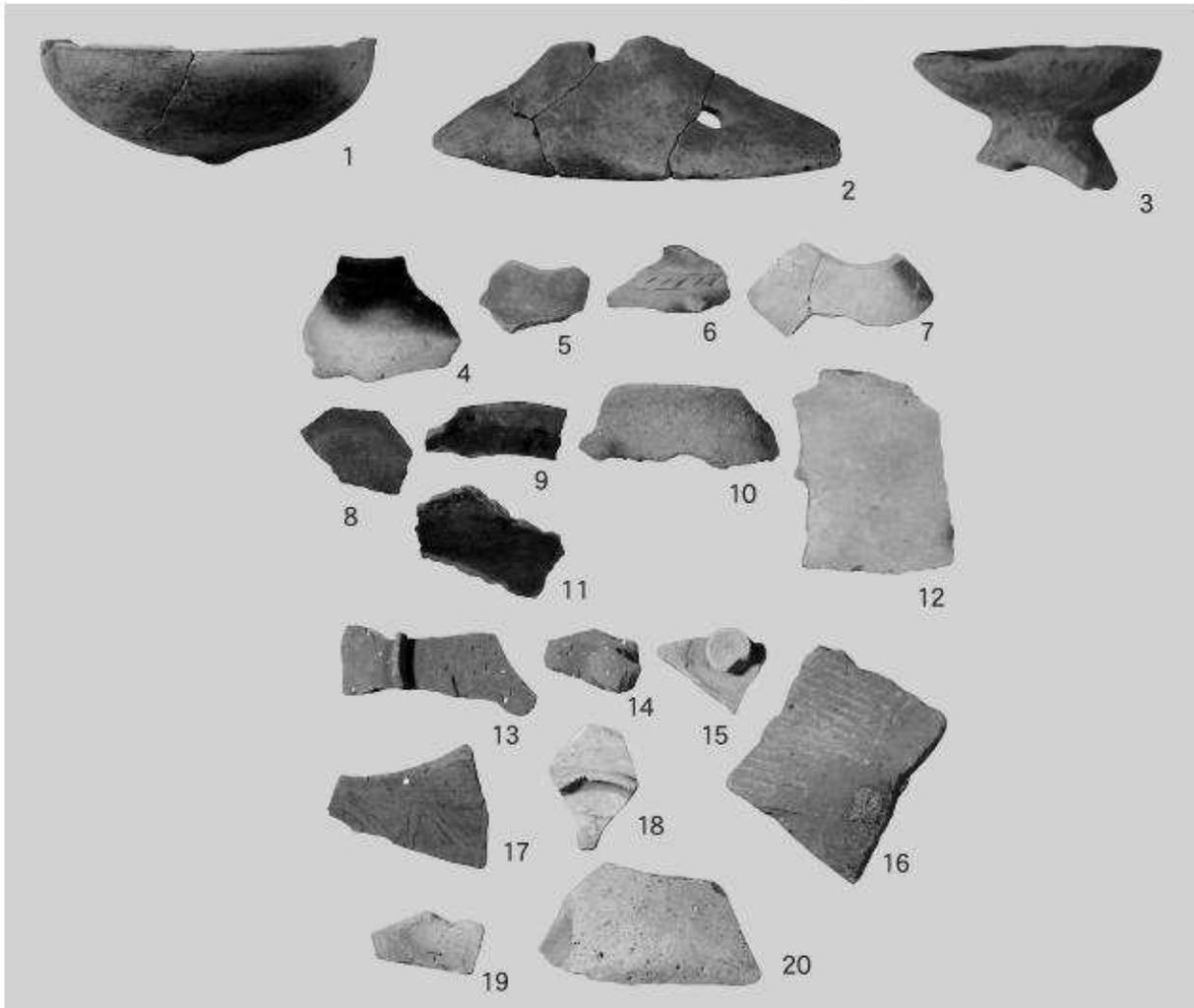
3. 土坑出土遺物

1 : SK01 2 : SK15 3 : SK22 4 : SK23



1. 試掘トレンチ出土遺物

- 1 : T-8
- 2 : T-12
- 3・9 : T-4
- 4 : T-11
- 5 : T-21
- 6・7 : T-1
- 8 : T-7



2. 古墳時代以降の遺構外出土遺物

- 1 : SI13 2 : SX05 3 : SE01 4・9・10 : SI05 5・15・17 : SX01 6・8 : SI01
- 7 : SI16 11 : SI26 12 : SD06 13・19 : SI04 14 : SD03 16 : SD02 18 : SX02
- 20 : SI14

報告書抄録

ふりがな	いしおかしみだのだいいせき																		
書名	石岡市弥陀ノ台遺跡																		
副書名	小美玉市道栗又四ヶ線道路改良工事に伴う発掘調査																		
シリーズ名	石岡市埋蔵文化財調査報告書																		
編著者名	小川和博・大淵淳志・大淵由紀子・遠藤啓子・谷仲俊雄																		
編集機関	有限会社 日考研茨城 〒300-0508 茨城県稲敷市佐倉3321-1 TEL.029-892-1112																		
発行機関	石岡市教育委員会 〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680番地1 TEL.0299-43-1111 小美玉市 〒319-0192 茨城県小美玉市堅倉835番地 TEL.0299-48-1111																		
発行年月日	西暦2014(平成26)年8月30日																		
収録遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因											
		市町村	遺跡番号																
弥陀ノ台遺跡	石岡市小井戸 465番地外	08205	135	36度 11分 21秒	140度 20分 13秒	20131125 ～ 20140502	4,950㎡	道路改良工事											
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物													
弥陀ノ台遺跡	集落跡 館跡	古墳時代 奈良・平安時代 中世	竪穴住居跡	26軒	掘立柱建物跡	15棟	井戸跡	2基	地下式坑	2基	竪穴状遺構	9基	堀・溝	9条	土坑	11基	土坑墓	1基	縄文土器、弥生土器、土師器、須志器、土師質土器、陶器、紡錘車、球形土錘、管状土錘、砥石、磨石、台石、鉄製品
要約	<p>園部川に向かって突出する北斜面部に形成された古墳時代前期・後期および奈良・平安時代の集落跡と中世の館跡等の複合遺跡である。古墳時代前期・後期と奈良・平安時代の集落跡は標高11.0～18.0mの斜面中部に集中して確認されているが、集落の中心部から外れ、高位部に平安時代の住居跡が1軒だけ検出され注目される。また、中世遺構は堀によって区画され、地下式坑や井戸跡および竪穴状遺構等が確認され、館跡と推定される。</p>																		

石岡市埋蔵文化財調査報告書

弥 陀 ノ 台 遺 跡

発行年月日 2014（平成26年）8月30日
編集・発行 石岡市教育委員会
〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680番地1
Tel 0299-43-1111
小美玉市
〒319-0192 茨城県小美玉市堅倉835番地
Tel 0299-48-1111
有限会社 日考研茨城
〒300-0508 茨城県稲敷市佐倉3321-1
Tel 029-892-1112
印刷・製本 有限会社 田辺印刷
〒298-0123 千葉県いすみ市苧谷663-4
Tel 0470-86-2298